

捻くれた少年と寂しが り屋の少女

ローリング・ビートル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡と東條希が出会つたら、という物語です。

目

DOWN														
TOWN	TOWN	#10	#9	#8	#7	#6	#5	#4	#3	#2				
	#2													
51	44	40	36	32	28	24	20	16	12	6	1			

次

君は天然色	君は天然色	君は天然色	君は天然色	君は天然色	DOWN									
#5	#4	#3	#2		TOWN									
					#10	#9	#8	#7	#6	#5	#4	#3		
126	119	111	104	97	90	86	81	76	71	66	61	55		

君は天然色	# 6										
君は天然色	# 7										
君は天然色	# 8										
君は天然色	# 9										
君は天然色	# 10										

212 206 200 193 184 178 171 165 157 151 146 140 133

S o m e d a y	いつか晴れた日に	# 9									
	いつか晴れた日に	# 10									
	ドリーミング・ディ										
	ドリーミング・ディ	# 2									
	ドリーミング・ディ	# 3									
	ドリーミング・ディ	# 4									
	ドリーミング・ディ	# 5									
	ドリーミング・ディ	# 6									
	ドリーミング・ディ	# 7									
	ドリーミング・ディ	# 8									
	ドリーミング・ディ	# 9									
	ドリーミング・ディ	# 10									

294 288 282 276 270 259 253 246 240 235 229 223 217

Y	Y	Y	Y	S	S	S	S	S	S	S	S	S
o	o	o	o	s	s	s	s	s	s	s	s	s
u	u	u	u	m	m	m	m	m	m	m	m	m
r	r	r	r	e	e	e	e	e	e	e	e	e
e	e	e	e	d	d	d	d	d	d	d	d	d
y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y
e	e	e	e	#	#	#	#	#	#	#	#	#
s	s	s	s	1	9	8	7	6	5	4	3	2
#	#	#		0								
4	3	2										

368 364 360 355 350 344 338 331 326 320 313 307 301

F	F	F	F	F	F	F	Y	Y	Y	Y	Y	Y
U	U	U	U	U	U	U	o	o	o	o	o	o
T	T	T	T	T	T	T	u	u	u	u	u	u
A	A	A	A	A	A	A	r	r	r	r	r	r
R	R	R	R	R	R	R	e	e	e	e	e	e
I	I	I	I	I	I	I	y	y	y	y	y	y
#	#	#	#	#	#	#	e	e	e	e	e	e
7	6	5	4	3	2		s	s	s	s	s	s
							#	#	#	#	#	#
							1	9	8	7	6	5
							0					

429 424 420 416 411 407 402 397 392 387 383 378 373

s	L	s	L	s	L	s	L	F	F	F	
t	o	t	o	a	o	a	o	U	U	U	
a	v	a	n	a	n	a	n	T	T	T	
n	e	c	e	c	e	c	e	A	A	A	
c	e	c	e	c	e	c	e	R	R	R	
#	a	#	a	#	a	#	a	I	I	I	
5	n	4	n	3	n	2					
	g	g	g	o	g	o	g	o	o		
	o	o	o		o		o				
	t	t	t	h	t	h	t	h			
	h	h	h	e	h	e	h	e			
	e	e	e		e		e				
468	d	i	462	d	i	456	d	i	442	438	434

	パ	ス	L	ス	L	ス	L	ス	L	ス	L
	レ	ト	o	ト	o	ト	o	ト	o	ト	o
	リ	ン	v	ン	v	ン	v	ン	v	ン	v
	ド	エ	a	エ	a	エ	a	エ	a	エ	a
		e	c	e	c	e	c	e	c	e	c
			a		a		a		a		a
	#		n		#		n		#		n
	8				7				6		
488	d		484	d		480	d		475	d	
	i			i			i		i		

風をあつめて

彼女との出会い、それはどしゃ降りの雨の日だつた。

5メートル先を見通すのにも苦労するような、ひどいどしゃ降りだつた。

「……マジか」

神社の片隅で雨宿りしながら、現実逃避しようとする俺。もちろん、そんなことで事態は好転しない。ざあざあと雨が地面に叩きつけられる音に、俺の呟きは虚しくかき消された。あまりの豪雨に、檻に閉じ込められたような感覚になり、慣れない土地なのも手伝つて、胸に居座る孤独感が増幅している。

……別に高校の出だしで躊躇つて、ボツチ生活が続いているからではない。

それに、恐らく出だしが変わつていたところで、ボツチのままだつたと思う。まあ、それでも自覚があるだけまだマシだろう。世の中には、自分をリア充と勘違いしている痛い奴もいるらしい。「いつからリア充と錯覚していた?」とツッコミたくなるくらいに痛々しい奴が。

とはいって、そんな事実で自分を慰めて、現状が変化するわけではないのも事実。

今はとりあえず……雨、止んでくれ。

「はつ……はつ……」

前をぼんやり見ていると、うつすらとこちらに向かってくる人影が見える。色は……白と赤?

まさか……幽霊じやないよね。浴衣姿の幽霊なら割と歓迎するのだが……いや、やつぱり駄目だ。自分のスペックにはそこそこ自信があるが、特別高いわけじやない。

どうでもいいことを考えていると、その人影ははつきりと色と形を結び、自分の隣に飛び込んできた。

「あく、もう! いきなり雨降るとか……」

彼女はぶつぶつ文句を言いながら、手に持ったスーパーの袋についた水滴を払う。しかし、それよりも目を引いたのは、その服装である。

巫女服。

始めて見るわけではないが、彼女はこれまでに見た誰よりも似合っていた。丈長で上品にまとめられた、ほんのり紫がかつた髪は、雨に濡れたせいで額や首筋に貼りつき、艶やかな魅力を放っている。

そして、巫女服もずぶ濡れになつたせいで、その豊満な身体のラインをはつきりと浮き立たせ、うつさらと紫色が透けて見える胸元から、目が離せないでいた。

数秒そうしていると、彼女がこちらに気づき、顔を向けてきた。

「あら？」

「……っ」

慌てて視線を逸らす。一応断つておくが、俺は決してふしだらな視線を向けていたわけではない。紳士たる俺は、彼女が風邪をひかないか、心配していたのだ。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「君、雨宿り？」

「え？ あ、ああ、ひやい」

囁んでしまった。だから、ふしだらな感情などないと、何度言つたら……。

「ふふつ、焦らんでもええよ？」

関西弁……巫女服に巨乳に関西弁とか、ちょっと属性を欲張りすぎじゃないですかねえ。金髪、ハーフの転校生とか、そんなレベルだ。

とりあえず向き直ると、大人びた美貌に視線を釘付けにされる。

目はぱっちりしているが、けつして鋭くはなく、優しげな視線をこちらに注いでくる。そんな感じに、顔のパーツは整いながらも優しい丸みを帯びており、ぽつりと厚みのある唇の色気も、胸の鼓動を高鳴らせる。

彼女は無言のままの俺に対し、気さくな調子で話しかけてきた。

「ここにはお参りに来たん?」

「え? ええ……まあ……」

今日ここに来たのは、単なる気まぐれだ。來たるべき進級に備え、柄にもなく遠出をして、英気を養おうとしたに過ぎない。そして、何となく神社に足を運び、いい1年とは言わない。平和な1年になりますように、なんて祈っていたところで、運悪く雨に降られた。おい、初っ端から躊躇いてんじゃねえか。

心中で毒づいていると、巫女さんの微笑みが向けられている事に気づく。

「じゃあ、大事な参拝客さんのために、ウチが傘貸してあげるから待つてて」

「…………え? あ……」

こちらが反応する前に、彼女は雨の中、境内へと走つていった。

* * * * *

10分程してから彼女は傘を差しながら戻ってきた。

服は私服になり、髪はおさげにしてある。片手には折りたたみ傘が握られている。

「はい、これ」

「……ありがとうございます」

降つて湧いたような幸運に、いまいち現実味が持てずにいると、巫女さんはまた傘を傾け、親しげな視線を送ってきた。

「気いつけて帰り。それとな……」

「？」

「女の子は男の子の視線には意外と敏感なんよ。ウチは慣れてるけど、学校ではさつきみたいにジロジロ見んほうがいいよ」

「…………」

彼女の去り際の悪戯っぽい笑顔は、家に帰つても頭から離れなかつた。

風をあつめて #2

翌日、俺はまた秋葉原へと足を踏み入れていた。理由は言うまでもない。昨日借りた傘を返却する為だ。こういう物はさつさと返すに限る。そして、お礼の品も渡して、貸し借りゼロにする。これで終了。偶然も運命も宿命も俺は信じない。

そんな自分への戒めを何度も復唱しながら、右手に持った紙袋の取つ手をぎゅっと握り締め、神田明神へと少し早歩きで向かった。

「あら、君は……」

「……どうも」

朝早いからか、閑散とした境内に、やや緊張しながら入ると、すぐに先日の巫女さんの姿を見つけた。彼女は竹箒で落ち葉を丁寧に掃いていたようで、足元には落ち葉がこんなもりと集まっていた。

なら話は早いとばかりに、俺は紙袋を差し出す。

「…………の前はありがとうございます……これ、どうぞ」

「あらら、これは御丁寧に……ふふっ」

「？」

急に吹き出した彼女に首を傾げてしまう。寝癖は直したし、私服にも空港の金属探知機ばかりに厳しい小町チエツクが入つたはずだが……。

「君は慌てんぼさんやね」

「？」

「何か忘れとらん？」

「…………あ」

彼女のからかうような微笑みで、はつと気づく。

やつちまつた……。

やらかし上手の比企谷君は、傘を返しに東京に来たのに、その傘を忘れてしまいました……。

ついキヨドつてしまい、視線があちこち動く俺に対し、巫女さんはお腹を抱えて笑つた。

「あつはつは！ 君、おもろいなあ♪」

「いや、何て言うか……その……」

「まあ、焦らんでもええよ。傘は別の持つてるし」

「はあ……」

「いつでもお参りに来てくれていいし」

「……ああ、俺、この辺りに住んでないんで……」

「あ、そうなん? 遠いところ?」

「……千葉からです」

「そつかあ。千葉からわざわざ傘返しに来てくれたんやね」

「……まあ、忘れたんですけど」

「鋸山、また登りに行きたいなあ」

「来たことがあるんでしゅか……」

「噛んじまつた。

柄にもなく会話してみようとするからだ。コミュ力なぞ、使わなければどこまでも衰えていく。

「ふふつ、今噛んだやろ」

「ああ、もうやだ。」

今日のところは退散しよう。

明日は明日の風が吹く。

「……じゃ、じゃあ、帰ります」

「うん、またね」

そう言つて、巫女さんはひらひらと手を振つた。

* * * * *

翌日。

俺は……いや、説明など必要なかろう。

俺の前には、呆れ笑いの巫女さんが立つてゐる。

「君は本当に真面目やねえ……」

「……早く貸し借りはゼロにしたいので」

「ふふつ、まあお疲れさん。あ、そうや、ちょっと待つてて。ウチ、今日はもう上がりやから」

彼女はそう言つて、ぱたぱたと草履を鳴らし、奥へ入つていつた。

正直、ここで帰つてもいいはずだ。普段ならそうしてゐる。これで貸し借りゼロの関係に戻したのだから。それに、心の片隅で一かけらでも変な期待をしてしまいそうな自分が怖い。

しかし、考へてゐる内に私服姿になつた彼女がこちらに駆け寄つてきた。

「お待たせ！さ、行こうか」

「いや、行くつてどこに……？」

「んー？わざわざ千葉から来ててくれた良い子に、そこの自販機で飲み物奢つてあげるよ」

「いえ、結構です……」

俺は年上だからといって奢られるのが当たり前と思っている軽い男子ではない。基本、自分を養ってくれると確信した女性以外には……

「まあまあ、そう言わんと奢られるの嫌なら無理にとは言わんから」

「……な、何故」

「今朝、カードが告げたんよ。出会いは大切について……」

「カード？」

「ウチ、占いが趣味なんよ。何なら占つてあげようか？」

「いや、そういうのは信じてないんで……」

「恋愛運好調って結果に裏切られたから？」

「……な、何で知ってるんですか？」

あれ、何この人？エスパー？秋葉原の母なの？確かにバブミを感じるし、オギヤれなくもないが……。

すると、手の甲に何か落ちてきた。

「……水滴？」

空を見上げると、いつの間にかどんよりと曇っていて、今にも大量の雨粒を落としそうだ。どうか、もう降り始めている。

そして隣を見ると、巫女さんが優しく微笑んでいる。

「……傘、いる？」

「……はい」

「じゃあ、うちの前まで行くから、ついて来て」

俺は、為す術なしといった心境で、彼女の背中をとぼとぼと追いかけた。やがて、雨雲が予想通りに大量の雨粒を落としてきた。

風をあつめて #3

雨がざあざあ降りしきる中を、俺が傘を持ち、所謂相合い傘状態でのんびり進む。秋葉原の賑やかな街並みから住宅街に差し掛かるまで、特にこれといった会話もなく、雨音が車の音や、赤の他人のすれ違いざまの会話をかき消すように鳴り響くのを黙つて聴いていた。

最初に彼女が口にしたのは、お礼の言葉だつた。

「ありがと」

「？」

俺は何も答えられず、また沈黙が訪れた。

横顔をちらりと見やると、その横顔ははつとするほどの見たこともない美しさと、鈍

色の海のような憂いが共存していて、目が離せなくなる。

そして、彼女の瞳は、この雨降りの街ではないどこか遠くを見ているようだつた。

巫女さんの住むマンションの前まで辿り着くと、彼女は入り口の雨よけの下に移り、にこつと微笑んだ。

「送つてくれてありがと。その傘使つてええよ」

「……っす。どうも」

急な笑顔にうつかりときめきそうになるが、何とか堪える。落ち着け。名前も知らない美少女と相合い傘をしたからといって、この先特別なイベントが起ころるわけではない。ただ偶然が重なつただけの話だ。そこに意味なんて求めるものではない。

すると、左肩に何か添えられた。

見てみると、それは彼女の手だ。

「君は優しいなあ」

俺の左肩の……雨に濡れた箇所を優しく撫でてくる。

「ずっとウチが濡れんようにしとつたんやろ？」

「いや、別に……」

傘を借りるのだから、少しでも貸し借りゼロにしておきたいだけだ。あとは……いや、いいか。

しかし、そんな内心などお構いなしに彼女はやわらかく微笑み、肩に置いた手をそつと……俺の頭に移動させた。

「なつ……」

「いい子いい子♪君は優しい子やね」

白く細い指先と、小さな掌の感触を頭に感じ、急激に心音が跳ね上がる。だがそれでいて、その温もりから伝わってくるのは、抗いがたい安らぎ。一撫で「」とに、心身の疲れを拭われるような圧倒的な癒し。

そして、こちらを見上げてくる優しい眼差し。
や、やばい……このままじゃ……。

何かに目覚めてしまいそうな予感がしたので離れようとすると、彼女の方から先に手を離した。

「ふふっ、ごめんなあ。嫌やつた？」

「い、いや、なんつーか……」

悪びれる素振りも見せずにそんな事を言わると、もうこちらとしては文句も何もないくなってしまう。まあ、元より言う気も起きてなかつたんだが……。

「ふふっ、可愛いなあ」

「そ、そうすか、失礼しましゅ……」

噛んでしまったことも気恥ずかしさに拍車をかけ、一刻も早く立ち去ろうとすると、先に彼女の方が手をひらひら振つて、マンションの中に入つ……。

「なあ、ウチの名前は東條希。君の名前は？」
くるりと彼女は振り返り、自己紹介をしてきた。

唐突な展開に混乱とまではいかないが、また動悸のようなものを感じながら、何とか自分の名前を告げる。

「…………比企谷、八幡です」

互いに自分の名前を言い合い、何とも言えない間を埋めるように雨音が鳴り響く。二人してしばらくそのまま雨音を聞き続けた。

風をあつめて #4

春休みが終わり、2年目の高校生活が始まつたが、もちろん学年とクラスメートが変わつただけで、大した変化はない。持ち前のボツチ力を發揮している。5年後には書籍化できるのかも知れない。

そして、周りの変化が些細なことに思えるのには理由がある。

結局、春休みの内に巫女さん……東條さんに傘を返すことができなかつた。

理由の一つは金欠。バイトをいくつかバツクリしてから、現在何もしていない俺には、そう何度も遠出をする金はない。

もう一つは……これは理由といえるのかもわからない。

どう会えぱいいのか、わからない。

先日の頭なでなでと自己紹介。

あの時の妙な感覚が頭から離れない。

中学時代の自分なら迷わず好きになつていただろうと考えてしまふ辺り、俺は期待しあたくないのだろう。

こんな偶然が重なるなんて……とか。

そんな事を考えている間も、教室内や窓の外の景色は、淀みなく流れていった。

* * * * *

今日は午前中だけだったので、午後は適当にぶらつこうかと思い、駅前へ足を運んだ。その途中で考えはまとまつた。

小遣いが入つたら、すぐに返しに行こう。

そこで、仮に神社に誰もいなくとも返却する。むしろその方が都合がいいまである。

そう、人生はリセットできないが、人間関係はリセットでき……

「あら？」

「…………

「比企谷君？」

この前みたいに思考回路が働かなくなり、その場に縫い付けられたように、動けなくなってしまう。

そんな俺とは対照的に、彼女は笑顔を向け、そつと言葉を紡いだ。

「スピリチュアルやね」

「……はあ、そ、そうすか」

絡み合う視線は中々解けず、近くを通り過ぎていく人のカツカツと鳴る足音が、この

前の雨音に似て聞こえる。

彼女は俺の服装を上から下までじいっと眺め、感心したように頷いた。

「へえ、制服似合つてるやん」

「ど、どうも……」

春らしい私服姿に身を包んだ彼女は、また距離を詰めてきた。ふわりと優しく甘い香りが鼻腔をくすぐり、彼女に関しての新しい情報がインプットされる。

「今日から新学期始まつたんやね」

「ええ、まあ……そつちは……」

つい聞き返してしまう。

「ちょっと遠出がしたくて。カードがこっちがいいって告げたんよ」

「はあ……」

「まあ、確かに面白いことになつたね」

東條さんは悪戯っぽい笑みに変わり、また肩に手を置いてくる。先日の感触が鮮明に蘇つた。

「暇なら付き合ってくれへん?」

「いえ、今から用事が……」

「ふふつ、嘘下手やなあ」

「…………」

「……ウチと一緒は嫌?」

「い、いや、別に……そんな事は……」

「じゃあ、行こつか」

リセットボタンはどうやら故障中らしい。

肩に置かれた手が離れると同時に、俺は東條さんと並んで、ゆっくり歩き出していた。

風をあつめて #5

「…………」

「どうしたん? いきなり考え込んで」

「いや、どうしたもんかと思いまして……」

「?」

「俺は一人で行動する時は、最大限楽しめるよう、綿密な計画を立てますが、誰かといふ時は基本任せで、後をついていくタイプですので、どうしたもんかと思いまして……」「素直な意見ありがと。なんか色々と悲しいけど」

そう。問題はそこなのだ。

女子との交際経験が乏しい俺は、こういう時に簡単に時間を潰せる方法など思いつかない。告白やらメールや電話やらで女子の時間を潰してきた俺ではあるが。何だそれ、哀しすぎる。

すると、東條さんが口を挟んだ。

「じゃあ、君がいつも行く場所でええよ」

「え?」

「君の予定にウチが勝手についていくだけなんやから。どこでも文句は言わんよ。ただし……」

「彼女は俺の耳元に艶のある色っぽい唇を寄せた。

「エツチな場所はあかんよ?」

「なつ……」

耳朶を撫でる艶めかしい声音と、首筋をくすぐる甘い吐息に、顔が赤くなるのを感じながら、慌てて飛び退く。い、今、ぞくつとしたぞ……。

彼女はなんてことないよう、クスクス笑い、目を細めた。な、何でしょう……そのままシマウマを見つけたライオンのような目は……。

「ほな……行こ?」

* * * * *

「本屋ね、ウチもよく行くよ」

「そなんすか?」

「ええ、占いの本とか料理の本とかを買いにね。あとは……」

「?」

「ヒ・ミ・ツ♪」

「何だよ、それすげえ気になるじやねえか。

ヒミツののんたんかよ。それとも、かみさまみならいかよ。いや、もつとストレートに考えよう。

つい、大人なコーナーに目がいつてしまう。

もしやヒミツとはそういうヒミツなのか……私、気になります！

「ん～～～？」

東條さんがこちらの考えを読んでいるかのようにニヤニヤ笑う。これもスピリチュアルな力の一端なのだろうか。

「比企谷君は何を考えてるんやろうな～？」

東條さんは悪戯っぽく笑いながら、俺が見ていた棚の前に移動し、適当にグラビアアイドルの写真集を引き抜く。

「ウチのこんなカツコとか～？」

次にタオル一枚を巻きつけただけの女性が挑発的な笑みを向けてくる表紙の雑誌を向けてくる。

「こんなんかな～？」

「ち、違います……」

やめいやめいやめい……！

想像しちゃうじゃねえか。妄想しちゃうじゃねえか。それと、焦っちゃうでしょっ、

泣いちゃうでしょっ！

そんなやり取りは、周りの人に少し注目させていた。

「うわ、すっげえ美人……」

「いいなあ……」

「あんた何見てんのよ」

「畜生……ボツチの癖に……！」

「綺麗ずらー」

おい、誰だよ。ボツチとか言つたの。東條さんに失礼だろうが……はい、すいません。俺ですよね。

本屋でここまで精神力をガリガリすり減らされたのは、間違いなく人生で初めてだろう。

店員から冷たい視線を頂いた辺りで、さつさと店から退散することにした。

風をあつめて #6

本屋を出ると、東條さんはうんと大きく伸びをした。

その際に、豊満な胸が白いTシャツ越しに強調されたが、はち切れそうとか、下着が透けるんじやないかとか、ちつとも気になつちゃいない。ハチマン、ウソ、ツカナイ。

東條さんがこちらをチラリと見て、悪戯っぽい声音で話しかけてきた。

「いやー、面白かったね♪」

「……どつと疲れが溜まった氣がするんですが……」

「ウチは結構楽しかったよ？君の好みもバツチリわかったし」

「え？あれだけで……」

「うふふ……ウチにかかるばそれくらい朝飯前や」

「ち、ちなみに……どんのが好みって思つたんでしようか？」

一応、尋ねてみると、東條さんは口元に指を当て、考える仕草をした。今考えてんのかよ。

「例えば……」

「ふあつ！」

東條さんはいきなり俺の腕をとり、しゆるつと自分の腕を絡めてきた。

そして、俺の肘の辺りには暴力的なまでの柔らかい温もりが押しつけられる。心臓がバクバク鳴り出し、顔が赤くなっているのが自分でもわかつた。

「こういうのに弱いんとちやうん?」

「い、いや、その……」

こんなのが古今東西全ての男子高校生は弱いと思います!

東條さんはすぐに腕を解き、俺の正面に立つた。何だ、この寂しさ……。

「じゃあ、次はどこに連れてつてくれるん?」

「…………」

さて、次はどの手札を……てゆーか、これ完全に彼女のペースですよね?もう、いいけどさ……。

ゲーセン、は論外だな……本屋でこれだ。ゲーセンとかだと、どんな風にいじられるか、わかつたもんじやない。

斯くなる上は……

* * * * *

「ラーメン?」

「ええ、そろそろ腹も減ってきたので……」

「うん、じゃあ行こつか」

座つて飯を食うだけの飲食店ならば、それほどからかわれずにすむだろう。我ながらナイスアイディア。お腹もペコペコだしね！

からかい上手の東條さんは、ニコニコ笑顔のままついてきた。
「比企谷君は、この辺りの高校なん？」

「まあ……近いっちゃ近いですね」

「ラーメン食べたら、君の家に行くのもいいかもね」

「…………」

「君は顔に反応がでやすいからええなあ♪」

「い、いや、いきなり何言つてんでしゅか……」

「なんかホツとするなあ」

な、何この人？勘違いさせる言葉のオンパレードで、中学時代の俺なら好きになつてるし、今の俺なら警戒心がMAXに働き、ATフィールド展開するまである。

「どうしたん？」

「い、いや、何でも……」

ラーメン屋までの道のりを俺と東條さんは、付かず離れずの微妙な距離感を保ちなが
ら歩いた。

風をあつめて #7

「あ～、美味しかった♪」

「……そうすか」

「どうやら気に入つて頂けたようだ。まあ、ラーメンは世界一の食べ物だしね！ 東條さんは振り返り、につこりと笑顔を浮かべた。

「じゃあ、ウチはそろそろ行くね。付き合つてくれてありがと♪」

「……まあ、その……スピリチュアルな力なら仕方ないんじやないですか？」

「ふふつ、そやね。じゃあ、連絡先交換しとこつか？」

「話が繋がつていらない気が……」

「君が傘を返そうと思った時に、いつでもウチがおるとは限らんやろ？」

「その時は神社の誰かに……」

「……嫌？」

「…………どうぞ」

実際断る理由もないのに、俺は東條さんにスマホを渡した。

彼女はキヨトンとしていたが、やがて俺の意図に気づいて苦笑した。

「君は警戒心が強いのか、そうでもないのか、ようわからんね」「暇つぶし機能以外あまり使わないので、こういう時の使い方がよくわかつてないだけです」

「さらっと悲しいこと言うね」

東條さんは軽やかな指さばきで連絡先を交換し、俺にスマホを返した。

「はい。後で連絡するから、登録お願ひ♪」

「……了解」

「それと……」

「は？」

東條さんの手が俺の頭に乗つけられる。

そのまま、ふわふわした優しい感触が俺の頭をよしよしと撫でた。ひんやりした感觸が、まだ4月の頭なのに、やけに気持ちよかつた。恥ずかしいけど。

「今日は付き合ってくれてありがと♪君は優しいね」

「いや、あの……すげえ恥ずかしいから止めて欲しいんですけど……」

「そんなに恥ずかしがることないやろ？この前もしたんやし」

「いや、そ、それとこれとは話が……」

道行く人の視線がグサグサ突き刺さり、HPがガリガリ削られていく感覚がする。特

に男子の視線が痛い。

「何だよ、あいつ……あんな美人に……」

「羨ましいぜ、チクショウ」

「けふこん、けふこん……あ、あ、あれはもしや、八幡ではあるまいな……」

「ちつ、ボツチの癖に……」

「ザキ」

怨嗟の声が聞こえてきた気が……今、知り合いがいなかつたか？あと誰だよ、ボツチって言つたのは。しかも最後に、誰か死の呪文を唱えて行きやがつた。

とはいえ、東條さんの頭の撫で方は絶妙で、なんか疲れが取れるというか、中学時代なら…………いかん。また東條さんのペースだ。

俺はそつと彼女の手をどけた。その際に掴んだ手首の細さに、妙に胸が高鳴るのを感じながら。

「もう、照れ屋やなあ～」

「い、いや、そつちが大らかと言いましゆか……」

「ふふっ、その噛みつぶりに免じて許してあげる♪ほな、行くね」

「…………」

彼女は意外なくらい颯爽と改札をくぐり、その背は見えなくなつた。

「……帰るか」

一人で帰路につくと、頭やら肘やらに残っている彼女の感触が、やたらとむず痒かつた。

風をあつめて #8

東條さんと連絡先を交換してから一週間後、彼女の方から休日の夜に電話がかかってきた。その間、特にメールなどのやりとりもなかつた。中学時代なら、きつと悶々とした日々を送っていたことだろう。そして、しようもないメールを送り、黒歴史を1つ増やしていたかもしれない。

まあ、仮定の話はいいとして、とりあえず東條さんから電話があり、彼女の方は何となくかけてみただけという謎な理由だったので、こつちが今日学校であつた出来事を話したのだ。

「奉仕部？」

「はい」

「学校生活を振り返って書いた作文で、おかしな事書いたから？」

「……はい」

奉仕部というよくわからん部活に入れられた経緯を話すと、東條さんからはキヨトンとしたような、または呆れたような反応が返ってきた。まあ、当然といえば当然の反応だろう。

なんて考えたところで、今度はクスッと笑う声が漏れ聞こえてきた。

「君はおもしろいなあ」

「今、面白い要素ありましたつけ？」

「ふふつ、今度その作文見せて♪」

「……絶対に嫌です」

「ええやん。減るもんでもないし。一度は先生に見せたんやろ?」

「それとこれとは話が別ですよ。つーか、わざわざ見せに行くのも……あ」

未だに玄関に置いてある傘を思い出す。

……早く返さなきやいけない。

まあ、傘のお礼に作文を見せるくらいなら別にいいか。実際に減るもんでもないし。減るのは東條さんからの僅かばかりの好感度くらいだろう。うわ、哀しそうだ。何でわざわざ自分から好感度を下げに行かなきやならないのか。

「じゃあ、今度傘と一緒に持つて行きます」

「ありや、どうしたん? 急に……」

「いや、今度こそ傘を返さなきやいけないんで、そのついでに……」

「ああ、忘れとつた! ふふつ、また忘れたら面白いんやけど」

「いや、それはさすがにないですから」

「それで、また忘れたんやね」

「いや、何と言いますか……作文の方に気を取られすぎていまして……」

「あはは！まあええよ♪おもろいし、カードがそう告げとつたし、作文もつてきてくれたし」

カードが告げてたなら、教えてくれてもいいんじゃないですかねえ……。いや、別にいいんだけどさ。

ちなみに、今は秋葉原駅近くの喫茶店で話している。今日は偶々神社でのバイトが休みだつたらしい……連絡先交換してよかつた……これもスピリチュアルパワーだろうか。

東條さんは既に、例の作文を読み始めている。

口元の笑みは残したまま、視線を原稿用紙に走らせる姿は、彼女の知的な美貌を一層引き立たせた。

そして、大した量はないので、すぐに読み終えた。

彼女の視線がこちらを向き、口元に貼りついた笑みが、次の言葉を想像させる。

「やっぱり君、おもろいなあ♪」

「本当に面白けりやクラスの人気者ですよ」

「あははつ、わかる人にはわかる面白さって事でいいんやない?」

「…………」

* * * * *

「ん?」

「どうかしたの、お姉ちゃん?」

「いえ、何でもないわ」

風をあつめて #9

「じゃあ、今日はウチが奢つたげるよ」

「いや、さすがにそれは……俺は専業主夫として養われる気はあっても、施しを受ける気はないんで……」

「あはは！ 君はおもういなあ。じゃあ、割り勘にしようか」

俺の未来の専業主夫としての矜持は、シユールなギャグとして受け取られたようだ
……何だこれ、やるせない。

支払いを終え、外に出ると、空はさつきよりどんよりと重たそうな雲が増えていた。

「また雨が降りそうやね」

「そ、そうですね……」

「おい、また雨とか勘弁してくれよ？ 思い出はいつの日も雨じゃなくともいいからね？
「ウチ、白いシャツだから、雨降らん内に帰らんと」

「そ、そうですね」

何故それをわざわざ口に出しますかね、この人は……これはむしろ「見てください」と
いうサインなのだろうか。そこで俺が見たら、何か罰ゲームがある流れなのだろうか。

「もしかして……見たかつた？」

「いや、俺はその手には乗らないんで」

「その手つて？」

「い、いや、こっちの話です」

どうやら俺の思い過ごしだったようだ。いや、まだまだ油断はできない。

そんな事を考えながらも、不思議と心が穏やかに屈いでいるのを感じた。

「君はまだ時間ある？」

「……あるつちやありますけど、まあ、その……課題もあるし、そろそろ帰ろうかと思ひます」

現代文の課題があるので、何がなんでも忘れるわけにはいかない。

東條さんは、ほんの一瞬……もしかしたら気のせいかもしれないが、目を伏して寂しげな表情を見せた。

そして、すぐにからかうような笑顔に戻った。

「そつか。課題はしつかりやらんとあかんよ。比企谷君、先生に目をつけられてそうやから。ふふつ」

「……どうでしよう」

ステルスヒッキーは同級生には効果絶大だが、教師陣には効果が薄いらしい。それは

薄々感づいていた。かといって、やることは変わらんのだが。

「まあ、無難にやり過ごしますよ」

「君はたまに枯れたこと言うなあ。せつかくの青春やから楽しいことが多いに越したことはないやろ?」

「何事もなく平穏無事が一番だと思いますけどね」

「そんな事言つて……いきなり転校生との甘い恋が始まつたりするかもしれんよ?」

「いや、そういうのは期待してないんで……」

謙虚、堅実をモットーに生きている俺としては、そんな甘い夢は見ずに非モテ三原則を遵守していきたい。てか、在校生とのロマンスの可能性はないんですね、わかります。これ以上つかれると、うつかり黒歴史を披露しかねないので、俺は強引に話題を変えた。

「あの……次こそは持つてきますんで」

「うん。期待せずに待つとくから、焦らんでええよ」

「え、あ、ま、まあ、その……」

言い訳のしようもない。する気はないが。

「何なら今度君ん家に取りに行つてもええよ」

「い、いや、さすがにそれは……」

「ああ、そういうことなんやね」

「？」

「ここまで来てウチの巫女服姿が見たいんやろ？最初からそう言えれば……」

「……話が飛躍しすぎて、大気圏外まで飛んでいってますね」

「そう？ふふつ、じやあ帰り気をつけて」

「ええ。それじやあ」

千葉と東京。どっちかの夜は昼間的な大した距離はない。

そう。つまり、これは大した出来事じやない。

だから過度な期待もしない。淡い幻想も抱かない。

彼女の視線を背中に感じながら、俺は駅へと向かつた。

あ……そういうや、作文返してもらうの忘れた……。

* * * * *

「……反応が遠くなつたわね。気のせいかしら」

「お姉ちゃん、さつきから何を言つてるの？」

風をあつめて #10

あの作文、つい何度も読み返しちゃったなあ。

字の感じからして、多分思つたことをそのまま書きなぐつただけなんやろうけど、だからこそ嘘偽りのない本音。

決して肯定はできない。でもあつさり否定もできない。

そんな彼の考え方……つて、ウチ考えすぎやね。はやく書類まとめないと……

「希、やけに機嫌よさそうね」

「ん？ そう？ そう見える？」

「μ, s の子達とは別の良いことがあつたのかしら？」

「無駄に鋭いんやね、エリチは。まあ、ちよつと……ね。興味深いものに出会つたというか……」

「何か匂うチカ」

「ん？ エリチ、今……」

語尾がおかしかつたような……。

「何？ どうかしたの？」

「……ううん。何でもないよ」

エリチはいつもの賢い可愛いオーラを振り撒いている。うん、やっぱりウチの気のせいやね。ぼーっとしすぎてたのかも。

書類をまとめ終えたエリチは、こつちに立ち上がり、真面目な表情になつた。

「じゃあ、私は理事長室に行つてくるわね」

「うん。いってらっしゃい」

足早に生徒会室を出ていくエリチの背中は、どこか焦つていて、余裕がないように思える。

新学期に入つてから持ち上がつた廃校問題。動搖している生徒も少なくない。責任感が人一倍強いエリチは尚更だつた。

そして今日も理事長に、生徒会として廃校阻止の活動をする許可をもらいに直談判しに行つてる。

この前はNOを突きつけられた。

……きっと理事長は気づいているんやろうな。エリチが無理してること……。

そこで、校門の辺りを三人並んで歩く女の子達が見えた。彼女達は、今朝も早い時間からトレーニングをしていた。

そう。廃校阻止に向け、動いている子達がここにも……。

「……騒がしくなりそうやね」

カードは確かにそう告げていた。

* * * * *

「へえ、比企谷君がテニスを……ふふつ」

「はい。まあ、成り行きで」

「……そのわりにはやけに機嫌よさそうやね」

「そうですか？」

「うん。返事がやけに早いし、声も弾んでる。もしかして、テニス部に可愛い子でもおつたん？」

「いや、依頼人は男子ですよ」

「じゃあ可愛い男の娘やつたん？」

「……ち、ちち、違いますす、よ？んな訳ないじやないですか……！」

「めつちや動搖しとるやん……ふふつ、でも見てみたいなあ、比企谷君がテニスしてると

「」

「いや、めつちや笑う気満々でしょ」

「ウチがそんな意地悪なお姉さんに見える？」

「……」

「おやおや？何で黙るん？言いたい事があるなら、はつきり言つた方がええよ？」

「いえ、な、何も……」

「ふふつ、まあ頑張つてね」

「……ありがとうございます」

通話を終え、ベッドに寝転がる。夜に携帯がいきなり震えて怪奇現象だと思わなくなった辺り、大きな進歩じやなかろうか。悲しすぎる。

……今日はやけに喋つてた氣がするが……ただの氣のせいだろうか。

一瞬で訪れた静寂が耳に馴染むまで、少し時間がかかつた。

しかし、それからすぐに眠気がやつてきた。

眠りに落ちる寸前、俺の書いた作文と彼女の傘が頭の中に浮かんだ。

DOWN TOWN

奉仕部は現在、川崎沙希という女子生徒のバイト先を探していた。彼女の弟からの依頼である。最近帰りが早朝になる事もあるとか。あと川崎大志が小町に氣があるんじゃないとか。あつ、こつちは関係ないか。

まあ、とりあえず調べていくうちに候補の一つとなつたメイド喫茶に入つたのだが

……。

「お帰りなさいませ、ご主人様♪」

「…………は？」

何故かメイド姿で俺を出迎えたのは東條さんだつた。

いつもの巫女服の儂げなイメージからかけ離れた萌え系メイド服の姿に、思わず息が詰まる。

……いやいや、まさか。きっと他人の空似だろう。そんな偶然があるわけ……

「あら、比企谷君？」

「つ!？」

まさかの本人。

今なら平塚先生の結婚報告も、すんなりと信じられる気がする。

そんな予期せぬ遭遇にテンパつていると、彼女はくすくすと笑みを溢した。

「そんな驚かんでもええやろ？ そんなに似合つてない？」

彼女はその場でくるりと一回転し、黒いロングスカートをふわりと泳がせた。同時に、いつもと違うフローラルな香りが漂ってきた。

そして、見慣れた悪戯っぽい笑みを向けてくる。

「どう？」

「え？ あ、ああ、まあ、その……似合つてなくはないんじやないですか？」

「疑問型なんて……ウチ悲しいっ！」

わざとらしい泣き真似をする東條さんに、逆に冷静さを取り戻す。ああ、このテンション……巫女服の時と変わんねえわ。だがリアクションには困る。

「いや、あの……」

すると、背後から声がかかつた。

「ヒッキー？」

「どうやら通い慣れてるようね」

振り向くと、由比ヶ浜と雪ノ下が怪訝そうな視線を向けてくる。どうやらあらぬ疑い

をかけられて いるようだ。

さらに、その後ろにいる二人も苦い表情をして いた。

「八幡、メイドさんが好きなんだね……」

「うむう……まさか貴様がメイドとそこまで親しげになるぐらい通つていたとは……さすがの我也ドン引きなんだが」

おいおい、何だこの空氣。材木座にまでドン引きされるとか……。

東條さんは、四人をちらりと見て、何だか面白そうにニヤアッと笑みを深めた。それに対し、俺の防衛本能が警鐘を鳴らします。

そして彼女は火に油を注ぎました。

「比企谷君、ごめんね? 今日は巫女服じゃなくて」

「…………」

雪ノ下が目を眇めて半歩ほど俺から距離をとり、由比ヶ浜はあわあわと俺と東條さんを交互に見て いる。

戸塚と材木座は何故か席の確保に向かつて いた。要するに逃げたということだ。

……とりあえず俺も逃げるとしよう。

「…………じゃあ、俺も席とつとくから」

「…………」

冷たい視線を背中に感じながら、材木座の隣の席に座る。

その後、二言三言話すのが聞こえてから、一際大きな声が聞こえてきた。

「じゃあ、メイド服を着用されるお二人はこちらへどうぞ！」

* * * * *

びっくりしたなあ。

まさか彼が来るなんて……まあ、今は仕事しないとやね。

とはいって、やはり色々と気になるもの。

私は試着用のメイド服を用意しながら、茶髪にお団子が特徴的な女の子に話しかけた。

「もしかして君達、比企谷君と同じ部活？」

その子はやや緊張気味に答えてくれた。

「あつ、えと、同じ部活なのは私達だけで、あとの二人は……手伝いというか」

「そう、賑やかやね」

「あの……お姉さんはヒツキーとはどんな関係なんですか？」

「どんな関係……」

ウチと比企谷君の関係……。

何故か言葉に詰まりかけたけど、すぐに思いつく。多分彼も同じように言うはず。

「……傘貸したんよ」

「え？」

彼女は驚いた顔をして、もう一人の女の子は、何かを探すようにシフト表を見ていた。

* * * * *

さて、従業員用の更衣室だか事務室だかでは、スクールアイドルと奉仕部がレッツ・ラ・ませさせられているのだが……何だこの胸のざわつきは……大丈夫だよね？ 何も出来上がりないよね？

「八幡、どうしたの？ さつきの人、知り合いみたいだけど……」

「ん？ あ、ああ、まあ、傘借りただけだ」

「え？」

戸塚は可愛らしく首を傾げる。まあ、俺も似たような返しをされたら、きっと疑問に思うだろう。俺が首を傾げても可愛らしくはならんが。

「ふむ、八幡よ。貴様、どのくらい通えばメイドさんとあのように仲良くなれるのだ」

「知らん。近い。あっち行け」

材木座がくぐぐつと近寄つて来るのを片手で押しのけながら、何とか気持ちを依頼のほうへ持っていく。

結局、雪ノ下と由比ヶ浜がメイド服で戻ってきてからも、東條さんは出てこなかつた。

* * * * *

その日の夜、東條さんから電話がかかってきた。

「ふふつ、今日はびっくりしたやろ?」

「……心臓飛び出すかと思いましたよ。つーか、あの後帰つたんですか?」

「休憩に入つただけよ。それに、特定のお客さんとだけ話すわけにもいかないから。それより、比企谷君が巫女服だけやなくメイド服も好きだなんて」

「いや、何でそうなるんですか……奉仕部の活動ですよ」

「なるほど。ウチに奉仕してもらつて、奉仕の精神を学ぶんやね。いやらしい……」

「……それで、何でわざわざ千葉のメイド喫茶でバイトしてたんですか?」

「ふふつ、ただの手伝いよ。知り合いから頼まれて、1日だけ入つたんよ」

「そうですか」

「だからメイド服もあれつきりやね」

「……そうですか」

「残念そうやね」

「いえ、別に……」

「何なら今度借りりて、着てあげてもええんよ?」

「いえ、別に……」

「……比企谷君のムツツリスケベ」

「いや、何でそうなるんですか」

「ふふつ、言葉通りよ」

「……そこは冗談よと言うところでは?」

「まあまあ。それより、比企谷君は中々楽しそうな部活に入ってるんやね」

「楽しそう…………ですか?」

「あんな可愛い子達に囲まれて羨ましいなあ♪」

「いや、羨ましいって……」

「それに……ヤキモチ妬いちやう…………かな」

「…………」

「なんて言つたらどうする♪」

「……おやすみなさい」

「あつ、ちょっと比企谷く…………」

また顔が赤くなるのを感じ、溜め息を吐く。電話越しでも心臓に悪いとかどんだけなんだよ。もう今日は寝よう。

結局、その日の夢に、関西弁のメイドが出てきて、やたらからかつてきたのはまた別の話。

D O W N T O W N #2

「比企谷君……いい朝やねえ」

「ええ。家で寝ていられたらもつといい朝でしたね」

休日の朝、俺は神社周辺のゴミ拾いに勤しんでいた。本来なら惰眠を貪り、ゲームか読書をする予定だったのだが、前日の夜に東條さんから呼び出されたのだ。呼び出されただけであつさり出てきちゃう俺……案外社畜適正が高いのかもしれません。

溜め息を吐く俺に、東條さんはクスクスと笑つた。

「ふふっ、たまには朝陽を思いきり体に浴びたほうがええんよ」「……スピリチュアル的に、ですか？」

「そうやね。それに……」

東條さんは、顔をぐいっと近づけ、耳元で囁いた。

「……君と迎える朝も中々素敵やん？」

「い、いや、変な言い方はやめてくれませんかね……」

うつかり変な妄想しそうになるだろうが。脳内で二人で朝を迎えて何気なく暮らしちゃうだろうが。

まあ、この人のからかいに逐一反応していたら時間が幾つあつても足らないので、さつさと作業を再開する。この手の単純作業は別に嫌いじやない。働きたくはないが。「ふふふ、何だかんだ眞面目にやつてくれるところは好きよ」

「そ、そりやどうも……」

落ち着け、俺。好きという単語にいちいち反応するな。これも全てからかい上手の東條さんの罠だ。

しかし、神社という場所だからか、こうしていると運気が良くなつていくような気がする。もしかしたら帰りに一万円ぐらい拾つちゃうんじやなかろうか。

「邪な考えを持つと運気が下がるから気をつけなあかんよ」

「…………」

地の文読む力あるとかスピリチュアルすぎんだろう……。

* * * * *

「はあ……ようやく終わつた」

「お疲れさん♪」

作業を終え、手の甲で額の汗を拭つていると、東條さんがスポーツドリンクを手渡してきた。

「……どうも」

「ふふつ、いい汗かいとるね。気分はどう？」

「……やっぱ将来は専業主夫になるべきだと確信しました」

「あはは……まあ君らしい答えやね。じゃあ、もう上がりだから、着替えたら行こつか」

「えつ？ まだ何かあるんですか？」

「そんな露骨に警戒しなくてええやん？ 朝から働いてくれたお礼にご飯くらいご馳走するだけやよ」

「いや、その、俺は給料分働いただけなので、お礼を言われる筋合いはないと言いますか……それに、奢つてもらうとか申し訳ないんで……」

自分でも何を言いたいのかわからないまま、とりあえず言い訳じみた言葉を並べ立てるが、彼女はそれをさらりと受け流すように笑い、俺の隣に並んだ。

「誰も奢るとは言つとらんよ。こういう時の為に用意してたから」

「……え？」

ワンテンポ遅れて彼女の言葉の意味に気づいた時には、既に彼女は歩き出していた。

俺は慌ててその背中に声をかけた。

「いや、さすがに家とか……」

「なんか問題あるん？」

「えつ、いや、その……てかあんた、俺の事好きなんですか？」

「ふふつ、かもね♪」

「はつ?……」

「何て言つたらどうする?」

「…………別に」

「あははつ、そんな顔しないの。お礼したい気持ちは本当やし。それに……」

「?」

首を傾げた俺に、彼女は今日一番の小悪魔めいた笑みを見せた。それだけで、何だか先の言葉が予想できてしまつた。

「比企谷君なら突然押し倒すような度胸はないやろ?」

「…………」

……予想できていたが、対応はできそうもない。

何か反論しようにも今は何も思いつかなかつたので、続annisは彼女の家に向かう途中で考えることにした。

……結局ついて行つちやうのかよ。

D O W N T O W N #3

彼女が自分の部屋のドアを開けると、何だか甘い香りがふわりと漂ってきた。初めての感覚に、得体の知れない緊張感が、腹の底から一気にせり上がりつてきて全然落ち着かない。

……や、やはりここは戦略的撤退を……

「あっ、俺ちょっと用事が……」

「じい／＼……」

無理そうちだつた。目をうるうるさせているのが見え透いた演技だとしても、それに抗えるかどうかは別問題だつた。

「じゃあすぐに用意するから。その辺座つといて」「は、はい……」

部屋の中は意外なくらい普通で、すつきりと清潔感がある。

大人しく椅子に座り、キヨロキヨロとあちこちを見ると、東條さんがクスッと笑つた。
「別に怪しいものはないやろ?」

「えつ、ああ……はあ、意外と普通の部屋というか……」

「ふふつ、当たり前やん? ウチ、普通の可愛い女子高生なんよ」

「自分で言いますかね、それ……」

「謙虚な女の子のほうが好みなん?」

「……お、俺に合わせる必要はありませんし、んな事言われたら、うつかり勘違いしちゃいそぐなんで」

まつたく……この人の発言はいちいち反応しづらい。

まあ、からかっているのがわかりきつている分、変な期待をすることもないんだが……。

「はいはーい、お待たせ!」

手早く準備を済ませた東條さんが、カレーを載せたお盆を持ってきた。多分、1日寝かせたやつだろうか。

「あの、もしかして俺がここに呼ばれたのって……」

「ん? 別に……作りすぎたカレーを食べて欲しかったとかじやないから安心してええよ?」

「……」

最早隠す気ゼロじやねえかよ……。

いや、タダ飯最高だからいいんだけどね? 巫女さんの手作りカレーとか、世の男子は

大抵喜んじやうだろう……あまり聞かないシチュエーションだが。

二人揃つて「いただきます」をしてから、カレーを少し多めに口に含むと、想像していたよりは辛かつた。そして美味い。

「味はどうかな？」

「ああ……美味いっす」

「そう? よかつた♪男の子に食べさせるんは初めてやつたからね。お口に合うか心配やつたんよ」

「そ、そうですか……」

普通ならここで、何故その初めてに自分が選ばれたのかを聞いたり、自分を部屋に上げた理由を聞いたりするのだろうが、どうせからかわれるだけなので、俺はそのままカレーに集中した。

* * * * *

「ふふつ、別に洗い物までしなくてええのに」

「いえ、さすがにそこまでしてもらうわけにはいかないので」

「君は本当に真面目やねえ」

「真面目ならあんな作文は書きませんよ」

「あははつ、そうやね。たしかに」

食器をてきぱきと棚に戻しながら、東條さんはクスクスと笑い、「でも……」と付け足した。

「君のそういうとこ、ちょっと面白くていいと思うんよ。なんか信用できるし」「……そんなもんなんですかね。よくわからないんですけど」

「ええんやない？ウチも何となく言つてるし」

そう言つた彼女の笑顔はさつきより大人びて見えて、改めて年上なんだと気づかされる。

そのまま自然と言葉のキヤツチボールをしていたら、いつの間にか洗い物は終わっていた。

* * * * *

すべて片付けると特に仕事もなくなつたので、もう帰ることにした。

「今日は朝からありがとうね」

「……ええ。めっちゃ疲れました。あとカレー、旨かつたです」

「ふふつ、素直やね」

「まあ、その……どうやらちょっと面白いらしいんで……つて何やつてんですか？」

何故か俺の頭には東條さんの手が置かれていた。

あまりに自然な動作で、避けようという気すら起きなかつた。

「……どうかしたんですか？」

「んく？ 何でもないよ♪」

そのまま優しく撫でられる。

前もそうだったが、妙な懐かしさと恥ずかしさで、何も言えなくなる。何故抵抗できないのか……。

紫色の粒子がぼつぼつ弾けるようなイメージと共に、体から余計な力が抜けるのを感じた。

彼女は笑顔のまま、そつと頭を数回撫でてから俺を解放した。

「じゃ、じゃあ、今度こそ帰ります」

「はいはい。あっ、比企谷君。ウチも部活始めることにしたんよ」

「……は？ いや、確かもう3年じゃ……」

「特に決まりはないからええんよ。だから応援よろしく♪」

「はあ……な、何部なんでしょうか？」

「スクールアイドル部♪」

「…………」

その聞き慣れない言葉を理解するまで、しばらくの時間を要した。

60 DOWN TOWN # 3

D O W N T O W N #4

μ , s.

東條さんが入ったスクールアイドルのグループ名だ。

なんでも、廃校の危機から音ノ木坂を救うために活動を始めたらしい。ちなみに、グループ名は芸術を司る女神の名前だとか。

さつそくライブ映像を見てみたが、本当に東條さんが歌い踊っていた。

その姿はきらきら輝いていて、普段とは違う彼女の生き生きした姿に、しばらく見
いつてしまつた。

……あの人、こういう事もできるのか。

素直に感心していると、携帯が震えだし、画面には彼女の名前が表示された。

「あっ、もしもし比企谷君？ ライブは見てくれた？」

「まるで狙い澄ましたかのようなタイミングっすね」

「ふふっ、そうやつた？ これもスピリチュアルの力やね。それで……どう、やつた？」

「…………まあ、その…………いい感じだつたと思ひます」

「…………ありがとうございます♪ 八幡君が素直に褒めるつてことは、アイドルの衣装も巫女服と同じ

くらい似合つとるんやね」

「そりやそと何故にいきなりスクールアイドルなんですか?」

「……カードがそう告げとつたんよ」

「…………」

きつと東條さんのことだからマジで言つてているのだろう。

一人頷いていると、東條さんが話を続けた。

「それで、比企谷君の推しメンは誰なのかな?」

「は? 推しメン?」

「そう、推しメン。比企谷君の好みの子や応援したい子やね」

「…………」

「ウチに気を遣わんでもええよ」

「はあ……」

推しメンといわれても、今ライブ映像を見たばかりだし、かといって東條さんを指名してからかわれたくもない。さて、どうしたものか……ん?

「……あの、一応決まりました」

「ほうほう……じゃあ聞こうかな?」

「……あー、俺の推しメンは……A—R I S Eの優木あんじゅさんです」

「…………」

「…………あれ? と、東條さん?」

「いや、ちょっとそこまで本気で選ぶなんて思つとらんかったから」

「……な、何故に引き気味?」

「それに……」

「?」

「……こはウチを選んで欲しかった……かな?」

「……えつ、あつ、いや、その……」

「ふふつ、冗談やけど♪ドキッとした?」

「…………」

……結局、どう答えるもからかわれるんじやねえか。

次からは一回からかわれる度に腕立て伏せ十回やつてみるか?

とりあえず……ム SとA—R I S Eのライブ映像をもう一回ずつ見ておくか。

* * * * *

翌週、ム Sが秋葉原の路上でライブ活動をやるというので、観に行くことになった。

べ、別に断れなかつたとかじやないんだからねつ!

確かメイド喫茶の前でやるらしいのだが……多分、こつちか?

電話で東條さんから教えてもらつた場所を思い出しながら歩いていると、曲がり角から出てきた人物に気づくのが遅れた。

「つ！」

「きやつ」

思いきり真正面からぶつかってしまう。

相手が尻餅をついたのを見て、俺は慌てて手を差し出した。

しかし、そこでようやく相手が女子と気づく。

鮮やかな金髪が印象的な彼女は、その宝石のように綺麗な青い瞳を、俺の手にじつと向けていた。

……もしかして、気味悪がられているのだろうか。

不安が胸をよぎつたところで、彼女は俺の手を握り、勢いよく立ち上がった。

「あ、ありがとうございます……」

「いえ、その、すいません。ぼーっとしてて……」

「ふふふ、私もよ。それじゃあ、私急ぐから……」

「あっ、はい……」

彼女は大人びた笑みを見せ、颯爽と去つていった。あつ、こつち振り返つた。
……なんか顔赤かつたけど大丈夫なのか？また振り返つた。

* * * * *

「はあ……はあ……早く忘れ物、取りに行かなきや……それにしても、さつきの男の子
……運命かしら」

DOWN TOWN #5

メイド喫茶前に到着すると、既に結構な人だかりができていた。ライブ映像のコメント欄を見た時も思つたが、割と人気があるようだ。

さて、東條さんはどの辺りにいるのだろうか……。

少し離れた場所から、そつと人だかりの隙間を見つめていると、背後に人の気配を

……

「ふう……」

「つ!?」

耳元に生温かいものがかかり、ぞわっと総毛立つ感覚がした。

「うん、ええリアクションやね」

「い、いや、何やつてんすか。心臓止まるかと思いましたよ……」

振り返ると、小悪魔めいた彼女の笑みがそこにあつた。いや、この人は本物の小悪魔じやなかろうか。

普段は巫女服を着て いる小悪魔は、今日はいつかのようなメイド服姿だつた。

「……」

「ふふつ、どうしたん? ぼーととして」

彼女はびよんっと跳ねて、俺の前に立った。その際、ある箇所が大きく揺れ、そこだけかなり悪魔的だつた。

そこで再び彼女と目が合う……おかしい。やましいところなど何一つないはずなのに、ギクツとちやつたぞ……。

彼女は俺の視線を悟っていたのだろうか、東條さんは目を細め、口を開いた。

「どこ見とるん?」

「……」、このライブの成功を夢見ています

「そつかあ、このライブの成功の鍵はウチの胸に詰まってるんやねえ」

「……」

……さて、家に帰つたら腕立て伏せをしつかりやりますかね。

「お待たせ!」

いきなりの大声に視線を向けると、そこにはさつき遭遇した金髪さんがいた。早すぎる再会に驚いていると、東條さんが彼女に声をかけた。

「あつ、エリチ。随分早かつたやん」

「ええ。全力で走つたから何とか……あ」

彼女と目が合う。

俺はとりあえず会釈しておいた。

「……どうも」

「ふふつ、また会つたわね」

「あら？ 二人は知り合いなん？」

「いや、その、知り合いといいますか……」

「今さつきそこでぶつかつたのよ。うんめい……偶然ね」

「…………」

「この人、なんか変な言い間違いしなかつたか？ いや、まあ気のせいいか。

東條さんは、俺と金髪さんを交互に見てから、今度はさつきとは違う質の笑みを浮かべた。ただ、どこがどう違うのかまではよくわからなかつた。

「そう言う希こそ彼と知り合いなの？」

「うん。ウチと比企谷君は仲良し小好しだもんね～」

「え？ あ、その……」

「あれ？ 仲良し小好しだと思つてたのはウチだけやつたんかなあ？」

「くっ！ 何でいきなりこんなテンションに！ あと近い近いい匂い近い！」

するとエリチと呼ばれた金髪さんは、強引に俺と東條さんの間に割つて入つてきた。

「ほらほら、そんな絡み方したら彼が困つてるでしょ？」

この人もこの人で近いんだが……そ、そして、いい匂い……。

「アンタ達、ライブ前に何やつてんのよ」

今度は年下っぽい女子がやつてきた。確かにこの子は……

「にこつち、どうしたん?」

「どうしたん? ジやないわよつ、絵里も忘れ物取つてきたなんなら早く着替えないと、そろそろ時間よ」

「あつ、そだつたわ。じやあ、比企谷君……だつたかしら。ライブ楽しんでいつてね」「あ、はい……」

二人はパタパタとメイド喫茶に入つていつた。金髪さんが何度も振り返りながらだつたのが気になるが……。

「さあて、ウチも戻らんと。比企谷君、熱い声援よろしく」

「……まあ、その……心の中でなら」

「ふふつ、じやあ行つてくるね」

「……ええ」

そう言つて駆け出す彼女のやわらかな微笑みは、やっぱり大人びた年上のもので

……。

何故か頬がじんわり熱くなるのを感じた。

「あつ、そうそう、にこつちはあれでもウチやエリチと同い年やからね」
「……そうですか」

D O W N T O W N #6

「気を遣つて優しくしてるなんなら……そういうのはやめろ」

先日、職場見学が終わつた後に、由比ヶ浜に告げた言葉。

これでいい。何一つ間違つてはいない。そのはずだつた。

しかし、胸の奥底で何かがどんより蟠つているのが、はつきり自覚できた。

俺はそれに気づかないふりをした。

そうするのが一番だと思っていた。

* * * * *

もう一学期もだいぶ終わりに近づいたある日の夜、何かを忘れるように読書に集中していると、携帯が震えだした。

誰からの電話かなんて、いちいち確認するまでもなかつた。

「……もしもし」

「ふふふ、こんばんは♪今日もテンション低いねえ」

「陽気なテンションで元気よく挨拶する俺を想像してみてくださいよ」

「んー……ああ」

いや何だよ、そのリアクション。そんなにひどいのかよ。

「じゃ、じゃあ今日は失礼します……」

「それで……なんかあつたん?」

「えつ? いや……は? だ、誰から……」

当たり前のように聞いてきたことに、ついつい驚きの声が漏れてしまつた。

「ふふつ、図星みたいやね」

どうやらカマをかけられていたらしい。普段からかわれているくせに、この程度も見抜けないとは……。

というよりは、それに気づかないくらいには、頭の中に先日の事が残つてゐるからか。何も言えずにはいると、彼女の息づかいだけが電話越しに聞こえてきた。

多分、俺が言いたくないといえば、この人は何も聞かないだろう。

何事もなかつたかのように、普段のノリでからかつてくるだろう。

そして、いつもの自分なら、そうして誤魔化して、時間が経つのに任せはるはずだつた。しかし、自然と俺の口は動いていた。

* * * * *

話し終えると、彼女は「そつか」と言つた。

何故か、一人で頷いている姿が用意に想像できた。

「どつちも優しいんやね……」

予想外の言葉に、一瞬言葉を失う。

「いや……別に優しくはないですよ。実際……」

「そんなことないよ」

「…………」

「きっと由比ヶ浜さんは君の事を思つてた。そして、比企谷君も不器用ながら彼女の事を思いやつたんやろ？ ただ、ちよつとすれ違つただけ」

「…………」

「三月に君と出会つてから、そんな大した時間は経つてないけど……君は最初から不器用で優しい男の子やよ」

「…………そ、そうですか」

心に何かがじんわり染み込むような感覚がした。

それは、彼女から頭を撫でられた時の感覚と、どこか似ていた。

電話越しの声だというのに、そつと穏やかに胸が高鳴るのを感じながら、思いついた言葉をそのまま口にした。

「ありがとうございます」

すると、彼女の安心したような息づかいが耳元を揺らした。

「元気でたみたいやね」

「かもしだせん……まあその……」

「そうやね、お礼は神社の掃き掃除のボランティアでええよ?」「……」、このタイミングで言いますかね、それ」

「あははっ、これはウチからの優しさ♪遠慮とかせんでええよ」

「……まあ、いつか、気が向いたら行きますよ」「来週やね。ありがと♪」

「…………」

どうやら来週の日曜日の予定は決まってしまったみたいだ。
まあいいだろう……何だかんだ世話になつてるし……。

「……東條、さん」

「なあに?」

「その……ありがとうございます」

「ふふつ、今日はやけに素直やね……可愛いなあ」

その艶やかな声音に、またドキリと胸が疼いた。

ここは戦略的撤退をするしかないだろう。

「……す、すいません。もう寝ます」

「はいは〜い♪おやすみ〜」

通話を終え、部屋の灯りを消すと、心が軽くなつた感覚と寂しさみたいなのが、同時にやつてきた。

そして、目を瞑つても、眠りは中々やつてこなかつた。

DOWN TOWN #7

「比企谷くくん。休憩してええよ~」

「……ああ、どうも」

東條さんから飲み物を受け取り、ベンチに腰かける。心地よい疲労感という言葉は自分らしくはないが、今感じているものが、まさにそうなのだろう。

「目以外から邪気が浄化された感じやね」

「……それでも目は腐ってるんですか」

「気にしなくともええんよ。そういう目つきが好きな女の子だつておるんやから」

「その奇特な奴を紹介してもらいたいですね」

「ん♪今日もいい天気やね♪」

そう言いながら東條さんは大きく伸びをした。

話を断ち切られたが、その強調された胸元を見れば許してしまっては男の性だろうか。ならば仕方ない。

俺は先日の夜、電話でした話を切り出すことにした。

「そういや、この前の件は一応解決しました」

「そつか……ふふつ、よかつたやん。仲直りできて」

「いや、仲直りとはニュアンスが違うと言いますか……」

「まあええやん? 細かいことは。これでまた部活動が始まられるわけやし」

「そつちのほうはさりげなく辞めたいんですけど……」

「まあまあ、案外悪くないもんやろ? そういう形で誰かと一緒にいるのも」

「…………」

いたずらっぽく笑う彼女に、俺は黙つて頷いた。

* * * * *

昼を少し過ぎたくらいに、全ての仕事が片づくと、東條さんが、今度は小さなポーチを二つ持つて、駆け寄ってきた。

「今日はお疲れさんやったね。はい、これ」

そのうちの一つを手渡されると、それが何なのか、何となく想像できてしまう。

「…………あの、これ……」

「ん? そんな慌てんでも、家に来て手料理も食べたんやし、今さらやろ?」

「はあ……」

そうなのかもしれないが、さすがにここまでされると、ボツチとして訓練してきた奴じやなければ、うつかり勘違いしてしまうんじやなかろうか……一体この人はどれだ

けの男子を死地に送ってきたのだろう。

心の中で敬礼を送り、丁寧にポーチを開くと、そこには……コンビニで売っているおにぎりが二つ、ちょこんと入っていた。

……いや、いいんだけどね？

「あははっ、だつて外で手作り弁当なんて渡してたら、カツプルみたいやん？」

「……べ、別に何も言つてませんけど」

「ふふっ、自意識過剰くん♪」

「また旬なネタを……」

つつても、全然シチュエーションが違いすぎて、いつも通りにからかわれている気分にしかならない。

「まあ朝寝坊しただけなんやけどね」

「つまり、朝寝坊しなかつたら手作り弁当が食べられた、と」

「ううん、それはどうかなあ」

含みを持たせて微笑む彼女の髪を、風が優しく撫でた。

控え目な香りがふわりと漂うのが、何だか前より馴染んだことのように思えた。

そのせいかはわからないが、つい思つた事を口にした。

「そういや……東條さんって一人暮らしなんですね」

「うん、そうやけど……珍しいね。君からウチの事聞いてくるなんて」「い、いや、何となく……」

彼女にそう言われると、急に恥ずかしくなつてしまつた。特に変な意味合いもないはずなのに……。

そんな俺の様子を見た彼女は、またくすりと笑つた。

「ふふつ……高校に入つた時からよ。ウチの親、かなり転勤が多いから」「…………」

それから彼女は穏やかなトーンで、小学校の頃の話を始めた。
五分程度だつただろうか。俺はなるべく想像力を働かせながら、その話に聞き入つていた。

* * * * *

「ふう……久しぶりに小学校の頃思い出したなあ。退屈な話だつたやろ?」「…………いえ、そんな事は……」

彼女の小学校時代は、転校が多く、友達づくりにも苦労したとのことだ。まあそうじやなくとも友達いない奴もいるしな……誰の事かは伏せておく。

ただ、話の内容よりも、遠い過去を見つめる彼女の横顔が、ひどく寂しそうに見えたのが、胸を締めつけた。

だがそれも数秒だけで、すぐに跡形も残さずに消えてしまった。

「じゃあ、今度は比企谷君の小学校時代について聞こうかな」

「いや、それはさすがに……本気で面白味の欠片もありませんし……」

「ええよ、それで……それに、比企谷君の小学校時代なんて気になるやん?」

「は、はあ……」

そういうものなんだろうか……まあ、別に隠す事でもないからいいけど……。

「じゃあ小学校時代の誕生日やフォークダンスの楽しい思い出を……」

「おつと……これは心して聞かんといかんね」

しようもない話の連続になりそうだが、少しでもいいから彼女が笑えばいいと思う。

心の片隅でそんな事を祈りながら、俺はなるべく明るく思い出話を始めた。

D O W N T O W N #8

「♪～」

「希、今日は機嫌いいわね。何か良いことでもあつた？」

「別に～、いつもどおりやよ」

エリチの言葉についつい首を傾げてしまう。そんなに舞い上がりつているように見えたのだろうか？

つい自分の頬を触つてみると、エリチがこつちを見ながらニヤニヤ笑つていた。

「な、なあに？」

「ふふつ、いつものように誤魔化そうとしても私にはわかるわよ」

「はあ……」

エリチの宝石のような青い瞳は、本当に全てを見透かすくらいに輝いている。しかし、ウチ自身にもわからない。そもそもどんだけ機嫌よさそうやつたんやろ？ 思い当たる節はなくはないけど……まあそれが全部じやないし。

「さつ、練習練習♪」

「……比企谷君ね」

「つ！」

何故かはわからないけど、図星を突かれたみたいに体がビクツとしてしまう。
……何でやろうね？

「もう、エリチつたら。いきなり変なこと言わんでよ～」
「ふふつ、たまにはいいじやない。だつて事実なんだし」

事実……なんかなあ？

色々あつて、最近連絡を取り合うことは多いけど、彼と話してゐる時の感覚がそういう
のかは正直わからない。

……そもそも恋がよくわからないのかもしね。

告白された事とかは一応あるけど、転校が多いという最もらしい理由をこじつけてお
断りしていた。

それに、周りの女の子達の恋愛話にもあまり興味が持てなかつた。

「希～……もしも～し」

「えつ？ああ、ごめん。ぼーとしとつた」

おつといけない。つい考え込んでた。

すると、エリチが頭を撫でてきた。

「何でいきなり子供扱い……いつもはそつちがポンコツやのに」

「そうだつたかしら? この私がポンコツだつたことなんて一度もないけど」

「今世紀最大のウソをどうもありがと」

「それより、比企谷君のこと色々教えなさいよ。どんな風に知り合つたのかしら?」

「エリチどうしたん? やけに食いつくねー」

珍しい。普段は男子の話なんてしないのに。

すると、彼女は何故かドヤ顔で笑つた。ポンコツが少し出てきたね。

「だつて……あんな素敵な目をした男の子、初めて見たわ」

「……目?」

つい首を傾げてしまう。

おかしいなあ? 私が知つてる比企谷君とエリチが言つてる比企谷君は別人なんやろうか。

彼の目はどんより濁つていて、スピリチュアルの力で何とかしたいと思つてたんやけど……まあ、あのままで可愛くはあるかな?

エリチはどこかうつとりした表情をしている……、これはマジなやつやね。

「それで、希

「な、なあに?」

「比企谷君について、できるだけ詳しく教えてくれないかしら?」

「……ウチもまだ詳しく述べらねえ」

よくよく考えてみれば、まだウチは比企谷君の事はそんなに知らない。

入つてゐる部活や、変な作文は知つても、もつと日常的な事についてはよくわからない。

この前も比企谷君の哀愁漂う思い出話やつたし……今度はそういう話もしてみようかな。

「希く、もしもくし。ふう……やつぱりライバルになりそうね」

「え？なんか言つた？」

「何も」

「いやアンタ達、何話してんのよ」

いつからいたのか、にこつちがジト目でこちらを見ていた。今日も相変わらずにこつちやね。

「どうかしたん？」

「さつきから黙つて聞いてれば……いい？私達はアイドルなのよ。男に現を抜かしてると暇なんてないんだから！」

「そ、そうやね！アイドルやもんね！よしつ、今日もレッスン頑張ろう！」

エリチの追及を逃れる為に、ウチは全力でにこつちの話に乗ることにした。後でに

こつちにはブラ○クサンダーでもあげよう。

「あつ、希！もう……」

エリチの視線を背中に感じながら、自分の頬が少し紅くなっている気がした。

* * * * *

「ふう……」

家に帰り、ベッドに身を投げ出すと、やつと気持ちが落ち着く。

エリチ……一目惚れしたんやろうか。

お堅い性格の彼女にしては意外だけど、予想外の出来事なんて、人生幾らでも起っこる。……ウチにもいつか、そんな日が来るんやろうか？

とてもじやないが、想像がつかない。

いや、今はそれより……比企谷君に電話しとかんと。好きな食べ物くらいは……何のためかはわからないけど。

彼の番号を選択すると、飾り気のないコール音がしばらく鳴り続けた。

七回……八回……九か 「はい」

その声につい笑みが零れてしまう。

「ふふつ、やつと出た。ねえ、比企谷君……」

さあ、なんて事ない話をしよう。

DOWN TOWN #9

「ふむふむ、ここが比企谷君の部屋か。意外と綺麗にしてるんやね」

「…………」

「……なんでここに先輩が!?」

いや、今まで先輩とか呼んだことないんだけどね?

つい変なテンションで、そう考えたくなる今日この頃……。

クラスメートですら上がつたことのない俺の部屋に、何故東條さんがいるのか。
理由は遡ること数時間前……

* * * * *

「ほら、お兄ちゃん! 腐った目してないで、はやくはやく!」

「へいへい」

休日の昼間に妹の荷物持ちとか、兄冥利につきの話ではあるけれど、やはり家でゴロゴロしていたい。惰眠を貪りたい。

そんな気持ちを片隅に、小町の後ろを歩いていると、何故か視線を感じた。
そして、ふと目線を向けた先に、その人は立っていた。

「あら、比企谷君？」

「ど、どうも……」

まさか、また千葉駅近くで会うとは……何、この人？千葉大好きなの？それとも俺の事好きなの？

「ふふつ、どうしたん？そんな驚いて」「いや驚くでしょ、そりやあ……」

「今日も用事があつて来たんよ。もしかしたら比企谷君に会えるかな」とは思つてたんやけど。本当に会えるとは……ウチら赤い糸で結ばれてるんやろうかね？」

「…………」

東條さんが頬に手を当て、いつものように悪戯っぽい笑顔を向けてくる。やばい……これはいつものパターンだ。

そう思つていたのだが、今回はそうはならなかつた。

「ちよ、ちよつと、お兄ちゃん！こつち来て！」

いきなり小町から腕を引かれ、ひそひそと耳打ちされる。

「何だよ……」

「何だよじやないよ！誰、あのグラマーな和風美人？小町、あんなの聞いてないよ！」

「……まあ、言つてなかつたからなあ」

「もしかして、比企谷君の妹さん？」

いつの間にか距離を詰めていた東條さんが、会話に割り込んでくる。さつきとは打つて変わった優しい笑みを向けてくるが、これが作り物であることはすぐわかつた。

……この人、間違いなく面白いものを発見したと思つてる。

しかし、そんな事はどうでもいいと言わんばかりに、二人は既に自己紹介を済ませ、会話を始めていた。

「それで、希さんはお兄ちゃんとはどんな関係なんですか？」

「いや、普通にただの知り合いなんだけど……」

ぼそつと言うと、東條さんはわざとらしく両手で顔を覆つた。

「うう……ひどい……ウチと比企谷君の仲なのに！」

「あー、お兄ちゃん、ひどい」

「…………」

どうやら余計な事は言わないほうがいいようだ。

首筋に手を当て、溜め息を吐くと、小町が東條さんに人懐っこい笑顔を向けた。

「あのですね、今小町と兄は一人で買い物に来てるんですけど、希さんもよかつたら一緒にどうですか？」

小町の唐突すぎる申し出に、東條さんは笑顔で頷いた。

「ええよ。もう用事も済んだし」

まさかの即答である。

ついつい口をポカンと開けていると、彼女はいつもの笑みで、心を揺さぶってきた。

「比企谷君がオーケーなら、やけど……」

断れるはずもないし、断る理由もない。別に嫌なイベントでもないし。

俺は黙つて頷き、二人の後を静かについていく事にした。

心が少し……ほんの少し弾んだ気がしたのは、多分気のせいだろう。

そして、このことがちよつとした事故のきっかけになるとは、無論知る由もなかつた。

DOWNTOWN #10

「いや、びっくりですよ。まさかウチの兄に、希さんみたいな美人な知り合いがいるなんて〜」

「あははっ、小町ちゃんはお上手やね〜」

「…………」

二人の後をとぼとぼついていきながら、何だか不思議な気分になる。あと小町がこちらを時折窺つてくるのが気になる。何を話しているのか、何を聴いているのか。すると、東條さんはこちらに意味深な笑みを向けてきた。

「な、何ですか……」

「別になんでもないよ、それより何でそんな離れどるん?」

「いや、ほら……安全確認大事ですよね？」

「その割には拳動不審でちょっと危険人物みたいやけど」

「失礼な。それだけ周囲に気を配つてることですよ。てか、小町に変なこと吹き込まないでくださいよ」

「変なこと? んー……例えば、初めて出会った時に君がウチの濡れた巫女服をいやらし

い目で見てたこととか？他には……」

「いえ、そういう事ではなく……」

「ふふつ、心配せんでもお姉さんは可愛い比企谷君の恥ずかしい場面をばらしたりはせえへんよ」

得意気にそう言いながら、彼女は頭を撫でてきた。

いや、だからそういう行動を慎んで欲しいんですけど……。

「くつ……うらやましい！」

「ちょっとアンタ、何見とれてんのよ」

「ザキ」

「はあ……まつたく、ボツチのくせに」

周りからぼそぼそと怨嗟の声が聞こえてくる。そして、その中に混じっている俺をボツチだと決めつける声。いや、当たつてるんだけどね？

とりあえず誰が言い当てたのかを確認しようとすると、そこにはそれらしき人物はない。

……どうやらステルス機能をお持ちらしい。

「ふふつ、顔赤くなつとるよ？どうかしたん？」

「いや、アンタのせいでしょうが」

「あわわわ、お、お兄ちゃんが……綺麗な年上女性に頭なでなでされてる！しゃ、写メ撮つてお母さんに見せなきや……」

「落ち着け、小町。変な誤解の種にしかならんからやめろ。あとそれぐらいで感動して泣くな」

「でもでも！あのお兄ちゃんがだよ？小町嬉しいよ……あつ、希さん。もつと撫でてくださいよ～」

「はいは～い」

「…………」

「とりあえずやめて欲しいのだが、何故かしばらくされるがままになつていた。
……別に気持ちよかつたとか、そんなんじやない……はず。

「それで、アソツはいつの間にかいなくなつてるわけですが……」

「あははっ、これもスピリチュアルやね」

いや、絶対に違う。ただの計画的犯行だろう。

そもそも小町の荷物持ちで來たのだから、もう用事はなくなつたわけだが……。

なんて考えていると、東條さんがいきなり近くから顔を覗き込んできた。

ふわりと優しい香りが漂い、その心地よさに包まれた気分に沈みかけると、厚みのあ

る唇が動いた。

「二人つきりは……嫌?」

「つ……！」

もちろん演技に決まってる。それは理解している。

しかし、理解しているからといって、この上目遣いに無反応でいれるほど悟りは開いていない。

彼女もそれを理解しているのだろう。いつものように悪戯っぽい笑顔を見せると、俺の返事を聞くこともなく歩き出した。

「比企谷君。ウチ、あのお店が気になるんやけど」「…………」

用事はなくなったが、どうやら別の用事が入つてしまつたらしい。

俺は大人しく東條さんについていく事にした。

* * * * *

彼女について行つた事を俺は早くも後悔していた。

「……そ、それで、さつそく水着売り場ですか?」

やたらカラフルな空間に、女子のみの集団やカツプル。しかもやたら甘い香りがするし、とにかく居心地の悪さだけは抜群だった。

無論、東條さんは、そんなの気にかけることなく、いくつかの水着を手に取りながら話を続けた。

「ふふつ、そろそろ夏の曲のMV撮影があるんよ。皆は去年買ったばかりっていうから「…東條さんは持つてないんですか?」

「ウチは……」

東條さんは胸元を押さえながら、そつと耳打ちしてきた。

「去年のはもうきつくなつたんよ」

「…………」

絶対に動搖してなるものかと気を強く持つていると、彼女は「うくん……」と伸びをしてみせた。

すると、ただでさえ豊満な胸がより強調される。視界の端っこでは、カツプルの男が女に頭をはたかれていた。

「よしつ！じゃあ、比企谷君はウチにどんな水着着て欲しいん？」

「ラジリアンビキニ。

「いや、俺はそういうのよくわからないんで……」

うつかり心の声が出るところだつたぜ……。

だが妄想は止めることができない。これは俺が悪いんじゃない。社会が悪い。違う

か。違うな。

東條さんは俺の心を読んだかのように、露出度の高い水着を手に取った。これこそ本当のスピリチュアルだろ……。

「その反応……そつかあ。比企谷君はこういうのが好みなんやね」

「いや、そ、そんなことないですよ……」

囁んでしまった。

おかしい、別にやましいことなどないのに。

「本当は？」

「好きです……い、いや、そうではなくてですね……」

いかんいかん。本当は、と聞かれたらうつかり口が滑るシステム発動してたわー。つべーわ。

東條さんはクスクス笑いながら、わざとらしく胸元を隠した。

「あんまエツチなのは無理やけど、可愛いのにするから期待してええよ。じゃ、ウチは着替えてくるから。水着売り場の外で待つててくれる？」

「えつ？ いや、そつちが……」

すると、東條さんは何故かそっぽを向きながら答えた。

「……や、やっぱり恥ず……ミュージックビデオを楽しみにしてて欲しいやん？ せつか

くやし

「そ、そうすか。じゃあ、近くの自販機で飲み物買つてきます」

水着姿を拝むイベントには入らねえのかよ……神様何考えてんだ。

俺は少し……ほんの少しやるせない気分になりながら、水着売り場を出た。
去り際に見た彼女の横顔。頬が少し赤い気がした。

君は天然色

東條さんが水着を購入してから、とりあえず喫茶店で一休みすることになった。

店内はそこそこ賑わっていたが、まだ空席がちらほら見えたので、すぐに座れた。案内された腰を下ろすと、ようやく人心地ついた気分に浸れる。

「ふう……」

「ふふつ」

零れ出した溜め息に東條さんが可笑しそうに口元を手で覆う。

「……何か？」

「ちょっと疲れすぎなんやない？ もしかして、運動不足？」

「いや、これは足が疲れたんじやなくて、人混みに疲れただけですよ。メンタルが……」

「それは……御愁傷様やね」

気まずそうに目を逸らしながら、苦笑いされている。おや？ どうやら引かれてます

ね、これは。

すると、普通の笑顔に戻った彼女は、メニューの一つを指差した。

「何にするか悩んどるなら、これなんかいいんやない？」

[?]

白く細い指が置かれた場所を見ると、そこにはカップルで頬むためにあるような、ストローが2つささったカラフルで映えそうな飲み物の写真があつた。

「……随分喉渇いてるんですね。俺の分の水あげましようか？」
「なるほど、今日はそう切り返すんやね」

「な、何の話ですかね？」

そう毎回毎回、西片君ばかりにからかわれてたまるか。

顔を上げずにもメニューを一つ一つ精査していると、やたらと視線を感じてしまう。
ああ……きっとにやにやしてんだろうな。絶対に顔を上げないでおこう。

「奉仕部のほうは最近どうなん？」

「はっ？」

予想していなかつた質問に、つい顔を上げると、そこには想像していたのとは違う種類の微笑みがあつた。

……この人は笑顔だけで何種類あるんだろうか。確かめていたい気がする。

その気持ちを押し殺し、メニューを一旦テーブルに置いた。

「……いきなり母親みたいな質問ですね」

「μ、sではそういう役割やからね。最近はエリチのお世話が大変やし」

「はあ……お世話?」

「それがね、君と会つてからやけに髪型とか衣装が年下の男の子にウケるかどうかを気にしたり、休み時間毎に君のことについてくる日があつたり……比企谷君のせいで大変な事になつとるんよ?」

それは本当に俺のせいなのだろうか?

わからないが、一応謝つておいたほうがよさそうだ

「……なんか、しのびないっす」

「構わんよ」

クスクスと笑う東條さんの口元にうつかり見とれそうになつたところで、まだ注文を済ませてないことを思い出し、俺と彼女は慌てて注文した。

何を注文したかって? 言うまでもなく普通のコーヒーだよ。

* * * * *

喫茶店を出て、しばらくぶらついたところで、俺はあることを思い出した。

「……そういや傘返さないと」

「……ああ、そういえばすっかり忘れとつたね~」
東條さんも今思い出したかのような反応だ。まあ、最近雨降つてなかつたしなあ。いや、ちゃんと返す予定はありますよ? 当たり前じやないですか。

「じゃあ、今から取つてきましょうか。そんなに時間はかかるないと思うんで」

「ウチも行つていい?」

「…………それじやあ今から取つてきます」

「ウチも行つていい?」

「…………」

どうやら聞き間違いではないようだ……マジか。マジで言つてんのか、この人。女子がウチに来たがるとか……中学時代なら、小躍りして いたかもしぬれない。だが断る。

「あつ、すいません。ウチ散らかつてて、今来客とかは……」

「よしつ、決まりやね! ジヤあ行こつか♪」

「つ!?

東條さんは俺の腕を取り、歩き出した。

正直抵抗できなかつたが、それは決して肘の辺りに感じる柔らかな感触のせいではない。ハチマン、ウソ、ツカナイ……。

* * * * *

「へえ、ここが比企谷君のお家かあ~」

「まあ、そうですけど」

ごく普通の比企谷家を見ながら、東條さんはやたら目をきらきらさせている。そんなに珍しいものでもないはずだが……。

大変不本意ではあるが、来てしまつた以上、一応はもてなしておかないと、小町からお叱りを受けてしまう。

「あの……と、とりあえずお茶でも淹れますんで……」

「……ありがと♪」

こうして比企谷家に……さらには俺の部屋に東條さんが上がることになつたのだが……。

「比企谷君、どうしたん? 汗かいてるけど」

「い、いや、エアコンがあまり効いてないようで……」

「そうかなあ? でも、」

笑いながら胸元をぱたぱたさせる東條さんから、慌てて目を逸らす。い、今、谷間が見えたような……てか、わざとじやねえだろうな。この人の厄介なところは、普段は狙つてやつてるのに、たまに天然なのが含まれているところだ。これがスピリチュアルの力か。違うか? 違うな。

なんて考えているうちに、東條さんが立ち上がり、怪しげな笑みを浮かべた。
「さてさて、じやあ始めようかね」

「何をですか？」

「もちろん、比企谷秘蔵のエッチな本探しに決まつとるやん？」

「…………」

何がもちろんのだろうか。

えつ、何？俺が知らないだけで、女子の中では男子のエロ本探しがブームなの？エロ本探しなうとかTwitterにあげちゃうの？その光景、映えるの？

彼女はベテラン捜査官のような余裕たっぷりの笑みで、ある場所に狙いをつけた。

「まずはベッドの下からやね」

「いや、そんなのありませんから。しかもベッドの下て、今時……」

「ええつ！…………な、な、ないの？ウソやろ？」

「いや、なんつー驚いた表情してんすか……」

「一体何を確信していたのだろうか。

ちなみにベッドの下には何もない……ベッドの下にはな。

せいぜいこの前パソコンでスクールアイドルのライブ映像を見た時、優木あんじゅの動画をいくつか保存したくらいだ。あとは……

「本当にないん？比企谷君なのに」

「比企谷君なのについて……まあ、そんなの読んだら魂が汚れますからね」

「そつかあ。じやあエリチのスクール水着写真を枕の下に入れとくね」

「いやいや、何やつてんすか」

「いらんかつた?」

「……い、いりませんけど?」

「表情とセリフがあつとらんよ」

……なかなか鋭い。てか、何故持ち歩いているのか。

すると、東條さんがベッドの下を漁った時の震動からか、棚から何かが落ちてくる。

そのあるものを見た俺は、冷や汗が背筋を伝うのを感じた。

「あら? これは……」

「ちよつ……」

それはやばいやつだ。

回収するべく、俺は一步踏み出した。しかし……

「あつ……」

「えつ?」

しかし、勢いあまつてしまい、足を滑らせた俺は、東條さんごとベッドに倒れてしまつた。

君は天然色 #2

「いたた……」

「…………」

ぎしぎしと軋むベッドの音。密着する柔らかな温もり。混じり合う吐息。驚いた丸い瞳。呼吸に合わせて動く豊かな双丘。

あらゆるもののが意識を埋めつくし、時間が止まつたような感覚がした。

こんなにも女子と顔を近づけたのは、生まれて初めてだという事実も、頭の片隅に追いやられていた。

それぐらい目の前の東條さんは……綺麗だつた。

ぽつてりした唇に視線がいき、あとは釘付けにされたかのようにそのまままでいると、ふつとその唇が動いた。

「……比企谷君」

「は、はい……」

言葉はぼんやりと、耳をすり抜けていった。中学時代なら、勢いに身を任せ、何らかの行動を起こしていたかもしれない。

「このまま、甘い香りに誘われてしまつたら、どれだけ……。
そこで、また唇が動いた。

「これは……とんだドスライズやね」

「…………」

いやドスライズつて何だよ。

しかし、急に場の空気が弛緩した気がした。

「あの、比企谷君……そろそろ、どいて欲しいんやけど?」

「つ!す、すいません!」

慌てて体を起こし、すぐに手を差し出す。無意識で出してしまつた手は、頼りなくぶらぶらしていたが、東條さんが掴んだことにより、安心感を得た。

「もう……びっくりするやん?」

「す、すいませんでした……」

「比企谷君つたら……意外とオオカミなんやね」

「いや、そういうわけでは……」

頬を紅く染めながら、わざとらしく言う東條さん

この人ならば、自分の意思で頬を紅くすることができるんじやないかと考えると、なんか複雑な気持ちになるが……。

「でも……」

東條さんが躊躇いがちに口を開く。

その瞳は微かに濡れていて、上目遣いがやけに色っぽく思えた。

そして、彼女は胸元に手を当て、言葉を紡いだ。

「さつきの比企谷君……男らしかったよ」

「ああ、そうですか」

「えへ、反応薄くない？」

「さすがに今のはわかりやすいというか……」

「そつかあ、比企谷君もウチの事を理解し始めたんやね。えらいえらい」

「…………」

何故頭を撫でるのかとツッコミをいれたいところだが、今はやめておこう。別に何だ
か気持ちいいとか、そんなんじやないとだけ言つておこう。

「ふふつ♪」

「…………」

しばらくの間、東條さんは俺の頭を優しく撫で続けた。

俺は、彼女の赤い頬を眺めながら、時計がチクタクと時を刻む音に耳を澄ませ続けた。

「ところで……」

そこに、東條さんの声が乗つかつてくる。

「この写真は何なのかな？」

「あつ……」

いかん。さつきのドスライズとやらで、すっかり忘れていた。

ニヤニヤと笑う彼女の手には、メイド服を着用した彼女の写真があつた。

……はい。先日、秋葉原に行つた時、ふらつと入つたスクールアイドルショップにて購入してしまいました。

「ふうくん、そんなにウチのメイド姿が見たかつたんかな？」

「……い、いや、これは……」

「ん？？」

「いや、だから……」

「どうしよつかな？可愛い比企谷君の頼みやからな♪」

「べ、別に頼んでるわけじや……」

だから見られたくなかったのだ。これならエロ本が見つかつたほうがマシである。持つてないけど。

得意氣な笑みでこちらを覗き込んでくる東條さんは、そつと顔を耳元に近づけてき

た。

「ふふつ、また今度ね……御主人様♪」

「つ！」

耳をくすぐる吐息のせいだろうか、それとも甘い囁きのせいだろう
とにかく、頭の中が真っ白になり、ふわふわと天にも昇るような気分が脳内を隙間な
く満たしていった。

* * * * *

その後、からかわれ続け、小一時間ほど経ったところで、東條さんは帰ると言い出した。

玄関を出て、もう一度我が家を見上げた彼女は、来た時と同じような表情を見せた。
「ふう……また来ようかな」

「いや、まあ……どっちでもいいですけど。てか、うちにスピリチュアルな何かがあるん
ですかね？」

「うーん、どうやろ？ 比企谷君の家やからね」

「それ、褒められてるんですか？」

「もちろん。今日も比企谷君からはスピリチュアルなエネルギーが溢れとるね」

「いや、今テキトーに言つてるでしょ……」

しかし、もし本当なら、俺がボツチなのはスピリチュアルな力が、人を寄せつけないからということになる。違うか？違うな。

それより、我が家を見上げる東條さんの横顔は、少しだけ……気のせいと思えるくらいに少しだけ、寂しげに見えたのは何故だろうか？

「よし、レッツゴー！」

「…………」

いつの間に自転車を用意した。いつの間に後部座席に座つた。これこそスピリチュアルだろ。

「……そこは小町専用なんで」

「はあ……ウチの足、震えとる。いきなり比企谷君に押し倒されたからやろうか？」

「…………」

「どうやら拒否権はないらしい。まあ、別にいいけど。なんだかんだバイトの時、世話を焼いてくれるし。

「あんまスピードは出しませんよ？暑いんで」

「ええよ。ウチもそのほうが好きやし」

ゆっくり座席に座ると、いつもと違う重みを背後に感じ、気が引き締まる。

すると、背中に暴力的ともいえるくらいの凄まじい柔らかさが密着してきた。

「つ!!」

「比企谷君、どうかしたん?」

「こ、この人……わかつてやつてんのか……！」

いや、しかし……そんな……いや、もう考えるな。背中に密着しているのはクツショ
ンだ。何の変哲もないただのクツーションだ。

心の中で何度も念佛みたいなのを唱えながら、俺はゆっくりと自転車を漕ぎ始めた。

君は天然色 #3

夏休みの過ごし方……それはやはり、エアコンの効いた部屋で読書やゲームやアニメが最高だと思うし、これまでそれを実践してきた。

しかし今年はだいぶ違った。何故なら……

「比企谷くん。そろそろ休憩入つてええよ〜」

「……はい」

こうして、俺は夏休みに入つてからも、たまに神社でのバイトに励んでいた。立派な社畜への道をコツコツ歩んでいるようで、何なら今すぐ帰りたい。しかし……

「比企谷君、今日はやけに頑張つてるね。何かあつたん?」

「……いや、別に何も。まあ、何もないからこそ、こうして有り余つたエネルギーを発散させているんだと思いますけど……」

結局、宿題を終わらせ、部活は休みなので、自然と仕事に精をだしてしまう。関係ないけど、精をだすつて下ネタにも聞こえます！

そんなくだらないことを考へているとは知らずに、東條さんは腕を組み、感心したよううに頷いていた。それにより、胸が強調されているが、おそらくご褒美だと思うので、

黙つてチラ見しておくとしよう。

「うんうん。とつても健全やね。そんな健全な比企谷君には、このMAXコーヒーを上げよう♪」

「……どうも」

さらにMAXコーヒーのご褒美までつくとか、さては……優良ホワイト企業だな？

俺は幸運に感謝しながら、とろけるように甘い液体で喉を潤した。

「美味しそうに飲むねえ」

「実際美味しいですからね」

「この前のシチュエーションとどっちが美味しい？」

「……何の話ですかね」

「比企谷君がウチを押し倒したり、二人乗りの時に背中で胸の感触を味わつたり……」

「…………そういうや、μ, sのほうは最近どうですかね？」

「露骨に話題をすり替えたね。皆元気にやつてるよ。誰か気になるん？」

「いや、別に」

「まあまあ、もうだいぶスクールアイドルの顔も覚えたんやろ？比企谷君の推しメンは

誰かお姉さんに言つてごらん♪」

推しメン、か……まあ、あの人しかいないな。

「……優木あんじゅ」

「え、何て？聞こえんかつたからもう一度」

「……優木あんじゅ」

「……そつかあ。ああ、喉が渴いたなあ」

「えつ？」

東條さんは、いきなり俺の手からマツ缶を奪い取り、こくこくと飲み始めた。
それ、まだ半分以上残っていたんだが……。

あと間接キスになつてますけど……。

すぐに飲み終えた彼女は、空になつた缶を俺に渡し、爽やかな笑顔を向けてきた。
「さつ、休憩終わりだから、そろそろ行こつか♪」

「は、はい……」

何故だろうか。いい笑顔なのに、目が笑つていらない気がするんだが。

しかし、そこにツッコむ勇気はなく、黙つて立ち上がると、彼女は今思い出したと言
わんばかりのテンションで、衝撃的な一言を呟いた。

「あつ、そうだ。今度海行こつか」

「……は？」

そんな一言をはつきり理解するのに、俺は数分の時間を要した。

* * * * *

どこまでも広がる青い海。

真つ直ぐに横たわる水平線。

そして、穏やかに揺らめく海。

……マジか。本当に来たのか。

先日東條さんから言われた時には、冗談かと思い流していたのだが、昨日の夜連絡が来たのにはマジで焦った。

まだ現実味がないからか、砂浜から伝わってくる熱も、周りを取り囲む喧騒も、どこか遠く感じる。

ちなみに、東條さん……達は着替え中だ。

まあ、そろそろ来る頃だと思うが。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！ おつ待たせ～！」

まず着替え終つたのは、ディアマイシスターか。

こちらにとてとてと歩み寄つてくる小町は、可愛らしい黄色い水着を着ていた。とは

いえ、妹の水着姿だが……

「ほらほら、何か言うことはないの？」

「ああ、世界一可愛い」

「うわ、テキトー……でも、あの一人の水着姿を見て、そのテンションでいれるかな」

「…………」

小町の言葉に、つい想像力が働き始めるが、ここは何とか抑える。落ち着け。俺は家に帰りたいだけなんだ。

「比企谷くくん！」

ざわめきが砂浜を揺らした。

振り向くと、絢瀬さんがこちらに駆け寄つてくるのが見えた。モデルばりのプロポーションに加え、白い肌と水色のビキニ姿がひたすら眩しく、男子だけでなく、女子の視線も集めている。

そんな視線を気にもせず、彼女はこちらに得意気な笑みを見せた。

そして、その後ろを東條さんが苦笑いで歩いている。言うまでもなく周りの視線を集めながら。

すると……

「おい、見ろよ。アイツ……」

「うわ……美少女3人も……」

「ザキ」

「ちつ、ボツチのくせに!!」

やはりこうなるか……てか、なんでお前は俺がボツチなの知つてんだよ。そろそろ正体が知りたい。

しかし、どこにもそれらしい姿は見当たらなかつた。ちつ、逃げやがつたか……。

「ふふつ、比企谷君どうしたん? 顔、赤いけど」

「い、いや、嘘ですよね。全然赤くないですよね」

「さつ、比企谷君、オイル、塗つてくれないかしら」

「……は?」

「比企谷君、オイル塗つてくれないかしら」「…………」

まさか、このようなベタなイベントに遭遇する日が来ようとは……何ならこの前夢で見たくらい理想的なイベントである。

だが断る!!

「いや、その……さすがに直接触れるのは、アレなんで……」「…………」

「照れなくともいいわ。私も初めてだから、ね?」

「…………」

言い方がエロい氣がするのは気のせいでしょうか?

「比企谷君、塗つてあげたらええやん？」

「…………」

逃げ道を塞ぐように、東條さんがニヤニヤと笑顔を向けてきた……アンタ、絶対に楽しんでるだろ。

* * * * *

「よしつ、ありがと！ 比企谷君♪」

絢瀬さんは、やたらいい笑顔で砂浜へと駆け出した。顔が赤かつたのは陽射しのせいだろうか。どちらにしろ……疲れた。

くつ……おいしい体験のはずなのに、ほとんど記憶にねえよ！ M O T T A I N A I !

「比企谷君、比企谷君」

「…………」

東條さんの声が聞こえただけで、嫌な予感がした。むしろ確信した。

「ウチにも塗つて♪」

「い、いや、その……」

「なんでも、エリチには塗つてあげたんやろ？」

「ぐつ……」

「ふふつ、お・ね・が・い♪」

「.....」

拒否権はないらしい。知つてたけど。
俺は緊張を紛らすようにため息を吐き、サンオイルをゆっくりと右手に垂らした。

君は天然色 #4

何とかサンオイルを塗り終わり……

「比企谷君、まだ塗つとらんやろ？」

「…………」

くつ……話数が変わったから、いつの間にか終わってた的な流れになると思つていたんだが……。

どうやらキチンとやらねばいかんらしい……果たしてメンタルが持つのだろうか？ 紹瀬さんでだいぶ削られたんだけど。

いや、腹をくれ……とりあえず……何も考えるな。

「じゃ、じゃあ……塗ります」

「うん、お願ひ♪」

俺は手にオイルを垂らし、彼女の剥き出しの背中に視線を落とした。

白い肌は陶器のように滑らかで、その曲線はまるで芸術品のようだ。

そして、腰はしつかりとくびれているのに、それなりに肉付きはいい。このスタイルが、あの巫女服の下に隠れていたかと思うと、何だか背徳的な気持ちに……おい、考え

ないと誓つたばかりだろうが。

ようやく背中に触ると意外なくらいの柔らかさに、鼓動が跳ねた。

「ひやうっ！」

「つ！」

……びっくりしたあ。

意外なくらいかわいらしい声に、逆にこつちが驚いてしまう。い、今の本当にこの人の声か？

「あはは、ごめんねえ。くすぐつたくて、つい……」

「わ、わかりました……」

氣を取り直して、もう一度背中に手を触れる。

「んあつ……！」

「……あの……わざとやつてますか？」

「ち、違うよ～。だから、なるべくはやく終わらしてくれんかなあ」

「りよ、了解……しました」

まだ来たばかりなのに、ここまで心身を削られるとは……やっぱ常に心身安定しているボツチ最高だな。

「はあ……はあ……」

ようやくオイルを塗り終えた俺は、精神力を使い果たしたせいか、砂浜に寝そべつていた。おかしい。定番のラッキースケベなイベントのはずなのに、こんなに疲労感があるなんて……リトさんやっぱパネエな。

「ほら、比企谷君も泳がんともつたいないよ？」

この疲労感の原因である東條さんは、さつきのあれこれを完全に忘れ去ったように、いつものテンションに戻っていた。やっぱりわざとだつたんじやねえか？この人……。「それとも、今度はウチが比企谷君にサンオイル塗つてあげようか？」

「いや、俺はそういうのいいんで……」

「じゃあ、ウチが泳ぎ教えてあげる♪」

「……普通に泳げるんですけど」

「えく、じゃああつちの沖まで競争する？」

「いや、しませんから。アンタめつちや体力ありそうだし」

「あははっ、比企谷君はウケるなあ」

「いや、ウケねえから」

やめて！このやりとりは別のキャラクターとのだから！先回りしないで！

* * * * *

東條さんにからかわれながら、テキトーに波に身を委ねていたら、いつの間にか昼になっていたので、小町と東條さんは昼食を買いに行つた。

ひとまず買っておいた飲み物に口をつけると、絢瀬さんがずいっと身を寄せてきた。
近い近い近い！

「ふふつ、比企谷君、楽しんでる？」

「……まあ、ばちばち」

「それはそうと、比企谷君は希と付き合つてるの？」

「つ！ げほつ、げほつ！」

唐突すぎる質問に焦つたせいか、飲み物が気管に入つたようだ。

「だ、大丈夫!? 」「ごめんね……」

何回か咳き込んだものの、絢瀬さんに優しく背中をさすられ、何とか早めに立ち直れた。

「……ふう……だ、大丈夫ですけど、てか、いきなりどうしたんですか？」

「んー、そりやあ、気になるわ。親友がいつの間にか素敵な男の子とお近づきになつてるんだもの」

「はあ……」

何とか平静を保つていても、素敵などいう誉め言葉に心がしつかり反応してしまつて

いた。

「それで……質問の答えは……」

「いや、言うまでもなく付き合つてませんよ」

「そつか……なら、えと……り、りり、り、立候補しようかしら……チカ」

「……はい？」

「あわわ……」「ごめんなさい！今の忘れて！」

絢瀬さんは、走つて海の中へと突つ込んでいった。その瞬間の海が割れたような衝撃に、周りの客は恐れ戦っていた。

「…………」

どうしてそんな事を聞くのかと悩むほど鈍感ではない。だからこそ、対応に困るのだろう。色々と疑問はあるが、せめて今だけは、この喧騒と波音がかき消してくれたらいとthoughtった。

「お待たせ！」

「焼きそば買つてきたよ！」

急に一人の声が聞こえたので、ビクツと肩を跳ねさせてしまう。何も後ろめたいことなどないのに。

「あれ？エリチは？」

「ああ……海に向かつて走り出しました」

「な、何で？」

「よくわからないんですが……」「ふううん。よくわからないんやね」

東條さんは、前屈みになり、こちらの顔を覗き込んできた。そのせいで豊満な胸がさらに強調されているのは、わざとなんでしょうか。

「……ほんとに、わからない？」

「…………」

上目遣いが意味していることは何だろうか？

彼女の質問への答えはわかつていても、それだけはさっぱりわからなかつた。からかつているのか、試しているのか。それとも……

「あのー、お二人さん？ いちおー、小町がいるんだけど、忘れてないですか？」

「……いや、別にそんなんじやねえよ」

「ふふつ、忘れとらんよ。小町ちゃん♪ エリチ呼んでくるね。そろそろ危険人物扱いされそうやし」

「はいはーい、お願ひしまーす」

「すぐ戻つてくるからね。自称鈍感くん♪」

「…………」

東條さんの背中を見ながら、俺は何とも形容しがたいこの気持ちに、どんな名前がつくのだろうかと、つい考えそうになり、慌ててかぶりを振った。

……今は考えなくてもいいだろう。

「お、お兄ちゃんがあんなやりとりするなんて……はやくお母さんにメールしなきゃ！」

「…………」

君は天然色 #5

「ああ、楽しかった♪」

「……」

帰りの電車の中、東條さんが楽しそうに呟くのを聞きながら、俺は窓の外を見ていた。夕焼けがたゆたう海に降り注ぎ、キラキラと輝きを撒き散らしているのを見ていると、そこに懐かしさみたいなのが湧き上がってきた。

「な、黄昏となるん？」

「いえ、なんか久々に海に行つたんで……」

「日光、人混み、塩水……比企谷君の苦手なものばつかやからね。ちょっと疲れたかな？」

「いや、勝手に変な属性つけないでね？ 確かに人混みきらいだけど……」

「他はそうでも……いや、夏の陽射しとか暑すぎて苦手かもしね。塩水も苦手かもしれん……あれ、当たつてる？」

隣で寝息をたてる絢瀬さんと小町を横目に、東條さんと話していると、不思議と疲れがとれる気がした。まあ、小町の寝顔があるからな。

しかし、その穏やかな空気をかき乱すように、彼女は何故か顔を近づけてきた。

「な、何ですか？」

「ふふつ、だいぶ日に焼けたね」。これはこれでいい感じやと思うよ。健康的で

「そ、そうですか」

「うん。普段より活発に見えるよ」

マジか。なるたけ家から出ないで済む、やらかい未来へ邁進中なんだが……。
ていうか、顔近い息が耳にかかるいい匂い可愛い……。

思考がこんがらがつて、何をどうしたものかとなり始めたところで、ようやく東條さんは離れた。

「比企谷君」

「はい……」

「呼んでみただけ♪」

「なんですか、それ？」

やめて！その付き合いたてのバカツップルみたいなノリやめて！うつかり勘違いしちゃうから！何ならキヤラ崩壊して、次回から彼氏面しちゃうまである。しないけど。すると、東條さんは口元に手を当て「うくん」と考える素振りを見せた。

「ねえ、やっぱり比企谷君つて、呼びづらいと思うんよ」

「……そうですか？」

「ここにきて、まさかの名字ダメ出し？と普段なら思うだろうが、彼女の表情から、何故かそれはただ言つてみただけに思えた。

「そうやね、じゃあ、今日から八幡君って言わせてもらおうかな」「すいません。勘弁してください。てか文字数変わつてませんから」

「ん？……そうやね。ウチみたいに、休日にこき使つて、いつもからかう先輩から名前で呼ばれるなんて……嫌やろうね。しくしく……」

「…………」

あからさまに演技なのだが、それでも潤んだ目で上目遣いされ、腕を組んで胸を強調されると、どうにも罪悪感やら思春期男子の純粋な心やらを刺激されてしまう。

「そういうわけで、名前で呼んでみてええやろ？面白そうやし」

「……いや、今はまだ心の準備が……」

「じゃあ、明日までにしといてね♪」

「…………」

ダメだ。言い返せねえ……何なの、この人？陰蜂並みに勝てる気しないんだけど。

ため息とともに、もう一度窓の外に目をやると、海に注ぐ夕陽の光が、からかうようにキラキラと瞬いていた。

* * * * *

千葉に到着すると、俺と小町は一足先に電車を降りた。ちなみに、絢瀬さんは寝つたまま、「八万……」とを呟いている。羊の数だろうか。

「希さん。今日はありがとうございました！ 絵里さんにもよろしくお願ひします！」

「うん。また一緒に遊ぼうね、小町ちゃん」

「…………それじやあ」

小町が背を向け、歩き始めたところで、彼女はさつと距離を詰め、耳元で囁いてきた。

「それじやあね……八幡君」

「…………」

あまりに突然の響きに、俺は何も返事できなかつた。

そして、そうしているうちに、甘い香りを残して彼女は離れ、扉が閉まり、俺も背を向けた。

「お兄ちゃん、希さんから何言われたの？」

「…………次のバイトのシフト」

「ふくん、そつか。頑張つてね」

小町は俺の言つた事を信じていないので、それでもそれ以上聞いてくる事はない

く、てこここと歩き始めた。

電車が完全に見えなくなつてから、ようやくおもいだしたように、一つの事実に思い至る。

夏はまだ始まつたばかりなのだと。

* * * * *

数日後……。

俺は千葉の林間学校にて、ボランティアに勤しんでいた。

もちろん自主的にではなく、小町をダシにして呼び出されたのだが……。

そんな風に、強制的に連れてこられた林間学校にて、俺は東條さんと電話で話していった。

休憩時間に、まるで狙いすましたかのようなタイミングで電話がかかってきたのだ。まさか、近くにいるんじやなかろうか……いないな。

「へえ、林間学校にボランティアとして参加しとるん?」

「……ええ。まあ

「そつかあ。頑張つてるんやね」

「いえ、無理やり連れてこられただけなん……何なら今すぐ帰りたいあるんですが」

「ふふつ、そう言いながらも眞面目にやるのが八幡君なんやけどね」

「…………」

「ちなみに、ウチらは今真姫ちゃん家の別荘で合宿しとるんよ。ちょうど海もあるから、ミュージッククビデオ撮影しとるんよ。この前の水着で」

「……ですか」

「そう言われると、自然と、sの水着姿が浮かんでくる。

「妄想も捲るやろ?」

「……そうですね」

「もう、照れてそんな棒読みせんでもええやん?」

「それよか、そろそろ練習に戻らなくていいんですか?」

「それもそうやね。じゃあ、なんかおもういことあつたら教えてね」

「……まあ善処します」

「それじやあね~」

通話が途切れると、急に蝉の鳴き声が大きくなつた気がした。

ていうか、名前で呼ばれてるのに、特に違和感ないのがヤバい。何がヤバいかよくわからなくてヤバい。

「はちまーん! どうかしたの?」

「いや、何でもない……今行く」

「あつ、ちょうどよかつた。八幡、連絡先交換しない?」

「えつ? ああ、わかつた」

マジか。戸塚の連絡先が手に入るとか、なんて棚ぼた……これも、あの人のスピリチュアルなおかげかもしねん。

君は天然色 #6

「ふふつ……」

八幡君との電話を終えると、自然と笑みが零れた。そつかあ、今は林間学校かあ。どんな顔でボランティアしてるのが見てみたいなあ。想像つくけど。

「どうしたの希？ニヤニヤして」

「ん～？何でもないよ。いい天気だなつて思つただけ」

「そう。あまりにニヤニヤしていたからポンコツ化したかと思つたわ」

「……エリチ、今ウチは今年一番傷ついたよ」

「何で!?」

まさかエリチにポンコツ扱いされるとは……ウチも注意せんとあかんね。すると、今度はにこつちがやれやれといった表情で溜め息を吐いていた。

「なにやってんのよ、二人して。ぼさつとしてたら、次の新曲は、このにこにーがセンターに……」

「そろそろ練習に戻ろつか」

「ちょっと無視しないでよ！」

その日の夜、八幡君の妹の小町ちゃんから電話があつた。
内容は想像していたものとはだいぶ違つた。

「え？ 八幡君が何かおかしい？」

「そうなんですよー。おかしいというか、おかしな事を考えてそういうか……」
小町ちゃんは言いたい事を上手く言葉にできないでいるみたいだ。でも、いつも彼を見ている小町ちゃんだからこそわかる何かがあるんだろう。

沈黙で続きを促すと、小町ちゃんはまた口を開いた。

「しかも、そういう時のお兄ちゃん、小町の経験上、最悪で最悪で……とにかく最悪なんですよー」

「ふふつ、小町ちゃんはお兄ちゃん想いなんやね。八幡君が可愛がるのもわかるなあ」「……え、えーと……あつ、お兄ちゃん來たそれじゃあ失礼します」

「うん、それじゃあね」

彼が何をするのか、小町ちゃんから聞いた状況から、何となく想像してみる。
カードで占つてみても、あまりいい結果はでない。

多分、彼は精神的にかなり疲れて帰つてくるだろう。
でも、周りにはそんな素振りをひとつも見せないだろう。

その時、ウチに何ができるかはわからないけど……何かできたらいいな。とりあえず今度会つたら、小町ちゃんをワシワシしてみようかな。

* * * * *

予定外のボランティアや、奉仕部の活動に忙殺され、ようやく林間学校が終わった。車は行きの出発点に近づき、慣れた街並みにほつとしていると、その中に見覚えのある人物を見つけた。

あれ？ あの 人……

* * * * *

由比ヶ浜も気づいたようだ。そういうや、メイドカフェで会つてたよな。この人の行動範囲がよくわからん。そのうち、うちの学校の購買でパン売つてそう。バナ納豆パンとかやばそうなやつ。

一
ほう
....

平塚先生のバツクミラー越しの面白そうな視線が、何だかくすぐつたかつた。
停車した車から降りると、スタスタ歩きながら、東條さんがこちらへやつて來た。
あつ、八幡君。偶然やね！」

「……そうですね。」

白々しい嘘に苦笑いを浮かべていると、小町がボソッと「お義姉ちゃん候補がよりどりみどり♪」とか呟くのが聞こえた。

「確か、海の見える別荘で合宿してたんじやないんですか？」

「もう終わつたよ。それで、用事があつて千葉に来たら、まさかこんな場所で会うなんて。これもスピリチュアルな力のおかげやね」

白々しい嘘に、俺は首筋に手を当て、しばし瞑目した。まあ、用事はあつたのかもしれないが。

そして、それと同時に安堵のような言葉では形容しがたい不確かで曖昧で温かな何かを感じていた。

「まあ、お互に合宿から帰つてきたことやし、今から甘い物でも食べに行かん?」

「いえ、荷物があるので今日はこのまま……」

「なるほど。一旦家に置いてから出てくるんやね」

「…………」

どうやら逃がす気はないらしい。ここで逃げようものなら、家までついてきそうだ。まあ逃げる理由もないんだが。

それより、視界の端で小町が平塚先生に何か話しているのが気になるんですが……。「あの！」

すると、由比ヶ浜もしゅばつと手を挙げた。

「ど、どつか行くなら、あたしも一緒に行つていいかな?! ゆ、ゆきのんはどう?」

「私は失礼させてもらうわ。疲れているし、それに……」

雪ノ下の視線の先には、雪ノ下姉がいた。ひらひらと笑顔で手を振つてゐるが、やはり怖い。あれ? 似たようなオーラを出す人が今近くにいるようだ。

「八幡君、どうかしたん?」

「い、いえ、なんでも……」

共通点は圧倒的戦力を誇る胸部か……そこにオーラが詰まつてゐるんですかね……あ、なんか納得だわ。

「ヒッキー?」

「そういや、ようやく帰つてきたって感じがするな」

「なんかめっちゃ話逸らそうとしてるし! しかも話題変えるのヘタ!」

* * * * *

とりあえず、いつまでも外にいても仕方ないので、近くにある喫茶店に入つてから話をする事にした。

店内に流れている穏やかなジャズも、何だか懐かしく思える。

俺と小町、東條さんと由比ヶ浜で向かい合つて座り、注文の品が来たところで、俺は

改めて尋ねた。

「それで……今日は何故わざわざ千葉に？」

「そりやあ、全国巫女集会に来たに決まつてるやん？」

「…………」

そんなあからさまな嘘を信じる奴がいるわけ……いやいますね。信じてる人が二人。ほえーっとか、はえーっと言つてて、この二人の将来がマジで心配。「もちろん冗談よ。知り合いに頼まれて、さつきまで近くでテイツシユ配りやつとつたんよ」

「…………ですか」

何故だろう。男子達がホイホイティツシユを貰つていくのが目に浮かんだ。何なら俺も取りに行くまである。いや、下心じやなくて人助けだよ？ハチマン、ウソ、ツカナイ。

「八幡君、林間学校は楽しかった？」

「楽しいとかそういうんじゃないでしょ、あれは。まあ、なんつーか、休日出勤のいい練習になりましたよ」

「うーん……ウチの知つてる林間学校と趣旨が違うような」「あたしがさつきまでいた林間学校とも違う……」

「お二人は間違つてませんよ。ただ兄がバグつてるだけですから」

「バツカ、お前……いち早く世の中の仕組みを理解しただけだろうが」「あははっ、やつぱ八幡君はおもろいなあ」

「八幡君……」

由比ヶ浜が繰り返すように呟くのを聞きながら、ミルクと砂糖をぶちこんだコーヒーに口をつけると、東條さんが、鞄からがさごそと何かを取り出した。

「実はバイト先で、こんなのもらつたんやけど。今晚皆でやらん?」

そう言いながら彼女が掲げたのは、大量の花火だった。

君は天然色 #7

東條さんの提案で、急遽花火をすることになったのだが、まだ夜まで結構な時間があるので、とりあえず時間を潰す事になった。

それはいいのだが……

「何故ウチに……」

「まあ細かい事はええやん？ 比企谷君の部屋でエツチな本を探す捜索隊が増えたわけやし」

「それがイヤなんですが……それと由比ヶ浜……『一体何冊あるんだろ』とか小声で言うな。顔を赤らめるな。

「じゃあ、小町も参加します！」

「せんでいい」

小町ちゃん、お兄ちゃんがそんなもの持つてると思つてたの？ ちょっとショックなんだけど。

こうしてあるはずのないお宝捜索隊が結成された。いや、活動させないけどね？

「残念やね。八幡君なら『探せ！性癖の全てをそこに置いてきた！』とか言いそうなのに……」

「いつからそんなキャラ付けされてたんですかね」

忸怩たる思いである。むしろ紳士扱いされてると思つていたのだが……。

「八幡、君……」

背後で由比ヶ浜が何か呟いたが、近くを通りすぎた車の音にかき消され、よく聞こえなかつた。

* * * * *

数時間後。

「八幡よ、何故に貴様が夜の公園で花火など、リア充なイベントを？」

「それよかお前はいつからいた。話はそれからだ」

「まあまあ、花火は皆でやつたほうが楽しいよ、八幡」

いきなり参加する運びとなつた材木座はともかく、戸塚の参加は素直に嬉しい。スピリチュアルな力を今だけは信じちやうくらいだ。

しかし、まさかこのメンバーで花火をすることになるとは、ある意味これが一番スピリチュアルやね！

まあ、実際企画してくれたのは東條さんだし……。

すると、彼女としつかり目が合つた。

「ん？・どうかしたん？」

「……いえ、何でもないですけど」

「ふふつ、そんな可愛い顔されたら気になるやん？」

「……そ、そりやあ、暗くて視界が悪くなってるんですかね？」

「あははっ、そうかもしけんね♪」

彼女は勢いよく放たれる虹色の光を、うつとりと見つめながら、くすりと笑つてみせた。

ぼんやりと頼りない光が浮かび上がる輪郭や、その小さな笑顔が、切なくなるような儂さで、やけに胸の奥底を締めつけた。

「……比企谷君、何をそんな暗い顔してるの？」

「え？・あ、いや……え？」

何の前触れもなく、背中に柔らかい感触と共に甘い囁き声が乗つかつてくる。こ、これは……ま、まさか……いや、間違いなく……

「エリチ……だいぶ早い到着やね」

「そりやあ、比企谷君……じやなくて、希から呼ばれれば5分で飛んでこれるわ」

その速度は色々と超えちゃつてる気がするんですが、いいんですか……あと背中に当

たつてるのが色々と変な気分になるんで離れてくれると嬉しいんですが……。

「あの……ヒツキーが困つてますから！」

すると、由比ヶ浜が左腕にしがみついてきた。それと同時に柔らかいものが肘に当たる。いや、だからそれだとさつきより困つた状況になつてゐるからね。

「じゃあウチはこつちとつた～！」

やはりこの人も参加してきたか……ええい、そのしてやつたりな表情やめい。色々と

本気になつたらどうしてくれる。

「なんだ、あの羨ましい状況……」

「おのれ、八幡……貴様はこちら側であろう……！ 爆発せよ！」「

「ちつ、氣に入らねえぜ！ ボツチのくせによ！」

「エクスプロージョン」

何やら怨嗟の声が聞こえてくる。

おい材木座、何故お前まで一緒になつてゐる。

そして、そこのお前……何故お前は俺をボツチだと……ちつ、逃げやがつたか。

それとエクスプロージョンはやめてね、皆巻き込んじやうから……。

* * * * *

しかし、いざ始めてみると早いもので、東條さんが持つてきた花火は3分の2ほど消

化された。

小町と由比ヶ浜はまだまではしゃいでいるが、俺は端っこで線香花火の小さな光を見つめていた。ああ、なんか落ち着く……。

「一人で寂しくせんで、ウチもませて〜」

東條さんが隣に来て、自分が持つ線香花火を俺のにくつづけてきた。
すると、二つの花火は合体して、ほんの少しだけ大きな塊になる。
このなんともいえない状況に、どちらからともなく笑いあつた。

「このままやるしかないかな」

「……そうつすね」

二人して、ぼんやりと灯る炎を見つめる。材木座達が騒ぐ声や、花火の弾ける音が遠ざかつた気がした。

「綺麗やね」

「ええ、まあ……」

「でも、なんか悲しい色やね」

「……かもしだれませんね」

「ごめん。冗談やから気にせんでええよ」

「なんですか？」

「うん……そなんよ」

ぱちぱちと小さな火花を散らしながら、ゆっくり燃え尽きていく姿は、確かにそう見える。

やがて小さな炎は地べたに落下し、あつという間に消えた。

東條さんの横顔を見ると、街灯の弱々しい光に照らされた瞳が、淡く優しく揺れていた。

その目はここではないどこか……もう戻りはしない何かを見ているようだつた。それだけで急に心がざわつき、何か言わなければいけない気がした。

「……もう一本やりましょうか」

「そうやね。また……合体させる？」

「いや、合体とか……」

「あははっ、比企谷君は何を考えとるんかな！」

それは健全な意味のほうでよろしいでしようか？

いつものように俺をからかう笑顔にほつとしながら、俺は彼女に線香花火を差し出した。

君は天然色 #8

夏休み最終日。

特にやることもないという、ある意味一番贅沢な一日を過ごし、あとは明日に備えて寝るだけ……と思つていたら、携帯が震えだした。

まあ、こんなタイミングで電話をかけてくる人は、あの人以外にいないだろう。

「やつほー。こんばんは、八幡君」

「……どうも」

予想的中。しかし、彼女も少し眠いのか、声が若干とろんとしていた。

「あらら、夏休みがあと1ヶ月足りないって顔してそうやね」

「……まあ否定はしませんよ。てか実際足りないと思うんですけど……」

「まあまあ、そんな事言わずに。二学期はイベントがあつて楽しいやろ。ウチらも文化祭があるし。八幡君もそうやろ？あと修学旅行とか……」

「そういう、そんなイベントがありましたね……」

うつかりしていた……そういうやあつたな。まあ、ぼーっとしてりや、そのうち終わつてるだろ。できるだけ楽な作業に割り振られることを祈る。

「ううん、かなりめんどくさそうやん……」

「まあ、どうにかして何もやらないをやるかを考えているところですね」「ふふつ、それじゃあウチが当日行こつかな。なんか面白そうやし」

「今のやりとりのどこに面白そうな要素が?」

「文化祭じやなくて八幡君が、だけど」

「いや、それこそ面白味にかけると思うんですけど……」

「いやいや、八幡君こそ自分の面白さに気づいとらんやろ? 八幡君よりからかいがいのある男の子はなかなかおらん」

「そりやあ、どうも……つーか、褒められてる気がしない……」

「ウチの中では大絶賛なんやけどねえ」

「俺の周りの女子、褒め方が下手すぎやしませんかね……褒められてるのに心が削られてる気がするんだが……。」

「もちろん八幡君は音ノ木坂の学園祭に来てくれるんやろ?」

「……まあ、用事がなければ」

「うん。それでええよ。來たらたっぷりからか……もてなしてあげるから」

「今からかうつて言おうとしてましたよね? 本音隠せてませんよね」

「あつ、流れ星」

「誤魔化し方が雑すぎる……」

「八幡君を楽しくからかえるシチュエーションに出会えますように。よしつ」

「星に願つちやつたよ……てか、そんな願つてまで望むもんですかね」

「もちろん。ウチはね、こう見えて結構寂しがり屋さんなんよ」

「……そう、なんですか？」

それは意外な気がした。

なんだか実年齢より精神的に大人びて見えるからだろうか。

そんな事を考えていると、彼女はすぐに声色を変えた。

「うん。そうなんよ。ウチ、寂しがり屋だから……構つて♪」

「つ…………」

甘い声音に脳が蕩け、体に電流が走ったかのような感覚。

たとえ自分の見せ方を心得ている者のフェイクだとしても、胸が高鳴らすにはいられなかつた。本当にずるいな、この人……。

そして、彼女はスピリチュアルな力のおかげかは知らないが、それすらもお見通しのようである。

「ふふつ、可愛い？」

「…………あー、そろそろ寝たほうがよくないですか？」

「素直やないね」

「明日に向け、体力を温存したいんですよ」

「じゃあ、八幡君が二学期を頑張れるように、ウチからプレゼントを送ろうかな」

「は？ プレゼント？ いや、それは……」

「そんな警戒せんでも、割と素敵なものやから楽しみにしててええよ」

「……そ、そうですか」

「おつと、もうこんな時間やね。それじゃあ、おやすみ♪」

「あ、はい……つて、もう切れてるじやねえか」

電話をかけてくる時と同じでいきなりだな、と思いながら携帯をベッドに置こうとすると、再び携帯が震えだす。どうやら今度はメールみたいだ。

差出人は……やはり東條さんか。

しかもメールに画像が添付されている。

これがもしかして、さつき言つてたプレゼントってやつか……ぶつちやけ開きづらい。

いや、あの人気がウイルスを飛ばしてきたりしないのはわかってるんだけど……新しいからかいネタとかになりそうな……。

しかし、虎穴に入らずんば虎子を得ず。もしかしたら本当に良いものかもしね。

意を決して画面を開くと、東條さんの水着写真がスマホに表示された。
この前着ていた物とは別の水着だつた。さらに、派手目なアクセサリーも着けてい
る。これは新しいP.V.に使つたやつか。

俺は苦笑いしながら、その画像を保存した。

……確かに良いものだ……こりやあとんだドスライズだぜ。

夏休み最後の一日は、いつの間にか終わりを告げていた。

君は天然色 #9

「へえ、八幡君が文化祭実行委員ねえ……」

「……まあ、寝てる間に勝手に決まつたんですね」

俺は神社のバイトの休憩時間に、東條さんと文化祭について話し合っていた。
二期が始まり、さつそく文化祭実行委員を決めていたのだが、寝てたらいつの間に
か決められていた……。

それを聞いた東條さんは、何故か優しく頷き、俺の肩に手を置いた。

「まあ、文化祭が終わるまではバイトも休みでええよ。どうせなら楽しくやれるといい
ね」

「……そう、ですね。そういうや、そつちも今月の終わりには大会みたいのがあるんじや
ないですか？」

「ああ、ラブライブの事？ そうやね……実は結構緊張しとるんよ」

「東條さんでも緊張するんですね。なんつーか……意外です」

「あははっ、ウチをなんだと思つとるん？ 緊張くらい普通にするよ」

そう言いながら笑う彼女は、たしかに普通の女の子に見えた。まあ、普段がスピリ

チユアルとかなんとか、やたらと風変わりだからな。

「八幡君はもちろん観に来てくれるんやろ?」

「……その日、用事がなければ」

「ありがと。じゃあ、ウチもしつかりいいもの見せんといかんね」

「……」

いつから俺のオブラートに包んだこのフレーズは肯定の意味を持つようになつたのだろう。まあ別にいいんだけどさ……。

「よしつ、しばらくバイト来れない分、今日はしつかり働いてもらおうかな」

「……了解」

しばらく彼女の顔が見れないという単純な事実に、胸の中に靄がかかつたような気分になりながら、俺は立ち上がつた。

* * * * *

さあウチも頑張らんといかんね。

八幡君の高校の文化祭も楽しみだけど、今は練習に全力を注がなきやいけない。

ただ、少し気になることがあつた。

「穂乃果、少し飛ばしすぎですよ。休憩時間くらいはしつかり休んでください。最近夜もランニングしてるそうじゃないですか」

「もう少しだけお願ひ！ほら、大会まであとちょっとしかないから！」

「……わかりました」

最近、穂乃果ちゃんが頑張りすぎている。あれは明らかにオーバーワークだ。ただ本人の頑張りを尊重したい気持ちもあるので、海未ちゃんもあまり強く言えないでいる。さらに……

「ことりちゃん、どうかしたにやー？」

「えつ？あ、ううん。なんでもないよ。あはは……」

ことりちゃんも目に見えて元気がない。こう、何か言いたい事があるけど、言えずにいるみたい。これは……すごく深刻そうやね。

部活が終わってから聞いてみようかな。

「希、どうかした？」

「ああ、エリチ。なんでもないよ」

「そう。ならいいんだけど、あまり無理しちゃダメよ」

「あはは、エリチに言われるとは思わんかつたわ」

「ふふふ、そう？じゃあ、私達もそろそろ練習に」

エリチは生徒会長の仕事もあるし、ここはウチがしつかりやらんとね。

* * * * *

いざ始まつてみると、文化祭の準備は予想よりかなりしんどいものとなつていた。

最初はそれなりに上手く回つていたのだが、雪ノ下姉に焚き付けられた実行委員長の鶴の一声で、ほとんどの実行委員がクラスの出し物を優先し始め、だいぶやばい事になつた。

さて、どうしたもんかね……。

「ヒツキー！ 調子はどう？」

「…………由比ヶ浜か」

「今の間、何!? 名前忘れてたとか!？」

「そ、そんなわけないじやないか！」

「口調変わつた!? もう、信じらんない！」

「まあ、それは冗談だが、どうかしたか？ 雪ノ下に用事か？」

「あー、それもあるんだけど、まあ、なんていうか……ヒツキーは元気かなつて」

「まあ、今すぐ帰りたくなるくらいには元気だ」

「それ、本当に元気なの!? あ、ヒツキー的には元気だね」

「納得されちゃつたよ。まあ、俺が言い出したんだが……そういうや、クラスの方はどうな

んだ？」

「えーと……巫女服着たいって言つたら却下されちゃつた。あはは……」

「いや、当たり前だろ。『星の王子さま』に巫女なんて出てこないぞ。あれはそもそも日本の作品じゃ……」

「いや、それくらい知ってるし！ そういうんじやなくて……ヒツキーって、巫女服好きなんだよね？」

「……は？」

「だつて希さんが言つてたよ？ ヒツキーは三度の飯より巫女服が好きだつて」

「いや、誰がそんな事……いや、言いそうなの一人しかいねえな。あの人何考えてんだ……」

「あはは、希さんつてヒツキーからかうの好きだよね。わかる気はするけど」「いや、わからなくていいから。そんなからかいがいのある奴じやないから」「彩ちゃんも言つてたよ。『じゃあ、僕も着て、八幡をからかおうかな』つて」「えつ、マジ？ なんだよ、それ。どこだ。どこで見れるんだ？」

「あたしの時と反応が違う！ ヒツキー、さすがに食いつきすぎだよ！」

「すまん、少し正気を失つてた……」

「そんなんに!? ヒツキー、彩ちゃん好きすぎじゃない!?」

「だつて仕方ないだろ？ 戸塚が巫女服でからかってくるんだぜ……つて、いかんいかん。戸塚は男子、戸塚は男子……。」

「まつたくもう……じゃあ、あたしはゆきのんのとこ行つてくるね。それじや頑張つて
ね。ヒツキー」

「……ああ」

由比ヶ浜を見送つてから、俺はスマホの画面を開き、東條さんにメッセージを送つた。
普段なら10分もしないうちに返つてくるのだが、今日は夜まで返信はなかつた。

君は天然色 #10

「ふうー……」

熱いお湯に浸かると、体の芯から疲れが解れていく気がする。
あれからスローガン決めのいざこざがあり、なんとか作業ペースはまともになつた
が、やはり疲れる。

それと気になることが一つ……いや、俺の気のせいかも知れないが。

湯気のようなぼんやりとした輪郭で、彼女の事を思い浮かべてみると、不思議とその
表情は笑顔だった。

彼女は何かを抱えているように見えた。

それが何なのかはまだわからない。

だが、柄にもなく……何かできる事はないか、なんて考えていた。

* * * * *

そして、文化祭当日。

色々あつたが、とりあえず間に合つた事に安堵しているのは俺だけではないだろう。
色々気がかりな事はあるが、まずは目の前の仕事を終わらせるしかない。

すると、いきなり目の前が真っ暗になった。

「だ～れだ♪」

いや、声だけでわかるんですが……あと背中に当たつてます。何がとは言いませんが、柔らかいものが当たつてます。はい……

「だ～れだ♪」

どうやら正解を言うまで拘束は解かれない仕組みらしい。

「……どうしたんですか、東條さん」

すると、ようやく拘束が解かれ、目の前が明るくなつた。
そして、振り向くと悪戯っぽい笑顔で彼女が立つていた。

「さすがやね。声だけでウチと気づくとは……」

「……まあ、割と特徴ある声なんで。あと関西弁喋るのが他にいないし……」

「なるほど。それは迂闊やつたね。ちなみに、本当にそれだけ？」

「…………」

これは色々と見抜かれているのだろうか、うつかりいらん事言わないようにしよう。
新たながらかいの種を生むことになる。そろそろイジらないで、東條さんとか言つたほうがいいかもしねない。

すると、東條さん以外のメンバーも顔を見せた。

「…………」

「エリチ、どうしたん?」

「なんか距離が縮まつてゐる気がするわ」

鮮やかな金髪を靡かせる絢瀬さんは、何故かこちらにジト目を向けていた。

そして、その様子を見て、矢澤さんが溜め息を吐いていた。

「まつたく、アイドルなんだからもう少し周りの目を気にしなさいよ。周りにはこの宇宙

「あははつ、にこつち、100%気のせいやから」

「なあんによ!？」

相変わらずのやりとりに何だか頬が緩みそうになる。

とはいへ、まだ仕事中なのを忘れるわけにもいかない。

さらに、この3人……やはり目立つ。まあ、たしかに……美人なのは間違いないからな。さつきから二度見していく野郎もいるし。なので、今は距離をとりたい。

「じゃあ、俺は行くんで。まあ、その……楽しんでつてください」

「うん。それじやあ、八幡君も頑張つて♪」

疲れが少しだけ解れた気分になりながら、俺は仕事に戻った。

* * * * *

あらら、こりや何かあつたみたいやね。

さつき周りにいた人の中に、八幡君に敵意の籠つた視線を向けた人がいた。もしかしたら、林間学校でやつたような事をやつたのかもしれない。

「どうかしたの、希？」

「ううん、何でもないよ。ほら、にこつち、迷子にならんようにしてね」

「なんで急に子供扱いすんのよ!?」

「まあまあ、にこつちやし」

「理由になつてないわよ！」

現状が掴めない以上、今は文化祭を堪能することにした。

* * * * *

そして、一通り見て回つたところで、文化祭終了のアナウンスがされ始めた。あとは体育館で有志によるステージパフォーマンスがあり、最後に地域奨励賞の発表などがあるらしい。

「私達も文化祭のパフォーマンス、しつかりやらなきやね」

「当たり前よ。この宇宙一スーパーイドル・にこにーがいるんだから。しようもないステージなんて見せられないわよ」

エリチとにこつちは、改めて音ノ木坂文化祭への思いを強くしていた。

……結局、最初に穂乃果ちゃんとことりちゃんからは聞き出せなかつたけど、まあ、今はパフォーマンスを成功させなきやね。

すると、八幡君が走つていくのが見えた。

……何かあつたんやろうね。さつきから、女の子が何人か誰かを探してゐみたいやつたし。

何故だか胸騒ぎがした。

私は八幡君が誰を探しているのかを知らない。

何ができるのかもわからない。

それでも、自然と足は動いた。

「ごめん。先行つてくれる?」

「え? いいけど……」

「……わかつたわ」

にこつちとエリチは、首をかしげながらも頷いてくれたので、笑顔を返し、八幡君が走つた方向に向かつた。

彼はテキトーに走り回つているのではなく、どこかに向かつてゐるような気がした
……多分、屋上かな?

そこに何の根拠もない。ただ何となくそう思つただけ。ム、Sが屋上で練習してゐ

とかはさすがに関係ない。

駆け足で階段を上がり、さらに屋上へ続く階段を探していると、それはすぐに見つかつた。

机や椅子でバリケードを作つてゐるけど、それが不自然にずらされていて、上方からガチャつと音がした。どうやら勘が当たつていたらしい。

これは本当にスピリチュアルやね。

少し得意げにバリケードを通過し、階段を駆け上がり、ドアノブに手をかけた。その時……

「だつたら結果だけ持つていけばいいじゃない！」

女の子の怒鳴り声が響き、慌ててドアノブから手を離す。どうやらお取り込み中らしい。

何だかよくわからないままその場で耳をすましていると、背後から足音が聞こえてきて、すぐに身を隠した。さすがに部外者がいていい場所じやない。

そして、陰からドアの前を窺うと、薄暗くてはつきりしないけど、多分男子一人、女子二人の三人組がドアを開け、屋上に出ていった。

再び耳をすませると、爽やかな男子の声と優しく労るような女子の声が、多分さつき怒鳴った女の子を説得していた。

だが、どうも埒があかないみたいだ。もうじきステージパフォーマンスも終わるんやないやろうか。

そう思つた直後……

「はあ、あ……」

うんざりしたような溜め息。

誰のものかはすぐにわかつた。

そして、声のトーンがいつもと違うことも……。

それからは、ただ淡々と言葉が紡がれていった。

驚くほど鋭利で冷たい言葉は、どこか虚しく響き……なんだか胸を切なくさせた。

やがて、その言葉は誰かにより断ち切られ、壁に衝撃がきた。多分さつき来た男子だろう。

これが八幡君の思惑だつたのか、屋上のドアからは女子二人に囲まれ、一人の泣いた女の子が出てきた。

「どうして……そんなやり方しかできないんだ」

その言葉を残し、男子も去つていった。

足音が遠ざかり、溜め息を吐くと、静寂だけが残つた。本当にあつという間だつた。

今、彼はどんな顔をしているんだろう？

「ほら、簡単だろ？誰も傷つかない世界の完成だ」

誰も傷つかない、かあ。君はそういう風にやつてきたんやね。自然と零れてくる苦笑いを、いつもの笑顔に変え、ウチは……私は扉を開けた。

いつか晴れた日に

独り言を呟き、青空を見上げると、そつと扉が開いた。

目をやると、そこには東條さんが立っていた。

不思議と驚きはなかつた。

彼女はいつか見せてくれたような包み込むような笑みを見せ、隣に腰を下ろした。

「お疲れ様。頑張つたね」

「いや、別に頑張つては……」

この人、全部聞いてたのか。てか独り言聞かれてたとしたら、相当恥ずかしいんだけど……。

しかし、彼女からはいつものからかうような笑みはなく、ただ優しい微笑みをで俺を見ていた

そして、まるで子供にするかのよう、頭を撫でてくる。

「……恥ずかしいんですけど」

「誰もいないから大丈夫やよ」

「いや、そう言われても……」

しかし、東條さんはそのまま俺の頭を撫で続けた。

「ふふつ、えらい、えらい♪八幡君は頑張った。本当に頑張ったね。いい子、いい子♪」
どうやら拒否権はないらしい。まあ、仕方ない。東條さんだし。

つかこれ、本当にやばい。何がやばいって、なんか気持ちよすぎてやばい。あとこの人の手の柔らかさがやばい。やばすぎて語彙力もやばい。

数秒そうしてから、彼女は自分の膝を指差した。お、おい、まさか……

「ちょっとだけ休んでええよ」

「いや、いや、さすがにそれはちょっと……そろそろ行かなきや行けないんで……」

「…………」

いや、そんなほつぺた膨らまされても……あざといし、可愛いし、やっぱあざといし

……。

すると、彼女はいきなり目の前に来て、正面から俺の頭部をそつと抱きしめた。

「つ…………」

「君は本当に強がりさんやね。まあ、そこが可愛いと」やけど

額に当たる柔らかな感触に胸が高鳴るが、何より彼女の優しさが胸に染み込んでくる気がした。

「さつきも言つたけど……お疲れ様」

「……どうも」

実際そうしていたのは1分ぐらいだろう。

でも俺にはやたら長く感じた時間だった。

それは、このままこうしてみたいからだろうか。

今確かに言える事は、この温もりと優しさに俺は救われている。ただそれだけだつ

た。

いつか少しでも、これと同じものを返せるだろうか。

まつたく自信はないが、それでもいつか……なんて柄にもない事を本気で誓つていた。

やがて甘い香りを残し、彼女の体は離れた。

「よしつ……もう大丈夫そうやね。じゃあ、そろそろ行こつか！」

東條さんは、笑顔でこちらに手を差しのべていた。

俺は頬が緩むのをこらえ、その手をそつと握り、しつかりと立ち上がった。

それからは言葉など必要なく、二人で屋上をあとにして、体育館へと向かつた。

* * * * *

すべての作業を終え、足早に校舎を出て、校門を通過すると、見知った顔がそこに集まっていた。

「お兄ちゃん！」

「やつほー！」

「八幡くん!!!」

「ちよつ……あんま大声出さないでよ！恥ずかしいじやない！」

まあ、なんというか……元気いいね。何かいい事でもあつたの？と言いたくなるようなテンションである。

「……悪い。待たせた」

「ええんよ、ウチらが勝手に待つてただけやし」

「うわ、なんか意外……お兄ちゃんの事だから、『別に待つてなくてもよかつたんだが』とか言うと思つてたよ……」

「それは、私がいるからかしら……やだ、もう」

「宇宙一のスーパーアイドル・にこにーがいるからでしょ」

なんか勝手に話が進んでいるのに苦笑いを返すと、自然と皆で駅の方へと歩き出した。

「いやー、やつぱり大きな学校の文化祭はすごいねー」

「……そういや、文化祭のステージはどこに決まつたんですか？」

「うつ……」

俺の言葉に、何故か矢澤さんがギクツとなる。

すると、その様子に笑いながら絢瀬さんが口を開いた。

「実は、屋上になつたのよ。公正なくじ引きの結果で」

「うう……だから何度も謝つてるじゃない」

「そうか。矢澤さんがくじを引いたわけか。

なんかその場面が目に浮かぶわー。」

絢瀬さんは、そんな矢澤さんの肩に、そつと手を置いた。

「大丈夫よ、にこ。誰も責めてないわ。それに、慣れた場所でできるんだからいいじゃない」

「そうやね。リラックスできて、うつかり過去最高のパフォーマンスになるかも」

「……そ、そうね！ そうよね！ 絶対にそうなるわ！ だつて、μ,s だもの！」

「わあ、楽しみです！ 小町も絶対に観に行きますからね！」

女子4人の賑やかなトークの邪魔をしないよう、忍のようになつそりと歩いている
と、東條さんが何か思い出したように手を叩いた。

「そういえば、さつき話しどつたんやけど、八幡君も頑張ったことやし、今度皆で巫女服
着て癒してあげようつてなつたんやけど……」

「いや、それはさすがに……」

「戸塚君もOKしてくれたよ」

「マジですか。それいつやるんですか」

「お兄ちゃん……」

「八幡君は戸塚君が絡むと変なテンションになるからね」

「ですよね、あれ何なんだろ?」

「これが愛じやなければ何と呼ぶのか、俺は知らなかつたんだが……。

まあ、ご褒美イベントはさておき、これは観に行かなきやなどと、珍しく外出に前向きな自分を誤魔化すように首筋に手を当てていると、東條さんが小声で呟くのが聞こえた。

「……よし。私も頑張らなきやね」

「?」

あれ?今、なんか違和感が……。

しかし、この時の俺はその違和感を放置しておいた。

いつか晴れた日に #2

文化祭が終わってから3日後。俺はベッドの上で悶えていた。

「うわあ……」

めっちゃ恥ずかしい。思い出すだけでも顔が真っ赤になりそうだ。あのまま東條さんの言うとおりに膝枕をされていたら、恥ずかしさで死んでいたかもしれない。しかし、あの時癒されていたのは否定しようのない事実なわけで……さらに彼女の優しすぎる笑顔が、いちいち胸を締めつけていた。

すると、その内心を容易に悟り、からかうかのように携帯が震えだした。相手が誰だかは言うまでもない。

「……もしもし」

「やつはろー！」

「とりあえず、文字だけだと誰だかわかりづらいんで、いつも通りにやつてもらえませんか」

「あはは、そうやね」

メタい話になつたが、まあそれは些細な事だろう。

とりあえず、さつきまでのあれこれを悟られぬよう、至つて平静を装い、いつも通りの声のトーンを強く意識した。

「そ、そろそろ、文化祭つすね」

「いやく、あれからエリチ達も、文化祭の準備張り切つてるんよ」

「……ですか。てか、大変じやないですか？生徒会とライブの練習両立すんの」

「まあ、大変は大変やけど、皆がいるから楽しいかな」

そういうのは多分、俺には無理な考え方だな。いや、プリキュア観てる時は思えるな。
「今、俺には無理な考え方だな。とか思つたやろ」

「……別に今スピリチュアルな力使わなくともいいですよ」

「あははっ、使つとらんよ。ほら、八幡君の思考パターンって、慣れたら読みやすいから。
ね？」

「…………」

いや、「ね？」って言われても……なんだ、それ可愛いつすね。

そこで、ふとの前の違和感が胸をよぎつた。

普段とは違う口調。

それだけのはずなのに、やけに引っかかつた。

だが、今それを聞くのが正しいのかはわからない。

「もしももし、聞いてる？」

「……ああ、すいません。ぼーっとしてたんで」

「あらあら、せつかく八幡君を褒めちぎつとつたのに」

「いや、絶対にそれはないでしょ」

「ふふふ、おかしいなあ。ウチはいつも八幡君を褒めちぎつてゐるのに、なんで疑われるかなあ」

「褒めちぎるの意味をググつたらどうですか？」

「それもそうやね……ふわああ……八幡君の声聞いてたら、なんか眠くなつてきたなあ

「話がつまらなくてすいません」

「あははつ。違うよ。ほつとしとるんよ。それじやあ、おやすみ！」

「……ええ。それじやあ」

訪れた静寂に、なんだか胸のあたりにぽつかり穴が空いたような気分になつた。

* * * * *

音ノ木坂学院・文化祭当日。

あいにくの雨だが、無事開催され、俺と小町は開始と同時に校舎の中へ足を踏み入れていた。

「わあく……すつごい盛り上がつてるね！」

「ああ、たしかに」

外はどんよりしているにも関わらず、校内はそれを感じさせないくらい盛り上がつて
いた。総武高校より規模は小さくとも、かなり活気がある。

すると、東條さんがこちらに駆け寄ってきた。

「やつほー、来たみたいやね。お一人さん」

「あっ、希さん！ こんにちは！」

「……どうも」

「こんにちは。おやおや、八幡君？ 女子校だからって、そんなに緊張せんでもええんよ。
むしろキヨロキヨロしてたほうが怪しいから」

「ま、まあ、それはわかってるんですけど……」

客の女子率がこんな高いなんて聞いてないよ！

いや、マジで……男子なんて、片手で数えられるくらいしか見かけていない。うつか
り回れ右するところだつたわ。

「ふふつ、たまにはええやん？ 女の子に囲まれるのも」

「……そ、それよか、ライブの準備はいいんですか？」

「今も絶賛準備中やけど？ ほら、八幡君をからかって、エネルギー充電とかんと」

「…………」

それで一体何が充電されるというのだろうか。

すると、彼女がほんの一瞬だけ不安そうに目を伏したのに気づいた。

それを気のせいだとは、どうしても思えなかつた。

「…………」

「じゃあそろそろいかんとね。二人も最後まで楽しんでね♪」

「わっかりました♪」

「…………」

陽気に手を振り合う二人を見ながら、俺は黙つて片手を挙げ、彼女を見送つた。

これが気のせいならいいんだが……。

そう思いながら、彼女の背中が角を曲がるまで、俺は黙つて見送つた。

* * * * *

小町としづらくな色んな教室を見回ると、思いの外はやく時間が過ぎた。

「いやー、こつちの文化祭も楽しいね♪」

「……まあ、裏でどんな面倒があるか知らなきやな」

「またそういう事言う……本当は希さん……ム、Sに会えるのが嬉しくてたまらないく

せに」

「小町ちゃん。今言い直した理由はなあに？」

そんなしようもないやりとりをしていると、いきなり校内放送のベルが鳴り響いた。

「皆さん、お待たせいたしました！ それでは14時から屋上ステージで、我が校が誇るスクールアイドル・μ,s のライブが始まります！ 雨の中ではありますが、是非足を運んでください！」

テンションの高い放送に、校内のあちこちから歓声があがる。これだけで、μ,sへの期待値の高さがわかるというものだ。私服姿の女の子もはしゃいでいるあたり、その知名度も上がっているのだと頷ける。入学希望者も増えてるらしいからな。

もしかしたら、その期待の高さで気負っているのだろうか。

「お兄ちゃん、どしたの？」

「……ああ、悪い。今行く」

……まさかな。

この時の俺は、俺自身の気持ちにすら気づいていなかつた。

* * * * *

わかりきつていた事だが、雨はさつきよりも強かつた。風があまり吹いてないのが幸いか。

屋上は傘をさした観客でカラフルに彩られている。後ろの人はかなり見えづらいだろうが……本当に早めに来てよかつた。

期待に満ちた空気がだいぶ高まり始めたところで、メンバーが登場し、空まで届きそ
うなくらいに歓声があがる。隣にいる小町も、片つ端からメンバーの名前を叫んでい
た。

そんな中、東條さんと目が合う。

この偶然もスピリチュアルなんかね。

彼女は、雨に打たれながらも笑みを見せたので、俺は黙つたまま頷いた。

そして、興奮の為か、顔がやたら赤い高坂さんが喋り始めた。

「皆さん、ここにちは！私達はスクールアイドル・μ，sです！今日は最後まで楽しみま
しょう！」

元気な開幕宣言から、雨をかき消すような爆音と共に、ライブが開演した。

いつか晴れた日に #3

ライブは勢いのあるパフォーマンスのお陰で、順調な滑り出しだった。だが、おかしな点が一つ……

「穂乃果さん、どうかしたのかな？」

「…………」

小町が不安そうに呟く。

そう、高坂さんがさつきからやたらと息が荒い。あれだけ躍りながら歌つていれば、息があがるのは普通だと思うのだが、高坂さんのそれは、明らかに他のメンバーより目立っていた。

さつき、顔が赤いのは気持ちの高ぶりのせいだと思ったが、どうやら本格的に体調が悪いのかも知れない。東條さんや他のメンバーも、ちらちら視線を送っていた。多分、事情を知っているのだろう。そして、そのうえでライブ決行を決断したのだろう。

何の足しにもなりはしないが、ただ何事もなく終わるように祈つてみるも、そんなものは儂く打ち砕かれた。

「穂乃果っ！」

最後の曲を終えたところで、高坂さんはステージ上で倒れてしまった。

絢瀬さんや他のメンバーが高坂さんに駆け寄るのを見て、俺と小町も自然と足が動いていた。

その途中で、ステージに背を向け、歩き出す観客を見た時、雨がさらに強くなつた気がした。

* * * * *

それからは何もかもがあつという間だつた。

高坂さんを運ぶのを手伝い、救急車が来て、それを見送つてから、そのまま小町と帰路に着いた。ただそれだけだつた。

電車の中で小町と交わした会話もほとんど覚えていない。

ただ、彼女の……東條さんの哀しそうな横顔だけが脳内に焼き付いていた。

……今、何をしてるんだろうか。

すると、携帯が震えだした。

今日はもうかかつてこないかと思つてたので、少し驚きながら携帯を耳に当てる、

彼女の声が聞こえてきた。

「あ……もしもし、八幡君……今日はごめんね？」

「いや、別に謝る必要とかないですよ。てか、大丈夫だつたんですか」

「うん。今は落ち着いとるよ。穂乃果ちゃん、昨日から熱がでたみたいなんよ……」

「……あー、その……東條さんは大丈夫ですか？」

「ウチ？ ウチは大丈夫。身体はどこも悪くないよ」

「いや、そういうんじゃなくて……」

しかし、彼女は続きを言わせてはくれなかつた。

「ふふっ、あー元気でたなあ。珍しく八幡君が優しい言葉をかけてくれたからやろうかなあ……あ、そういえば明日までにやらんといかん生徒会の書類作成があつたんだ！ ゴめん、八幡君。また今度ね」

「えつ？ あ……」

こちらが反応する前に、通話が途切れ。

訪れた静寂は、もやもやした気分を増幅させるだけだつた。

その空元気に俺はただ一人で頷くことしかできなかつた。

* * * * *

それから数日間、お互にそのまま連絡は取らなかつた。

口実が見つからないなど、それらしい理由は思いつくのだが、本当の理由が自分でわかつてるので、もどかしさを感じてしまうのだ。

とりあえず、それを紛らすように、H, Sのライブの結果を確認すると、そこには意

外な結果が表示されていた。

「……辞退？」

そう、μ、sは予選を辞退したと書かれていた。

……一体何があつたのだろうか？

たしかに途中で中止になつたものの、それまでは上手くいつていたし、何よりわざわざ

頭の中によぎる不安から、とても目が離せそうになかつた。

「あれ？お兄ちゃん、どつたの？」

「……ちよつと出てくる」

小町に一言だけ残すと、学生服のまま家を飛び出した。

* * * * *

不思議と電車の中では何も考えなかつた。
何より今はただ東條さんの顔が見たかつた。

駅に着いてからも、あとはひたすら神社までの慣れた道のりを走つた。
そこにいる保証など、どこにもないのに。

ただ、予感はした……こりや俺もだいぶあの人の影響受けてんな。
すると、制服姿の彼女とバツタリ出くわした。

「……あれ？ 八幡君……？」

東條さんは目を丸くしていたが、同時に俺が来るのを予想していたかのようにも見えた。

「……どうも」

「ふふつ、どうしたん、急に？ おつかいにしては遠出やね」

「どうやら冗談を言う元気はあるらしい。まずはその事に安堵した。てか本当に今さらだが、大した口実もなしに千葉を飛び出して秋葉原まで来るとか、わけわからなすぎだろ。」

にこやかにこちらの顔を覗き込む彼女に、とりあえず言い訳だけする事にした。

「いや、その……まあ、あれですよ。この前心配してもらつたから、その借りを返すといふか、なんというか……」

普段は理屈や屁理屈をこねくりまわすくせに、本当に肝心な時に気の利いた言葉の浮かばない自分に苛立ちながらも、それでも特に言葉は出てこなかつた。

そりやあそудろう。勝手に心配して、勝手にここまで来ただけなのだから。わざわざその身勝手を口にする事もない。

だから、一言だけ……ひとかけらだけの本音を伝えた。

「……急に会いたくなつただけです」

「奇遇やね。ウチも八幡君に会いたかつたんよ」

「そう言つて、彼女はやわらかな笑みを浮かべた。

「……そう、ですか」

「うなんよ。ウチら、気が合うね」

「一方的に心読まれてる気はしますけどね」

「ふふつ、ここで立ち話もあれやし、とりあえずウチの部屋行こつか」

「…………」

そのまま俺と彼女は並んで歩き出す。

二人分の足音が、いつもより重なつて響き、夜空へと溶けていった。

いつか晴れた日に #4

「……お邪魔します」

「どうぞー」

東條さんの部屋に足を踏み入れると、やはりまだ慣れない感覚がする。まあ、特に何をするわけでもないので、そんなに気負う必要もないのだが。

「今コーヒー入れるから待つとつて。砂糖とミルク多めでええやろ?」

「あ、はい……お願ひします」

テーブルの近くに腰を下ろし、部屋の隅に目を向けると、小さな棚の上に普段占いに使っているタロットカードが置かれていた。

そして、その隣に写真立てが置いてあるが、ここからはどんなのががよくわからない。すると、東條さんがコーヒーを俺の前に置いた。

「はい、お待たせ」

「ありがとうございます」

「そうそう、下着はそつちの棚やないよ」

「ぶほつ!?

いきなりすぎる一言に、咳き込んでしまった。なんだ、この人。俺に見せたいのか？見せびらかしたいのか？なんなら受けて立つぞ。

「いや、いきなりどうしたんですか……」

「だつて、棚の方を真剣に見てるから、てつきり盗ろうとしてるのかと」

「…………」

つつこみすら入れず、とりあえずコーヒーに口を付け、気持ちを落ち着けることにした。また彼女のペースに乗せられているようだ。もう諦めてるけど。

その様子を見て、くすっと笑みを見せた彼女は、斜向かいの位置に腰を下ろした。俺は、その表情から、話を始める気配を感じた。

「じゃあ、ちょっと長い話になるけど大丈夫？」

「……いくらでも聞きますよ」

俺の言葉に意外そうな顔をした彼女は、すぐにいつもの表情になり、話を始めた。

* * * * *

それからしばらくして、コーヒーが温くなる頃に、彼女は溜め息を吐いた。

「なかなか上手くいかんもんやねえ……」

「…………」

どうやら活動休止の理由は、中心人物の高坂さんが抜けた事にあるらしい。

そして、そうなるのに至つた理由は南さんの留学……とそれに関するすれ違ひのようだ。

東條さんは、何かあるのに気づいていながらも、何もできなかつた自分に対し、歯痒さを感じているのが、ありありと見て取れる。

そんな彼女は、窓の外に目をやり、溜め息を吐いた。

「もつとうまくやれてたらよかつたんやけどねえ」

「いや、別に東條さんのせいじやないでしよう。てか、誰が悪いとかでもないと思うんですけど……」

なんというか、この人は一人で背負いこみすぎている気がするのだ。

本当は人一倍寂しがりで、俺みたいなどうしようもない奴でもついからかつて構うくせに、肝心な時に一人で考え込む。

それを否定はしない。俺も似たようなものだから。
でも……だからこそ……。

「……たまには周りに、甘えてもいいんじゃないですかね。なんつーか、その……あんなにいいメンバーいるなら」

「まさか君から言われるとはねえ」
「自分でもそう思いますよ」

「……じゃあ、約束しよつか」

「約束、ですか？」

「うん。八幡君は、この前みたいな事になる前にウチに甘える。ウチは今回みたいな事になる前に八幡君に甘える。どう？」

東條さんは、小指を突きだしてきた。

それに対し、頬が緩むのを感じながら、そつと小指を絡めた。

ひんやりとした感触が合わさり、温もりになる瞬間がはつきりとあつた。

「まあ、その機会がこないのが一番かと」

「ふふっ、そういうとこホント君らしいなあ。でもせつかくやし……それじゃあ、ちょっと甘えようかな」

彼女の小悪魔めいた笑みに、びくっと肩が反応する。

「……今、ですか」

「うん、甘える♪そういうわけで、八幡君はベッドに座りなさい」

「……は？」

「この人……今どんでもないこと言わなかつたか？」

聞き間違いかと思い、もう一度聞いてみることにした。

「すいません。聞こえなかつたからもう一度……」

「そこに座つて♪」

聞き間違いではないようだ。え、ホント何言つてんの、この人？

「あ、あの、何をするんですかね……」

「何をするというか、ウチがしてもらう側やね」

「…………」

いよいよわからなくなってきた……一体何をさせる気なのだろうか？

変な想像が勝手に膨らんでいくのを必死に押し止めていると、東條さんがじりじりとにじり寄ってきた。

「ふふつ、力抜いてええよ。あとはウチがリードしてあげるから」

「…………」

やばいやばいやばいやばい……！

しかし、こうなつた以上、あとは自然の流れに身を任せせるのも人生だろう。
しばし瞑目し、俺は覚悟を決めた。

* * * * *

「んく、気持ちいいなあ」

「…………」

東條さんが、気持ちよさそうに目を閉じ、俺に身を委ねている。

そう、俺は東條さんに……膝枕をしていた。

……さつき変な妄想ばかりしていた自分が恥ずかしくて死んでしまいそうだ。

「八幡君の膝はなかなかの寝心地やね。エリチにも負けとらんよ」

「そりやどうも」

「ううん、このまま朝まで眠れそう」

「そ、それはさすがにきついんで……」

「ＺＺＺ……」

多分、いや間違いなく寝たふりだろうが、今はそれでも構わなかつた。

こんなことでも、彼女の役に立てることが嬉しかつた。

* * * * *

ぼんやりした視界の中、不思議なものを見た。

俺は何故か東條さんと南極にいた。どうしてそんな宇宙よりも遠い場所にいるかはわからぬが、二人して光る何かを見て、ゲラゲラと笑つていた。そのぼんやりした光をしつかり見ようと目を凝らしたところで、その世界は消え去つた。

「…………ん？」

慌てて時計を確認すると、なんと朝の8時を過ぎていた。

どうやらいつの間にか寝落ちしたらしい……やつべえ。なんかもう、やばい理由が多

すぎて色々やべえ……いつ自分が寝たとかもわからんし、もう遅刻決定どころの騒ぎじやないし、小町にも泊まつてくるとか言つてないし、さらに女子の家で朝を迎えるやつたし……さらに……

「…………」

「すう……すう……」

目の前には天使がいた。

普段の東條さんのイメージからすると、女神とか言われそうなものだが、今の彼女はあどけない寝顔を晒している天使だつた。

……やばい。急に心臓がばくばく鳴り出した。これ、なんかの病気じやね？

俺は、その寝顔から目が離せずに、少し厚みのある唇が、何か言葉を紡いでいるのをじっと見ていた。

しかし、それが音を伴うことではなく、ただ彼女の内で完結していた。

……このまま時間が止まればいい、なんて本気で考えてしまった自分に苦笑していると、彼女が目を覚ました。

「……あ、八幡くうん、おはよー」

「……おはようございます」

寝ぼけ眼の彼女は、この状態にも動じることはなかった。それはそれでどうかと思う

が。

「ごめんねえ……ウチ、すっかり寝ちゃつたみたいで……」

「いや、まあ……いつの間にか俺も寝てたんで」

「学校大丈夫?」

「もうどうしようもないんで、たまには重役出勤で」

「ふふつ、じゃあウチも今日は遅刻しよつかなあ」

「いや、東條さんはギリギリ間に合うでしょ……」

「八幡君だけ遅刻させるわけにもいかんやろ?」

「今から急ぐのが面倒くさいだけじゃないですか?」

「それも半分くらいはあるかも」

「あるのかよ……しかも、半分」

「まあまあ、細かいことはええやん。それより、先にウチ、シャワー浴びてくるから」

「……あ、ああ、はい」

このシチュエーションでそういうことあつさり言うの、やめてくれませんかねえ。ひ

たすら心臓に悪いんで。

ただ、のろのろと浴室へ行つた寝起きの彼女は、とにかく無防備らしく、衣擦れの音や鼻唄がやたらと脳を刺激してきた。

交代にシャワーを浴び、東條さんが作ってくれた朝食を頂き、同時に家を出ると、なんだか妙な気分だつた。

「東條さんもそう考へているのか、いつもと少し違う笑顔を向けてきた。
「来てくれてありがとう。嬉しかつたよ」

「いえ、特に何かしたわけでもないんで……」

「誰かがいてくれるだけで救われた気分になることもあるんよ」

その言葉に、屋上で事を思い出した。

同時に何だか照れくさくなり、首筋に手を当てた。

「……ならよかつたです」

「ふふつ、それじやあ、いつてらつしや……じやないや。またね、八幡君」

「ええ、それじやあ」

そのまま二人して別々の方角に歩き出す。

どちらもこんな朝のような晴れやかな心で、一步一歩刻んでいた。

いつか晴れた日に #5

「えつ？ μ s、活動再開するんですか？」

「うん。まあ、今度のライブは平日やけど、また土曜とかにライブするときは連絡するね」

東條さんの家に泊まつてから三日後、どうやら問題は解決したようだ。

結果だけ見てみれば、南さんは留学を延期し、高坂さんは μ s に戻り、すべて元通りだ。まあ、あれだ……この人の言うスピリチュアルな力が働いたということにしておこう。

東條さんの声も、いつもより弾んでいるように聞こえた。

「八幡君にはなんかお礼せんといかんねえ？」

「いや、お礼されるようなことは何もしてないんですけど……」

「今度会つた時、普段より多目にからかつてあげようかな」

「……それ、お礼じやないような気がするんですが」

「まあまあ、八幡君も嫌いやないやろ？ むしろ、好きやろ？」

「は？……い、いや、そんなことは…」

「素直になつてええんよ。お姉さんはちよつとくらいは受け止めてあげるから」

「いや、俺は何を説得されてんですか。しかも、ちよつとしか受け止めねえのかよ」

「ふふっ、ほら……八幡君は色々すごそうやし」

「え? 何ですか、そのイメージ」

「あつ、もうこんな時間。じやあ、ウチはそろそろお風呂入ろっかなあ」

「うわ、このタイミングで……いや、まあいいんですけど」

まあ、何というか……晴れても降つても、東條さんはやはり東條さんだつた。

そして迎えた休日の朝……。

「……おはよー。八幡くーん」

「…………」

「朝ぐ、朝だよぐ、朝ぐはん食べて学校行くよぐ」

「…………は?」

緩い朝の微睡みの中、やわらかな声が降りかかり、徐々に意識が覚醒していく。小町

……じやないよな……あと今日は休みのはず。

うつすら目を開けると、朝の陽射しがその姿を優しく照らし、なんだか神々しく見え
た。

「おはよ♪」

「……」

そこには笑顔の東條さんが、ベッドの傍で中腰になり、こちらを覗き込んでいた。

「……な、なんで、いるんですか？」

いきなりすぎる展開に輪郭も曇気な言葉を発することしかできない。

しかし、彼女は事も無げに答えた。

「この前言うたやん？」

「…………」

この前……そういや、お礼がどうのこうの言つてたな……。

少しずつ思考が回り始めたのと同時に、彼女の私服姿を確認する余裕も出てきた。

「ふふつ、チャイナドレスじゃなくてごめんね？」

「……リクエストしたことありましたつけ？」

「でも、見たいやろ？」

「……ちょっと顔洗つてきます」

「うん、いつてらつしやい」

そう言つてにこやかに手を振る彼女の視線を背中に感じながらも、一つだけ考えた。

頼んだら、チャイナドレス着てくれるのか。

……いや、別に頼まないけどね？ハチマン、ウソ、ツカナイ。

* * * * *

とりあえず顔を洗い、身支度を整える。

部屋に戻ると、本を読んでいた彼女は居住まいを正し、こちらに向き直った。
「じゃあ、改めておはよう」

「……どうも」

「よし、それじゃあ、行こつか」

「……あー、今日は大事な用事があるので」

「うんうん。ゲームもアニメもあとでいくらでも付き合つてあげるから」

「……わかりました」

こうして、よくわからないまま休日の予定が決定してしまった。

しかし、不思議と嫌な気分なんてのは欠片もなかつた。

* * * * *

まずは公園に到着。

迷うことなく、すぐに到着するあたり、東條さんはこの辺の土地勘があるんじゃない
かと思えてくる。

晴れた日の休日らしく、公園内には家族連れやカップルや、友達同士など、ボッチに

はかなり近寄り、づらい環境が出来上がっていた。

隣を歩く東條さんは、わざとかどうかは知らないが、「ん」と伸びをして、胸を強調してから、こちらに笑顔を向けた

「さつ、まずはここで好きなだけウチに甘えてもええよ」

「いや、甘えるつつたつて……やることもないですし」

「好きな風に甘えればええんやない？ほら……あんな風に」

東條さんの視線のさきには、小柄な女子と一人の男性がいた。

男のほうは、女子に優しく抱きしめられている……ていうか、胸に顔を埋めている。

「おにーさん、いつも漫画描いて偉いね。よしよし」

「…………（あまえちゃん、好きー！！）」

……あれは……まあ、触れないでおこう……皆、スルーしてるし。

「いやあ、さすがにそこまで甘えるわけには……」

「はい、どーぞ♪」

東條さんは、ベンチに座り、自分の膝をぽんぽん叩いていた。

……経験上これは……心を決めるしかないようだ。

わずかに逡巡してから、俺も同じようにベンチに腰を下ろし、ゆっくりと体を倒した。

「……し、失礼します」

「どうぞ♪」

いつもの枕よりも、やわらかくて温かな感触が、包み込むように頭を癒してくれる。……や、やばい、気持ちよくて、このまま寝てしまいそうなんだが。すると、見知った人物が目の前を通りすぎていった。しかも、目が合つてしまふ。

「ん?……」

「あつ……」

そう、偶然にも平塚先生と出くわしてしまつた。

……まさか、この状況で……いや、ここ千葉だから別におかしいことではないんだけど。

「…………」

そのまましばらく視線が交錯してから、平塚先生は何事もなかつたかのように歩き始めた。

どうやら気づかなかつたのだろうか。だが、はつきりと目が合つた気がしたんだが

……まあ、何事もなければそれでいい。それより……

「どうかしたん？」

「いえ、何も……」

この態勢、ぶつちやけ恥ずかしいので、そろそろ起き上がりたいのだが、頭を撫で始めた東條さんは、それを許してくれそうもなかつた。

* * * * *

「いやー、まさか生徒が休日にデートしてる幻を見るのはなー。私、疲れてるのかなー？」

……ふう、ラーメン食つて帰ろ」

いつか晴れた日に #6

「ううん……次はどこに行こうかな？」

「……意外とノープランなんですね」

「気まぐれなのもええもんやろ?」

なんか良いこと言つた風に見えるのは、この人の普段の言動のおかげだろう。

頭に残る東條さんの太ももの感触に、まだ胸の奥がじんと熱くなるような気分になら、とぼとぼ見慣れた町並みを歩いていると、秋の匂いをはらんだ風が彼女の髪を揺らした。

「いい風やね……」

「まあ、涼しくてちょうどいいですね。一年中このぐらいならさらといい」

「ふふつ、言うと思つた。でも、こうやって季節の移り変わりを眺めるのも素敵やない？」

「……悪くはない、と思います」

「偶然、ウチと君が出会つて、もう半年以上経つたんよ」

「そういやそうですね」

改めてそう言わると、何だか不思議な感じがする。

この人と出会つてから、時間が経つのが早く感じるようになつてしまつた。からかわれているうちにいつの間にか半年とかすげえな。出来ればそんなに早く大人になりたくないんだけど……。

「八幡くん?……あかん、口マンチックな気分じやなく、先の事考えすぎてだるそうにしてる」

「やつぱり今が最高ですね」

「できればもつと後に言つて欲しい台詞やね。じゃあそろそろお昼ご飯にしよつか。八

幡君は何か食べたい物ある?」

「そうっすね……やつぱりラーメンですかね」

「あ、いいね。行こつか。じゃあ、この辺りに八幡君のおすすめある?」

「……一応」

「よし、じゃあそこに……わわつ」

何かに躊躇いたのか、東條さんがバランスを崩し、こけそうになつた。

慌てて反応すると、彼女を真正面から抱き止める形になる。

「あはは……こけるところやつたね。ありがとう」

「い、いえ、大丈夫です……はい」

意外なくらい近くにある彼女の顔に戸惑いながらも、何故かそのまま動けないでいた。

「じんわり温かな感触のせいだろうか、なんて考えていると、彼女は首を傾げ、俺の顔を覗き込んできた。

「もしかして……このままでいたい？」

「え、いや…………その…………」

厚みのある唇から言葉が零れるのを合図に、俺はそつと手を離した。

それと同じタイミングで、彼女は俺の数歩前を歩き始めた。

「ふふつ、なんちやつて♪」

「…………」

いや、まあ冗談なのはわかってたんだけどね？

何故か彼女はしばらくこちらを振り返らなかつたので、その背中を見つめながら、俺はとぼとぼと歩き続けた。

* * * * *

……ウチはしばらく振り返らなかつた。いや、振り返ることができなかつた。

自分の頬が、じんわりと熱くなっているのがわかつたから。

「ラーメン楽しみやなあ」

そう言いながら私は……ウチは、そのまま普段どおりを意識しながら足を運んだ。
それが既に普段どおりじゃないと気づきながら。

* * * * *

いつものラーメン屋に入ると、まだ割と席は空いていた。

水はセルフサービスなので、一人分持つてカウンター席に並んで座ると、東條さんが
口を開いた。

「八幡君はよくラーメン屋に行くの？」

「……まあ、そこそこ。東條さんは行かないんですか？」

「ウチ？ ム、Sのメンバーとは練習帰りにたまに行くよ。凛ちゃんが好きやからね」

「へえ……まあ、運動後のラーメンは美味しいですからね。何なら運動してなくても美味
いし」

「ようするにいつでも美味しいって言いたいんやね」

「そういうことです」

それから少しして、熱々の湯気を立てながら、ラーメンが運ばれてきた。

二人して「いただきます」を言つてから、ラーメンを啜ると口の中に、こつてりした
幸せが広がる。

「ふう……」

そのまま幸福な溜め息を吐くと、偶然タイミングが重なり、東條さんが笑い、俺は口元が緩む。

「捻くれてない八幡君を見るのは初めてかもねえ」

「いや、さすがにもう少しあるでしょ」

「うん、そういうことにしどこつかな」

「えええー……」

そんなしようもないやりとりの後は、どちらも黙々と麺を啜つた。

* * * * *

「あ、美味しかったあ♪」

「……ええ、ほんとに」

やはりラーメンは最高という事実を、改めて認識しながら、俺は東條さんの言葉に頷いた。

彼女は、携帯で時間を確認すると、すっと身を寄せてきた。

「そろそろ八幡君の家に戻ろっか」

「え？ ああ、はい。どうかしたんですか？」

「言つたやろ？ 今日はゲームやアニメにも付き合つて」

「……そういうや言つてましたね……え？ まさか、一緒に？」

「うん、一緒に。あつ、もしかして趣味は一人で楽しみたいタイプ?」

「いや、そういうわけじゃ……まあ東條さんがよければ」

本当はめっちゃそういうタイプだし、東條さんならそこに気づいていそうなものだが、この時の俺は否定の言葉を口にできなかつはたし、する気もなかつた。

もしかしたら、初めて個人的な趣味を誰かと共有したいと思つた瞬間かもしれない。そんな風に大袈裟に考えていると、彼女は俺の耳元に、そつと囁いてきた。

「いきなり押し倒してたらダメだからね」

「…………」

さすがに上手い切り返しが思いつかず、俺は首筋に手を当て、誤魔化した。

いつか晴れた日に #7

「お邪魔します」

「……どうぞ」

妙な緊張を抱えた俺とは対照的に、東條さんは大して気にしてない感じで部屋に入つたが、こちらとしてはやはり自分でもよくわからない不思議な感覚があるわけで……しかも、さつきの一言が頭の中でやたら響いていた。

そして、彼女はそれすらも忘れたように、一人で頷いている。

「うんうん、相変わらず八幡君って感じの部屋やね！」

「いや、それどんな感じですか……てか、最近來たばかりでしようが」

「あははっ、それもそうやね。じゃあ、早速観よっか。八幡君、プリキュア好きなんやろ？」

？

「いえ、やめときます。あれはほぼ確実に号泣するから一人で観たいんですよ」

「そ、そうなんやね……それは仕方ないね」

せつかくこちらの趣味に歩み寄つてくれた東條さんには申し訳ないが、これだけは譲れない。どんな色仕掛けをしてこようともだ。いや、別に期待しているわけじやないよ

? 本当だよ? とりあえず来るなら来い。受け止めるから。

そこで、飲み物すら用意していない事に気づいた。来客慣れしてないからか。いや、させてくれない周りが悪い。

「……飲み物取ってきますんで、その辺に座つといてください」「はいはーい」

飲み物を取りにいく途中、こういう作業を自分からするという事実に、つい苦笑いしてしまった。

* * * * *

飲み物を用意し、テレビの前に並んで座り、とりあえず最近始まつたアニメを観てみると、さつそく事件が起きた。

「わお……いきなりやね」

「…………」

学生服姿の男子と、巫女装束の女子がキスをしていた。

おい、どうなつてんだ。いきなりキスから始まるとか……ゼロ〇使い魔思い出したわ。てつきりアクションものかと思つてたのに……迂闊だつたわ。

いや待て。俺、意識しすぎじゃね? 別に、学生服姿の男子と巫女装束の女子がキスしているだけじゃねえか。さすがにこれだけで意識するのは気持ち悪すぎるだろ、俺

……。

学生服姿の男子は爽やか系のイケメンで、俺とは似ても似つかないし、巫女のほうは吊目がちだし、胸元のボリュームも寂しい。

思考を切り替えところで、ふと隣にいる東條さんに目をやると、彼女は人差し指で自分の唇をなぞっていた。

そのしなやかな指先の動きと、唇のほんのりとした赤みに、どくんどくんと心が踊るのを感じ、俺は慌てて画面を停止させた。

「ん？どうかしたん？いきなり……」

「あー、とりあえず別のやつにしましよう」

「ふふっ、そうやね。それはそうと、今さつきウチの唇見とったやろ？」

そう囁き、彼女はにんまりと笑つた。

「……えー、これでいいですかね」

……だが無視する!!

少しでも反応しようものなら、どうなるかが目に見えているからな。ていうか、この人……俺をからかいすぎて感覚麻痺してるのかもしけんが。今のやりとり、俺のような自制心がなきや、絶対に危なかつたぞ……。

「…………」

「？」

少し責めるような目つきで見ても、彼女は可愛らしく小首を傾げるだけだつた。
……わざとなのかどうなのかは本当にはつきりして欲しい。

* * * * *

アニメ鑑賞を始めて三話くらい観終えると、東條さんが「あつ」と何か思い出したよ
うに呟いた。

「どうかしましたか？」

「八幡君。そろそろウチの事、名前で呼んで？」

「……いや、このタイミングでする提案じゃないでしょ、それ……」

「じゃあ八幡君の中でのベストタイミングを教えてくれたら、そこでええよ」

「…………」

もうこれ、遠回しに逃げられないことを告げてますよね。大袈裟な言い方かもしけん
が。

……まあ、確かに東條さんから名前呼びされてるのに、俺が名字呼びというのはフエ
アじやないかもしれない。だから、これはあくまで公平性の問題であつて……
「またそんな顔して……たまには面倒な事考えんでええと思うよ」

「…………」

今自分がどんな顔をしてるかは知らんけど、そう言いながら優しく微笑む彼女は、それはもう余裕たっぷりで……。

もし俺が名前呼びすることで、その余裕を少しでも崩せるなら、なんて考えてしまつた。

「それじゃあ、いきますよ…………の、希しやん…………っ」

囁んだ。

わかりやすく囁んだ。

だが、彼女からはいつものようなリアクションはかえってこなかつた。

その瞳は逸らされていて、ほんのり赤く染まつた頬をかいている。どうやら思つた以上効力はあつたらしい。

「へえ……思つたよりすぐに言えたやん？まあ、最後は囁んだけど。でも、」

「……そこは聞き逃さなかつたんですね。……希さん」

「か、からかうように言うのは禁止やよ？」

「そつちが名前で呼べって言つたんじゃないですか。……希さん」

「もう……今日の八幡君はなかなか手強いなあ」

「いえ、今のは……希さんの自滅でしょう。やつぱり名字呼びに戻しましようか？」

「そんなイジワルなこと言う子にはワシワシしちゃうよー！」

「えっ、あっ、ちよっ、まっ、ああっ!!!!」

東條さ……希さんが、背後から胸の辺りをがしつと掴んできた。間違いなく、Sのメンバーにもやつてんな、と思わせるような強さで。

それは男相手でも変わらないのだろうか、俺はしばらく立てなくなるまで、希さんにワシワシされた。

いつか晴れた日に #8

わしわしから解放され、ようやく体力が回復し始めたところで、もうだいぶ陽が傾いていることに気づいた。

希さんも同じことを考えていたのか、すっと立ち上がった。

「じゃあ、そろそろ帰ろうかな」

「……送ります」

「うん。それじゃあ、お願ひしよつかな」

希さんの言葉に、少しだけ寂しさを覚えたのは、なんだかんだ今日が楽しかったからだろうか。

半年前は思いもしなかつたであろう考えに、人知れず苦笑いをしてしまった。

* * * * *

駅前はいつものような人通りの多さで、色んな人が帰路に着いているのが、何となくわかつた。

希さんは、こちらを振り返ると、いつものからかうような笑みを見せた。

「八幡君。ウチが帰るからって、そんな寂しそうな顔せんでもええよ」

「いや、無理つすね。寂しくて堪らんので、帰つたらプリキュアでも観ることにしますよ」

「素直でよろしい♪あ、今度またμ,sが出るイベントあるから、ヒマやつたら来てね」「ええ。ヒマじやなければ行きませんけど……」

「あらあら、そんなこと言つてたら、ウチの最高の一瞬を見逃しちやうよ？」

「そりやあ非常事態ですね。なるべく行けるように最善を尽くしますよ」

「最善つて単語が八幡君とミスマッチすぎる件について」

「自覚はあります。おそらく二度と使わないでしよう」

自然と言葉が零れるままに会話をしていると、このまま長い時間過ごしていられそうな気がした。もちろん、そろそろ帰るけど。

彼女は今度は温かな日だまりのような笑みを見せた。

「じゃあ、またね。八幡君。今日は付き合つてくれてありがと」

「いえ、どういたしまして。てか、こちらこそ気遣つていただいて、ありがとうございます」

「ウチはやりたいことやつてるだけ。それじやつ」

そのまま振り返る事なく改札をすり抜ける彼女の後ろ姿は、ほんの少し大人で、なんとなく可愛らしく、見とれてしまった。

* * * * *

「あ、ヒツキー、やつはろー！」

「……おう」

こちらは休み明けで、まだ体に休日の緩さが残っているのだが、由比ヶ浜のほうはそうでもないようだ。朗らかな笑みのまま、俺の背中をはたいてきた。

「ほら、もつとシャキッとしたばつかなんでしょう？」

「いや、あれはデートじゃ……てか、なんでお前知つてんの？ エスパー？」

「違うし。フツーに見ただけだよ。駅前で」

「…………」

そりやあまあ、由比ヶ浜も千葉で生活しているわけで。

別に駅前にいたところで、不思議でもなんでもない。

「ちなみに、ゆきのんもいたよ」

「…………そとか」

何と返せばいいかわからないので、とりあえず返事だけしておく事にした。特に何か

を疑われているわけでも……

「付き合ってるの？」

「いや、違う」

そこは即答しておいた。てか考えたそばからこんな質問が来るとか、こいつやつぱりエスパーなんじやねえの？俺の周り、超能力者ばつか。

「そつかあ、付き合つてないんだね」

そう言いながらお団子をくしくしと弄る由比ヶ浜の表情は、なんとも形容しがたいものがあつた。

なので、そこに触れるのはやめておいた。

「そろそろ教室行かないと、チャイム鳴るぞ」

「あ、そだね。行こつか」

そのまま教室の前まで並んで歩いたが、かつかつと響く足音は、やけに揃つていて、やたら大きく響いた。

* * * * *

μ , s は曲作りの為、また合宿に行つて いるらしく、おそらくその間は連絡は来ない。

……今さらだが、定期的に電話がかかってくるのが、当たり前になつてたんだな。

そう考えると、俺もこの半年くらいでだいぶ人間強度が下がつたのかも知れない。

「お兄ちゃん、そういう時は自分から電話すればいいんだよ」

「……何の話だよ」

「今のお兄ちゃんが何考えてるかなんて、顔に書いてあるよ」

「……………そうか？」

あなたがち否定できない辺りが悔しい。いや、これはそういう気になるではなくて、ただ。一応、バイト先の後輩として……。

すると、携帯が震え出す。どうやらメールを受信したみたいだ。またどつかからのスパムメールだろうか。

確認すると、希さんからのメールだった。

『そんな寂しそうな顔してどうかしたん?』

「……………」

ほんの一瞬ではあるが、マジで焦つた。

実はその辺の中にいるんじやねえかと思つたぞ。

スピリチュアルなパワー、恐るべし。

……いや、テキトーに送つただけなんだろうけど。

* * * * *

「希、どうかしたのですか？」

「なんかニヤニヤして楽しそうだにや〜」

「ふふつ、な・い・しょ♪」

いつか晴れた日に #9

『金曜日、秋葉原来れる?』

合宿から帰ってきた希さんのメールには、そんな短い文章が書かれていた。

さて、どうしたものか……金曜日は来るべき休日の為、英気を、あ、考へてるうちに

『行きます』とか返信しちやつてるよ。どうしたんだ、俺。イミワナンナイ。

「お兄ちゃん、どうしたの? いきなりニヤニヤして。なんかキモイよ?」

「小町ちゃん。言葉遣いが乱暴よ。あと別にニヤニヤしない」

「してたよ。じやなきや言わないもん。どうせ希さんの事考へてたんでしょ」

「いや、休日に思いを馳せていただけだから」

「ウソだー。さつき希さんから、イベントのお誘いのメール來たから、それでニヤニヤしてたんでしょー?」

「……えつ? お前にも來たの?」

「当たり前じやん。希さんは大事なお義姉ちゃん候補……じゃなくて、お友達だからね」

「…………」

小町ちゃん、本音はもう少し隠そうね。

まあ、そりやあ友達だから呼ぶよな。危うく気持ち悪い勘違いをするとこだつたわ……。

「まあ、それなら一緒に行くか。他は誰に送つたんだろうな」「多分、結衣さんとかじゃないかな。あく、楽しみだなあ♪」

小町の言葉に、それだけは間違いないと頷いておいた。

* * * * *

ライブ当日。

いつかのようすに、学校帰りにそのまま駅に向かっているのだが、今日は一人ではない。

「ヒツキー、楽しみなのはわかるけど、歩くの早いよー！」

「確かに……この男にしては、珍しく動きが機敏ね」

今日は総武高校メンバーもいる。小町も既に駅にいるらしい。やはり、知り合いには声をかけていたようだ。

由比ヶ浜に半ば強引に連れられた雪ノ下ではあるが、その表情はさほど嫌そうではない。さらに……。

「八幡、μ、sのライブ楽しみだね」

「あ、ああ……」

「あ、ああ。やばい。スクールアイドルのライブの前に、既に天使降臨してやがる。てか、もう戸塚もライブやりやあよくな？ 何ならファンだけでなく、プロデューサーを引き受けるまである。

「ど、どうしたの、八幡？ そんなじつと見て……」

「え？ あ、悪い……てか、少し急ぐか。もう小町が待ってるらしい」

「待てい、八幡よ。我もいることを忘れておらんか？」

「…………」

「何故、知らぬふりをする!?」

「あ、いや、悪い。完全に忘れてたわ」

ライブ会場に着いてもいないのに、こつちはこつちで無駄に賑やかだつた。

* * * * *

秋葉原に到着し、UTXの前まで行くと、由比ヶ浜などの初めて見る面子は、驚愕の表情を浮かべていた。

「うわあ、すご……これ、校舎なんだよね」

「前、テレビで見た事あるけど、実物はさらにすごいね」

「今からこの中が見れるなんて……あ、お兄ちゃん、希さんに連絡した？」

「一応、メールは送った」

雪ノ下もこの校舎には感心しているのか、興味深げに見上げている。てか、この子なら通つても全然違和感ないんだが……。

ちなみに、材木座はUTX近辺から女子の比率が増した事もあり、少し大人しくなつてた。わかるわ、その気持ち。

まあ、女子校に入るのは、かなり遠慮したいところではあるが、まさかここまで来てUTAーンするわけにもいかない。

「……とりあえず中に入るか」

「そだね。お兄ちゃん、今から女子校に入るんだから、目つきどうにかならない？」

「いや、今日は大丈夫だろ。皆スクールアイドルの事しか考えてないからな」「皆、はやくしないと置いてつちやうよー！」

「由比ヶ浜……あいつ、初めて来た場所でよくあんな……」

「由比ヶ浜さん、迷子になるからこつちにいらつしやい」

「なんか子供扱いされてる!?」

* * * * *

本番前、ウチは柄にもなく緊張していた。やつぱり、A—R I S Eと一緒にライブをやるというのは、かなりプレッシャーがかかる。普段そういうのを感じないウチでもこ

うだから、一年生はもつと緊張してるかもしない。

「希、どうかしたの？」

「エリチ……いや、なんでもないよ」

「隠さなくてもいいのよ。私もすぐ緊張してるから」

「あはは、わかつた？」

「ええ。だから、一人にしておけなかつたのよ」

いつになく大人びたエリチに、なんだか照れてしまう。この子はたまにこうだからズルい。ポンコツのくせに。

でも、そこが最高に好き。

「……おおきに」

照れ隠しに、少しおちやらけながらお礼を言つたところで、携帯が震えた。

何故か、それだけで誰からか確信した。これこそ本当のスピリチュアやね。

そして、その予感はズバリ当たつていた。さて、どんな内容やろうね？

『着きました。応援します』

ついつい笑つてしまふ。

普段の語彙力からは想像もつかないくらい短い文章。さらに、シンプルといえば聞こえはいいが、もつと何か書くことあるんじやないかとつつこみたくなるような内容。

でも、それが何故かすごく嬉しくて……。

頬が緩むのが、自分でもはつきりわかつた。

「もう大丈夫そうね。なんか悔しいけど……よし、気合い入れていくわよ！」

「ふふつ、そうやね」

私は、心の中で捻くれた彼に『ありがとう』を告げ、皆の元へと駆け出した。

いつか晴れた日に #10

ライブが始まると会場内の熱気はさらに増し、体が自然とリズムを刻んでいた。

先にステージに現れたのはA—R I S E。全国トップクラスの人気を持つ彼女達のステージは、完全に場の空気を支配していた。

「すごい……」

「…………」

由比ヶ浜と、意外にも雪ノ下もステージ上の3人に見とれていた。

まさに王者の貫禄。この後ステージに立つ、sは……いや、大丈夫か。

何故か俺は何も根拠はないけど、そう確信していた。

やがて曲が終わり、割れんばかりの拍手が鳴り響き、会場を埋め尽くしていく。総武高メンバーも、自然と惜しみない拍手を送っていた。

「……かつたね……」

「……ああ」

戸塚の呟きに頷くと、材木座も何か呟いた気がしたが、とりあえずそれは置いといて、もう一度ステージに目を向ける。

今からム、Sが……希さんがあそこに立つと思うと、なんだか不思議な気がした。

そういうしているうちに、あつという間に時間がやつてくる。

『さあさあ、皆さんお待たせいたしました！』続いての登場は、音ノ木坂学園のム、Sだ
〜！』

やたらテンションの高い司会のアナウンスとともに、再び会場が暗転する。すると柄にもなく、今から何か始まるという高揚感が沸き上がってきた。

それを後押しするように、9人の姿をスポットライトが照らし出す。

すると、さつきのA—R I S Eに負けじと、周りから歓声があがつた。
由比ヶ浜や戸塚の声も混じっていて、つい頬が緩みそうになる。

そして、ム、Sのライブが始まつた。

ささやかなイントロにメンバーの歌声が乗つかり、会場の空気が変わる。

それは先程のA—R I S Eのライブで感じたものと、非常によく似ていて、どこかが違つた。

何だか会場を温かく包むような一体感。

さつきは凄すぎるものを見て、見とれていた由比ヶ浜も、今度は笑顔でリズムをとつていた。

そしてそれは、周りの人間も同じらしい。

会場内は、幸せが降り注いだような温かい空気に満たされていた。

* * * * *

曲が終わり、健闘を称えるような大きな拍手が鳴り響くと、ステージ上の9人は深々と頭を下げた。

「お疲れ」

何故かはわからないが、俺はぼつりと咳き、そのまま拍手を送り続けた。隣では小町が「希さん！」と叫びながら、手を振っている。

何だか、さつきまでの数分間が夢みたいな、不思議な感覚がした。

そうさせるのは、ステージにいる希さんが、あまりに綺麗だったからかもしれない。

そんな感想が自然と出てくるくらいには、心踊る夜だつた。

* * * * *

「はあ……すぐかつたね」

「……そうね」

帰り道、由比ヶ浜はまだ先程の興奮を引きずり、雪ノ下はやや疲れを滲ませながらも穏やかに話しながら前を歩いていた。その後ろを、俺や小町、戸塚と材木座がテキトーに固まり、歩いていた。駅のすぐそばなので、すぐに帰れるのがありがたい。

そこで、携帯が震えだした。多分、これは……。

すぐに画面を開くと、また予想は当たっていた。

『ありがとう。帰り気をつけてね』

……さて、どう返信しようか。

気の利いた文章を送りたいところだったが、帰りの電車の中でも何も思いつかず、結局寝る直前まで携帯と自問自答していた

* * * * *

翌日の夜。

「やつほー、八幡君。昨日はありがとう」

「あー、いや、こちらこそ。小町も楽しんでたみたいですし」

「君はどうなの?」

「……楽しんでましたけど」

「おっ、いつになく素直やねえ。明日は雪やろうか?」

「かもしだせんね。明日が楽しみです」

「ふふふ……メール、ありがと。あれで緊張が少し解れたよ」

「……いや、大したことは書いてないんですけど」

「それでもええんよ。八幡君がどんな気持ちで送ってくれたかは何となくわかるから」

「それはスピリチュアルな力ですか?」

「女の勘やね」

「ああ……なるほど」

「さらに、寝る前には『お疲れ様です。おやすみなさい』なんてシンプルで優しいメールも貰つたし」

「あ、あれは、自分も寝る前だつたんで……なんつーか、気の利いたこと書けないのは申し訳ないです」

「ええんやない？むしろ、八幡君が絵文字を駆使して、長文送つてきたら、そのほうが心配になるやろ？」

「心配されるレベルですか……いや、それより、予選の結果発表はいつなんですか？」

「明日やね。まあ、ジタバタしても仕方ないし、のんびり構えてようかな」

「そつすか。……まあ、大丈夫だと思いますけど」

「そう？」

「あんな綺麗な……魅力的なの見せられたら、まあそう思いますよ」

「……もう一回言つてくれる？」

「いや、その……すいません。用事思い出したんで、し、失礼します……」

「危ねえ……ライブ中に思つたこと、そのまま言いそうになつたわ……。」

* * * * *

「さつき、綺麗つて……ふふつ、ウチだけに言うたわけやないのに、なんでにやけるんやろうねえ」

ドリーミング・デイ

昼休み。

いつもなら一人でベストプレイスにて、昼食を楽しんでいるところだが、今日は違う。俺は今、奉仕部の部室にて、パソコンとにらめっこをしていた。

「だ、大丈夫？ ヒツキー、すごい顔しかめてるけど」

「あなた、少し緊張しすぎじゃないかしら」

「八幡、深呼吸してみたら？」

「あ、ああ、悪い……」

もちろん部室内には雪ノ下と由比ヶ浜もいて、さらに戸塚もいる。
この場に集まっている理由は一つ。

ラブライブの予選の結果を確認するためだ。

現在、発表時間まであと三分を切つたところなのだが……。

「ふう……」

戸塚に言われたとおり深呼吸をすると、ほんの少しだが、気持ちが落ち着く。まあ、あれだ……今さらジタバタしても仕方ないというか、そもそも俺にはジタバタしようもな

い。

今頃希さんは、どんな気分で発表を待っているのだろうか……表向きは余裕綽々なのは間違いないだろうが。

「あつた！ あつたよ！ μ, s って書いてある！」
「……え？」

由比ヶ浜の言葉に、思わず声が漏れる。

すると、隣にいる戸塚が「やつたー！」と喜ぶのが聞こえ、雪ノ下がほつと胸を撫で下ろすのが見えた。決して物理的に撫で下ろしやすそうとか思ってない。ちなみに、材木座は教室の隅で、したり顔で頷いていた。いつからいたんだよ……いや、今はそれより……

「……おい、マジか」

「マジだよ！ ほら、見てみなつて」

由比ヶ浜に言われ、おそるおそる確認してみると、そこには確かに μ, s の名前と写真が表示されていた。

すると、胸の中につかえていた何かが、すうっと抜けていくのを感じた。
……よかつた。

素直な感想と共に、つい口元が緩むのをこつそり左手で隠し、窓の外に目を向けた。

朝はあまり意識していなかつたが、突き抜けるような青い空は、雲一つなくて、遠くても繋がつてゐるような不思議な感覚がした。

まあ、何がとは言わないが……柄じやないし。

「比企谷君、気持ち悪い思い出し笑いはやめなさい」

雪ノ下の罵倒を聞きながら、俺は希さんに『おめでとうございます』とメールを打ち、すぐに送つた。

* * * * *

その日の夜、風呂から上がり、自分の部屋に戻つたところで、狙いましたかのように携帯が震える。これもうスピリチュアルというよりエスパーじやねえの?なんて考えながら通話を押すと、いつもの陽気な声が聞こえてきた。

「こんばんは〜、八幡君」

「……どうも」

「相変わらずテンション低めやねえ。昼間はあんなに早くお祝いメールくれたのに」

「これがデフォなんで、慣れてくれると助かります。それと……おめでとうございます」

無難な返しと祝いの言葉をセットで送ると、クスクス笑うのが聞こえてきた。

「うん、ありがと♪エリチも八幡君からのメールを見て、目をギラギラ……キラキラさせとつたよ」

「今、ギラギラって言いませんでしたか？え、何？俺食べられちゃうんですか？」

「あの人、普段はクールっぽい感じなのに、たまに頭のネジが吹っ飛んだようなテンションになるの、本当に謎すぎる。」

「まあまあ、細かい事は気にせんでええやん」

「全然細かくない気がしたんですが……」

「それより、八幡君は今度体育祭があるんやろ？」

「はあ、てかよく知つてましたね」

「そりやあもう、結衣ちゃんが言つてたから。実行委員会にもなつとるんやろ？」

「……ええ。まあ」

「はあ……お姉さんは哀しいなあ。八幡君がそんな大事なことをウチに黙つてたなんて」

「いや……黙つてたというか、そつちもライブ前だつたんで……」

「知つてるよ♪もちろん、応援に行つてあげるから、楽しみにしてて」

「…………確か部外者は出入り禁止ですが」

「そんなウソが通用すると思つた？」

「…………」

「いかん。ム、Sの予選突破をお祝いする予定が、ウチの学校の体育祭の話になつて

る。まあ、希さんが話したければ別に構わないのだが……。

「まあ、実行委員会つつつても、俺の役割はサポートみたいなもんですし、競技もそんな出ないですからね」

「へえ……それじゃあ、そんなやる気のない八幡君に、やる氣ができるおまじないをしてあげよう」

「……おまじない？」

「徒競走で一等になつたら、ひとつだけ何でも言うこと聞いてあげる」

「はあ…………は？」

「ん？ 聞こえんがつた？ 徒競走で一等になつたら、ひとつだけ何でも言うこと聞くつて言つたんやけど。こう見えて、ウチは約束は守るよ」

「…………」

「ふふつ、それじやあ期待してるよ、少年♪あ、でも、はりきりすぎてケガせんようにな」「え？ あ、はい……」

「それじやあ、おやすみ♪♪♪」

彼女の言葉と同時に通話が途切れかからも、しばらく携帯を耳に当てていた。

……いや、別に変な事は考えていない。そもそも体育祭とは運動を通じて、心と体を育み、生徒同士の交流を深める場であつて、下心を持ち込むなどもつてのほか。最後ま

でスポーツマンシップをまつとうするのが俺の役目。なあ、そうだろ?
……はあ。とりあえず、ほんの少しだけ頑張りますかね。少しだけ。

ドリーミング・デイ #2

とある早朝。

数日前から始めて、だいぶ慣れてきたジョギングから戻ると、のろのろと階段を降りてきた小町と出くわした。寝癖がついてても、やつぱりめちゃ可愛い。欠伸してる姿とか、神がかって可愛い。

「ふあああ……あれ？ お兄ちゃん、こんな朝早くに外出してたの？ 珍しい……」

「……まあ、あれだ。たまにはな。ほら、いい天気だし」

「うわ、なんかお兄ちゃんらしからぬ言葉……どつたの？ 希さんから命令されてるとか？」

「い、いや、命令つて……一体どんな関係性なんだによ」

「噛んだ……て事は半分くらい当たつてるじやん。ま、頑張つてね」

「お、おう……」

「でも、お兄ちゃんのやる気スイッチ押すなんて、希さん何やつたんだろ。参考にしたいから後で聞いとこつと」

「いや、聞かなくていいから。参考にしなくていいから。やる気スイッチとか入つてな

いから』

「ふうん、でも今のお兄ちゃん、なんかいい顔してるけどね」

「つ……そ、そつか」

……そこだけ聞くといい話に見えなくもないが、それだと俺は、どんだけ希さんに言うこと聞かせたいんだよ、と我ながらゲスい気分になるな。落ち着け、八幡。体育祭とはあくまで学校教育の一環であり……。

朝っぱらから俺は、いつかと同じ事を考えて、下心を塗り潰していた。いや、下心なんか断じてないけど

* * * * *

そして迎えた体育祭当日。

幸い爽やかな快晴に恵まれ、体調も万全だ。要するにいつもどおりだ。いつもどおりなの大事。

そこで、ポケットに入れていた携帯を取り出し、今朝希さんからきたメールを、もう一度確認する。

『ファイトだよー!』

何故高坂さん風のかはわからないが、言っている姿は容易に想像できる。まあ、悪くない。

携帯をポケットに仕舞い直したところで、同じ実行委員でもある奉仕部メンバーがやつてきた。

「ヒツキー、やつはろー！」

「おはよう」

「……おう」

「どしたの？ 今日なんかやる気に満ち溢れてない？ 目がいつもより爽やかというか……

濁つてたけど」

「そういえば、少し背筋もしやんとしているような……」

「いや、そうでもないが……てか、濁つてるってなんだよ」

「そつか。ヒツキーも大人になつたんだね……」

「おい、話を逸らすな。目を潤ますな。なんか哀しくなるだろうが」

周りから見ても、今日の自分はどこか違うらしい。いまいち釈然としないが……まあ、なるだけ全力を出しますかね。

全力という言葉の自分らしくなさに苦笑が漏れる。

そうこうしているうちに、とりあえず総武高校体育祭が幕を開けた。

* * * * *

一方その頃……

「まさか、エリチ達もついてくるとはねえ」

「ほら、希一人で千葉なんて、迷子になつたら大変でしょ？親友として当たり前の事じやない」

「親友つて言葉がこんなに薄つべらく聞こえる日が来るとは思わなかつたわ」

「ていうか、お姉ちゃん。この前秋葉原で迷子になつてたよね」

「ぐつ……あ、あれは……ちょっと迷つただけよ。人生に、ね」

「イミワカンナイ。はあ……お姉ちゃんがどんどんポンコツになつていく……」

「まあまあ、そこがエリチのいいところやし、ね？」

「私がポンコツと言われてるのは否定しないのね」

「そりやそうでしょ。そこは事実だし」

「チカア!!!」

* * * * *

最初のほうは特に出場する競技もなく、やる事といえば、委員会の仕事くらいだ。こちらに関するては特にこれといった問題もなく、無事進行できている。

……てか、今さらだが本当に来るんだろうか？

改めて考えると少し……いや、かなり恥ずかしい気がする。何が恥ずかしいかはわからぬが……。

やべえな。急に落ち着かなくなつてきた。

「あの男は一人で何を唸つているのかしら。通報するべきかしら？」

「あはは……まあ、ヒツキーにも色々あるんだよ。ヒツキーだし……なんでかは予想つくけど」

由比ヶ浜の最後のほうの呟きは、聞こえない振りをしておいた。てか予想つくのかよ。スピリチュアルかよ。

* * * * *

「よし、着いたわね！ 皆、ついてきて！」

「エリチ、そつちやないよ」

「…………」

「な、何よ！ 亜里沙もにこもそんな目で見なくてもいいじゃない！」

* * * * *

「ねえ、ゆきのん大変だよ!!」

「どうかしたの？」

「紅組、怪我した人がいて、二人三脚リレーのチームが一組足りないんだって！」

ドリーミング・デイ #3

総武高校のグラウンドに到着すると、想像していたより観に来ている人の数は多く、こつちのイベントもかなり気合いを入れてるのがわかつた。

観客には私達と同年代の人達もいて、ぽつぽつ聞こえてくる会話から、友達や気に入る異性を観に来ているみたいで、何だか微笑ましい。

「さて、八幡君はどこかしら？」

「エリチ、その怪しげな望遠カメラはしまってね」

「お姉ちゃん、いつそんなの手に入れたの？」

「ほら、アンタ達バカやつてないで、さっさと座るわよ」

呆れた顔で溜め息を吐くにこつちについて、皆が並んで

「こういう時、たまにお姉ちゃんっぽくなるんよねえ。もしかしたら、本当に妹でもおるんやろうか。後で聞いてみよう。

「あれ、八幡君じゃない？」

「ん？」

エリチの言葉に反応し、グラウンドに目を向けると、すっかり見慣れたくせ毛の男の

子が、気だるそうに辺りをキヨロキヨロしていた。どうやら、実行委員の仕事中らしい。

「……ああ、からかいたいなあ……つて、ダメダメ。八幡君はお仕事中なんやから。

「もう少し間近で観たいわね。よし、行つてくるわ」

エリチがまたわけのわからない事を言い始めたと思つたら、あらびつくり……エリチ

は私服の下に総武高校のジャージを身につけていた。

「……エ、エリチ？」

「お姉ちゃん!?」

「ア、アンタまさか……」

「ん?もちろん手作りよ」

「…………」

才能の無駄遣いにも程がある。隣で亜里沙ちゃんは頭を抱えていた。御愁傷様。

「もちろん皆の分も用意してきたわ」

「何でよつ!?

「念の為よ。念の為」

「…………」

ダメや。この子、はやく何とかしないと……。

そう考えながらも、何故かウチはワクワクしていた。なんでやろうね。

「まつたく、行くなら一人で……つて、アンタらもなんで行こうとしてんのよ!?」

「姉がこれ以上恥を晒さないように、です……」

「……ほら、なんか面白そうやし?」

「お、面白そうって……」

「大丈夫よ、にこ。別に競技に出るわけじゃないから。近くで彼を……体育祭を観察するだけだから。これも音ノ木坂の為よ」

「せめてもう少し本音隠しなさいよ……ああ、もう一・どうなつても知らないからね!」

エリチの手作り総武高校ジャージは、それはもうサイズぴったりだった。

* * * * *

さて、二人三脚のメンバーが足りなくなつたようだが、どうしたものか……。

今の俺のクラス内の状況を考えると、俺から救援を頼むのは限りなく不可能に近い。なので、この件は由比ヶ浜や雪ノ下、もしくは委員長の相模に頑張つてもらうしかないのだが……

「…………は?」

ふと斜め前に視線を向けた瞬間、俺の口から驚きの声が零れた。

ありえないことなつていて。いや、何て言うか……いるはずのない人物がそこにいた。

……でか、今日来るつて言つてたな。じゃあ納得……できねえよ。まあ待て。まだ見間違いの可能性もあるし……。

予測不可能すぎる展開に、やや混乱しながらも、とりあえずその人物に近づいてみると、その人は……東條希は、すっとぼけるように首を傾げて見せた。

「あの……何やつてるんですか」

応援に来るとは聞いていたが、まさかこんな所までやつてくるとは聞いてねえぞ。聞いてたら全力で拒否してたが。

彼女は、ほんの少し考える素振りを見せてから、にぱあつと笑顔になつた。

「え？ ウチ、君とどこかで会つたつけ？」

「希さんじやないなら誰なんですかね」

「うふふ、ウチの名前は西條望。よろしくね」

「…………」

わかりやすすぎると偽名である。いや、ここまでくると、偽る気なさすぎて、ある意味正直といえる。てか、誤魔化そうとするなら、関西弁どうにかしましようね。

色々言いたい事はあるが、まあまずは……

「…………か、そのジャージはどうしたんですか？ 変なサイトでも……」

「これ？ エリチの手作り。ウチもびっくりしたんやけど」

「…………」

「…………」

なんだ、その才能の無駄遣い……。

呆れ混じりの感心をしていると、こちらに向けて由比ヶ浜が駆け寄ってきた。
「あ、ヒツキー!! ちょっとといい? つてええ! な、なんで東條さんがいるの! ?」

「違うよ。ウチの名前は西條望やよ」

「あ、そうだつたんですか。すいません、人違いでした」

「おい、あつさり騙されんな。少しば疑え」

さすがはアホの子と言いたいところだが、ちょっと将来が心配になつてきた。変な壺とか買わされないように注意して欲しい。

由比ヶ浜は周りをキヨロキヨロと確認してから、ヒソヒソ声で話しかけた。

「あの、な、なんでいるんですか? 大丈夫なんですか?」

「まあ、こつそり見るだけだから大丈夫大丈夫。エリチと亜里沙ちゃんは髪が目立つから、こつそり隠れながらやけど。にこつちは小さいし」

胸が大きい者同士の会話を聞いていると、今度は体育教師が駆け寄つてくるのが見えた。

「由比ヶ浜、代わりの走者は見つかつたか?」

その言葉を聞いた由比ヶ浜は、「あつ」と何か思い出したような表情になつた。まあ、

希さんの件があつたから仕方ない。

すると、体育教師が何故かじゅつとこちらを見ていた。

もしかして、このタイミングで「ペアを組め」対策について物申されるのだろうか。あ
れが使えないのかなり辛いんだけど……。

内心びくついていると、体育教師はにつこりと暑苦しい笑みを見せた。
「よし、お前ら走ってくれ！もう時間がない！」

「…………え？」

この人、今何て言つた？

隣を見ると、希さんにしては珍しく驚いた顔をしていた。

ドリーミング・デイ #4

どうしてこうなった……。

そんな呟きが口から漏れてきそうな現状に、思考回路が上手くついていかない。だが、そんなことはお構い無しに、時間と物事は進んでいく。

一方、希さんは「フンス！」と気合いを入れていた。

「さあ、八幡君。ウチらも頑張ろうか！」

「いきなりの参加で、よくそんなテンションになれますね」

「まあ、こんな機会滅多にないし？今日のウチは総武高校二年西條望として、八幡君が優勝できるように全力を尽くすよ」

「いや、優勝とか……てか、大丈夫ですか？練習もなしに二人三脚とか……」

「まあ、大丈夫なんやない？ウチら割と一緒にくるやん？」

「何の根拠にもなってねえ……てか、めっちゃ楽しそうっすね」

俺の言葉を聞いた彼女は、キヨトンとしてから、いつもの悪戯っぽい笑みを見せた。

「…………君とだから、楽しいんよ」

「…………ですか」

いや、そういう言い方は反則じゃないんですかね？べ、別に悪くはないんだけどさあ……いや、もう何て言うか、反則すぎて反則というか。

てか、もう10月なのに暑いな。陽射しのせいで、顔が火照つてやがる。勘弁してくれ。

* * * * *

そうこうしているうちに、すぐに順番が回ってきた。

普通の徒競走とは違う緊張感に戸惑いながらも、深呼吸して気持ちを整えると、希さんが笑顔を向けてきた。

「八幡君、準備はいい？」

「……はい」

この心臓の強さはステージで培われたのだろうか。元々だろうか。やはり心強い。

そして、平塚先生の合図で、一斉にスタートした。

自分が思つたよりもずっとスマーズなスタートに驚きながら、順番に足を運ぶと、自然と速度がついてきた。

「はつ……はつ……」

「はつ……はつ……」

息もぴったりのようで、急造にしては中々のコンビネーションだと思う。だが、問題

が一つ。

.....右下で何かが揺れてる!!

そう。スタートと同時に、視界の右斜め下で、希さんの豊満なアレが激しく揺れ動いている。

まつたく予想できなかつたわけではないが、これは想像以上だ……。

何とか視線を前に、むしろやや上向きに固定しているが、それでもやはり気になつてしまふ。だつて男の子だもん！

ちなみに、順位のほうは現在8組中3位。この状況を考えれば、中々の位置だろう。だが、ハングリー精神豊かな彼女はそう考えてはいならしく、まだスピードをはやめようとしている。

これ以上はぶつちやけこける危険性が高くなるので、遠慮したいところではあるが、彼女に合わせて走らないといけないのも事実。

さらに向こうへ、プルスウルトラ！的なノリでまた1組追い抜くと、もう1組もすぐ近くにいた。

小気味良いリズムはテンポを上げ、やがて前には誰もいなくなる。

あと少し……もう少し……。

だが、欲をかきすぎたのか、どちらからともなく足がもつれ、紐がほどけた。

「あつ！」

「つ！」

踏ん張ろうにも、最早こけるのは避けられないようだ。だが、この人には……
最近の運動の成果か、ただのまぐれか、何とか彼女の体の下に、自分の体を滑り込ませた。

すると、顔面に柔らかな衝撃がきて、後頭部が地面にぶつかつた。

「ぐつ！」

「だ、大丈夫!? 八幡君！」

「……何とか」

「もう……無理しすぎ。あつ、ウチら1位みたいやね」

「そ、そうすか」

希さんに手を引かれ、ゆっくり立ち上がると、赤組が盛り上がり上げているのが見えた。

「あの謎の二人組速かつたなー」

「あんな人達居たつけ?」

「まあ、1位だし良くね?」

「あの女人の人美人だよねー」

「む、胸……胸……」

「すぐかつたな……色々と……」

「あの人、どつかで見た事あるような？」

「つか、あの男羨ましすぎるだろ」

「ちつ！ボツチの癖に!!」

うわあ……1位になつただけでなく、最後にこけたせいで、やたら目立つてしまつた
ようだ。そのせいか、何やら色々言われている。てか何人かムカつく事言つてんな。棒
か何かでぶん殴つてやりたいわ。

ジロリと声のする方を睨んでいると、希さんが肩をつづいてきた。

目を向けると、彼女は何故かしてやつたりみみたいな笑顔を浮かべている。

「君、なんかチラチラこつち見てたよね」

「つ…………」

「さつき、思いきり胸が顔に当たつとつたね」

「つ…………」

「八幡君やらしー♪」

「…………」

何も言い返せない。いや、確かに下心みたいなのがゼロだつたわけじやないが。

すると、彼女はそのぼつてりした唇を俺の耳元に近づけ、優しい声音で囁いてきた。

「でも、ありがと。かつこよかつたよ♪」

「っ!!」

だから反則技止めて欲しいんだが……。

口元を手で覆い隠すと、希さんはすぐに心配そうな表情になり、俺の服の砂埃を優しくはいた。

「じゃあ、ケガした所を……」

「あ、それは自分でやつとくんで。希さんは早く隠れてくれると助かります……」

「うん、そうやね。じゃあ、顔に残った感触はウチからのご褒美つて事で♪」

こちらが何か言い返す前に、彼女はペロッと舌を出し、矢澤さんのいる場所へと小走りで行つてしまつた。

……まあ、とりあえずあの感触は忘れないようにしてこう。ご褒美らしいし。

* * * * *

「あ、いた!! ちよつと希!! あんた何ちゃつかり競技に参加してんのよ!!」

「そうよ! なんてうらやま……危ない橋を渡つてるチカア!」

「でも、1位おめでとうございます!」

「あはは、ごめんねえ。成り行きで……」

そうは言いながらも、まだウチの胸の中は激しく高鳴つていた。

今まで気づかんかったけど、八幡君つて、意外とおつきな体してるんやねえ。
とくん、と高鳴る胸に手を当て、ウチは顔が赤くなつてたらどうしようか、なんて考
えていた。

ドリーミング・デイ #5

体育祭が無事に終わり、携帯を確認すると、希さんからメールが来ていた。
内容を確認すると、どうやらもう帰っているらしい。

……とりあえず、ばれなくてよかつた。

いや、知り合いには普通にバレてたけどね！ 雪ノ下からも片付けの後に説教されたし

雪ノ下からの説教を思い出し、くたびれた気分になりながら鞄を漁つてると、何やら入れた覚えのないひんやり硬い物に手が触れた。

……なんだ、これ？ いや、なんか馴染んだ感触の気が……。

おそるおそる引つ張りあげると、手にはMAXコーヒーが握られていた。
さらに、紙しきがテープで貼り付けられている。

『お疲れ様。今日はありがと。楽しかったよ♪ またやつてみたいなあ』

何だか声が聞こえてくるようで、つい頬が緩んでしまう。

丸っこい文字で書かれた言葉は、じんわりと胸に染み込んできた。

……とりあえず、これつきりにしといてください。マジでヒヤヒヤしたんで。

数日後……。

「ああ、そつちは今月修学旅行ですか」

「うん。まあ行くのは穂乃果ちゃん達やけどね」

「場所はどこなんですか？」

「ウチらの時と同じで沖縄やね。沖縄の海、気持ちよかつたよ♪また泳ぎに行きたい
くらい！」

「…………」

「今、ウチらの水着姿を想像しとつたやろ？」

「…………美ら海水族館には行つたんですか？あ、果ての浜は？」

「露骨に誤魔化してるなあ。まあ、そのムツツリ感が八幡君らしいんやけどね」

「俺らしさとは…………か、なんか用があつたんじゃないんですか？」

「あ、そうそう。すっかり忘れとつた。八幡君と話すの楽しいから、つい脱線するんよ
ね」

「なんすか、その優しい責任転嫁」

「あはは。実はね、今度結婚式場のイベントに、sが出演することになつたんよ
「はあ」

「来週の日曜日なんやけど、来れそう？」

「……まあ、特に用事もないんで構いませんけど」「

「そつかあ。いつも通りやね。よかつたあ」

「おーい、何気に失礼……いや、はつきり失礼ですよー」

「ふふつ、衣装もいつもと違うティーストやから、楽しみにしててええよ。あ、水着やないからね！」

「さすがにそのぐらいはわかるんですが……」

「じゃあ、よしつ！来週はよろしく。あつ、今週のバイトも忘れんようにな〜」

「……了解」

通話が途切れ、先程までの会話の余韻に浸りながら、

結婚式場ね……まあ、滅多に行く機会がない、というか今後も行く機会があるかもわからないしな。あるとすれば小町の結婚式くらいだろうか……うわ、つい想像しちゃつたじやねえか。泣けるからやめろ。

まあ、とにかく……今回はどんなイベントになることやら……。

* * * * *

イベント当日……。

「いやー、さすが結婚式場のイベント。女子率高いなあ。お兄ちゃん、小町がいてよかつ

たね

「ああ、それはこういうイベントがなくても毎日思つてゐるぞ」

「いや、さすがにそれは気持ち悪い」

「ひどい……」

いつものようなやりとりをしながら、小町と並んで歩いていると、確かに女子率高え……一人で来てたら、うつかり回れ右してたわー。本当に小町がいてよかつた。何なら、朝起きた時から、夜寝る時までそう考えている。要するに小町最高。

「八幡君、相変わらず目つき悪いよ?」

「うおつ！びっくりしたあ……」

これは得意技なのだろうか、スピリチュアルな力なのだろうか、また知らないうちに背後を取られていた。これ、未だに慣れないんだけど……。

小町はあまり気にしていないのか、にぱあっと可愛らしい笑みを希さんに向けていた。

「あー、希さん、こんにちはー！今日は小町まで誘つていただいて嬉しいです！」

「こちらこそ来てくれてありがとう。相変わらず小町ちゃんは可愛いなあ♪」

希さんも同じ考え方のようで、小町の頭を撫で、嬉しそうに目を細めている。すると

……

「今日は来てくれてありがとう。相変わらず可愛い日をしてるわね」

「っ！」

いつの間にか傍にいた絢瀬さんが、頭を撫でてきた。いや、距離感……！

しなやかな指先の感触に、何やら不穏な気配を感じていると、彼女は上目遣いでこちらを見てきた。

「この前の体育祭は完全に希のターンだつたわ。てなわけで今度は私の魅力満載の……」

「エ・リ・チ？」

「はい」

いつものようにツッコミを入れている希さんだが、その身に纏つた雰囲気は、いつもどこか違う。なんかこう怖いというか……うん、怖い。紫色のオーラは……氣のせい、だよな？

「ほうほう」

何故かはわからないが、小町が一人で納得したように頷いていた。

* * * * *

イベント始まると、ステージ上では、希さんを含めた6人のメンバーが、パフォーマンスを始めた。2年生組はいないが、その不在を感じさせないパフォーマンスに、会場

はの熱気は増していく。

その中でも一際目を引くのが、やはりウエディングドレスに実を包んでいる星空凜だろうか。照れ笑いのような表情に、会場全体が虜になつたかのように思えた。タキシードをアレンジした衣装に身を包んだ他のメンバーも、ステージに彩りを添え、観客の盛り上がりも、より一層熱を増していく。

そこで、希さんと目が合つた……気がした。まあ、今回は席がステージに近いしな。そんな偶然もあるだろう。

だが、この時の俺は知る由もなかつた。

この後、俺達の関係がハツキリ変わり始める出来事が起くる事に……。

ドリーミング・デイ #6

ライブ終了後、希さんから呼び出され、小町と一緒に別のホールに行くと、何やら撮影が始まろうとしていた。

入る場所間違えたかと思い、少し戸惑っていると、背後から肩をとんとんと叩かれる。
……また背後を取られちまた。どうやら俺に殺し屋の才能はないらしい。

そう考えながら振り向くと……その瞬間、時が止まつたような感覚を覚えた。
「ふふん。相変わらず八幡君は隙だらけやね」
「…………」

「ん? どうかしたん?」

「…………」

「お~い、八幡くん」

「わあ~! 希さん、綺麗ですね~! 本物の花嫁みたい!」

本物の花嫁ってなんだよ、とかいうツッコミも言えないくらいに、俺はその格好に見とれてしまっていた。

ドレスそのものは、星空が着ていた物と変わりはしないのだが、何故だろうか……何

かが違つて見えた。

スタイルとかそういう単純な話ではなく、何かが特別だつた。

「…………」

「八幡くん。あかん、返事がない。ただの屍みたいやね」

「あららら、お兄ちゃんが興奮と感動のあまり黙っちゃつてる」「…………い、いや、何つーか、その…………いきなりすぎて驚いただけだけど?え、あれ?てか、

今から何が始まるんですか?」

「実はモデルを頼まれたのよ」

俺の質問は答えたのは、希さんの背後にいた絢瀬さんだ。こちらもウエディングドレスを着用している。淡いブルーが彼女の魅力を引き立てていた。さらに……

「まつたくもう…………しようがないわね」まあ、この宇宙一のスーパーアイドル・にこにーなら、モデルに選ばれても仕方ないけど

「はいはい。早くしないと、皆待つてるわよ」

「少しほ感動に浸らせなさいよ!!」

よく見ると、先程ドレスを着ていなかつたメンバーがドレスを着用して、そこに立つていた。

これは何事かと希さんを見ると、彼女は申し訳なさそうに笑つた。

「いやあ……あはは、本当はもう帰るところやつたんやけどね。こここのオーナーさんに頼まれちゃって……ごめん、そんなに時間はかかるんらしいから、待つてくれる?」

「…………まあ、大丈夫ですけど」

「それにしても、皆さん綺麗ですね!いいなあ、小町も着たいなあ♪」

小町のドレス姿……やはり見たいような、見たくないような、というのが本音だ。まあ、どちらにしろまだ先の話だが。

しかし、今は胸がどくんどくんと激しく脈打つており、何も考えられそうにない。

……おい、なんだ、この感覚。

「八幡君?」

「つ?!あ、は、はい?」

「そんな驚かんでもええやん。撮影の前に一年生の紹介しておこうと思つたんやけど」「ああ、そうですか……」

「…………」

希さんは俺をじつと見つめてから首を傾げ、そつと耳打ちしてきた。

「もしかして……ウチのドレス姿に見とれてたん?」

「…………」

何故言葉が出てこないのだろう……普段どうでもいい事や余計な事ならいくらでも

出てくるのに。

そんな俺を見て、希さんは、してやつたりみたい笑顔で、くすくす笑つた。

* * * * *

まだ頭の中がふわふわした状態のまま互いの自己紹介を簡潔に済ませると、小泉が心配そうにこちらを見た。

「あ、あの……顔真っ赤ですけど……だ、大丈夫ですか？」

「……だ、大丈夫だ……ああ」

やだなにこの子。小動物感のある癪し系じやないですかー。なんていうか、奉仕部の部室に欲しい感じ。

すると、希さんがジト目でこちらを見ながら、ぼそつと呟いた。

「彼は発情期やから、あまり気にせんほうがええよ。特に半径5m以内は立ち入り禁止やよ」

「は、はつ……つ!?」

「いや、なんつー嘘ついてんですか……」

半径5m以内立ち入り禁止の発情期とか、ただの危険人物じやなかろうか。

そうこうしている内に、スタッフさんがメンバーを呼びに来た。

「お待たせしました。それではよろしくお願ひします」

さて、撮影が終わるまでもうしばらくかかりそうだし、その辺をうろついときますかね。そうすりや少しは落ち着く気もする。

「あ、そこのキミ!」

いきなり聞こえてきた大きな声が、自分に向けられたものだと気づくと同時に、やらテンションの高いショートカットのお姉さんが、俺の周りをぐるぐる回り、品定めをするように上から下まで眺めている。

どうしていいかわからずにはいると、そのお姉さんは立ち上がり、笑顔で俺の手を握つてきた。

「君も手伝つて！お願い！」

「…………は？」

* * * * *

どうしてこうなつた。

タキシードに着替えた……というか、着替えさせられた俺は、現在スタイリストさんに髪型を整えてもらつていた。

まさか、この俺にこんな機会が訪れる時が来るとは……。

あのカメラマンは、一体俺の何を見て判断したのだろうか？今日、体調悪いとかじやねえよな。

準備が終わり、撮影現場に戻ると、小町が「おおつ」と驚いていた。

「お兄ちゃん、だいぶ雰囲気変わったねー！目はアレなままだけど」

「わかりきつた事をいちいち言うな」

希さん達に目を向けると、どうやら撮影はほぼ終了したのか、弛緩した空気が流れていた。

そこで、絢瀬さんと目が合う。

「ぐはあつ」

彼女は何かに撃ち抜かれたように胸を抑え、ぱたりと氣絶した。いや、なんでだよ。だが、それすらも構わず、カメラマンさんは「キター！」とテンションを上げている。いや、なんでだよ。

「そのどんより……影のある目つきがタキシードに意外と合うわー！やはり私の目に狂いはない！」

今、どんよりってはつきり言つたな。言つたよな。おい、目をそらすな。

だが、彼女は勿論そんなのお構い無しに、μ, sのメンバーに目を向けた。

「よし、じゃあそこのアナタ！ちょっとといい？」

「はい」

呼ばれてこつちに来たのは、何となく予想はしていたが、希さんだった。

……てか、これ、まさか……

「はい、じゃあ、そこに並んでもらえる？ そうそう、はい腕組んで！」

カメラマンの指示どおりに希さんが腕を絡ませてくると、甘い香りが鼻腔をくすぐつてきた。

「いいわね、最高！ その初々しい感じ、いいわよ！」

どんな感じなのか。何がいいのかはさっぱりわからないが、パシャパシャとテンポよく撮られていくので、そんなに失敗はしていないのだろう。

横目で彼女を窺うと、自然な笑顔を見せていた。

そして、そのままこちらを見ずに唇を動かした。

「大丈夫。ウチの隣やから、慣れとるやろ？」

「……そこそこ」

「よし、じゃあ次はハグしてみようか！」

「え？」

さすがの希さんも驚いた表情をしている。これはまあ、さすがに、ね。

すると、カメラマンも正気に戻ったのか、申し訳なさそうな笑みを見せた。

「あー……ごめんごめん。つい熱が入っちゃって……いきなりこんな事言われても困るよね？」

「ウチは大丈夫ですよ」

「は？」

「本当に!?」

慌てて希さんを見ると、別に大したことないとでも言いたげに笑っている。マジか
……。

「いや、いくら何でも……」

「八幡君は嫌やつた？」

「いや、別に嫌というわけじや……」

「じゃ、せつかくやし……ね？」

「え、いいの？ マジ？ マジ？」

希さんのあつけらかんとした物言いに、カメラマンも期待の眼差しを向けてくる。

そうなると、こちらとしては黙つて頷くしかない。

「……」

「？」

とはいって、これまでの人生経験でハグの経験などないので、どうすればいいかわから
ない。

こちらが視線をさまよわせていると、希さんは首を傾げてから、「あつ」と手を叩いた。

「ウチからしてあげたほうがいいよね。それじゃあ……」

「え……」

彼女はそう言つてから、そのまま俺に抱きついてきた。

柔らかな感触が体に絡みつき、優しい体温が心を包み込んできた。
それに合わせるように、彼女の背中に手を回すと、彼女の体がすっぽり收まり、想像より華奢な体に、鼓動が再び跳ね上がる。

少し離れた場所からキヤーキヤー聞こえてきて、小町達がそこにいるのをようやく思
い出した。

だが、不思議と恥ずかしさはなかつた。いや、それに構う余裕すらなかつたというほ
うが正しいだろう。

胸の中は緊張やら興奮やら、そして……言い様のない幸福感で満たされていた。
「よしつ、もう大丈夫ですよ～！」

「…………」

「ふう……これはさすがに緊張するね～。あれ、八幡君？」

もう終わりだというのに、腕がほどけない。
……やばい。

今はまだこの人を……

「もしも～し」

「つ！」

彼女の言葉でようやく我に返り、慌てて腕をほどく。

すぐ目の前にある彼女の瞳は、少し戸惑いの色を見せていた。
その事が胸の奥をきつめに締めつけた。

「お疲れ様～！完成したら、パンフレット送るね～！」

締めの言葉を聞き流してから、とりあえず俺達は、一旦二人だけになろうと、どちらからともなく控え室を目指した。

* * * * *

ドアを閉めてから、俺はすぐさま希さんに土下座をした。

「……すいませんでした」

おそるおそる彼女の表情を窺うと、頬をかき、視線を部屋の隅に向けていた。

「も、もうつ！びっくりするやん？いきなり……」

「……本当にすいませんでした」

「ああ、もうつ、そんなに謝らんでもええから、頭上げて？べ、別に嫌じやなかつたし

……」

「……」

頭を上げると、今度はその頭を彼女に撫でられ始めた。

「つ、あ、あの……！」

「お返し♪拒否権はなしよ」

「は、はあ……」

よくわからないまま、しばらくされるがままになつていた。

その小さな手はいつものように温かく、でもどこか違う。

再び彼女が口を開いたのは、時計の秒針が一周してからだつた。

「まあ、八幡君の新たな一面が見れたから良しとしておこつかな」

「……そうですか」

「そうですよ♪。じゃあ、そろそろお互ひ帰る準備しよつか、狼くん♪」

「つ…………はい」

この時、俺はすぐに察した。

またしばらく彼女に頭が上がりそうにない事に。

ドリーミング・デイ #7

『八幡君、目を閉じて?』

「……は?」

『いいから、あとはお姉さんに任せとけばええよ』

「え、いや、だから、その……!』

「つ!!』

目を開け、体を起こすと、そこは見慣れた自分の部屋だとすぐにわかつた。

……なんつー夢見てんだか。欲求不満かよ。

自分に呆れながら首筋に手を当てるとい、この前の出来事を思い出してしまった。

あがが自分での中でどういう意味を持つのか……既にわかりきっている気はするのだが、まだ深く考えられる状況じゃない。

……今はただ……とにかく恥ずかしい!!

何やつてんの、俺!?何、その場の勢いだけであんなことしちやつてんの!?中学時代に学んだでしょ!?八幡のバカ!

ひたすら自己嫌悪に陥りながら、今日は少しぐらい遅刻してもいいや、とだらけた氣

持ちになつていると、携帯が震えていた。

「こんな朝早くから誰だろうか……などと考えるまでもなかつた。

「……はい」

「おっは～!!」

「元気いいですね。何かいいことでもあつたんですか？」

「ん？いいこと？そうやね～……誰かさんに熱くだきしめられたことかな」

「……すいません。本当に勘弁してください」

「あははっ、これはしばらく使えそうやね。うんうん」

「てか、用事は何なんですか？」

「ん？なんかね、八幡君が遅刻してもいいやつて気分になつてそうやから、注意しどこう
と思つて」

「…………」

「え？まさか……本当に当たつてたん？」

「い、いや、まさか……」

「まさにスピリチュアルやね。さ、八幡君も起きて準備しよつか」

「はあ……まあ、そうしひきます」

「うんうん。今日も八幡君はいい子やね」

「めっちゃや子供扱いされてる気がするんですが……」

「どうやろうね？あ、用事もう一つあつた」

「？」

「君の声が聞きたかつただけ……なんてね」

「つ！」

朝からなんつー爆弾投下してきやがる……いや、悪い気は全然しないからいいんだけどね？

この後、洗面所で顔を洗つていたら、小町から「朝から何一人でニヤニヤしてんの？怖すぎるんだけど……」などと言われてしまつた。

……いや、本当にあの攻撃はズるいと思います。

* * * * *

「告白？」

「そうそう、それで手伝つて欲しいってワケ」

いきなり場面が変わつてすまないが、奉仕部に意外な依頼が來た。

なんと、クラスメートから告白の手伝いをして欲しいという、明らかに面倒極まりない内容……だが、本人は至つて真面目らしい。戸部だから、そう見えづらいが。戸部だし。

さらに、その依頼を受けるかどうかの判断が、俺に委ねられようとしている。いや、なんでだよ。

とはいって、部活の性質上言うことは一つしかないのだが……
「まあ、やってみますか……」

その言葉が、色々な物事を大きく変える鍵になるとは、勿論知る由もなく……。

* * * * *

そして、再び俺は希さんと連絡をとつていた。

「修学旅行、ええなあ。ウチも京都行きたいなあ♪」

「いや、去年行つたでしよう」

「場所は京都やないし、修学旅行先で八幡君をからかえなかつた……」

「そもそも去年は出会つてないでしよう」

「あ、それもそうやね。なんかもつと前から君のこと知つてたみたいやから。不思議やね」

「……ですか」

口ではそう言つたが、たしかにそのとおりだと思う。

ぶつちやけ去年の今頃は、家族以外の誰かとケータイで話をするなんて思つてもみなかつた。なんだそれ、哀しすぎる。

「……あー、一応土産買つてきますんで、とりあえずバイトの時渡しますよ」

「あら、ありがと。じゃあ、ウチはお礼にハグしてあげよっかな」

「いや、それは遠慮しちゃります。てか、あんた接触多すぎでしょ。俺の事好きなんですか？」

「…………うくん、どうやろうねえ？」

「…………」

やつぱり変にからかうのはやめておこう。駆け引きでこの人に勝てる気がしない。

「そういや……今度ライブあるって言つてましたね」

「うん。少し先なんやけどね。今度はハロウインパレードでのライブやから、衣装も面白いもんになるよ」

「面白い…………ですか」

「そ、面白いやつ。さらに、八幡君のお土産次第で露出度が上がる仕組みになつております」

「なん…………だと……」

「なんだ、そのおかしく幸せな仕組み……いや、素晴らしいのかかもしれないが、見れるのはいいが、見られるのは……」

「八幡君？」

「つ……いえ、なんでも……」

今、俺は何を考えていたのだろうと、すぐに反省をする。何を思いあがつてているのだろうか。

気持ち悪い考えを振り払つていると、耳元を彼女のクスクス笑う声がくすぐつた。

「どうかしましたか？」

「別に。やっぱり君と話すのは楽しいなあ、て思つただけ」

「……それならいいんですけど」

急に先日の夢を思い出し、胸の中がざわつき始める。

それを悟られないように、何か話を切り出そうとしたが、上手く言葉が出なかつた。

「じゃあ、そろそろウチは寝よつかな。じゃあ、八幡君。修学旅行楽しんで来てね♪」

「ええ、それじやあ」

何も悟られなかつた事に安堵を覚えた俺は、戸部の依頼と、その後奉仕部を訪れた海

老名さんの遠回しな依頼について考えた。

* * * * *

「ううん、なんか隠してゐる気がする……」

ドリーミング・デイ #8

さて、希さんにはもちろん言わなかつたが、修学旅行中に奉仕部としても活動しなければならない。

一つは戸部の告白の手伝い。そして、もう一つは……おそらく海老名さんだろう。はつきりとは言わなかつたが、何となくはわかる。

……まあ、ぼちぼちやりますかね。

あと、お土産忘れないようにしなけりやな。

* * * * *

「♪♪♪♪」

「かなりご機嫌みたいね。何か良いことあつた？まあ、予想はつくけど

「ん？何の事やろ？」

「別に私に隠す必要ないわよ」

そう言つてエリチは爽やかな笑みを見せた。なんやろ、この何かを吹つ切つたような

笑顔は……。

そんな笑顔のまま、エリチはさらに話を続けた。

「愛しの彼と進展があつたんでしょ？この前もあんなに熱い抱擁を交わしてたんだもの……いいなあ」

「し、進展つて……そんなんあるわけないやろ？恋人じやあるまいし……」「でも好きなんでしょ？」

はつきりと出てきた『好き』という言葉に、胸が高鳴るのを感じた。

そのせいか、特に何も考えないまま口を開いてしまう。

「……やけにストレートに聞いてくるね……ど、どうしたん？」

「そりゃあ気になるわ。親友と初恋の相手がただならぬ関係になつてているのよ？気にならないわけがないわ」

「いやいや、ただならない関係とかなつとらんよ？……たまに電話するくらいやし」

「ふむふむ……好きなのは否定しないのね」

「も、もう！からかわんといて」

からかうのは大好きなのに、自分がからかわれると頭が混乱してしまう。ああ、どうしよう……。

何を聞かれるのかとあたふたしていると、エリチは今度は大人びた笑顔を見せた。

「ふふつ。いいじゃない、少しくらいは。私、これでも少し落ち込んだのよ」「エリチ……」

彼女がどのタイミングでその決断をしたのかはわからない。

でも、それより大事なこと……。

もし逆の立場だつたらどうだろうか。こんな風にすんなりと相手の背中を押せるだろうか。

いや、まあ八幡君の事に関しては色々と言いたい事があるけど、まず聞くべきは……
「エリチ……本当にいいの？」

「まあ、希もまだ自分の気持ちがよくわからないみたいだし、比企谷君が誰が好きかはわからないけど。もしかしたら案外私の事が好きかもしないし。その時はごめんね」「もうつ、台無しやね！まあ、エリチらしいけど」

「でしょ？ もうポンコツとは言わせないわよ」

「あははっ、それは無理やろ」

「えつ？」

流石にそれは無理がある。うん。

それにしても……私の気持ち、か。

* * * * *

「…………」

「ヒッキー？」

「ヒツキーってば！」

「つ！」

「どうしたじやないよ。お土産コーナー睨みつけてるけど、選ぶの早すぎじゃない？
まだ初日だよ」

「……まあ、たしかに」

「いくらなんでも気が早すぎたか。とはいえ、今から少しでも考えておかないと、絶対に失敗するだろう。

こちらをじ一つと見た由比ヶ浜は、何かに気づいたように、「なるほど」と言つた。
「もしかして、希さんへのお土産考えてたとか？」

いきなり鋭くなりやがつた……お前はもつとアホの子のはずだろう。
「……いや、小町に頼まれてたものがあるか探してただけだ」

「ふうくん。じゃあ、そういうことにしておくね。それと、依頼の事忘れちゃダメだよ」
「あ、ああ……」

* * * * *

「じゃあ、今日はここまで」

「はあく、疲れた～」

穂乃果ちゃんがのろのろと床に寝転がると、それを合図に場の空気が弛緩していく。

「にやう。気持ちいいにやう♪」

「り、凛ちゃんつ、ジャージ汚れちゃうよ！」

「二人とも、何をやつているのですか。はやく帰らないと下校時間を過ぎてしましますよ！」

「えく、私も寝転がりたかつたなあ」

「ことりまで……！もう……少しだけですよ」

「まつたくもう……何やつてんのよ」

「希、今日はやけに気合いはいってわね」

「そう？ウチとしてらいつもどおりやつたんやけど」

ふと目を向けると、夕焼けが滲んで、街をほんのり赤く染め上げていた。
……今頃彼も同じような夕陽をみているのかな。

柄にもない事を考えてると、頬が熱くなっているのがわかつた。

それと同時に、胸の中が不思議なくらいざわついていた。

* * * * *

「……ふうう」

「八幡、お疲れだね。どうかしたの？」

「ああ……まあ、あれだ。観光地で人多いからな。それで疲れたんだろ」

「あはは。八幡らしいね」

ふわりと甘く囁くような戸塚の声を聞いていると、気力体力が回復していく気がした。

とりあえず今日はこんなもんだろう。

戸部のほうは正直手伝いなんか要らないんじやないかと思えるくらい奮闘していた。それよりも、葉山の行動の方が気になつた。まあ、何となく予想はつくが……。どちらにせよ、今俺ができるのは奉仕部として、できる限りの手伝いをすることだけだ。

……そういう旅館の中にも土産屋はあつたな。
参考までにこつそり見に行くか。

ドリーミング・デイ #9

翌日。

奉仕部で早めに宿を出て、朝食をとっているのだが、朝から落ち着かない気分だ。
修学旅行でテンションがおかしなことになつていてるからだろうか。

……いや、違う。俺に限つてそれはありえない。

女子二人と朝飯を食つていてるからか。

……この二人とは部活で割と一緒にいるからな。

じやあ、昨晩戸塚と一緒にお風呂に入れなかつたからだろうか。

……まだチャンスはある。あとこれはそういうのじやない。

だとしたら、奉仕部の依頼の件だろうか。

……まあ、こんがらがつた内容ではあるが、文化祭の時ほどは疲れてない。

そうだとしたら、この感覚はなんなんだろう。

いや、本当はもう気づいている。

お土産を探している時だけじやない。

この慣れない街を歩いている最中、ふと考へてしまふのだ。

あの人があの人にいれば、もつと楽しいんじやないか、なんて……

「ヒツキー、どうかしたの？」

「…………」

「ヒツキーってば！」

「つ!!びつくりしたあ……どうかしたのか？」

「どうかしたのかじやないよ。ほら、はやく食べてお店出ないと二人を見失っちゃうでしょ?」

「……そうだな」

いかん。こんな朝っぱらから何をありえない妄想してんだか……ドルチエ&ガツバーナの香水のせいだろうか?どんな匂いか知らんけど。

「何か心配事でもあるの?」

「あー、今のところは特にないな。せいぜい戸部の喋り方がアレなのが問題つてくらいで」

「今さら!?そこはさすがに変えようがないよ!」

「たしかに問題かもしれないけど、普段から一緒にいるなら大丈夫じやないかしら」

「ああ、だから今テキトーにぼんやり対策を考えた」

「うわ、なんにも考えてなさそう……だ、大丈夫だよ!……うん、多分……」

何、その頼りない声……まあいいか。戸部だし。ダメ元だし。ダメ元すぎて、なんならダメ出ししたいまである。

それよりも気になるのは葉山の動きだ。ちなみにこれは、海老名さんが喜ぶような意味ではない。

……それとなく邪魔をされている気がする。

とはいえる、その理由やら経緯やらは何となく予想はつく。

こりやあまた面倒なことになりそうだ……てか、既になつてんだよなあ。

すると、ポケットの中で携帯が震えだした。

確認すると、どうやらメールのようだ。差出人は……まあ二択だな。

特に意味はないが、あえて画面を見ないようにメールを開き、再び画面に目を落とすと、まず顔を思い浮かべたほうだつた。

『眠い』

「…………」

いや、俺にどうしろと？

メールを打つ気力があるなら起きようよ……うわ、寝ぼけ眼でメール打つてるとこ想像したら、それはそれで可愛い。それどころじゃないとわかつていても可愛い。

……とりあえず、少し気持ちが落ち着いた。

「比企谷君。いきなりニヤニヤするのをやめなさい」

* * * * *

「…………ふう」

ああ……寝起きの変なテンションで、八幡君に変なメール送っちゃつた……。
最近、気が緩みがちやねえ。やつぱり、あのハグからやろうか……いやいや、朝つぱ
らから何を思い出しどるんやろ、ウチは……。

すると、背後からこちらに向かつてくる足音が聞こえた。この音の感じやリズムで、
すぐに誰だかわかつた。

「おはよう。どうしたの、希? 昨日とは打つてかわつて沈んだ表情ね」

「んく、昨日夜更かししたんよ！」

嘘は言つてない。実際夜更かしちゃつたし。ぼんやりしているうちに、いつの間に
かだいぶ深夜になつていた。

「夜更かし……いやらしいわね」

「いや、さすがにそれは妄想が過ぎるやろ。エリチにそういう一面があるのは知つどる
けど……」

「う、うるさいわね。まあ何もないならいわ。また占いで不吉な結果でも出たのかと
思つたわ」

「ん、まあカードは悪くないんやけど……」

「？」

私の言葉にエリチは首を傾げたが、私は笑い返すことしかできなかつた。
ただ胸が少しざわつくというだけで、細かいところを言語化できる気がしなかつたから。

小さな溜め息が零れたけれど、それが何を意味するのから自分でもわからなかつた。

* * * * *

数時間後……。

奉仕部の依頼というはあつたものの、それなりに楽しかつたせいか、あつという間に時間は過ぎていつた。

現在、俺達は竹林の道にいる。

そう、戸部はここを告白の場に選んだのだ。由比ヶ浜も「とべつちにしてはナイス……」と呟いていた。

あとは海老名さんが来るのを待つだけだ。

「いよいよだね……」

「ええ。なんかこういう場面は初めてだから、なんか変な感じね」

「あはは……まあ、告白の場面に遭遇するとかまずないし、したとしても、じっくり見た

りしないからね

「……」

「ヒツキー？」

「比企谷君？」

「……」

二人から声をかけられているが、今は返事をしている余裕はなかつた。
もう海老名さんの姿が見えている。躊躇などしている余裕はない。
ここで俺が……俺のような奴がやれることはただ一つ。

……まあ、やるしかねえか。

そして、俺は彼らの元へと飛び出して行つた。

ドリーミング・デイ #10

家に帰り、制服のままソファーに腰を下ろすと、そのまま眠ってしまいそうだった。ちよつと最近根詰めすぎたかも知れない。

だが、そんな疲れた身体でも、習慣になつていることは覚えているのか、自然と携帯をチェックしていた。

メールは特にないようだ。別に特定の誰かからのを待つていてるわけでは……いや、やはり気になる。

修学旅行最終日になり、もう家に着いててもおかしくないのに、八幡君からのメールがない。

……この言い方は違うかな。家族や恋人じやないし。

ただ、胸騒ぎがする。

とりあえずこの仕返しだけはしたいなあ。

「ふう……今度会つたら、たっぷりからかわんといかんね」

ぽつりと呟いた言葉は、一人きりの部屋に、やけに大きく響いた。

* * * * *

「いやあ、まさか修学旅行から帰つてきて、すぐ風邪ひくなんてねえ。まあ、お兄ちゃんらしいかもだけど……」

「……俺らしいとは」

修学旅行を終え、帰宅したその夜に、体調不良を感じ、その日はそのまま寝たのだが、翌朝にはさらに悪化していた。

……まさかこのタイミングで風邪をひくとは。

腫氣ながら、あの日の夜の事がぼんやりと頭の中に浮かんできた。

『あなたのそのやり方……とても嫌い』

『すまない。君がそういうやり方しか知らないとわかつていたのに……』

『なんで色んな事がわかるのに、それがわからないの!?……ああいうの……やだ』

奉仕部の依頼……。

どうやら、俺は色々と間違えてしまったようだ。

……いや、そんなのは今さらか。

間違えていたというなら、最初から間違えていたのだろう。

いや、そもそも最初つてどこだっけ?

「もしもーし、お兄ちゃーん?」

「あ、ああ、悪い……考え方してたわ」

「……もしかして、結衣さん達と何かあつた?」

「……よくわからん、なんかあつたと言えばあつたし、なかつたと言えばなかつた」「うわあ、またお兄ちゃんが拗らせてる……まあ、体調悪いから今は聞かない。じや、学校行つてくるね」

「ああ、行つてらっしゃい。もし移つてたら、お詫びにお粥作るわ……」

「余計具合悪くなりそうだからいい。それより、ちゃんと寝てなきやダメだよ。目腐つてるし」

「…………」

最後の一言がなけりや完璧可愛い妹だつたんだが……いや、憎まれ口叩いていても完璧に可愛い。

そんな事を考へてる

とりあえず……今は寝よう。

深い眠りが訪れる前、誰かの顔が浮かんだ。

その表情は靄がかかつていて、よく見えなかつた。

* * * * *

学校にいる間も、何だかモヤモヤした気分のまま過ごしてしまつた。授業がこんなに耳に入つてこないのは、初めてかもしだれない。

「ううん……」

「何やつてんのよ。希

「ん? 誰やつたつけ?」

「ぬわあに言つてんのよ! スーパーアイドル、矢澤にこよーてゆーか、しようもない冗談
言つてんじやないわよ!」

「あはは、ごめんごめん。ついからかいたい欲求が……」

こんなにからかいがいのある人も珍しいかもしない。八幡君と西片君に並ぶといつても過言ではないだろう。

にこつちは溜め息を吐いてから、こちらにジト目を向けてきた。

「まつたくもう……それで、なんかあつたの?」

「え?」

「そんないかにも悩んでますみたいな顔されたら、誰でも気になるわよ」

「あらら、ウチそんな顔がしどつたんやねえ……」

いけないいけない。これは注意しておかないと。

何となく頬に手を当て、表情を柔らかくしようと悪あがきをしていると、にこつちは前の席に腰を下ろした。

「もしかして、比企谷っていう男子のこと?」

「うん」

「…………」

「どうかしたん？」

「いや、随分はつきり言うなあつて思つただけ。アンタの事だから、どうせはぐらかされ
ると思つてたし」

「隠す必要もないからねえ」

「……も、もしかして、もう付き合つてんの？」

「……そんなんじゃなくて。もう修学旅行も終わつてるのに、連絡も何もないから気に
なつてるだけ」

「はあ？ そんなの自分から連絡したらいいじゃない」

「んく、そうなんやけどね……いや、ほら、何て言うか……」

「……やっぱ。ちょっとずつキャラ変わつてきてる」

「何か言つた？」

「何も。それより、気になるならさつさと電話でもした方がいいわよ。誰とは言わない
けど、背後から虎視眈々とチャンスを窺つてるのがいるかも知れないし」

「お礼ならいらないわよ。このくらいスーパー・アイドル・にこにとつてはどうつてこと

ないんだから」

「にこつち虎視眈々なんて言葉知つとつたんやね」

「なんで感心するところがそこなのよ!?」

「冗談冗談。ありがとね、にこつち」

だいぶ心が軽くなつた気がする。

にこつちの頭を撫でると、まだ人慣れしていない野良猫のように嫌がられた。

* * * * *

家に帰つてから、私は八幡君に……ではなく小町ちゃんに電話をした。

にこつちがいたら溜め息を吐かれそつだが、今は仕方ない。

通話状態になると、私はすぐに話し始めた。

「あ、もしもし、小町ちゃん?」

「希さくん、聞いてくださいよ~」

「?」

「実は兄が……」

小町ちゃんの話を聞いた私は、すぐに家を飛び出した。

S o m e d a y

「……今、何時だ?……てか、だりい」

意識が朦朧だが、体がまだだるいだけは、はつきりとわかる。

普段なら風邪ぐらい一日で回復しそうなものだが、今回はどうも普段よりひどいようだ。

まあ、別に皆勤賞を狙つてるわけじやあるまいし、2、3日休むのは構わないのだが、これではゲームをしたり、アニメを観たりする余裕もない。

やたら損した気分になるが、どちらにせよ今は休むしかない……喉、乾いた……。

一旦起きるか……起きのだるいが……

「あ、無理せんほうがええよ。今は」

「……それも、そう、ですね…………は?」

「ん?どうかしたん?お水飲む?スポーツドリンクもあるけど……」

「……夢、か」

「夢じやないよ~」

聞き慣れた声のする方に、ゆっくりと視線を向けると、確かに彼女はそこにいた。

いつもと変わらない小悪魔めいた笑みをこちらに向けていた。

「…………希さん…………ですよね？」

わかつていながらも、一応尋ねてみる俺に対し、彼女は笑みを深めた。

「当たり。君の尊敬する優しい先輩、東條希だよ！」

「…………な、なんで…………？」

「小町ちゃんから聞いて、心配になつたからやね。本当は昨日からでも来たかつたけど、さすがに遅かつたから、とりあえず栄養ドリンクとか、お見舞いの品だけ買い込んだ」

「…………学校は？…………てか、今何時ですか？」

「今はそんなの気にせんでもええよ。はい」

希さんが蓋を開けたペットボトルをこちらに渡してきた。

口をつけると、乾いた喉を優しく潤していく感覚が気持ちいい。

少しだけ元気が戻つた気がしたので、もう一度確認すると、やはり彼女はそこにいた。どうやら間違いないようだ。危ねえ……滅茶苦茶リアルな妄想したかと思つたわ

……。

一息ついたところでまた布団に潜り込み、頭に浮かんだ疑問をぶつけてみた。

「…………あの、どうして…………？」

「困った人を見たら放つておけない性格やからね。バイト先の可愛い後輩やし」

「……学校は？」

「振替休日やね」

「でも、もし移つたら……」

「はいはい。病人はそんなこと気にしないで休まんと」

「……はい」

「今は何を言つても……いや、そもそも万全の状態でも、この人には言いくるめられてきたのだが……。」

「何なら子守唄でも歌つてあげようか？」

「……クセになつて毎晩聴かないと眠れなくなりそうなんでやめときます」

「ふふつ、体調悪くてもそういうところは相変わらずやね……それじや、おやすみ」

そう言つて、希さんは俺の頭を撫でてきた。

ひんやりした掌の感触が心地よく、なんだか眠気が再びやつてくる。

沈んでいく意識の中で、彼女に渡すために買ったお土産の事を思い出した。

* * * * *

再び目が覚めると、もう外はだいぶ陽が傾いているようだ。

それと、体はかなり楽になつていた。

すぐに希さんの事を思い出し、隣に目を向けると、彼女は机に突つ伏して、寝息をたてていた。

その姿に自分の学校での姿が重なり、つい頬が緩んでしまう。

「すう……すうう……んん？あ、おはよー」

「……もう少し寝ても大丈夫ですよ」

「ふふつ、ウチが寝てる間に、こつそりエツチないたずらする気やろ？」

「恩を仇で返す真似はしませんよ」

彼女はとろんとした目つきのまま立ち上がり、そのまま俺の顔を両手で挟んだ。

「は？」

「ん……」

そして、そのまま顔を近づけ……額と額を優しく合わせた。

「うん、もう熱も下がったみたいやね」

寝ぼけているのか、からかっているのか知らないが、とにかく今希さんの顔がすぐ目の前にあるのは事実。

唇の辺りに生温かい吐息がかかつた瞬間、俺の体は自然と動き出していた。

「…………つ！」

「きやつ！」

俺は、いつかのようになにかを抱きしめていた。

病み上がりのせいか、頭はまだぼんやりとしていたが、甘くやわらかな体温と感触は、はつきりと伝わってきた。

もちろん彼女の戸惑いも、両腕を通して伝わってきた。
「は、八幡君？」

「……いくらなんでも無防備すぎやしませんかね」

「あはは……そうかもしけんね。八幡君、意外と狼さんやもんね」

「いや、羊が頑張つて吠えただけですよ」

「なんかあつた？」

「……少しだけ」

「今日は正直やね」

「隠し事してもどうせばれますから」

「これも病み上がりのせいだろうか、普段よりもするすら言葉が出てくる気がした。
自然と彼女の厚みのある唇に目がいく。

彼女は俺の視線に気づいたのか、控えめな笑みを見せ、そつと口を開いた。

「ねえ……する？」

「……」

何を、とは聞かなかつた。

さすがに何の事を聞かれているかは想像がついた。

だが、何も言えずに黙つていると、希さんは目を閉じ、無防備な唇をこちらに晒した。

正直心臓が高鳴りすぎてヤバい。だがこの状態で逃げるような真似はしたくない。

俺は少しづつ彼女との距離を詰めた。

「…………」

「…………」

「にや～」

「つ!?」「

氣の抜けるような鳴き声に、二人して驚いてから目を向けると、そこには、いつからいたのだろうか……カマクラがベッドの下から、のそのそ出てきて、こちらをじとつと見つめていた。

先程までの張り詰めた空気が一気に弛緩し、一気にいつもの空気が戻つてくる。

「あはは、び、びつくりするねえ。カマクラちゃん、いつからいたんやろうか」

「そ、そうつすね……普段はそんなに俺の部屋には来ないんですけど」「そ、そう?あ、ちよつと台所借りるね。八幡君はまだ横になつてて

「は、はい……」

ぱたぱたと部屋から出ていく彼女の背中を見つめながら、俺は胸の辺りに、初めて感じる熱が確かにそこにあつた。

見れなくとも、触れられずとも、それが何なのかは最早言うまでもなかつた。

* * * * *

「……あゝ、ドキドキした。どうしよ。この後顔見れるか心配なんやけど……」

Some day #2

「そつか……八幡君、大変やつたんやね」

「いや、大変つてほどのことは……」

希さんが部屋に戻ってきてから、何となく沈黙が嫌になり、俺はゆっくりと修学旅行での出来事を話し始めた。

その流れで、自然と奉仕部への依頼の件も話してしまっていた。

マナー違反な気もするが、誰かに話して、一度頭の中で整理したかった。別に依頼者が戸部だからではない。

希さんは何故か終始目を合わせてくれなかつたが、しばらく一人で頷いてから、急にデコピンをかましてきた。しかも地味に痛い。

だが、彼女はやつと目を合わせてくれた。

その顔には文化祭の日の屋上で見せてくれた笑みを浮かべていた。

とはいえデコピンをしてくるあたり、今は少し怒っているのかかもしれないが。

俺はおそるおそる口を開いた。

「……ど、どうかしましたか？」

「理由は言わんでもわかるやろ?」

「……はい」

あの時はあるあるしかなかつたとは言わなかつた。言えなかつた。結局それは今までの自分に都合のいい言い訳にすぎない。

その選択しか取れなかつた自分も、結局は過去の自分の積み重ねなのだ。

俺が何も言えずに俯いていると、彼女は俺の手をそつと自分の手で包み込んだ。

「ウチはね……やつぱり君が傷つくのは嫌なんよ。自分勝手な事言つて、ごめんね」

「…………謝らなくてもいいですよ。むしろ、こつちこそ…………すいません。学校休んでまで看病してもらつて、さらに話聞いてもらつて……」

「あらら、ばれてたんやね」

「まあ、なんとなく気づいただけなんですけど……」

「別に気にせんでええよ。ウチはやりたいことやつてるだけやし」

小さな手のひらの心地よい冷たさが、心にまで染みてくる気がした。

そして、もう少しその冷たさの奥にある温もりを知りたくて、なるだけ優しく握り返した。

「ねえ、八幡君」

「？」

『好き』って言葉は……その言葉は君が本当に誰かに伝えたくなった時にとつておいて欲しいな。まあ、君の事だから、そんなほいほい使つたりはせんやろうけど

「……そうします……あ、そうだ。お土産なんですけど」

「？」

俺はのろのろと立ち上がり、まだごちやごちや散らかつた鞄の中から、学業のお守りを取り出し、希さんに手渡した。

「……これ、受験あるんで……」

「ありがと。これはウチもお返しせなあかんね。……何して欲しい？」

「そういう時は『何か欲しいものある?』とか聞くもんじやないですかね」

「だつてほら、八幡君やし」

「いや、一回もそんなお願ひしたことありませんから。てか、いいですよ。お返しなんて」

「そんなこと言つてると後悔するかもよ?」

「…………」

たしかに。

そう思いながらベッドに腰を下ろすと、希さんが隣にきた。その口元はやたらニヤニヤしている。

「ほら、たしかにって思つてるやん」

「その普通にマインドスキヤンするの何とかならないですかね……」

どつちかの眼、実は千年眼じやなかろうか。今後何か粗相をしたら罰ゲーム喰らいそ
う。

「まあ、今決めなくともええよ。ウチは待つてるから」

「……」応考えときます。忘れるかもしませんけど

「じゃ、約束しこつか」

「はい……てか、そっちから言うんですね……」

「ウチは義理堅い性格なんよ」

こちらに身を寄せてきた彼女と、今度は小指を絡めた。

こんなに細くて頼りないので、どうしてこんなに強いんだろうか。

本当に……色々反則すぎだろ、この人

* * * * *

しばらくしてから希さんが帰ることになり、俺は玄関まで彼女を見送ることにした。

外はすっかり陽が傾いており、見慣れているはずの夕焼けの風景は、何だか違和感を
感じた。

希さんはこちらを振り返り、まだどこか心配そうに、こちらを見つめていた。

「じゃあ、ウチは帰るけど、熱が下がつたからって、無理したらあかんよ」

「ええ。ありがとうございました。そつちも帰り気をつけてください。それと……もし何か困った事があつたら、今度は俺に話してください。できるだけ力になりたいので」「まだ熱があるみたいやねえ」

「いや、本氣で言つてますよ……何と言うか、借りりは返しておきたい」

「ふふつ、借りりとか君らしい言い回しやね……じゃあ、もしその時が来たら、真つ先に君に相談させてもらおうかな」

すると希さんは、猫のようにしなやかな足取りで距離を詰め、俺の耳に直接言葉を吹き込んだ。

「頼りにしてるからね」

そう囁いてから、彼女は甘い香りを残し、離れていった。

普段から大人びているが、この時ばかりは大人と子供になつたような気分だった。

「じゃあ、またね」

「ええ。……それじゃあ」

そして彼女は遠ざかつていった。

夕陽が照らす後ろ姿は、いつまでも見ていたくなるくらい綺麗で、また胸をかき乱されるのだろうと確信した。

そして、彼女の言葉はまだはつきりと脳内に響いていた。

『頼りにしてるからね』

……今ままではいられない。

少しずつでいい。一歩ずつでいいから変わりたい。

いつか来るかもしれないその時のために、俺は決意を新たにした。

Some day #3

体の軽さを実感しながら学校に行くと、何だか見慣れているはずの景色がどこか違つて感じられた。久しぶりの病欠後のせいだろうか。まあ、そのうち慣れるだろう。いや、慣れるつてのもおかしいか。

そんなしようもない事を考えながら歩いていると、いつの間にか学校に到着してい

た。

とはいえ、安定のボツチ力を発揮している俺は、教室に入つても、特に誰からも声をかけられるでもなく……

「あ、八幡！ もう大丈夫なの？」

戸塚が小走りに駆け寄ってきたので、頬が緩みそうになつたが、なんとかこらえた。おつふ。危うく天使のスマイルで昇天しそうになつちました。

「おう、そもそも昨日にはもうだいぶ回復してたからな」

「そつか。じやあ何か困つた事があつたら言つてね。あまり無理しちゃだめだよ」

「……お、おう」

え、何その健気な台詞。いくらでも無理できなんですけど！ つーか、もつかい休

んで、もつかい言われてみたい！

そんな中、ふと誰かに見られている気がして、チラ見すると、由比ヶ浜と戸部がすぐに顔をそむけた。

* * * * *

「ふう……」

「あら、どうしたの？ 昨日からよく溜め息ついてるけど」

「ううん 自分でもよくわからんねえ。ていうか、そんなに溜め息吐いてた？」

「ええ。でも、よくわからないって、本当かしら？」

「どういう意味？」

エリチはやたらにやにやしながら私の頬をつついてきた。あ、これは少しお姉さんモードやね。

「なうに？？」

「ん？ いや、希も希で案外素直じやないのね」

「…………」

「昨日も比企谷君からもらつたお守りを休み時間の度に見てたの自分で気づいてないの

？」

「え？ ウチ、そんなんなつてた？」

「ええ。一人でにやにやしてたわ。少しひいたわよ」

「がーん……エリチに引かれるなんて……音ノ木坂で一番イタいエリチに……エリチに……」

「失礼ね！まつたく……この前休む時協力してあげたのは誰かしら？」

「うつ……それは確かに感謝してるけど……ていうかエリチ、なんかキャラ変わった？」

「失恋で成長したのかもしれないわね」

「…………」

私はそれに何と答えたらしいのかわからなかつた。

彼女は間違いないく私の背中を押してくれている。

そして私は間違いないく……

すると、エリチはうつとりとした表情で窓の外を見ながら呟いた。

「私は……愛人で構わないわ」

「エリチ、台無し……」

窓の外の景色はもうだいぶ涼しそうで、あと少しすれば冬になることを告げていた。

あつ、その前にハロウインライブがあるんやつた。八幡君に教えてあげよ。

* * * * *

さて、どうしたものか……。

ようやく登校できるようになり、学校生活を無事に終えたのはいいが、まだ希さんには連絡できていない。

いや、普通に着信ボタンを押して、普通にお礼を言うだけでいいのだが……。この前のあれこれが脳裏に焼き付いて離れないせいで、つい躊躇つてしまう。緊張のあまり、みつともない姿を見せてしまってどうで……。

恥をかくのなんて慣れてるはずなんだが……。

すると、そんな情けない俺に呆れたように携帯が震えだした。

しかも、画面にはしつかりと目的の人物の名前が表示されている。

「やつほく。元気？」

「……………はい」

「ど、どうしたん？ そんな申し訳なさそうな声出して」

「ああ、いえ。なんつーか、本当ならお礼の電話をこちらからしなけりやいけなかつたんで……」

「あはは、そんな事気にしどつたん？ ええよ。ウチがやりたくてやつただけやし」

「そういうわけには……」

「大丈夫やつて。年末年始、神社で頑張つて」

「…………ええ？ あ、いや、わ、わかりました」

「……今、嫌そうな顔せんかつた？」

「あー、あれですよ、あれ。まさか、社畜になる前から年末年始働くことになるとは思わなかつたんで」

「ふふつ、君らしい理由やね。でも、年末年始にウチの巫女姿を見れるという素晴らしい特典があるよ。それとも、君はもう見飽きた？」

「……ま、まあ、別に暇だからいいですけど」

「素直でよろしい♪あつ、その前に今度ハロウインパレードでライブやることになつたんよ。よかつたら観に来て欲しいなあ」

「……本当に色んなコスプレしてるんですね」

「いや、巫女服はコスプレで着てるんじゃないけどね。何なら八幡君もコスプレしてきたらどうかな？」

「もう間に合つてるみたいなんでいいっすよ。たまに小町からゾンビ扱いされますんで」

「ああ、八幡君らしいね」

「俺らしいとは……」

「よかつたら小町ちゃん達も連れてきてね♪」

「了解……あ、ちょっと、いいですか？」

[?]

「あー……その……この前は本当にありがとうございました……わざわざこつちまで来てもらつたり、色々迷惑かけたんで、その……借りは返しておきたいので、飯でも奢らせてください……」

「……うくん、噛んだねえ」

「…………」

「あははっ、そんなに気にせんでええよ。八幡君が噛むのかわいいし。それじやあ、楽し

みにしてるからね♪八幡君のエスコート……期待しちゃうなあ」

「……ほどほどにしてくれると助かります。それじやあ」

「うん、ばいばい」

* * * * *

その数分後、ほつと安堵の息を吐きながら、二人はそれぞれ呟いていた。

「よかつたあ……普通に話せた」

「よかつたあ……普通に話せた」

そんな小さな呟きが重なつたことなど知る由もなく、二人はいつもよりぐつすり眠つた。

Someday #4

ハロウインライブ当日。

秋葉原はまだ朝だというのに、既に仮装した人達で溢れていた。

そんな中、俺は小町達と一緒に人混みを通り抜けているわけだが……。

「つべーわ。ヒキタニ君、ほんとに仮装しなくていいん」

「もう間に合ってるからいいんだよ」

そう。何故か戸部がいる。

ちなみに戸部はミイラのコスプレをしている。どうでもいいけど。今朝、小町と駅で戸塚達を待っていたら、何故か一緒に来たのだ。理由はわからんけど。

かといって反対する理由も特になないので、そのまま行動を共にしているわけだが
……。

あと材木座はフランケンシュタインのコスプレをしている。本当にどうでもいいけど。
ど。それより……。

「わあ……八幡、すごいよ、あっちの人達」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。希さんからメール來たよ。衣装楽しみにしててだつて」

見ろよ、この天使二人を。両方魔法使いの格好してるけど、こりやもう立派な天使だよ。何なら、これが拝めただけでも来た価値があるというものだ。

そう思いながら戸塚の視線の先を確認すると、何のコスプレかはわからないが、華やかで賑やかな集団がいた。

「ほら、才人！こつちこつち！」

「ルイズ、お前まだ來たばかりなんだから、あんま走り回んなって！迷子になつちまうぞ」

「才人さん、私も構つてください！」

「ここが才人さんのいた世界……」

「すごく高い建物……」

なんだろう、普通のコスプレとはどこか違うというか、まるでファンタジーの世界から飛び出してきたみた이다。ハーレムだし。

しかも、その真ん中にいる男子だけ、割と普通な……とにかく不思議な集団だ。

* * * * *

さて、小町ちゃんにメールも送った事だし、あとはしつかりパフォーマンスするだけやね。

……普段なら八幡君にメールを送るところやけど、何故か送れなかつた。

自分でもよくわからんけど、余計に気になるからやろうか。

「…………」

「希、もしかして緊張してるのでですか？」

「え？……そう、見える？」

「にやー！ 凜達がいるから大丈夫にや！」

二人から言われたということは、どうやら自分で気づいていなかつただけで、実は緊張していたのだろう。

……ああ、もう！ これは間違いなく八幡君のせいやね。

絶対に後で思いつきりからかわんと。

私は、また極めて自分勝手な事を決意して、気合いを入れ直した。

* * * * *

特設ステージに、Sが登場すると、一際大きな歓声が上がり、彼女達の知名度がかなり高くなっていることがわかつた。

それぞれハロウインらしいカラフルなコスプレに身を包み、観客の目を惹き付け、すぐパフォーマンスに移ると、観客はあつという間に魅了されてしまった。

「希さん！」

「ふむう……今回も悪くない」

「わあ…………」

「ちょっと……ヒキタニ君、俺こういうの初めてなんだけど、なんかやばくね？やばくね？」

「…………？」

興奮しながら肩をバシバシ叩いてくる戸部をスルーし、ステージに意識を集中していると、希さんと視線がぶつかる。どこで見るかなんて言つてないので、これもスピリチュアルな力なんだろうか。

すると、彼女は少しだけ目を伏せてから、またこちらを見て……投げキッスをしてきた。

……なんだ、今の撃ち抜かれたような感覚。

それと、さつき目を伏せた彼女の表情が、どこかいつもと違う気がした。

* * * * *

ライブ終了後、パレードをぼんやり眺めながら、μ,sのパフォーマンスの余韻に浸つていると、肩をつかれた。

振り向くと、先程までステージにいた絢瀬さんがそこにいた。

軽く頭を下げるが、何か企みを含んでいそうな笑顔で、こつそり話しかけてくる。もう少しポーカーフェイスとかできないんでしようか……まあ、わかりやすくていいけ

ど。

「比企谷君。 ちょっといいかしら」

「はい？」

「希に飲み物届けてもらえない？ もう着替えは済んでると思うから」

「……あ、わかりました」

何を頼まれるかと思えば、そのくらいのパシリなら小町で慣れてるからお安いご用だ。

近くの建物の一室を借りてゐるらしく、自然と早足になつてゐるせいか、言われた部屋にすぐ辿り着く。

そして、一呼吸おいてからドアを開けると、そこには……

「え？」

「つ……」

まだ着替えてる途中の希さんがいた。

「すいませんっ！」

あまり出さないボリュームで謝りながら、勢いよくドアを閉める。

すぐに静寂が訪れたが、まだ心臓がぱくぱく高鳴つていた。

しばらくすると、「もういいよ」と声がかかり、俺はおそるおそる足を踏み入れた。

彼女は髪を指先で弄びながら、こちらをジト～とした目で見た。

「も、もう……ノックくらいしてよ」

「はい。すいませんでした……」

確かに。

いくら着替えが終わっているからと聞いていても、ノックするのがマナーだった。小町が相手だつたら、三日間くらい口を聞いてもらえないだろう。首筋に手を当て、もう一度謝罪の言葉を口にしようとすると、彼女は距離を詰め、こちらの顔を覗き込んできた。

「ふふつ、じゃあ今度のバイトでお昼^(ご)はん奢りね」

「……はい」

元より拒否権などあるはずもない。

頷くと、彼女は俺の胸に手を当て、悪戯っぽい笑みを向けてきた。

「君になら見られてもええんやけど」

「からかわないでくださいよ」

「それは無理な相談やね」

まあ、そりやそうだろう。

飲み物を手渡すと、希さんは「ありがと」と受け取つたが、また伏し目がちになつた。

その表情がどこか切なくて……

俺は自然と口を開いていた。

「あの……あー…………この後時間あるなら、どつか行きませんか？」

S o m e d a y #5

「お待たせ」

「……いや、そんなには」

希さんが控え室から出てきたので、俺は携帯から顔を上げ、意味もなく手を軽く挙げた。

「やっぱ制服なんですね」

「まあ、学校の代表として参加してるからね。あ、ごめんね。巫女装束は持ってきてないんよ」

「そりや残念っすね」

「お、なんかリアクション変わったやん? いきなりデートに誘つてくるし、八幡君が今日何をするつもりなのか楽しみやね」

「あんまハードル上げられても、ぐぐるしかなくなるんですけど……」

「あ、やっぱりいつもの八幡君やね。安心安心」

「お、おう……」

いつもの俺とは……と少し不安になるが、まあいいだろう。

俺と彼女はどちらからともなく歩きだし、控え室をあとにした。

* * * * *

まだ小町にメールで先に帰つていいと伝えると、「頑張るんだよ!」と謎の激励を貰つた。

……まあ、素直に受け取つておこう。

希さんも、ゞゞのメンバーの誰か……おそらく絢瀬さんだろう……に連絡してから、にぱつと笑顔を見せた。

「それじゃあ、どこ行こつか?」

「あつちの方、出店あるらしいんで行つてみますか」

「へえ、そういえばまたお祭りっぽいもの食べてないんよ。これは何か食べんといかんね」

急に目をキラキラさせた希さんは、ガシツと俺の左手首を掴んだ。

あまりに自然なその行動に、しばらく照れやら何やらが追いつかなかつた。

* * * * *

「ん~、美味しい……♪」

クレープを頬張り、うつとりと呟く希さんを、通りすがりの男女がチラ見して行つた。まあ、気持ちはわからないでもない。可愛い。あと可愛い。

感心して、一人で頷いていると、希さんがクレープをこちらに差し出してくる。

「はい、あくん」

「いや、しませんよ」

油断すると、すぐにこういうからかいが来る。さつき見たあの表情は幻だつたと言わんばかりのテンションだ。

すると、周りからヒソヒソと声が聞こえてきた。

「おい、あれを断る男がこの世にいるのか？」

「頭がおかしいのか……心に病を抱えているのか……」

「二フラム」

「ちつ、ボツチのくせに！そこは素直にいけよ！」

何か色々言われているんだが……。おい、昇天させようとすんな。あと俺をボツチ呼ばわりするお前。いい加減姿を見せろ。

目を向けると……ちつ、逃げられたか。まあいい。今はそれどころじゃないからな。「八幡君、どうかしたん？」

「いえ、何でもないです……」

「えいつ」

「んぐつ！」

いきなり口にクレープを押しつけられ、言葉が発せなくなるなくなる。

ふわふわの生地と甘い生クリームのコンボに、MAXコーヒー並の幸せを感じたが、すぐに気恥ずかしさが表出てくるのがわかつた。

「ふふつ、どう？」

「いや、どうとか言われましても……甘いです」

「八幡君好みの甘さやろ？」

その言葉の意味をいちいち深読みしてしまいそうになる自分がいるが、まあこれは言葉どおりに受け取つておいていいだろう。

「くりと頷くと、希さんは何か思い出したかのような表情で口を開いた。
「今日は何で誘つてくれたの？」

「…………」

彼女の視線は正面を向いていて、その視線は人混みの向こうに注がれていた。だが、周囲のざわめきは先程より少し遠く聞こえる。

このまま聞こえなかつたふりをして構わないのかもしれないが、俺はさつきの違和感を口にした。

「……気になつたんですよ」

「？」

「あー……何つーか、気のせいかもしれないんですけど、ふとした時の表情が暗いとか、暗めというか……それで、気になつたんですよ。ほら、バイト先の先輩がどこか悪くしてたら気になると言いますか……」

最後の方はだいぶ早口になつてしまつたが、噛んではいないので伝わつただろう。希さんは、正面を向いたまま頷いていた。

「そつかあ、そんなにウチの事が気になつてたんやねえ」

だいぶ曲解はされているが。いや、そうでもないのか？

何ともいえない気分になつていると、急に希さんが腕に抱きついてきた。

暴力的なまでの感触が肘に押しつけられ、脈拍数が急速に上がるのを感じた。
「じゃあ、気にかけてもらつたお礼をせんといかんね」

「い、いや、礼とか……そんなの……いらぬでしゆけど……」

「あははっ、噛んだ♪……ありがと。心配してくれて。あとこうして一緒にいてくれて」

「…………」

最後の方の『一緒にいてくれて』が、やけに切なく聞こえたのは何故だろうか。

だが、そんな疑問を打ち消すように、彼女は爆弾を放り込んできた。
「ねえ、八幡君にとつて、ウチつて何なん？」

「…………」

せめてからかう時には、もうちよいわかりやすいテンションでやつてくれませんかねえ。

俺は内心の焦りを隠し、いつものように言つた。

「……大事な先輩、ですかね」

「……………鈍感」

希さんのリアクションは、いつもと少し違つていた。

* * * * *

「ふう……やつと仕事が一段落つきそうね」

「ああ、そろそろ娘の顔が見たいよ」

「ふふつ、あの子びっくりするんじやないかしら……いきなり、こつちに来いつて言い出したら」

S o m e d a y #6

「ふう……」

自然と零れる溜め息。最近少し多い気がする。まあ、そんな時期なんやろうね。カードもそんな感じやつたし。

実は昨晩、両親から連絡があつた。
まさか、いきなりあんな……

「どうしたの？また溜め息ついて」

「えっ、あ、まあ、あはは……」

「むむつ、今度は恋愛絡みとはまた別のやつね……私でよければ話聞くけど」

やつぱりエリチは鋭いなあ。ポンコツやけど。

とはいえ今は言いづらくて、つい作り笑いを浮かべてしまつた。

「うん、まだ大丈夫かな。まあ、そんな大変なやつやないし……」

「そう？ところで、最近進展はあつたのかしら？」この前もライブが終わつた後、夜の街へ

消えていつたじやない

「夜の街へは行つとらんけどね。まあ、その……今みたいなのも悪くないよ？」

「なんだあ……せつかく妄想ネタを回収しようとしてたのに……」

「エリチ、また色々台無しになつとるよ。はやくヨダレ拭いて」

「とりあえず……今色々考えるのはよそう。

そう決めた私は、エリチに思いつくまま話題をふり、いつものような会話で頭の中を埋めた。

* * * * *

ハロウインライブや、その後のあれこれの余韻に浸りたいが、なかなかそういうのが現実の厳しいところだ。学生でもこうなのだから、社会人になつたら……はあ、働きたくねえな。

「ちっす、比企谷君！」

「てか、あの人今何してんのかな……って、初恋中の中学生男子か。って、いらん事考えたらトラウマが……。」

「つて、比企谷君、シカトとかひどくね!?」

「……ああ、戸部か。いつからそこにいた?」

「いや、さつきから声かけてたし! この前一緒にハロウイン行つた仲じやん!」

「どういう仲だというのだろうか。もしかして俺がリア充になつたとでもいうのだろうか。もしくは戸部がボツチの仲間入りを果たしたとか……ボツチの仲間入りとか、こ

れもうわけわかんねえな。

「それで……何か用か？例の依頼なら、この前聞いたとおり、今は無理だろから諦めろ」

「いや、そうじやなくつて！それも関係あるけど！」

「？」

「どういうことがよくわからないので、沈黙で続きを促すと、戸部は急に申し訳なさそうに頭を下した。

「あん時、ごめんっ！」

「は？」

どの時かは何となくわかるが、謝られる理由がからないので、首を傾げるなど、戸部は続けて口を開いた。

「いや、ほら……あん時、比企谷君が海老名さん好きつて言つたの……あれ、ウソつしょ？なんつーか……周りが気まずくならないようについていうか……」

「……別にお前の為にやつたわけじやねえよ」

「そうかもしけないけどさ、でも大事なのつて、俺が比企谷君に感謝してるとつて事じやね？」

「……そういうもんか」

「そーそー！細かい事いいつこなしでしょ～！」

まあ、確かに戸部がそう言うのなら、それを俺が否定する事はできない。
……いや、それよりも一つ気になる事がある。

「お前……呼び方変わつてね？」

「え？あ、気づいた？実は戸塚君に聞いたんよ！比企谷君、ヒキタニ君じゃなかつたんで
しょ？いや、俺もおかしいと思つてたんだわ～」

最後の方は嘘だろ。お前は絶対にヒキタニだと思つてたはずだ。戸部だし。

まあ、このしようもないやりとりでわかつたことがある。

こいつ、まあまあどころか、だいぶいい奴なのではなかろうか。

一応、戸部と目を合わせると、何故かいきなり肩を組まれた。うん、やつぱりこうい
うノリは苦手だわ。材木座とは違うベクトルで疲れそうだもん。

* * * * *

「希～、そろそろ練習に……つて、いないわね。どこ行つたのかしら？トイレ？しそうが
ないわね。荷物だけでも持つて行つてあげますか。よいしょっ、あわわっ！！希のケータ
イがつ～……ふう、傷はついていないようね。よし、しつかり画面も……ん？……こ
れつて!!」

* * * * *

今日は戸部がやたら話しかけてくる以外は特に変化のない一日だつた。いや、奉仕部の部室に行つてないのは、まあ変化といえば変化か。思えば2年になつてから、平日は殆どあの部室に顔を出していた。

……明日は顔出すか。まだ勝負の事もあるし。

そう考えたところで、携帯が震えた。多分着信だな、これは。

画面を確認すると、確かに当たつてはいたが、その相手は予想外だつた。

「あ、比企谷君！·ちよつといい？大変なの！」

「ど、どうかしましたか？」

絢瀬さんの慌てた声に、つい緊張気味になつてしまふ。どうしたというのだろうか。こちらが聞き返そうとすると、絢瀬さんの声が聞こえてくる。

「希が……希が両親のところに帰っちゃうの!! 何か聞いてない!?」

「…………は？」

あまりに突然すぎる話題に、理解が中々追いつかず、俺は口をポカンと開けたまま、玄関で立ち尽くしていた。

Some day #7

絢瀬さんとの通話を終えてから、俺はすぐに電話帳を開き、見慣れた名前を何度も指で叩いた。

しかし、繫がらない。どうやら電源が切られているようだ。

いや、落ち着け。別に今すぐどこかに行つてしまふわけじゃない。

そう自分に言い聞かせてみたが、焦りみたいなものは収まってくれなかつた。試しにもう一度彼女の名前を指で叩いてみたが、やはり繫がらない。

それと同時に、今度は無力感がこみあげてきた。よくよく考えてみれば、俺は彼女の事を知つたつもりでいて、その実大して知らなかつたのだ。というか、そんな事を考えることすら自惚れなのかもしねれない。

いきなり知られた事実に、止めどなくマイナス思考が溢れ出すのを、何とか抑えようとかぶりを振る。

すると、カマクラがじーっとこちらを見ているのに気づいた。

「……どした？」

何か言いたそうな顔に、つい語りかけてしまうが、もちろん何の返事もない。こんな

事するあたり、自分が平常心じやない証拠だろう。

「お前だつたらどうする？」

「な、何やつてんの、お兄ちゃん？」

「…………」

我が麗しのマイシスターが、いつの間にかご帰宅されていたようだ。しかも、こちらに気持ち悪そうな目を向けてくるというおまけつきで。

「おかげり」

「いや、何事もなかつたようにしても無駄だから。てか、どしたの？ カーくんに人生相談なんかして。もしかして希さんの事？」

「……別に。何でもねえよ」

「うわ、当たつちやつた……まあ、お兄ちゃんが悩みそうなことなんて、それ以外にほとんどないから仕方ないんだけどね」

「…………」

どうやらこいつに隠し事しようとするだけ無駄らしい。ついでに失礼な事を言われてる気がするが、まあ事実だろう。

「お兄ちゃん、何があつたかは聞かないけどさ、もうちょっと素直になつていいんじやないの？」

「……そういうもんか」

「まあ、今さら素直で可愛げのあるお兄ちゃんなんて気持ち悪いだけなんだけどさ、たまには言うべきこと言わないと、嫌われちやうかもよ？」

「……そういうもんか」

「ギャップ萌えというやつです！」

ぱちこんつとウインクしてくる小町に、つい苦笑してしまう。何それ可愛いかよ。
何だか、あっちの状況もよくわかつてないのに、一人で悩んでいるのが馬鹿らしくなつてきた。

つーか、たまには思いきり驚かせて、からかいつくしてやらんと割に合わん。
俺は小町の頭を撫でてから、すぐに用意を始めた。

* * * * *

よし、準備完了。

まあ、いきなりの事やし。あとは向こうで色々揃えればええやろ。

……いきなりなのはいつもの事か。

小さい頃はいきなり転校するって言われて、随分怒ったなあ。

とりあえず、いつも振り回してくる仕返しに、二人に会つたら少しくらいお説教してもいいだろう。

何なら、その勢いで八幡君を無駄にからかいまくつてもいいくらいだ。

* * * * *

しばらくして、俺は秋葉原の駅前に立っていた。

別に気持ち次第で電車が速くなるわけでもないのだが、何だか普段よりかなり早く到着した気がする。

とはいえる、もうすっかり暗くなつており、駅前を行き交う人は、どこか急いでいるようを見えた。

さて……多分今日は、あそこにあるよな。

確信に近い感覚で足早に目的地へと向かう。

通学路に比べたら、歩いた回数は遥かに少ない道。

だが、この道を歩く時に目に入る景色は、鮮明に脳に焼き付いており、微かではあるが、胸が高鳴る。

そんな事に今日初めて気がついた。

やがて、目的地の神社に到着する。

一步一步確かめるように歩いていくと、すぐにその背中が見えた。

こんな時もいつもどおりなのが、いかにも彼女らしい。

……果たして言いたいことはしつかり言えるだろうか。

全然こちらに気づく気配のないその背中に、俺は声を飛ばした。

「……希さん」

「ひやあつ！……え？え？え？ほ、本当に八幡君？」

「あー、はい……」

「ど、どうしたん、いきなり？」

あまりに予想外だったのか、慌てふためく彼女は、まだ俺がここにいるのが信じられないみたいだ。

とりあえず先制攻撃は成功したらしい。いい気味だ。

薄暗い境内で見る彼女は、どこか幻想的で、油断すると、そのまま見つめてしまいそうだった。

それを何とか振りきり、俺は軽く息を吐いて、思いつくままに言葉を口にすることにした。

「その、なんつーか、希さんって、結構謎な人ですよね」

「ん？そ、そうなんかなあ？別に何も隠したりはしてないけど……」

「いや、秘密っていうか、俺みたいなのにも最初から割と親しげに接してきたじやないですか」

「それは……何となく君がウチと似てたから、かな」

「……そうなんですか？」

「うん。一人は平気みたいな顔してるけど、どこか寂しそうなところとか……」「そうですか……」

寂しそう、か。あながち間違いではないのかもしない。

ただ、これまで諦めるのに慣れていただけで……。

それで諦めたくないものが今はあるから……。

「あと、文化祭や修学旅行の後、希さんのおかげでいろいろ助かりました」

「ウチは大したことはしとらんよ。でも……ありがとう。今日はお礼を言いに来てくれたん?」

「……それだけじゃないですよ。ただこういう事は言えるうちに言つておこうと思つただけなんで」

「え? それってどういう……」

「……希さんが引っ越して、これまでみたいに会えなくなつても……」

「…………？」

「あー……一回だけでいいんで聞いてください」

「は、八幡君?」

「こちらが何を言うのかは、きっと既に気づいているのだろう。

いつの間にか、風は止み、時間が止まつたような感覚に陥つていた。
俺は、丸くなつた目を見つめたまま、ゆっくりと口を開いた。

「俺は……希さんが好きなんですよ」

S o m e d a y #8

訪れる沈黙。

自分が言つた言葉を、もう一度頭の中で反芻してみる。
よし、間違つてはいなはず。

そんな意味のない確認作業をしながら、何とか気を紛らわそうとするが、もちろん大
した効果はなく、不思議な高揚感と脱力感のせめぎあいが身体を支配していた。
一体どのくらい静寂がこの場を包み込んでいたのだろう。
先に口を開いたのは希さんだつた。

「…………八幡君」

「…………」

名前を呼ばれたが、碌に返事すらできないのが情けない。

それでも、何とか視線は逸らさないように、真っ直ぐに見つめ続ける。

すると、彼女の唇が再びふわりと動いた。

「あの、ウチが引つ越すつて、何の話?」

「…………え?」

希さんは、こてりと首を傾げながら、本当に不思議そうな表情を見せた。
な、何だ、この感じ……。

焦りに身を任せるように、ついつい口を開いてしまう。

「あ、絢瀬さんから聞いたんですけど……」

「エリチから? んく……まあ、うつかり携帯でも見たんかな? エリチやし……」

「…………」

「まあ、エリチの早とちりやね……ちょっと九州にいる両親から呼び出されただけで、引つ越したりはせんよ」

「……そ、そうですか」

「うん、なんかごめんね。エリチが……あはは」

少し気まずそうに笑う希さんは、そのまま顔を伏せたかと思うと、こちらに一步踏み込んできた。

ほつとしたのも束の間、今度は別の緊張がこみあげてくる。

「ねえ、八幡君……」

「は、はい?」

彼女は極上の上目遣いと共に甘い声音で囁いてきた。

「さつきの言葉……一回しか言ってくれないの?」

「つ?」

おい、なんだこの反則技。こんなもありかよ。……まあ、この人からすりやあ、アリなんだろうな。うん、知つてた。

こちらの心情など掌で転がすように、蠱惑的な笑みを浮かべた彼女は、また一步距離を詰め、甘い香りでこちらを包み込みながら、そつと掌を胸に当ててきた。

「さつきは君が来たことに驚いて、よく聞こえんかったなあ」

「ぐつ……」

「あーあ、もう一度しつかり聞きたいなあ」

男に二言はないと言いたいところだが、そんな顔されたら言うしかない。だつて可愛すぎるんだもの。

あつさり前言撤回した俺は、もう一度彼女の目を見て、さつきよりもしつかりと言葉に輪郭をもたせた。

「……好きです。心から」

「……うん」

最後に付け加えた言葉に一瞬目を見開いた希さんは、すぐに穏やかな笑顔になり、はつきり頷いてくれた。

こんな薄暗い中でも、その頬は朱く染まっているのがわかり、より一層胸が高鳴る。

それから彼女は、しばらく考え事をするように目を伏せたが、何かを決意したように顔を上げた。

「その……ウチの事を心から好きで、早とちりでわざわざここまで来てくれた八幡君には、何かご褒美が必要やね」

「い、いや、別に……」

「必要やね？」

「はい……」

何だろう。今庄で押しきられた気がするんだが……。

まあ、十中八九からかわれるだろうが、今となつてはそれもどんと来いだ。こちらはもう既に告白を済ませているのだから。

「ん…………」

「つ…………!?」

キスされた。

何も考える暇などない。

希さんはいつになく俊敏な動きで、俺の頭部を左右から掴み、自分の唇を俺のそれに、やたら不器用に押し付けていた。

柔らかな唇の感触に、全身が痺れるような感覚がして、微動だにできない。

まるで天に昇つていくような幸せを俺は初めて体験していた。

ぼーっとした思考回路の中、名残りを惜しむように、そつと唇が離れると、再び時計の針が回り始めるように、周りの景色もじんわりと目に馴染み始める。

希さんは、どこか落ち着かない表情のまま、口元だけ笑みを見せた。

「……わ、私……ウチも君が好き。大好き。心から」

「……どうも」

初めて見る表情に、たまらなく愛しさが溢れてくる。

衝動のままに今度はこちらから口づけを交わした。

「……」

「ん、んん……」

こちらもよく加減がわからず、随分不恰好なものになってしまったが、それでも気持ちは昂り続けている。

希さんは、とろんとした目をこちらに向け、小悪魔の笑みを見せた。

「巫女装束のまま、こんなキスさせるなんて……八幡君はほんと好きやねえ」

「いや、最初はあんたからでしようが……」

「こんな気持ちにさせたのは君やろ?」

彼女はぺろりと唇を舐め、キスの余韻を味わっていた。

その赤い舌に目を奪われていると、希さんは目ざとくその視線に気づき、思いきり抱きついてきた。

「もう一回……ね？」

「……はい」

その魔性に抗えるわけもなく。ただ不器用に唇を重ねる二人を、月だけが見ていた。

S o m e d a y #9

「じゃあ、すぐにご飯作るから待つてね」

「…………」

まさかこんな展開になるとは……。

その後、希さんと手を繋いで駅まで行き、彼女に見送られながら千葉に戻る予定だったのだが、トラブルにより、電車が止まってしまった。

そして、今日はこちらに泊まることになつたのだが……。

「ん? どうかしたん? あ、まさか緊張しとるん? 結構前泊まつたのに?」

「あー、いや、その……この前とは色々違うというか……」

「そうやねえ、あつ、忘れとつた!」

何かを思い出したように希さんはこちらに駆け寄り……唇を重ねてきた。

不意打ちにまつたく反応できずに呆然としていると、唇が離れ、頬を赤くしながら笑う彼女が視界に映つた。

「ふふつ、家でチューすんのは初めてやね?」

「……そ、そりやまあ、さつきのが初めてなんで……」

「それもそうやね。というわけで……ん」

希さんは目を閉じ、何というか……『待ち』の姿勢になつた。

長い睫毛もきめ細やかな肌も、形のいい艶やかな唇も、これまでより近く感じる。触れられるという事実だけではなく、心の距離がそうさせるのだろうか。

俺は手が微かに震えるのを隠すことなく、再び彼女と唇を重ねた。

* * * * *

食後。二人して洗い物をしていると、ある事を思い出した。

「そういや、両親に会いに行くって言つてましたけど……」

「ん？ ああ、その用事なんやけど……やつぱり年が明けてからにしようと思つてるんよ。ラブライブもあるし……」

「そうですか」

「何なら君もついてくる？ ちょっと早いけど両親への挨拶ということでお早すぎ。早すぎですよー……でも」

「？」

「一緒に旅行とか……いいんじやないんですかね。まあ、予定が合えば。あと金が貯まれば」

「……そうやね。八幡君とならどこ行つても楽しそうやし。北極や南極でも」

「その2つは遠慮しておきたいんですけど、まあどこ言つてもからかわれるんでしようね」「あははっ、当たり前やん」

「当たり前なのかよ……」

色々想像したら、つい笑みが零れてしまつた。確かにこの人なら、南極でも平然とからかつきそうだ。

「ふむふむ。八幡君のそういう笑顔、初めてやね。可愛い」

「そ、ですかね？ てか、どういう笑顔なのか、よくわからないんですけど」「なんていうか、外ではあまり見せないやつやね。こういうの見れるのが恋人の特権かな」

「……ま、まあ、こんなんによければいくらでも」

何故か指で頬をつついてくる彼女に、俺は苦笑しながら、後でつつき返そうと密かに決心した。

* * * * *

あれこれやつてるうちに、少しだけ作業が遅れたが、ようやく一息ついた頃、1日のイベントとしては最後のアレがやつてきた。

「八幡君、お風呂どうぞ」

「え？あ、ああ、はい……」

お風呂という単語だけで心臓が跳ね上がりそうな自分が情けないが、まあ仕方のないことだろう。だつて男の子なんだもん！

落ち着け、俺。ただ風呂に入るだけだ。この前と同じ。そうだろう、八幡？ いきなりそんなドスライズな出来事は期待しちゃいけない。そう、まずは健全な付き合いをしていかなきや……よし！

「ど、どうしたん？ えらく自問自答してるみたいやけど……」

「いえなんでもないです、はい」

さつさと服を脱ぎ、湯船に浸かると、何だか1日の疲れが抜けていく気がした。
改めて……えらい急展開な1日だつたなと思う。

自分がまさか希さんと付き合う事になるとは……。

彼女ができた、という単純な事実確認では済まされない何かがそこにはあつた。

それと、あの人さつきからやたら可愛すぎるんですけど！

なんかもう、うれしい！ 楽しい！ 大好き！ を全身で表現してきて、既にこちらはキヤパオーバーになりかけである。

すると、コンコンとノック音が聞こえてきた。

「八幡君？ 湯加減どう？」

「……ああ、はい。だいぶ良い感じです」

「そつかあ、じやあ入るね」

「え？」

ガラツと音がしたので目を向けると、バスタオル一枚巻いただけの希さんがそこにいた。

「は?……え、あ、ちよ……」

「ふふん、お背中流しましようか? なんちやつて♪」

「…………」

俺は口をぱくぱくさせながら、思考を何とか正常に戻そうとしたが……無駄だつた。

タオル一枚だけ巻かれた彼女の身体から目が離せなかつた。

俺の視線に間違いなく気づいているはずの彼女は、この上なく楽しそうに笑つて見せた。

「あらあら、八幡君つたら、気になつて仕方がないみたいやね」

「…………」

「まあ、ええよ。八幡君なら、全部見ても」

「つ!」

はらりと床に落ちるタオル。

その瞬間、俺の意識は途切れた。

* * * * *

「あらら、水着着とつたのに……ふふ。 ちょっとやりすぎたみたい。 本当に可愛い反応
するね、君は」

S o m e d a y #10

「…………あれ？」

目が覚めると、白い天井がこちらを見下ろしていた。

「……俺は何をしていたのだろうか。何かこう……物凄く幸福な体験をした気がするんだが……ハチマン、キオクナイ。

すると、奥から希さんが出でてきた。彼女は目が合うなり、こちらに駆け寄ってきた。

「あ、やつとお目覚めやね」

「……希さん？え、あれ？」

「いやあ、君をここまで運ぶの大変やつたよ。おまけに着替えまで……」

「え？ 着替え？……あ」

なんか色々と蘇つてきた。

さらに、今自分がぶかぶかのスウェットを着用していることに気づく。

「あ、それお父さんの」

「いや、まあ、その、ありがとうございます……え？ い、一応聞きますけど……」

今頭の中に浮かんでいる最大の疑問を口にしようとすると、希さんはそれを手で制止

した。

「まあ、皆まで言わんでええよ。ね？」

「……うわあ」

まさか付き合い始めた初日に全部見られてしまうとは、いやおかしいだろ。このシリーズ、大概こっちが見る側だつたじやねえか。うん、メタイ。

「そんなに落ち込まんでもええやん？どうせいつか見ることになるんやし」

「いや、いきなり何言つてんですか……」

「あ、ごめん。どうせいつか見せ合うことになるんやから、やね」

「……い、いや、まあ、そうなのかも知れないんですけど」

もしかしてだけど、俺が欲しくてたまらないんじやないの？と勘違いしちゃいそうになるから、もうちょい控えめにして欲しいものだ。じゃないと、そのうち勢いでいつちやいそうな気がする。

「それじゃあ、ご飯も食べたし、お風呂も入つたし、もう寝よつか」

「あ、はい……」

布団を敷くくらいは自分でやろうと思つていたが、もう既に、ベッドの隣に敷いてあつた。

「それ、エリチがうちに泊まる時に使う布団なんよ」

「はあ……」

何だ、その情報……ありがたいような、聞かずにいたほうがよかつたような……ほら、色々気になつちやうし？

「だから、浮氣はあかんよ？」

「……はい」

じやあ何故言つたのだろうか。いや、まあいいんだけど。仮に絢瀬さんの残り香がかなり残つていたとしても心が揺らぐことはない。ハチマン、ウソ、ツカナイ！てか、浮気のボーダーライン低すぎやしませんかねえ。

すると、希さんはにこにこしながら上に向かつて手を伸ばした。

「じゃあ、電氣消すからね！」

「え？ あ、はい……」

いきなり視界が真つ暗になり、何とも形容しがたい不思議な気分になる。

部屋が暗くなり、静かになつたせいか、外から聞こえてくる音が、やけに強調されている。それも普段自分の部屋で聞くものよりは少しだけ賑やかな気がするのは、東京という街の空気がそうさせているのだろうか。

そして、この前とは違い、今回はこういう細部を気にすることができる自分がいる。いや、無理矢理にでも考えないといらんことを考えそだからか。

「八幡君、寝心地はどう？」

「……いいですよ」

「そつか。じやあ、そつち行つていい?」

「え……」

いきなり何を言い出したかと思えば、こちらが返事をするよりはやく、希さんは布団に潜り込んできた。

「はっ!」

「大丈夫。隣で寝るだけやから」

いや、それが色々と問題なんですが……この人、俺の理性を過大評価してなかろうか。包み込むような甘い香りに、落ち着かない気分でいると、彼女はそつと手を握つてきた。

「ふふつ、あつたかいなあ」

「……ですか、ならよかつたです」

「まだ緊張してる?」

「……そりやあ、まあ……なんつーか……信頼を裏切らないようにしなきやいけないので……」

「あらあら、なんか申し訳ないなあ」

「絶対思つてないですよね……」

「それじゃあ、もつかいキスする？」

「……いいですね」

彼女が動く前に、俺の方から覆い被さるように口づけると、微かに驚く気配があつた。このぐらいの仕返しはしていいだろう。

それから、手を繋いだまま無言になり、甘い余韻に浸つた。

互いの息づかいと温もりが満たす時間に、極上の幸福が宿つているのが、ありありとわかる。

やがて、どちらも意識を手放して、ゆっくりと穏やかな眠りについた。

Your eyes

翌朝。

意外なくらいあつさり目が覚めた。少し早めに寝たからだろうか。体を起こす際に、やけに軽くなつた気がした。

希さんは既に起きていて、台所で料理をしていた。

「あ、おはよう。思つたより早く起きたね」

「……おはようございます。あの、すいません……一人でゆっくり寝ちゃつて」

「ええよ。わざわざこっちまで急いで來たから疲れてたんやろうね。それより……はい」

希さんは、こちらにとてとてと駆け寄つてきて、目を閉じ唇を突き出した。

「……えつと、熱はないみたいですね。はい」

「は・ち・ま・ん・く・ん♪」

あ、どうやらこういう逃げは許されないみたいですね。さて、正直まだかなり緊張するんだけど……。

俺は、彼女をそつと抱き寄せ、昨日の事をなぞるように、なるたけ優しく唇を重ねた。

そして、彼女は当たり前のように、駅まで見送りに来てくれた。
駅までの道のりや、行き交う人並みすら、普段と違つて見えるのも、氣のせいかもしれないが、それでもやはりどこか違う。

改札の前まで行くと、希さんは手を握る力を強めてきた。

「それじゃあ、またね。あ、ちゃんと小町ちゃんには報告してあるから」「ああー……何言われるか大体想像つきますね。まあ、別にいいですけど」

「ふふつ、その場面見てみたいなあ。今から千葉に行こうかなあ」

「いや、今日練習あるでしょ」

「もう……そこは『俺も離れたくないよ』とか言うべきやないの?」

「…………」

いや、何でそんな可愛らしく頬を膨らませてんですかね、この人は。そういうキャラじゃないでしょに。いいぞ、もつとやれ。

「今、可愛いつて思つたやろ?」

「そう思うのわかつててやるのはずるいんじやないんですかね」

「そういうとこ好きになつたんやないの? それとも一番は……こゝ?」

希さんはやや前かがみになり、胸を強調してきた。

朝っぱらから狂暴な魅力を放つてゐるが、俺の言うことは既に決まつてゐる。

「……全部好きですよ」

「…………」

あれ、なんかこの人固まつてらつしやる?

どう声をかけようかと悩んでいると、

「も、もう、びっくりさせんといてよ! いきなりらしくないと言つたから、異世界転移したかと思つたやん!」

「え、そこまで?」

「あ、もうこんな時間! 八幡君、急がな間に合わなくなるよ」

「やべえ、それじゃあまた!」

「うん、大好き♪」

「つ!」

そつちも不意打ちしてんじやねえか。危うく転ぶとこだつたわ。

千葉に戻る途中、窓の外を流れていく景色は、やはりどこか違つて見えた。

* * * * *

家に帰ると、案の定小町がにつこり笑顔で待ち構えていた。

「お兄ちゃん、おつかえり♪♪」

「お、おう、ただいま……」

こんなハイテンションで出迎えられるのは、小学生以来じやなかろうか。

すると小町はすかさず俺から鞄を受け取り、手洗いをしたらリビングに来るよう促してきた。どうやら話すまで鞄は解放してもらえないらしい。

俺は嘆息してから洗面所へと向かつた。

* * * * *

口に出すとアレな部分は伏せておいて、大まかな流れを説明すると、小町は驚いているのか、感心しているのか、よくわからない声を出した。

「はえ～、お兄ちゃんの勘違いがとんだファインプレーになっちゃったんだね～」

「まあ、俺というか絢瀬さんだけどな」

「あはは、そだね。でもそつかあ、お兄ちゃんがすっかり成長してくれて、小町も嬉しいよ」

「なんでオカン目線なんだよ……」

「でも、本当におめでとう。お兄ちゃん、希さんのこと大事にしなきやだめだよ?」

「それはまあ……重々承知している」

「でも本当によかつたよ。正直周りから見たら、もどかしいと言いますか……とにかく

見ててやきもきさせられたのですよ」

「……そつか」

「あ、言つとくけど、お兄ちゃんと希さんがケンカしたら、小町は希さん側についちゃうから」

「そりやあ、頼もしいな」

そう言つて笑う小町の瞳は、やけに優しく見えた。

Your eyes #2

「……ちょっといいか？」

「え？」

カーテンの隙間から西陽が差し込む放課後の部室。

それまでの鉛のような沈黙を破り、いきなり声をかけてきた俺に、雪ノ下と由比ヶ浜は驚きを隠すこともなく、ただ視線をこちらに向けている。ついノックもせずに入ったことは後で謝ろう。

「次の生徒会選挙の事なんだが……」

「ああ、いろはちゃんの依頼だよね？」

「前も言ったけど、貴方のやり方を認めるわけにはいかないわ」

「まあ待て。それなんだけど、俺が立候補しようと思うんだが……」

「…………え？」

「どういう事かしら？」

「言つたまんまの意味だ。俺が立候補して当選する。それだけだ」

俺の言葉に、一人は顔を見合せた。多分だが、内心ではかなり驚いていると思う。

「一体どういう風の吹きまわしかしら」

「さあな。なんつーか……」

この感覚は何なのだろうか。

成長とか、そういうかっこいいものとは違う。
もつと泥臭い何かだと思う。

俺は自然と思いついた言葉を口にしていた。

「あがいてみたくなったんだよ」

二人は、どういう心境かは知らないが、はつとした表情になつた。何言つてんだ、こ
いつみたいな雰囲気になつてないことは何となくわかるが……。

雪ノ下はしばしの間、瞑目して考え込む素振りを見せてから、やがて小さな笑みを見
せた。

「それで……依頼は何かしら？ 比企谷君」

さすが察しがはやくて助かる。

由比ヶ浜もうんうんと勢いよく頷いていた。

ならば、もう迷うことはない。

俺は少しだけ背筋をしやんと伸ばし、口を開いた。

「生徒会役員になりたい……協力してくれ」

「それはかなり難易度の高い依頼ね。二重の極みを習得するほうが遥かに簡単そうだわ」

「え、マジで？ そんなに？」

「雪ノ下から『二重の極み』という似つかわしくない単語を口にするくらいには難しいらしい。」

「で、でもでも！ ほら、何とかなるかもしれないじゃん？ えと……同情票とか！」

「それフォローになつてないからね。あと、お前よく同情票なんて言葉知つてたな」

「馬鹿にすんなし！」

気づけばいつもの奉仕部に戻つていた。

自分から一歩踏み出す勇気をくれた希さんには感謝だな……

「あ、そういえば希さんから聞いたよ！ ヒツキー達付き合う事になつたんだつて！」

「へえ……あの人も物好きね。色々と話を聞いてみたくなるわね」

「あの人……後で覚えてろよ。いや、そのうちバレスだだからいいんだけどさ。」

* * * * *

「その日の夜……」

「そつかあ、奉仕部元通りになつたんやね。よかつたよかつた」

「……まあ、その後からかわれまくりました」

「うんうん、いいことやね」

「いいことなんですかね」

「あつ、ごめん！やつぱり君をからかうのはウチやないと、本領発揮せんよね」「これまでどう本領発揮したのか聞きたいところなんですが……」

「生徒会選挙、いい結果ができるように祈つてるからね」

「カードは何て言つてるんですか？」

「ひ・み・つ♪」

「勿体ぶるということは、まあまあいい結果みたいですね」

「……君、そういうの上手くなつたね」

「生憎この読みは一人にしか通用しないんですけどね」

「あらら、それは気をつけんといかんね。ウチの気持ちが筒抜けになつたらあかんから」

「もうだいぶ筒抜けになつてますよ。つつても人の事は言えませんが……」

「そもそもそうやね。あ、もうこんな時間やん。じゃあウチはもう寝るね」

「ええ。俺もこうします。それじゃあ」

「うん。おやすみ♪」

Your eyes #3

それから数日後……。

やたら賑わっている廊下には新しい生徒会メンバーの名前と役職が貼り出されていた。

生徒会長・雪ノ下雪乃

副会長・由比ヶ浜結衣

生徒会書記・一色いろは

生徒会庶務・比企谷八幡

「どうしてこうなるかね……」

「あはは……ま、まあ、いいじやん。皆仲良く当選つて事で……」

「そうですよお、先輩。終わり良ければ全て良しつていうじやないですか」

「いや、そもそも何でお前がちゃつかり当選しちゃつてんの？これつてお前を当選させない為の依頼だつたんじやねえの？」

「え？だつてほら……皆さんとなら楽できそう……楽しくやれそうですし、内申点……皆さんがやるのに、私だけやらないのも後味悪いというか」

「…………」

「この子、本音が隠しきれてない。てか、隠す気ないよね……まあ、別にいいけど。

「あの、比企谷君。本当にいいの？当初の予定とはだいぶ違う結果になつてるけれど……」

「ああー……まあ、これはこれでいいと思う。そもそも資質でいえば、お前がやるのが適

任だからな」

「でも、せんぱあい。なんで一年の私が役付きで、先輩が庶務なんですか？」

「ん？まあ、あれだ……色々雑務に追われそなんでな」

「ああ、よくわかんないですけど」

結局、他に候補者が集まることもなく、それならもうこのメンバーでということになりました。この結果になつた。

すると、由比ヶ浜がぼつりと呟いた。

「奉仕部のほうはどうなるのかな？」

「……別に、そのままにしどければいいんじゃないの？毎日生徒会活動やるわけじゃないし

「そだね。ゆきのんの紅茶飲めなくなるのやだもんね」

「それが理由なのかしら……まあ、いいけど」

「あ、それじゃあ私も奉仕部参加します」

「お前、サツカー部あるだろ」

「たまにですよ、たまに」

……とまあ、こんな風によくわからんが、さらに騒がしくなりそうな展開になつた。

* * * * *

「♪～～」

「希ちゃん、ご機嫌だね～」

「ええ、それに何というか……綺麗になつた気がします」

「にや～」

ことりちゃん達から声をかけられ、自分がにやけていた事に気づく。よかつたあ、い
い方向に受け取つてもらつて。でも、気をつけんといかんね。

「の～ぞ～み～」

こんな風に絡まれちゃうから。

「はあ……今夜はウオツカで一杯やりたい気分だわ」

「はいはい。まだ未成年だからやめようね。よしよし」

元生徒会長の危険発言を宥めながら、優しく鮮やかな金髪を撫でた。

理由はまあ……想像つくだろうから伏せておきます。

とにかくウチがやるべきことは、エリチの名誉のために、ボロが出ないようにフオ

口一すること。もう手遅れの可能性が非常に高いけれど。

「はあ……恋をして、終わりを告げ、願うことは……」

「はい、ストップ。それよりにこつちは？」

「たしか、穂乃果達と……いえ、はじめてのおつかいかしら」

「これはボケているのだろうか？それともバグっているのだろうか？どちらかわから
ないからツツコミづらい。いや、そもそもウチはボケて魅力を發揮するキャラだから、
そこ取らないで。

すると、廊下の向こう側から、穂乃果ちゃんにこつちがドタバタと走ってきた。

「みんなー！次の会場決まつたよ！」

「あら、どこかしら？」

一瞬で切り替わったその表情は、もう既に立ち直っていると告げている気がした。
……さすがエリチやね。

「あと希。後でお泊まりの時の事、詳しく」

「え？」

とりあえず、誰から聞いたかだけ後で取り調べしておかなきや。

Your eyes #4

「は？新曲がラブソングになりそう？」

「そりゃんよ……」

「それで、どうしてその報告を昼休みに？」

「実はね……」

* * * * *

「決勝の曲はどうしようっか？」

「そうですね……残りの日数を考えると、これまでの楽曲からパフォーマンスを磨いたもののほうがいい気がします」

「そうかもね」

「A—RISEや他のスクールアイドルはどうするのかな？」

「いや。悩むにやう」

「審査員がいるんだから、パフォーマンスのクオリティを優先するべきよ」

「私もそう思うわ。決勝だし」

「ちょっと待つて。皆、それでいいの？」

「エリチ？」

満場一致で決勝には、これまでの楽曲で挑もうという流れになっていたけれど、急にエリチが反対を表明した。何やろ？ 嫌な予感しかしない。

すると、エリチはこれ以上ないくらいのドヤ顔で告げた。

「ラブソングにするべきだと思うのよ!!」

「「「「「ラブソング……」」」」

つい皆の声が重なる。

まさかの提案だつたからだろうか。にしても、何故このタイミングで？ 首を傾げていると、まず海未ちゃんが真っ先に口を開いた。

「あの、ラ、ラブソングとはつまり……恋愛の歌、ということですよね」

「ええ。そういうことになるわね」

「わあ……絵里ちゃん、大胆です」

「どうかしら？ でも、アイドルが恋愛ソングを歌うのは普通じゃない？」

「ま、確かにそーね。むしろ歌わないほうが珍しいわ」

「私達が歌わなかつた理由は……ねえ」

「どうせ誰も経験がなかつたからでしょ」

「真姫ちゃんもにや」

「う、うるさいわね！」

ラブソングという単語だけで、ここまでざわつくとは、さすが女子高生やね。うんうん。

そのざわざわを納めるように、エリチが手をぱんぱんと叩く。

そして、再び不敵な笑みを見せた。

「確かにこれまで経験者はいなかつたわ。これ・ま・で・は。でも、今は違うでしょ？」

「…………」

「な、なんで皆してこっちを見るん？」

皆が見たことのないような目つきでこちらを見ている。

軽いホラーよね、これは……。

「希。ム、Sのために一肌脱いでもらえないかしら。赤裸々にあなたの体験を語ってくれるだけでいいから」

「えええ……」

* * * * *

「というわけなんよ。あはは」

「というわけなんですか」

「それでね。ウチは考えたんよ。この状況を打破する策を

「はあ……」

「八幡君。明日、こつち来てくれない?」

「はい？いや、あの……もしかして巻き添えにしようとしてます？」

うん♪

うわあ、こんな可愛い声音で人を巻き添えにする人初めて見た。
だが断る!!

「いや、何と言いますか……俺があれこれするよりも、希さんが説明したほうが効率いいと思うんですが……」

「八幡君はウチが皆から一肌脱がされても……いいの？」

「ウチが八幡君のあれこれを全て話しても……いいの？」

「あ、やつぱり行きます」

即決即断

そりやそうだろう。そんなの怖すぎる。

μ 、S内とはいへ、あれこれバラされたら恥ずかしいに決まつてゐる。

や、さすがにそんな話はしないだろうけど。

性癖とか。 い

「ごめんねえ、休日に」

「……まあ、これもデートの代わりだと思つときますよ」

「ふふつ、八幡君もそういう事言えるようになつたんやね。お姉さんは嬉しいよ」

「そりやどうも。じゃあ、集合時間とか決めときますか」

「そうやね。あ、八幡君」

「？」

「決勝戦終わつたら、どこか行こうね。二人だけで」

「は、はい……どうかしたんですか、いきなり?」

「うん。君に会つてみたいつて両親が言うから、それに向けて、親密度をさらに上げておきたいなつて」

「ああ、なるほど…………え?」

なんか急に重大イベント発生した氣がするんだが……。

Your eyes #5

当日。

秋葉原まで行くと、改札のすぐそばに希さんは立っていた。

「おはよ」

「……おはようございます」

「そんな緊張せんでええよ。何人かは結構話したこともあるやろうし、皆いい子ばかりやからね」

「…………」

いや、あなたを一番警戒しているのですが……とは、あえて言わなかつた。

果たして、今日はどうなつてしまふのか。

そう考えていると、彼女がいきなり抱きついてきた。

不意打ちで甘い香りに包み込まれ、周りからちらちらと視線を感じ、鼓動が加速する。

胸元にぶつかつてくる柔らかな温もりも、かなり暴力的だ。

「の、希さん？」

「このくらいええやろ？ 皆の前やとできないからね」

「…………」

確かにそのとおりだと思うが、ここも周りの視線はあるんですが……ほら、どつかか
ら「あれは、Sの東條希さん？え？お、男の人と抱き合つてる！嘘つ、あれ？これ何
て状況？」とかやたら混乱した声が聞こえてくるし……この声、どつかで聞いたことあ
る気がするんだが……。

「ああ、やつぱりあかんね。このままやと……八幡君、こつちこつち」

いきなり身体を離した彼女は、俺の手を引き、人目を避けるように柱の陰まで誘導す
る。何だ、一体……つ！

「ん…………」

「…………」

思考があつという間に真っ白になるような甘い感触。

希さんは、自分の唇を押しつけるように、俺のそれと重ねていた。

しかし、それも数秒のこと。こちらの理性が完全にとろけないように加減したかのよ
うな塩梅で、唇は離れていった。

希さんは、頬を紅く染めながら、あははと誤魔化し笑いをした。

「…………い、いきなりごめんね。でも、君を見たらやつぱり抑えられんやん？」

「そ、そうですか……ま、まあ、いいんじやないですかね？せつかくの休日ですし……い

や、休日あんま関係ないかもしませんけど、まあいいと思いますよ」

「あははっ、めっちゃや早口やん！ 可愛い♪じや、行こつか」

「……は、はい」

僕の心のヤバいやつが、「その前にトイレ……」と言いたそうにしているが、何とか彼女と並んで歩き始めた。

* * * * *

今回の謎のミーティング会場となっている和菓子屋『ほむら』に到着すると、希さんがこちらを向き、少しだけ真面目な声のトーンで告げた。

「心の準備はできた？」

「……なるようになれって思つとけばいいですかね」

俺の言葉を聞いた彼女は、「その意気やよし」と扉を開けた。すると……：

「いらっしゃいませーーーあ、今日はよろしくね！」

「……どうも」

「あれ、穂乃果ちゃん何で仕事してるん？」

「あはは、ちょっとこの前お母さんのプリンこつそり食べた罰で……あ、あと5分で終わ

りだから、部屋に行つてていいよ」

「りょーかい。じや、行こ」

「あ、はい」

「ちょっと待つて！」

「？」

いきなり呼び止められたかと思ひきや、高坂さんはじいっと俺の顔を覗き込んでいた。柑橘系の爽やかな香りが鼻腔をくすぐり、非常によろしくない。あと近い。

「あー、えつと……？」

「うん、やつぱり希ちゃんの言つたとおりだ。どんよりしてるけど優しい目つき……」

「そ、そうか……」

微妙な褒められ方に苦笑していると、希さんが割つて入るように腕を取つてきた。

「さ、仕事の邪魔したいから、はよ行こ」

「……はい」

な、何だ、この変な威圧感……いや、気のせいかな？

俺は黙つて足を動かすこととした。

* * * * *

「比企谷君、待つてたわよ！」

高坂さんの部屋に足を踏み入れると、今度は絢瀬さんがこちらにやつて来て、手を握られる。くつ……相変わらずこの人の距離感だけは未だに謎だ。

すると、また希さんがさりげなく絢瀬さんの手をほどき、割り込んできた。

「じゃあ、穂乃果ちゃんが来るまで、簡単な自己紹介済ませとこつか」

「…………」

この時、希さんがいつもより声が強張つて聞こえたのは、おそらく気のせいじゃない。

Your eyes #6

わかつてはいたことだが……めっちゃ居づらい！

女子ばかりの空間に放り込まれ、何だか居たまれない！だつて男の子だもん！

希さんの方に目をやると、何故かやたらニコニコしている。

この表情……笑顔だけど笑顔じやない。さつきから威圧感すごいし。周りは気づいてないけど。

彼女の謎のテンションに内心不安を覚えていると、誰かに肩を叩かれた。

振り返ると、二年生組の一人・南ことりがいた。特徴的なサイドポニーとふわふわした柔らかい雰囲気。優しい笑顔の組み合わせは、いかにもアイドルっぽいと思えてしまう。

彼女は笑顔のまま、俺と希さんを交互に見て、うんうんと何かに納得したように頷いた。

「希ちゃんのこんな表情初めて見たよ～」「ん？」

「…………」

とりあえず頷くだけ頷いておくと、南さんはこちらに笑顔を向けてきた。

「比企谷君つて、執事服とか似合いそうだよねえ～」

「そ、そうか？」

「希ちゃんもすつゞくメイド服似合つてたし、二人並べて写真撮りたいな～。比企谷君の分、執事服作るから採寸していい？」

「ああ……」

「えっと、八幡君のサイズは……」

いつの間に移動していたのか、希さんは流れるような動きでメジヤーを使い、俺の採寸を済ませた。

「はい、これ返すね」

「え？ あ、うん。ありがと♪」

「おい、あまりに動作が自然すぎて、南さんはメジヤー奪われたこと気づいてなかつたぞ……てか、これまさか……いや、それはあの人のキャラじゃない気が……。」

すると、今度は一年生組のショートカットが特徴的な星空凜が隣に座ってきた。

「今日はよろしくにやー！ 比企谷さんはラーメンが好きなんだよね？ 凜もだよ！」

「お、おう……」

近い、だから近い

「そうやね。凛ちゃん、ラーメン大好きやもんね。また食べに行こうね」「にや〜」

絶妙な撫で加減で、反対側から星空を猫のように宥める希さん。いや、いつそこに移動した?

「…………」

「ん? 八幡君とこつちどうしたん?」

「い、いや……」

「べつにー」

矢澤さんは希さんの異変に何となく気づいているようだが、特にそれを指摘することではなく、こちらに視線を向け

た。おそらく『あんたがどうにかしなさい』という意味だろう。知らんけど。

「あの、比企谷君。ちょっとといいでですか?」

気まずさみたいなのを誤魔化すように、立ち上がって身体をほぐそようとすると、今度は園田さんが話しかけてきた。

どんな話だろうと身構えると、彼女は「失礼します」と言つて、急に俺の腰に手を添えてきた。

「少し猫背気味ですね。せつかくそこそこ身長があるのでですから、背筋をしつかり伸ばしたほうがいいですよ」

「……おう。了解」

「あ、危ねえ……「ひやうつ！」とか変な声出しそうになつちまつた……いきなり腰がつり来るから……」

「八幡君は猫飼つてゐるから、猫っぽくなつたんやね♪」

「そ、そうなんですか？」

「…………」

さすがにそれは無理があるような……てか、いつから希さんが腰を押してた？入れ替わったの全然気づかなかつたわー。

「あ、あの、比企谷さんは……」

「お米好きだよ♪」

「びやうつ！は、はい」

まだモノローグでの紹介すら終わる前に、一年生の一人・小泉花陽の話は遮られた。あのリアクションからして、「米派ですか？パン派ですか？」という質問とかだと思うが……。

「希…………？」

「なあに、真姫ちゃん?」

「いえ、何もないわ。大丈夫……」

一年生組最後の一人・西木野真姫も、希さんのいつもと違う何かに気づきながら、スルーすることにしたようだ。

てか、何だこの状況。空気は悪くないけど、落ち着かないというか……。

すると、ドタバタと足音が近づいてくるのが聞こえた。

おそらく高坂さんが手伝いを終えたのだろう。

すると、ガラツと扉が開き、部屋に駆け込んできた彼女は笑顔で希さんの手を握りしめた。

「それだよ、希ちゃん!」

……いや、何がだよ。

You r e y e s #7

高坂さんのいきなりの発言に、その場は静まり返る。

一つだけ言えるのは、皆一様に「どういう意味?」と言いたげな顔をしていることだ。
「あの、穂乃果……それだけでは意味がわからないのですが……」

「今の希ちゃんの気持ちを歌にすればいいんだよ!」

「え? ウチの?」

いきなり名前を出された希さんは困惑している。他のメンバーが視線で続きを促すと、高坂さんは「えーと……」と唸りながら、必死に言葉を搾り出していた。

「そう! さつきみたいに希ちゃんがヤキモチ妬いてる時の気持ちとかを歌詞にすればいいんだよ!」

「ほ、穂乃果ちゃん? ヤキモチって、ウチそんな……」

「確かに……さつきすぐかつたよね。圧力が……」

「ええ。いつもの希とは明らかに違いました」

「私はこれをいつも見ているのよ」

「それはあなたの自業自得でしょ」

「にやあ、ほんつとうにびつくりにや」

「私は話しかける隙すら……」

「まあ、確かにこういう機会がなきや見れないかもね」

「み、皆…………あうう…………」

いきなりあれこれ言われた希さんは、珍しくあたふたしている。うわ、何て可愛い。いいぞ、もつとやれ。

こちらの心情が悟られたのだろう、恨みがましい目を向けられたが、気づかないふりをしておいた。どうだ、からかわれる気持ちは。

……これ、絶対後でえらい目に会うよな。

一応心の準備だけしておくと、希さんがようやくまともに口を開いた。

「で、でも、こんなんで曲作りつてどうするん？」

「大丈夫！海未ちゃんと真姫ちゃんが頑張ってくれるから！」

丸投げかい。

しかし、名前を出された二人は、特に嫌そうな顔をするでもなく、いつものことのように頷いた。どうやら、sでは当たり前の光景らしい。

「よし、私も衣装のデザイン考えなくちゃ！」

南さんも何がスイッチになつたかは知らないが、スケッチブックを出し、何やら書き

込み始めた。さつきのあれこれで衣装が書けるなら、それはそれですごい。

さらに、矢澤さんと絢瀬さんが立ち上がった。

「じゃあ、私達は希から胸キュンエピソードを引っ張り出すわよ！」

「希、比企谷君、覚悟を決めなさい！」

「八幡君、こんな時どんな顔すればええんかな？」

「……笑えればいいと思いますよ」

こうして、俺と希さんは将来子供が何人欲しいかという、最早曲作り関係なさそうな事まで、根掘り葉掘り聞かれた。

* * * * *

数時間後、ようやく解放された俺達は、相変わらず人通りの絶えない秋葉原の街を歩いていた。そんな中、冬の訪れを伝える冷たい風が吹き抜け、手を擦り合わせたり、顔をしかめたり、皆似たような反応をしている。

からかわれることにはまだ慣れていない希さんは、やや疲れ気味な顔のままだ。

「はあ、エリチの本気のレッスンより疲れたわ……」

「……まあ、作業が進んだからいいんじやないですかね。まだどんなもんか全然知りませんけど」

「あはは、八幡君には本番まで内緒やね。でも、いい曲になるから楽しみにしてて」

「……はい」

希さんの言葉に頷くと、彼女は何かに気づいたように、空を見上げていた。

「あ、雪……」

「え？」

その言葉に反応して空を見上げると、薄暗い空から、はらはらと雪が舞い降りてきていた。

手の甲に落ちたその一粒は、じんわりと溶けて、小さな水滴に変わる。

希さんは、嬉しそうに笑みを深め、そつと呟いた。

「初雪やね。まさか八幡君と見れるなんて……」

「普段の行いのおかげですかね」

「そういうことにしておこうかな。ねえ、八幡君。もう少しだけいい?」

「大丈夫ですよ」

俺達はどちらからともなく手を繋ぎ、しばらく眺め続けていた。

Your eyes #8

本格的に冬に入り、ベストプレイスにも少し居づらくなつた今日この頃。俺の周りは珍しく賑やかだ。

「そつかあ。八幡、東條さんと付き合い始めたんだね」

「……ああ。まあ、な」

「つべーわ、比企谷君。スクールアイドルに手を出すとか、マジぱねーわ」

「戸部、言い方。下品極まりないからやめろ」

「うむう、しかしあれほどまでの美女が選んだのが……八幡つて、それはないでしよう！」

「ああ、おもしろいおもしろい」

賑やかなのは構わないんだが、約二名がアホな事言つてる。しかも一名滑つてる。滑るのは一向に構わないのだが、周りまで恥ずかしい気持ちにさせるのは、最早罪だと思う。

「あとやつぱり……八幡が自分からそういうの言つてくれるようになつたのが嬉しいな」

「……そうか」

うわ、なんて可愛い顔して笑つてんの、この子。いや、いかん。戸塚は男。戸塚は男。それにそういうこと考えてたら、スピリチュアルな何かで希さんに知られて、お叱りを受けるかもしね。

「八幡、どうかした？」

「いや、何でもない。まあ、色々と警戒していただけだ……」

「そ、それって、何でもなくはないような……」

「ほら、あれじやね？まだ付き合いたてだから色々あるんじやね？マリッジブルーとか言うつしょ」

「いや、それ結婚前のやつだから」

「だから八幡つて、それは……」

「もう言わせねえよ」

そんなこんなで、寒さを程よく忘れるくらいには賑やかな昼休みとなつた。

* * * * *

「雪？」

「うん。ニュース見たら、結構積もるらしくて」

「ああ、そういやこっちも深夜から降るって言つてましたね。ライブのほうは大丈夫な

「ですか？」

「そつちは大丈夫なんやけど……多分電車止まるやろうね」

「ああ……」

確かに予報どおりならば、朝電車に乗る頃にはすっかり積もつているだろうな。

そんな事を考えていたら、希さんの表情が少し沈んだ気がした。もちろん見えるはずもないのだが、何故かそんな気がした。

「まあ、ネットでも観れるからえんやけど」

「……行きますよ」

自然とそう答えていた。

俺は、Sの関係者ではないし、この前作詞の手伝いのようなことをしただけだ。だが、俺はこのライブを生で見届けなくちゃいけないという変な使命感があつた。ちょっと今までなら、鼻で笑ってしまうような選択だが、そんなのはもう関係ない。

「あー……絶対に、行きます」

「……そつか。じゃあ、楽しみにしてるね」

「ええ。それで、頼みがあるんですが」

「?」

* * * * *

「まさか前日から泊まりに来るとはね」

「……これが一番確実かと」

ライブ前日の夜。俺は希さんの家にお邪魔していたまあ結局のところ、雪が降る前にこつちに来ておけばいいだけの話なのだ。後の事は後で考えればいい。

「てか、すいません。本番前なのに」

「ええよ。だつてこつちのほうが元気になるし……」

「……」

「いや、無言にならんですよ。恥ずかしいやん?」

「そ、そうつすね。そういう、年末とかどうするんですか?」

「ん? 神社でバイトがあるけど……」

「え? マジですか。俺何も聞いてないですけど……」

「八幡君は千葉にいるからやない? あと、ウチがごり押しした特殊なポジションやし」

「ああ、それもそうですね……てか、ごり押しつて……」

メイド喫茶といい、この人一体どんなコネクションを……いや、今は考えないでおこ

う。

希さんは、こちらを見ながらからかうような声音で話を続けた。

「八幡君が年末からこつちでお泊まりでええなら、喜んで一緒に働きたいけど」

「ああ、じゃあそれで……」

「そ、即答やね……ええの？」

「そりやまあ……一緒にいられるし」

「…………いくらウチが喜ぶこと言つても、今日はやらしいの禁止やよ」

「しませんよ。てか、色々台無し」

「あははっ。あ、一つお願ひしていい?」

「いくらでも」

「じゃあ……眠るまで手を繋いでて欲しい、かな」

「…………」

「そう言つた時の表情は、それはもうどんな天使や女神も敵わないくらい魅力的で
……。

俺に出来るのは、黙つて頷くことと、手汗の心配くらいだつた。

Your eyes #9

朝起きると、昨日見た街の風景が偽物だつたのかと思えるくらいの白銀世界。外泊という特別な状況も相まって、まるで異世界にいるかのような変な高揚感が湧いていた。

「わあ、八幡君こつち来といてよかつたねえ」

「そうつすね」

「ふあああ、まだ眠たいなあ。昨晚八幡君が寝かせてくれんかったからやろうか」

「……言うと思いました」

「まあ、お約束やからね。夜更かしは今度泊まりに来た時にお預けやね」

「そりやあ生きる希望が湧いて助かりますね」

「ウチはちょっと早めに出るけど、八幡君はどうする？・ライブは午後からやし、もう一眠りしとつてもいいけど」

「……あー、じやあ俺は準備して、神社に行つときます」

「そつかあ。あ、これ……」

希さんは引き出しから何か取り出し、俺の手に握らせた。何だ？お小遣いか？

手を開いてみると、そこには……

「鍵?」

「そ、鍵やね。まあ細かくいえば合鍵やね」

「…………」

マジか。

高校生にして女性の部屋の合鍵を渡される日が来るとは……これ結構でかいイベン
トじゃね?

「八幡君、なんか目がいやらしいよ」

「い、いや、そ、そそ、そんなことはないによろよ!」

「慌てすぎやろ……まあ、いいけど。その……いつ来てもええよ」
「…………まあ、その、時間があればいつでも」

それから特に意味のない笑みを交わす。

このくすぐつたい感じは割と嫌いじゃない。

希さんはくるりと身を翻し、台所へと向かつた。

「それじやあ、朝御飯にしよっか」

「そうですね」

右手に握りしめた鍵の感触は、自分の家のものと大して変わらないはずなのに、まつ

たく違うものに思えた。

* * * * *

朝食を終えてから、希さんはさつき言つたとおりに学校へと向かつた。彼女の表情は、いつもどおりに見えて、微かに緊張を滲ませている。

「じゃあ、また後でね！」

「ええ。足元気をつけて」

「うん。八幡君も来る時気をつけてね」

彼女を見送り、片付けを済ませると、まだ大して時間は経つていないが、出かけるにはちょうどいいくらいになっていた。

「それじゃあ、俺も行きますかね」

せつからく時間があるのであら、まあ少しくらいは役に立つておこう。

* * * * *

予想外の事態。

昼頃には止むと言われていた雪は、一向に止む気配はなく、東京の街を白く染め続けていた。

「えく!!穂乃果ちゃん達、間に合わないかもしねのおー!?」

「ば、ばかっ！縁起でもないこと言うんじゃないわよ！」

「そうよ。そろそろ説明会も終わる頃だし、急げば余裕で間に合うわよ」「うん、はやく雪止むといいなあ……」

「……希、どうかした？」

「……ううん。何でもないよ」

仮に雪が止んだとしても、道に雪が積もっていたら走るのは難しいし、何より転ぶ危険がある。もし転んでケガでもしたら……。

悪い想像が一瞬頭をよぎりかけたが、それを何とか抑え込む。

大丈夫。きっと大丈夫。カードも良い感じやつたし。

絶対に9人揃って最高のパフォーマンスをすると決めたから。これまで応援してくれた人のために、自分のために、大事な人のために。

「あら？ ミカさんからだわ」

穂乃果ちゃん達の友達で、何かと、sを手伝ってくれているメンバーの1人からの着信に、皆の視線が集まつた。

「はい、もしもし。…………えつ！ 本当に！…………比企谷君が！？」
「え？」

いきなり出てきた彼の名前について目を見開いてしまう。どういうことなんやろ？
通話を終えたエリチが、につこりと笑顔をこちらに向かた。

「穂乃果達はもうじき到着するわ。音ノ木坂の皆が雪かきを頑張つてくれたそうよ。なんとその雪かきには比企谷君も参加してくれて、とても活躍したそうよ」

「そなん? 昨日、説明会あるのは話したけど……もう、言つてくれてもええやん?」

とはいへ、何も言わないあたりが八幡君らしいので、まあ良しとしておこう。

うんうんと頷いていると、エリチが何ともいえない笑みを見せた。

「ちなみに、穂乃果達がお礼を言おうと駆け寄った時に転んで、3人が抱きつくような感じになつたらしいわよ」

「…………」

ふうーん。さ、エリチ。ウチらも準備始めるよ」

* * * * *

「つ!!」

「どうかした、比企谷君?」

「大丈夫、比企谷君?」

「私達がメインのシナリオまだ? 比企谷君?」

「あ、ああ、問題ない。てか、最後の質問意味わからん」

今、何か寒気がしたんだが……。

き、きっと寒さのせいだよね! うん!

Your eyes #10

ライブ開始まであと数分。

雪はいつの間にか止んでいて、そのせいか音を立てるのも躊躇うような静寂が観客席に充満していた。

無事にライブができるという安堵もあるが、やはり緊張感のほうが勝ってしまう。すると、照明が落ち、ステージがライトで照らされ、メンバーの姿が見えた。

それだけで、想像以上の歓声が上がり、一気に会場内のボルテージは上昇した。やがて、曲の始まりを悟ったように熱気はそのままに会場内が静まり返つた。

数秒後、まるで雪がちらつくような雰囲気のイントロが鳴り響き、歌が始まる。そこからはまるで夢の中にいるみたいだつた。

切ない歌詞も華やかな演出も、すべてが心に刺さる感触を確かめながら、気がつけば先程の倍はあるかというくらい大きな歓声が沸き上がっていた。

俺も出遅れた分を取り戻すようになるべく大きな拍手を送る。

彼女に聞こえるように。彼女に届くように。すると、彼女がこちらを見た……気がした。

現実的に考えて、俺の拍手の音を聞き分けられるはずもないし、見つけるのも至難の業だが、今ならばそんな奇跡を信じてもいい気がした。

会場を後にし、火照った身体を冷ますように、駅までの道をゆっくり歩いていると、ポケットの中で携帯が震えだす。

一応確認すると、いつもの名前が表示されていた。

「……はい」

「あ、八幡君？ 今どこ？」

「会場出て駅に向かつてることですよ」

「え？！せっかく会おうと思つたのに……」

「いや、さすがに人多すぎて無理かと思つて……てか、他のメンバーと一緒にいなくていいんですか？」

「んー、むしろ皆から行くように言われたんよ。今日のお礼もかねて」

「ああ、まあ、その……たまにはボランティアでもやろうかと」

「へえ、わざわざライブの日に？」

「…………はい」

「穂乃果ちゃん達に抱きつかれたって本当？」

「つ…………いや、あれは不慮の事故で……」

「そつか。じゃあ、上書きしどかなあかんねえ」「は？」

「どくん！」

「つ！」

背後から突然の襲撃、もといハグ。

…………からのワシワシ!!

「~~~~~!!」

凶悪なコンボに思わず変な声を出しながらも、解放されると同時に振り返る。すると、そこにはにつこり笑顔の希さんがいた。

本当にいつもの笑顔で、さつきまでのステージが嘘みたいに思えた。

「やつほー。今日はお疲れさんやつたね」

「いや、そつちのほうが疲れてるでしょ。……あー、ライブ観れて本当によかつたです」

「そつか。八幡君も最近すっかり素直になつたねえ。よしよし」

「昔から素直ですよ。自分には」

「そういうところは相変わらずやねー。よしよし」

「いや、どんなテンションなんですか」

「この解放感に浸つたまま君を可愛がりたい気分やね」

「……打ち上げとか行かなくていいんですか？」

「それは結果発表終わつてからやね」

「そうですか……じゃあ、もしよければ今日は一緒にいませんか？」

「もちろん」

その言葉を合図に、どちらからともなく口づけを交わす。

甘い感触が心を満たしていく。

寒さなんて気にもならなかつた。

そう思つた直後に、手の甲にひんやりした粒が落ちてきた。

「あ、また雪が……」

「さつき雪かきしたばかりなんですが」

「あーあ、このまま積もつて明日の電車止まればいいのに」

「あんたが言うと現実になりそだからやめてくださいね」

とりあえず希さんの家へ向かうことにしてた。

鍵は俺が開けよう。

彼女の前で彼女の部屋の合鍵を使うのは、一体どんな気分だろうか。
弾む会話の片隅で、俺はそんなことを考えていた。

「はい、もしもし」

「……おめでとうございます」

「ありがと。これも八幡君のおかげやね」

「いや、それは大きさでしょ。曲とパフォーマンスが良かつただけですよ。てか、これ言わせようとしてます?」

「バレたかあ。でも、君がいてくれて助かつたって心から思つてるよ。雪かきも頑張つてくれたし、しつかり声援もくれたし、手がかじかんで鍵を取り出せない時も合鍵を使つてさつと開けてくれたし、一晩中抱きしめてくれたし……」

「最後に嘘を混ぜてきましたね」

「あらら、ウチは別にいつでもいいのに」

「つ……い、いや、まだ、その……付き合い始めたばかりでそういうことをやるというのは……何と言いますか……」

「ん? ウチはただ抱きしめてくれるだけでええんやけどな。八幡君はまだ先のことがしたかつたん?」

「…………」

「八幡君のエツチ♪」

「…………したいです」

「え？」

「本音を言えば、その…………めちゃくちゃしたいです」

「…………ええつ!?」

「次のデートの後、いいですか？」

「え？ いや、ちょっと……」

「…………何て言い出したらどうしますか？」

「…………あくく!! 八幡君、ひどい！ ウチをからかうなんてひどい！」

「何すか、その特大ブーメラン。そういうや、年末大丈夫そうですか？」

「うん。八幡君がキリキリ働く準備はちゃんとできてるよ。何なら巫女服も着る？」

「いや、それ誰得なんですか。参拝客ドン引きでしょ」

「そつかあ。じやあこのプランは次の機会に……」

「その機会は永遠に来ないと思いますが……」

「ふふふ、じやあ明日は楽しみにしどくね」

「ええ。それじゃあ」

* * * * *

通話を終えると、急に部屋が静かになつた気がした。まあ、当たり前なんやけどね。
……はやく会いたいなあ。

あれ、どうしたんやろ。前まではこんな事なかつたのに……。
ああ、ちょっとだけ脆くなつたんかな。

「……八幡君、はやく会いたいなあ」

さつきと同じ咳きを今度は口にしてみると、より一層部屋の静けさが増した気がする。

「あらあら、もしかして彼氏と電話？」

「うん」

「へえ、希にもようやく恋人ができたのね。嬉しいわ」

「…………えつ？えくくくくくく！お母さん！」

「そうよ。あなたのお母さん。びっくりした？びっくりした？」

「あ、当たり前やろ！いつからそこにおつたん！」

『はい、もしもし』の辺りから

「最初からやん!?」

この母親、相変わらず神出鬼没すぎる。スピリチュアルとかそういうのを通り越し

て、ただただおつかない。

お母さんは長い髪をかき分けながら、楽しそうにこちらを見ている。

「そつかあ、希もそういうお年頃かあ。よきかなよきかな」

「も、もうええやろ？それより何の用なん？」

「親が子供に会うのに理由がいるかしら？年末だから仕事の合間に縫つて会いに来ただけよ。そしたら、まさかのビッグニュース。私つたら運がいい。スピリチュアルね。ちなみに明日は何時から来るの？」

「えつ？まさか、会う気なん？」

「まあまあ、悪いようにはしないから。ね？」

* * * * *

普段なら年の暮れは、大掃除も程々にこたつでダラダラしているのだが、まさか秋葉原まで来る日が来ようとは……。

そして、最近彼女の住むマンションまでの道を歩いていると、自宅に帰る時のような安心感がするようになつていて。

マンションに到着してから、彼女の部屋の前に行くまで、何度もポケットの中の合鍵を感触を確認した。

……いや、これはさすがに浮かれすぎだな。今日は呼び鈴を押すだけにしつくか。

そう決めて、ゆっくり呼び鈴を押すと、すぐにドアが開いた。

「いらっしゃい、八幡君。待つてたよ♪」

「ど、どうも……」

何故かさつそく違和感。

……何だ？ 何かおかしい気がする？

確かに同年代の中じや飛び抜けて色っぽい人だが、ここまで色っぽかつたつけ？ 顔は
変わつてないみたいだけど……。

他におかしいところは…………あれ？ 胸でかくなつてね？

FUTARI #2

「……えーと」

「どうかしたん?」

「いや、その……なんか雰囲気変わりました?」

「そう?成長期やからやない?」

そう言いながら、希さん(?)は自分の胸をわしわしした。

……べ、別につい目が吸い寄せられてなんかない。ていうか、今そうなつたらやばいと本能が告げている。

「なんやなんや、これくらいで照れちゃつてもう♪八幡君は可愛いなあ」

「うふつ!」

いきなり顔面を胸に押しつけられ、その柔らかさのせいか呼吸困難になる。

やばいよやばいよやばいよ!普段なら心中でガツツポーズくらいするのだが、これはやばい気がする。何がやばいって、よく理由もわからないのにやばいとハッキリ思える部分がやばい!

しかも、気のせいだろうか……どこからか殺氣じみたものを感じてしまう。スピリ

チュアルやね。もう何が何だかわからん。

「んく、そのリアクション……本当に可愛いなあ」

「え？ え？」

希さん（？）が至近距離で、こちらの顔を覗き込んでくる。
あれ？いや、間違いない！この人は……！

「ストップ！」

すると、希さん（？）がハリセンで誰かに頭を叩かれる。

「いつたあくい！ちょっと何すんのよ、希く！」

「うるつさい！私の恋人に何しようとしてんの、お母さん!?」

「……やつぱりか」

「え？ 気づいてたの？」

「まあ、その……途中から雰囲氣似てるけど、別人かなと……」

本当はお姉さんだと思つていたのだが、今言うと面倒そうなのでやめておこう。

希さんのお母さんは、ハリセンの痛みから立ち直つたのか、再度俺の顔を覗き込んできた。ふわりと漂う大人の香りに、何ともいえない気分になつていると、希さんがジト一つとこちらを見ていた。そりやもう効果音がしそうなくらいに。

「ふむふむ、ふむふむ。しかし意外ね。まさか年下と付き合い始めるなんて……ほら、あ

の子つてああ見えて寂しがりで甘えんぼじやない？」

「もうつ、余計なこと言わないの！」

再びハリセンでツッコミを入れようとする希さん。

しかし、その一撃は不敵な笑みと共に、あつさり受け止められた。

「甘い。その攻撃はもう見きつたわ」

「くつ……！」

「…………」

おーい。もしもーし。来客が置いてきぼりになつてるよー。

とはいえ、このままでは陽が暮れそうな気がしたので、俺は二人の間に割つてはいつた。

「希さん、今日はバイトもあるので……」

「あ、そうやつたね。ていうかごめん。玄関で……じやあお母さん、続きは後で」

「しようがないわね。じゃあ、今から用意して出かけるわよ」

「え？」

「神社のバイトは夜からでしょ。それまで積もる話でもするわよ」

「もう、強引なんやから。八幡君、大丈夫？」

「俺は大丈夫ですけど、いいんですか？親子水入らずの時間を……」

「もちろん♪君にはたっぷり話を聞かせてもらわなきやだからね。あ、私の名前は東條いのり。いのりって呼んでもいいわよ」

そう言つて、希さんのお母さんはがつしりと腕を組んできた。

すると、ぎつしりと柔らかな何かが詰まつたような感触のものが、肘の辺りに押しつけられる。こ、こういう時は念佛を……宇宙天地與我力量降伏群馬迎來曙光……

「あーもうっ！そこはウチのポジション！」

「じゃあ逆で……」

「そつちもダメ！」

「…………」

左右からもう色々とやばい。やばすぎてやばい。

もう年の暮れだというのに、さらに騒がしくなるとは……。

どうやら今年は最後まで楽しすぎる一年になるらしい。

既に確定していた。

FUTARI #3

「いやー、久々の東京は相変わらず混んでるわね～」

「いつぶりやつけ？」

「あ～……一年以上は経ってるんじやない？」

「…………」

「どしたん、八幡君？」

「……いや、動きづらいのでそろそろ離れて歩いてもらえないかと」

俺は未だに左右からガツシリ腕をロツクされていた。暴力的な柔らかさに頭がくらくらするのもあるが、今度は周りからの殺意のこもった視線に、背筋が凍る思いもしていた。

「うら、やま、し、い……」

「ガツデム」

「美女に囮まれてんじやねえよ。ボツチのくせによ」

「ほら、やっぱり聞こえてきた。ていうか、お前は一体誰なんだ。何故俺がボツチなのを知っている？」

さつと目を向けたが、そこにはそれらしき人物はいなかつた。

……いずれ決着をつけてやろうじやないか。明日には忘れてるだろうけど。

「どうしたん、八幡君？柄にもなく戦う男の顔をして……」

「いえ、何でもないのでお気になさらず」

「そうよ。男は外に出れば七人の敵がいるんだから、そつとしておいてあげなさい」「とりあえずお母さんはそろそろ八幡君から離れよっか」

「しようがないわねえ」

いのりさんが離れ、ようやく右腕に自由が戻った。だが、ほんの少しだけ名残惜しさを感じたのは何故だろう。冬だからか。

すると、希さんがさらに強く左腕にしがみついてきた。

さすがに力が強すぎませんかねと思い、左側に視線を向けると、彼女は俯いたまま口を開いた。

「……ウチ以外見んといて」

「はい」

可愛い。

いや、マジで。

え？てか、さつきの可愛さ何？やばい。思わず「はい」とか即答しちゃつたんだけど。

いや、他の人見るつもりなんてないからね。つーか、ほんと可愛い。できればもつかい
やつてほしいくらい可愛い。

「あらあら。我が娘つたら、そんな表情まで身に付けちゃって……とりあえず仲睦まじ
い」「人をパシャリ！」

「ちょつ、い、いきなり何なん？」

「娘の成長の記録を残しただけよ。後でお父さんにも見せてあげなくちゃ」

「やめて」

「孫の顔見るのが楽しみだわ。この二人からなら絶対可憐なチルドレンできそそうだし」

「いや、気が早いにも程があるやろ。まだ付き合つて1ヶ月くらいやし……」

「あ、着いたわよ」

「聞いてない……いいや、これは人の話を聞く気がないやつやね」

「……似てますね」

「えっ!?ほ、ほんとに?!複雑なんやけど」

「いや、まあ、はい。いい意味で……」

しかし、希さんがこんなテンションになるとは……さすが実の家族。いいぞ、もつと
やれ。

二人のやりとりを見ていると、自然とにやけてしまいそうになり、食事中もそれを誤

魔化すのに苦労した。

* * * * *

店を出て、心地よい満腹感に浸つていると、思いきり伸びをしたいのりさんが、こちらを振り向き、満足そうな表情で口を開いた。

「よし。腹も膨れたことだし、そろそろ行くかね」

「え、もう？」

「まだ仕事の合間だからね。でも、安心していい。来年の中頃には二人で戻るから。だから、年末年始は一人きりを堪能しなさい」

「……そつか。最後のは余計やけど。お父さんによろしく言つといて」

「はいよ。じゃあ、八幡君。この子の事頼むわね。まだ今年は半日くらい残つてるから、しつかり楽しみなさい」

「……はい。あ、ご馳走さまでした」

「お母さん、またね」

「うん。それじゃ、二人とも、よいお年を」

いのりさんは軽く手を挙げ、駅までの道を颯爽と歩いていった。

悪ふざけの多い人ではあるが、その背中は大人のそれだつた。
「なんつーか……嵐みたいな人ですね」

「ほんとに……ふふつ、だから退屈しないんやけどね。」

そう言って微笑む彼女の横顔は、さつきのいのりさんみたいに写真におさめたくなるくらい魅力的だつた。

FUTARI #4

それから俺と希さんは神社のアルバイトへ向かつた。

まだ夕方なので人通りもまばらだが、夜になれば凄まじい混み具合を見せると聞き、少しだけ怯んだが、彼女の楽しそうな横顔を見て、何とか思い止まつた。ふう、一人なら既にバツクレてたところだつたぜ……。

互いに着替えを済ませ、外に出ると、見知った顔が近づいてきた。

「あら、来たわね。お二人さん」

「まつたく……年末になつても見せつけてくれるわね」

「もう、照れるやろ？」

「……どうも」

全然照れた素振りも見せずに笑う希さんに続き、会釀すると、μ-sの三年生メンバー、絢瀬絵里さんと矢澤にこさんは巫女服を見せびらかすように立つていた。

「わあ、やっぱり二人共似合つとるやん。ねえ、八幡君」

「……そうつすね」

ぶつちやけ蟲負目なしに見ても、この三人だけでそれなりに客を呼べると思う。眼福

という言葉をはつきり表していると思う。

「比企谷君、そんな…………はつ、だ、駄目！あなたには希がいるじゃない！で、でも、愛人とかなら、まつたく考えなくもないというか……」

「エ・リ・チ？」

「はい」

「もう、いつまで失恋を引きずってんのよ。年末なんだから、しつかりしなさいよ」

「にこはまだお子様だからわからないのよ。この胸が張り裂けるような痛みが」

「誰がお子様よ！」

「じゃあ、そろそろ仕事始めよっか。八幡君」

「ですね」

「放置してんじゃないわよ！」

* * * * *

仕事に入つてからは、その作業量に忙殺され、あつという間に時間が過ぎた。

物を運び、あつちに行つたり、こつちに行つたりを繰り返ししていると、もう休憩時間になつていたのか、希さんがこちらにとてとてと歩いてきた。手にはマツ缶が握られている。

「はい、お疲れ」

「……どうも。まだ余裕ありそうですね」

「まあ、3回目やからね。もう体が覚えとるんよ。どう? 騒がしい大晦日は」「まあ、悪くないっすね……仕事がなければさらについい」

「あははつ、まあその方が君らしいもんね。うんうん」

「何故頭を撫でてくるのかわからないんですが……」

「嬉しいくせに♪♪」

実際疲れが吹き飛ぶ感覚がするから不思議だ。これもスピリチュアルだろうか。す

げえな、俺の彼女。ヒーリングつとな力でも持つてるんだろうか。

「さつきむ、Sの皆も来たよ。A—RISEの三人も来てたみたい」

「あ、そうなんですね。てか、もう年越してたんですか」

「うん。明けましておめでとう。今年もよろしくね」

「……」ちらこそ、よろしくお願ひします

「……」

希さんは、そつと近寄ってきて、こちらを上目遣いで見つめてきた。

「ど、どうかしたんですか?」

「……ほんとにわからない?」

「……」

さすがにそこまで鈍感ではないので、彼女を優しく抱き寄せてから、そのまま口づけを交わす。

これまでで一番長かったかもしれない。

彼女の温もりが体に流れ込んでくる気がした。
唇を離すと、彼女は笑みを見せた。

「今年初のキスやね」

「……そつすね。あの……一回目もいつときますか」

「ん……」

人のざわめきが遠ざかり、夜風がふわりと通りすぎていく。

冬の寒さはあまり気にならなかつた。温もりがそれだけ包み込んでくれていたから。
今年もこの人と一緒にいれますように……それだけをしつかり祈つた。

* * * * *

「あわわ……キ、キス……本当にする人いるんだ……きゅう」

「ツバサ！しつかりしろ！」

「まさか、偶然こんな場所に出くわすなんて……ツバサ、ドンマイ」

FUTARI #5

正月が過ぎて、冬休みもそろそろ終わるかという頃、早朝のジョギングから戻ると、まさかの来客がいた。

「やつほ〜♪」

「……え？」

希さんが我が家の前でひらひらと手を振っている。

あれ、おかしいな？あと5キロくらいなら余裕で走れそうなんだが……。
少し速度を上げて駆け寄ると、彼女はタオルを手渡してくれた。

「ど、どうも……」

「来ちゃった」

「いや、マジでびっくりしました……」

「ふふふ、君の家族にも新年の挨拶しときたいからね」

「そつすか。じゃあ、その……上がつてください」

「うん、お邪魔します」

* * * * *

「あら、希ちゃん。いらっしゃい」

「希さん、明けましておめでとうございまーす！」

「…………」

希さんが入ると、まだ休日の朝だというのに、母ちゃん達は賑やかに希さんを迎えた。

「明けましておめでとうございます。こんな朝早くにすいません」

「いいのよ。希ちゃんはもう家族も同然だから」

「そうですよ～」

二人が歓迎している姿は、息子の彼女と仲が良い素敵な家族感が出ているが、半分くらいは『こいつはここを逃したら今後彼女ができることがない』みたいな気持ちが籠つてしまふ。いや、さすがに疑いすぎか。

小町は希さんに抱きつき、その豊満な胸元に顔を埋めていた。おい、うらやましいからやめろ。俺だってまだやつてもらつたことねえんだよ。

「よしよし、相変わらず小町ちゃんは可愛いね」

「もう……この感触を脳裏に焼き付け、是非トレースせねば」

「ちょ、次、私にやらせて」

母ちゃん、何やつてんだよ。そんな目をキラキラさせてんの初めて見たんだけど

……。

ちなみに親父は、気まづくなつたのかリビングのソファードで寝転がり、もう一眠りしようとしていた。まあ、親父が小町達と同じノリになつたら、スピリチュアルな力で消失去るけどね！まあ、そんな心配はないだろうけど。とにかく親父はそこで寝て日頃の疲れでも癒してろよ。

「とりあえず、俺はシャワー浴びてくるわ」

* * * * *

身支度を整え、自分の部屋まで行くと、希さんは俺のベッドで眠つていた。

「すう……」

「…………」

マジか。いや、別にいいんだけど。可愛いし。あと可愛い。

静かな部屋には、彼女の寝息だけ響いている。

「すう……」

「…………」

する必要はないのだが、一応周りに人がいないかを確認してから、至近距離で寝顔を覗き込む。

……あ、やっぱ。可愛い。語彙力崩壊するくらいに。

この時俺は何を考えていたのだろうか。

自然と手が動き、指で彼女の唇を撫でていた。

やわらかな感触が指に吸いつき、いつまでもこうしていたくなる。

止め時がわからなくなり、もうこのまましばらくこうしてようかと思つた瞬間、はむつと指をくわえられた。

いつ目を覚ましたのか、最初から寝たふりだつたのかはわからないが、得意氣な笑みを見せていた。

一体自分の指はどうなつてしまふのかと成り行きを見守つていると、指先をチロリと舐められただけで、すぐに解放された。

「眠つている女の子にイタズラしようとするなんて、さすが八幡君やね」
「いや、さすがつて……寝たふりしてたんですか？」

「ううん。寝てたよ。でも、唇にいやらしい気配を感じたんよ」
「…………すいません」

「ええよ。君ならいくらでも。でも……指だけなん?」

「……いや、無理っすね」

寝転がつたままの彼女の唇に、強引に自分のを押しつける。
小町のノックで中断されるまで、それは続いた。

FUTARI #6

昼過ぎまでだらだらと過ごしてから外出すると、陽射しがやけに眩しく感じられた。

「今日もいい天気やねえ。八幡君の目つきも……ああ、うん。ごめんね」

「いや、今さら何の確認してんですか。わかりきったことでしょうに」

「あははつ、でもこの目つきがええんやけどね。あと八幡君、お父さんと日つきそつくりやね」

「うわ、すげえやだんですけど……そういうや、希さんは母親似でしたね」

「まあ、そうやね。あ、胸はまだあつちのほうが大きいよ」

「どうしたんすか、急に。何すかその情報……」

とりあえず記憶の片隅くらいには留めておこう。別に変な意味などない。多分。うん、多分。

「そういえば八幡君。彼女にして欲しいコスプレとかある？」

「唐突ですね。どうしたんですか？」

「いや、これからからかいのバリエーションを増やしていくないと飽きられるかもしけんからね」

「飽きませんよ。てか、からかいのバリエーションって何ですか。それがコスプレとどう繋がるんですか」

「ほら、例えばチアガールが応援してる風にからかうとか」

「いや、そんなの……悪くないですね。むしろいいと思います」

「うん。たまに必要以上に素直になるところ、ええと思うよ」

「……とりあえず、総武高校の制服を……」

「おっと、これは予想以上にドス黒い要求がありそうやね」

「たまにはそのぐらいあつたほうが健全ですよ」

「そう、やね……うん？ そうなんやろうか？」

特に意味のない楽しい会話は、冬の乾いた空気の中でどんどん弾み、いつまでも続けられそうだった。

だが俺はある事実に気づき、立ち止まつた。

「そういや、俺達は今どこに向かつてるんですかね？」

「ん？ あ、てつきり八幡君がどこか決めてるかと……」

「……とりあえずバスでも乗りますか」

とりあえず……夢中になりすぎるのは注意したほうがいい。

* * * * *

千葉駅まで行き、目についた喫茶店に入ると、店内はそれほど混んでおらず、ちょうどいい雰囲気だった。

ゆつたりメロディーをなぞるような穏やかなジャズを聞き流し、希さんの表情が少し真面目になつたのを見て、俺は話を聞く態勢を整えた。

希さんも俺のその様子に気づき、頷いてから口を開く。

「ウチ、大学も東京のに行くことになつたよ。本当はちよつと前に決まつてたんやけどね。ドタバタしてて落ち着いて言うタイミングがなくて……」

「ああ、確かに……おめでとうございます」

「ありがと。まあこれからも巫女のバイトは続けるから、巫女服のウチは見れるよ」

「そりやあラッキーですね。そういう、μ, sはどうするんですか？」

「ううん、そつちはまだ色々と話し合いしてたんやけど」

「そうですか」

「八幡君も何か言いたいことがあるんやないの？」

さすがに読まれていたようだ。最早スピリチュアルとかではなく、表情で悟られたのだろう。

俺は気を取り直すように、運ばれてきたアイスコーヒーに口をつけ、気持ちを落ち着け、口を開いた。

「……俺、東京の大学を目指そうと思います」

「……ほんと?……」

「まあ、まだ受かるかわからないつすけど。もし受かつたら、その時はよろしくお願ひします」

「うん。もちろん……そつかあ、楽しみやねえ」

希さんはやたらとにこにこして、こちらを見つめてきた。その表情はいつもより幼く見え、こちらもつい頬が緩んでしまう。

「あと一年くらいでいつも一緒にいられるんやねえ」

「……受かつてからね。そこ重要だから」

「大丈夫。ウチが春頃からみつちり勉強教えてあげるから」

「うわあ……効果ありそうだけど、なんか怖いっすね」

「ふふふ、今夜は寝かさんよ」

「いや、何で今夜なんですか。まあ、やれるだけやりますので、よろしくお願ひします」

「うん。あ、今のもしかしていやらしい意味?」

「ち、違います、勉強ですよ……」

まったくこの人は……テンパリそうになる俺も俺だが。

希さんは、いたずらっぽく目を細め、小さいがよく通る声で囁いた。

「ねえ、八幡君。もうしばらくここで話さん?」
「……いいですね」

再びコーヒーを口にすると、いつもより砂糖が少ないことに気づいた。
……まあ、たまにはいいか。

このコーヒーの味と共に、会話の一つ一つを刻んでおきたくなつた。
こういう日常の先に、さつき話した未来が待つてゐるなら、それはとても素敵なこと
なんだろう。

FUTARI #7

「えつ？ラブライブの決勝の会場が幕張に？」

「うん、そうなんよ」

夜に希さんから突然の報告。

確か幕張には国内でもかなり有名なイベント会場があるはずだが、まさかラブライブの会場として使われることになるとは……。

もしかしたら、sの知名度は俺が思ってるよりはるかに高いのかもしれない。

「まあ、何つーか……かなり観に行きやすくなりましたね」

「そうそう。それともう一つ面白そうな情報があるんやけど」

「？」

「実は……ボランティアを募集する予定らしいんよ」

「……ほう。社畜の練習ですか。ステージで夢を見せてる裏で社会の現実を教えるとか、かなり充実したイベントになりそうですね」

「うんうん。その感じいいよ。八幡君してる」

「八幡君してるって……いや、言いたいことはわかるんですけどね」

「まあ、君の都合さえよければ考えてみてよ」

「了解しました。前向きに検討しちゃります」

「おお、本当は即答したいけど、あえて返事を遅らせるという八幡君らしい捻デレやね」
「…………」

恥ずかしいから、思つてもそういうことは言わないでね……。

「と、とりあえず……本番楽しみにしてますので」

「うん。それじゃあ、またね」

「はい。それじゃあ」

* * * * *

「せんぱあくい、幕張でボランティアってどういうことですか？」

「…………社畜の練習だよ」

「は？ どういう意味ですか？」

「そのまんまの意味だよ」

「はあ……って、そういう意味じやなくて！ どうしてあの先輩が自分から幕張のイベン
トのボランティアをするつて言い出したんですか？ しかも生徒会まで巻き込んで」
「…………」

「あ、黙った。って、何寝たふりしてるんですかー？」

「あはは……まあ、でもいいじやん？ イベントって、楽しそうだし」

「それもそうね。この男の私利私欲の為に動くのは少し納得いかないけれど」

「私利私欲？ それどういう意味ですか？」

「深い意味はないわ」

「はあ……まあ、雪ノ下先輩も納得してるならいいですけど」

「ふふつ、ヒツキーがあんなに前向きに行動するなんて滅多にないもんね。私達も背中押さなきや！」

「…………」

なんか照れくさいので、心の中で礼を言うことにした。

……後でマツ缶買つてくるか、4人分。

* * * * *

それから、他に有志のボランティアを募つたり、希さんと毎日連絡を取り合つたり、希望大学を考えたりしているうちに、あつという間に日々は過ぎた。

そして本番二日前……。

「……しかし、見事に見知った顔ばかりだな」

校内でボランティアを募集したところ、テニス部や葉山グループなど、見覚えのある奴らばかりが集まっていた。

「あはは、いいじやん。緊張しなくて」

「そうね。何かと使いやすいわ」

「私、そういう意味で言つてないよ!?」

「わあ、やっぱり可愛い子多いですね～。せんぱあい、どの子がタイプですか？」

「はいはい、会場から追い出されたら困るから黙つてようね」

「八幡、μ、sの人達まだいないみたいだね」

「今控え室にいるみたいだぞ」

「けふこん、けふこん……」

「材木座、無理して喋ろうとしなくていいぞ。てか、よく来てくれたな……」

「は、八幡……べ、別にあんたのためじやないんだからね！」

「……本当に喋るな、お前自身のために」

メダパニでもかけられたかのようなテンションの材木座から距離をとると、誰かが目を丸くしてこちらを見ているのに気づいた。

「あれ、比企谷？」

「…………折本？」

「うつそ、まじで比企谷じやん、総武高校行つたんだ～！」

「あ、ああ、まあな……」

まさかこのタイミングで過去に告白した女子に再会するとは……。
さらに、向こうが俺の事を覚えているとは……。

どうしたものかと思い、首筋に手を当てるど、折本は数秒首を傾げてから、何故か一人で頷いた。

「比企谷、なんか変わったね。ウケる」

「いや、ウケねえから」

「あははっ、じゃあ今日はお互い頑張ろーね！」

「……おう」

変わった、か。

そんな些細な一言に充実感みたいなものを感じてしまうあたり、確かに変わったのだろう。

まあそれでも過去の失恋なんていちいち思い出したくないけどな！絶対に気のせいだろうけど、ほんの少し背筋に悪寒がしたし！

* * * * *

「あら、希どうしたの？なんか怖い笑みを浮かべて……」

「何でもないよ♪」

「あ、はい」

FUTARI #8

それから作業が始まり、ただの空洞のようだつた会場内はそれらしい雰囲気になつていつた。

「ヒツキー、休憩行つてきたら？」

「……ああ、もうそんな時間か」

やはりこの手の単純作業は集中できる。ボッチ経験者なら納得してくれるはずだろう。

それ故に時間が経つのも早く、作業は既に折り返し地点を迎えていた。

確かに休憩に行くにはいいタイミングかもしねない。

「じゃあ比企谷君のグループは休憩に行つてきて。それと比企谷君、ちゃんと10分後には戻つてくるのよ」

「ちよつと? 何で遅刻常習犯みたいな扱いなんですかね」

「正確には、警戒しているのは貴方ではないけれど」

「……お前がそういう冗談言うようになるとはな」

「誰の影響かしらね」

雪ノ下の言葉に苦笑しながら、俺は戸塚達と一緒に休憩に入つた。

* * * * *

「やつほ〜」

「……あ、どうも」

一人になつたところで、まさかの普通に遭遇。

いや、もつとこう……サプライズみたいなね？ 別にいいけどさ、嬉しいし。だがそれがあまり伝わっていないのか、希さんは不満げな表情だ。

「あ、どうも。なんて、他人行儀な挨拶やねえ。やり直しを要求する〜」

「いや、ほら。ここイベント会場だからね……誰かに見られたらアレと言いますか……」

「ほう、八幡君は人に見られたらあかんことをしたいんやね」

「いや、そういう話じやなくて……」

「ちなみに、さつきの女の子は初恋の相手かどうかを聞くのは後にするから心配せんでええよ」

「……は？ どこから見てたんですか？」

「君達がいたところからは正反対の入り口」

「どんだけ目と鼻利くんですか」

「スピリチュアルやね」

「万能すぎやしませんかね、その台詞」

「まあ、見えた聞こえたは嘘やけどね。ただの女の勘」
「それはそれで……いと思想いますが……」

それこそスピリチュアルというやつではなかろうか。

すると、彼女は急に言いづらそうに口をもぐもぐさせた。

「それで……ああ、これ言うてええんかなあ」

「せつかくだから言つたらどうですか？」

続きを促すと、彼女は髪の毛を弄りながら数秒俯き、そして何かを誤魔化すような笑みを見せた。

「うん。嫉妬やねえ。こんなんウチらしくもないけど

「……言うまでもなく付き合つてたとかじやないですよ」

「わかつてもつい出ちゃうんよ。ほら、恋は盲目つて言うやん？」

「…………」

そして希さんはこちらに距離を詰め、つむじを見せてきた。

「だから……色々終わるまで我慢する分、心を込めてよしよしして欲しいなあ

「……それぐらいなら」

一応周りを確認してから、その頭に手を触れ、優しくいたわる。

猫のように目を閉じた彼女を見て、そろそろかと思い、そつと手を離すと、彼女は満足そうに笑つた。

「ん……充電完了。リハーサルもいけそうやね」

「……リハーサルで燃え尽きないでくださいよ」

「その時はまた充電してもらうもん」

「そりや、何度でも構いませんけど」

「ふふつ、じやあお礼に……」

今度はこつちの頭を撫でられる。

だいぶ慣れたが相変わらず破壊力は抜群である。

いつもより短めの時間だが、それでも身体が癒された気分がした。

「よし、じやあこの後も頑張らんといかんね」

「……ええ」

そう言つて、手をひらひら振る彼女の笑顔は、スクールアイドルの顔だつた。

FUTARI #9

本番当日。

俺達はボランティア参加者に用意された席で、ステージを見つめていた。

そんな中、右隣にいる由比ヶ浜はやたらそわそわしている。

「わあ、なんかこつちが緊張しちゃうなあ」

「……まあ気持ちはわからんでもない」

さすがに全国大会決勝ともなると、雰囲気が別物である。いや、何で俺が緊張してんだよと思いつながらも、これはどうしようもない。開演してくれたらこれも紛れるかもしがれんが。

すると、何度かライブで見かけたことのある眼鏡をかけた賑やかなお姉さんが出てきた。

「さあ、会場にお集まり皆さん、盛り上がる準備はできていますかー!?」

その言葉と突き上げた拳に、一気に会場内の空気がヒートアップしていく。

さつきまでの緊張感はどこへやら、由比ヶ浜も盛り上がっていた。さすがリア充。左隣にいる戸塚もぱちぱちと拍手している。可愛い。

そこからはまるでスイッチが入ったかのように物事が進んでいった。

一組目のグループから会場は派手な盛り上がりを見せ、歌声や声援や演出が混ざりあって、夢の世界にいるような気分になつた。

しばらく見届けていると、パフォーマンスの合間に戸塚が肩をつづいてきた。

「八幡、μ、sは何番目だつけ？」

「あー……次の次だ」

プログラムを確認しながら、ちょっと驚いてしまう。もうここまで来たのか。
その事に気づくと身体がうずうずしてきた。

「うわあ……あつという間だ」

「そうね。意外と魅入ってしまうものね」

「八幡、いよいよだよ」

「……あ、ああ」

「は、八幡よ……こういう雰囲気、私は苦手なのだが」

「…………おお、珍しく気が合うな」

「……」

そして、また一組パフォーマンスを終え、会場内が拍手の音で満たされる。

いよいよだ。

司会が待ちわびたその名前を呼んだ。

「さあ、続いては音ノ木坂学院から、Sでーす!!!」

名前が呼ばれるとスポットライトがステージにいる彼女達を照らし出した。すぐに希さんがどこにいるかはわかつた。

その姿に胸が高鳴り、さつきまでの不安みたいなものが吹き飛ぶ。

そして高坂さんが「よろしくお願ひします」と言い、全員が頭を下げる。束の間の静寂が訪れた。

数秒してから穏やかなイントロが始まり、色んな音が重なつてから、壮大なものに変化していく。

熱い歌声が、熱のこもつたダンスが、会場内を包み込んでいくのがわかつた。

* * * * *

奇跡のような時間が終わつた後、スクリーンに映し出された彼女達はやりきつた笑顔を見せていた。

「」「」「」「」「ありがとうございました!!」「」「」「」

次の瞬間、割れんばかりの歓声があがる。

周りが、ファンだからかもしれないが、これまでで一番大きく聞こえた。

俺は豆粒程度の希さんに視線を集中させた。

すると、それは多分ただの偶然だろうが、彼女がはつきりとこちらを見た気がした。星空の中のようなきらびやかな空間で、一瞬だけ二人きりになつた気がした。一つだけ確かなこと。

この光景を一生忘れない。

それだけを自分の中に誓い、俺は彼女達を讃えた。

FUTARI #10

あの熱狂から少し時間が経ち、今日はバレンタインデー。

街が色めき立ち、冬の寒さも忘れるくらいに盛り上がる一日。
もちろん自分には関係ないと思つていた。

だが今年は……

「あ、八幡君お待たせ！」

「……いえ、今来たところなんで……」

「おお、その台詞が出るとは……八幡君ノリノリやねえ」

「ええ、まあ。一回言つてみたかつたんで……」

「そういうのあるよね、わかるわかる」

「わかるんですか。ちなみに、どんな台詞ですか？」

「ヒ・ミ・ツ♪」

そう。今年は一緒にいる相手がいる。

俺と希さんは現在千葉にある某遊園地の前にいる。

今思えば、付き合い始めてからこういう場所に来たのは初めてだ。

まあ、これまでお互に忙しかったのもあるが……。
すると、希さんが流れるような動きで腕を絡めてきた。

「じゃ、行こつか」

「は、はい……」

うわ、何この人。いきなり普通のカップルみたいなことしてきたんですけど。可愛い
すぎて涙出そう。

「ふふつ、今日はしつかりエスコートお願いするからね」

「いや、俺は三歩後ろを黙つてついていく大和撫子タイプなんんですけど」

「あははっ、確かにそうかもしけんね。じゃあ、今日はウチがエスコートしてあげよう」「よろしくお願ひします」

「八幡君は初めての遊園地やからね。お姉さんから離れないように注意しとかなあかん
よ」

「いや、さすがにそこまでしなくてもいいんで。てか、初めてじゃないので。久々すぎる
だけなので」

「そう? その割には珍しそうにキヨロキヨロしてるけど」

「……前に来た時と比べると、だいぶ変わつてたんで……」

「う、うん。細かくは聞かないでおこうかな」

なんか少し引かれた気がするが、まあいい。テンションが高い今は細かいことなど気にならない。

ていうか、さつきから肘に柔らかいものが押しつけられてて、そつちの方が気になつて仕方ないんですけど！

* * * * *

「そういや、ラブライブ優勝のインタビューはもう落ち着いたんですか？」

「うん。ようやく、やね」

先日のラブライブ全国大会で、Sは見事に優勝を果たした。

ぶつちやけ感動しすぎて涙で顔がぐしゃぐしゃになり、由比ヶ浜と戸塚の表情がやや引き気味だつたぐらいだ。

テレビにも取り上げられ、学校前にファンが来たりしているらしい。

「あれからドタバタしどつて落ち着かんかったからね。落ち着いてからやつと優勝した実感も沸いてきたというか……」

「まあ、あの後会う暇もなかつたですし……」

「そう。だから寂しかつた分を埋めんといかんからね。よし、じやあさつそくあのジエットコースター行くよ！」

「……いきなりですか。いや、別にいいんですけどね」

「ふつふつふ。今日はとことん付き合つてもらうよ。そのためにはさりげなくサービスしてんやからね」

「あ、そういうことだつたんですね……ちょっと……いや、かなりずるくないですかねえ」

「そんなん今さらやん?」

見ました?この人の開き直り方ハンパないですよね……。

そうこうしているうちに、俺達はアトラクションの前まで来ていた。

* * * * *

「はあ……はあ……」

「いやあ、いきなりこれはなかなかハードやつたね」

「……ええ。ていうか、何すか世界最長つて……」

「世界で一番長いって意味やね」

「いや、そういうことではなく……」

「大丈夫。ほら、そこベンチあるよ」

希さんと近くにあつたベンチに並んで座ると、何だかさつきまでの急転直下が夢の中での出来事みたいに思えた。

目の前を通過していく家族連れが何だか微笑ましい。

「ちち、はは、アーニャあれのりたい」

「あれはお前の身長じゃダメだ」

「あら、残念ですねえ」

……仮に乗れたとしても子供にあれはきついだろう。

行き交う人の流れをぼんやり眺めているうちに、体力が回復したので、俺は柄にもなく気合いを入れて立ち上がった。

そして、彼女にそつと手を差し出した。

「……そろそろ行きますか」

「そうやね。ふふつ」

小さな手の感触は柔らかく、ほんのり温かかった。

Love can go the distance

昼時になり、俺と希さんは目についたレストランに入った。

控えめなBGMのかかった店内はカップルや家族連れでそこそこ混んでいて、それぞれ会話や食事に夢中になつてゐる。

「よし、何とか半分くらいは乗れたかな」

「そうつすね。運良くそんな並んでないタイミングで行けたんで」

「そうやね。これも……」

「スピリチュアルな力、ですかね」

「むむつ、ウチの名フレーズが八幡君に奪われそうな予感……これはまた新しいのを考えんといかんね」

「いや、奪うつもりなんてこれっぽっちもないの……」

「えく、なんかウチのセンスが否定された気分やね。じゃあ、八幡君の決め台詞考える？」

「それこそいらんでしょう。どこで使うんですか？」

「電話の時とか？」

そんなやりとりをしているうちに、テーブルに料理が運ばれてきた。すると、希さんが小悪魔めいた笑みを浮かべ、フォークに突き刺したハンバーグをこちらに差し出してきた。

「はい、八幡君。あくん♪」

「……いや、さすがにそれは恥ずかしいと言いますか……」

「大丈夫、誰も見とらんよ♪」

念のため周囲を確認すると、確かに皆目の前の相手や料理に集中しているように見える。まあ、ここテーマパークだし、そんなもんか。

「そ、それじゃあ……」

ぶつちやけかなり恥ずかしかつたが、同時に何とも言えない幸福感が沸いてくる。あ、やばい。これダメになりそうなやつだ。

「あ、あ、あなた達……」

「え？」

明らかにこちらに向けられたっぽい声が隣からしたので、目を向けると、なんとびっくり。A—R—I—S—Eの三人がそこにいた。

綺羅ツバサさんは何か信じられないものを見る目で、他の二人はそんな彼女を気遣う目をしている。

「……」

「…………」

さすがにこのエンカウントは予想外だったのか、少し照れ気味に希さんは挨拶し、俺は黙つて会釈した。

状況が状況だけに、一体何を言われるだろうと緊張していたら、綺羅さんはにつこり笑顔を浮かべ……

「ね、ねえ、英玲奈。はい、あくん」

「……あくん」

「はい、あんじゅもあくん」

「あ、あくん」

「じゃあ、今度は二人が私に……」

「やめろ、ツバサ！傷口に塩を塗るだけだぞ！」

「そうよ！この勢いで新曲を書けばいいじゃない！」

「…………」

ほんの一瞬だけ綺羅さんとある先生が重なったような……まあ、賑やかな時間を過ぎてよかつたです。はい。

* * * * *

少し陽が傾いてきた頃、俺と希さんは赤く照らされた街を見下ろしていた。

「やつぱり最後は観覧車やねえ」

「そうですね。なんかこう……あつという間でしたね」

「そうやねえ。あ、次は水族館とかどう?」

「……いいですね。てか、水族館もしばらく行つてないんですけど」

「またお姉さんがエスコートするから安心してええよ」

「そりやあ安心ですね」

「あ、そろそろ頂上やね。八幡君、チャンスがきたよ」

「いや、それいちいち言いますか。てか、ベタすぎじやないですかね」

「だからええんよ。こういうのやつてみたいやん?」

希さんは目を閉じ、待ちの姿勢になつた。

長い睫毛も厚みのある唇もやけに艶かしく、胸の中を乱暴にかき乱していく。

これは一種の暴力みたいだと思えてきた。

だが、そんな下心を悟られぬよう、なるべく優しく彼女頭に手を添え、口づけを交わ

す。

いつもより少し長い口づけに頭がぼうとした頃、つうつと糸を引き、唇が離れて
いった。

希さんはとろけたような表情のまま、ポケットから小さな包みを取り出し、俺の手に置いた。

見たところバレンタインのチョコレートのようだ。

「こういうの作るの初めてなんやけど、割と自信作」

「……ありがとうございます」

希さんは、まだ夢見心地の瞳のまま今度は耳元に顔を近づけてきた。

「もうちょっと大人になつたら、まだ甘いの味わわせてあげる」

「……っ！」

甘い囁きに言葉を失つていると、観覧車はもう一週を終えようとしていた。

「八幡君、これから色んなどこ一緒に行こうね」

「……はい」

ドアが開き、また冬の寒さに包まれたが、それも気にならなくなるくらいに彼女の笑顔と手は温かかつた。

Love can go the distance
#2

3月に入り、学校の行事も卒業式を残すだけになつた。

そんな目を覚ましたばかりの春の夜に、窓の外に浮かぶ半分の月を眺めながら、俺は珍しく自分から電話をかけていた。

「はい、もしもし」

「……こんばんは」

「どしたん? 八幡君からなんて珍しいね」

「えつと……明日はそつちが忙しいと思うんで、今日言つとこうかと思つて……」

「あー、明日卒業式やもんね」

「ええ。その……卒業おめでとうございます」

「うん、ありがと。ふふ」

「?」

「なんか卒業式前夜に言われるのって変な感じやね」

「一番に言いたかつたもんで……」

「最近は本当に素直やね。お姉さんは嬉しいな～」

「そ、そういうや、両親には会いに行くんですか？」

「うん。卒業式終わつたら次の日には行こうかなつて思つてるよ。なになに？もしかして、ウチの両親に……」

「いえ、家族水入らずを邪魔するわけにはいかんので……」

「え～、八幡君と九州行きたいと思つとつたのに～」

「いやほら、まだ心の準備が……」

「あははっ、冗談やから気にせんでええよ。それより次の週はこつちに来るんやろ？」

「ええ。バイトもありますし」

「でもよかつたねえ、八幡君」

「何がですか？」

「まだしばらくはウチの巫女姿見れるよ。JDの巫女」

「そりやあ素晴らしい幸運ですね。しつかり目に焼き付けときます」

「そうそう。そういう心がけは大事にせんとね」

「あー、肝に銘じておきます。そういう大學に入つてから、Sのほうはどうするんですか？」

「ううん、それは今度直接会つた時に言おうかな。あ、それと気になることがあるんよ」

[?]

「カードによると明日ものすごいサプライズがあるらしいんよ」

「すごいサプライズ……卒業式で？」

「何やろう、八幡君が卒業式でプロポーズしてくれるとかかな？」

「まあ、毎回当たるわけじゃないと思うんで」

「あ、スルーした。ちなみに八幡君もあるらしいよ」

「マジですか。なんか急に怖くなってきたんですけど……」

「大丈夫。あくまでサプライズだから。良い事かもしねんよ」

「……それは、そうかもせんね」

「そうそう、前向きな心が大事なんよ。つて、もうこんな時間やん。じゃあ、ウチ明日朝早いからもう寝るね」

「わかりました。それじゃあ……おやすみ」

「うん、おやすみ♪」

さて、明日はどんなサプライズがあるんですかね。

この時の俺は大して深く考えることなく、そのまま眠りについた。

* * * * *

翌日……。

「え？ ラブライブの大会を東京ドームで開催？ その前にニューヨークでライブ？ 一方その頃……。」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！ すごいよ！ お母さんがニューヨーク旅行当てたよ！」
「…………マジか」

Love can go the distance

#3

「ええ!? ニューヨーク旅行当たつたつてすごいやん!」

「いや、ニューヨークでライブするほうがすごいと思うんですが……」
本当にサプライズが起こりやがった……しかも二人同時に。

こんな事が本当に起ころるなんて思いもしなかった。

正直まだ現実感がない。希さんと話ながらも、つい頬をつねつてしまふ自分がいる。
サプライズという言葉ですませるのも生温い気がした。

「ニューヨークかあ……」

「行つたことあるんですか?」

「あるよ。ただそういうんじやなくて……」

「?」

「初めて君と一緒に行くのは新婚旅行にしたかつたというか……」

「……いきなりそんな事言われるとリアクションに困るんで自重してください」

「あははっ、でも本当にすごいなあ。スピリチュアルやね」

「やつぱりそつちが言うほうがしつくりきますね。そういうや東京ドームでもイベントやるんですね。そつちもかなりすこいと思うんですが……」

「ああ……うん、でも、まずはニューヨークのライブを成功させんといかんからね」「？」

「八幡君、ニューヨークで迷子にならんようにね」

「いや、迷子て……まあ、そん時はよろしくお願ひします」

「いい子にしてたら迎えに行つてあげる」

「じゃあ大丈夫ですね」

「あはは、本当かな？……ふわあ……なんか眠くなつてきた。じゃあ今日はもう寝るね。おやすみ！」

「ええ。おやすみ」

通話を終え、いつもの静寂に身を委ねると、先程の会話で感じた違和感を思い出した。

東京ドームで何か言い淀んだ気がするが……これは気のせいだろうか？

* * * * *

数日後、日本の玄関といわれる成田空港にて、俺は何ともいえない気分で外の飛行機を見つめていた。

隣には小町がいて、やたらとキヨロキヨロしている。まるでこれから高飛びでもする

かのようだ。

「お兄ちゃん、ちょっと緊張しすぎじゃない？」

「いや、お前もさつきからそわそわしそうだろ……」

「おい、バカ兄妹。搭乗口はこっち」

「…………」

父ちゃんと母ちゃんは割といつもどおりのテンションだつた。まあらしいつちやら
しいな。せつかくの旅行なんだし、せいぜい羽伸ばして楽しめっての。

すると、今度は母ちゃんがキヨロキヨロし始めた。

「ねえ、希ちゃんはどこにいるの？」

「いや、探さなくていいから。何するつもりなんだよ……」

「挨拶に決まってるじゃない」

「まあまあ、お母さん落ち着いて。お兄ちゃんが希さんみたいな美人と付き合えるなん
て、ポケモンが実在するくらい低い確率なんだから、ここはそつと見守つてあげないと」
いや、ポケモンて……確率低いどころの話じやねえぞ。

ちなみに、希さん達は比企谷家が立ち話しているそばの柱の真後ろにいる。さりげなく誘導しといてよかつた。

やがてアナウンスが聞こえてきて、それと同時に期待に胸が高鳴り始めた。

* * * * *

さつきはあんなにワクワクしていたのに、まさかこんなことになるとは……

「ねえねえ、私の家の辺りかな？」

「穂乃果、もう少し静かにしなさい」

「海未ちゃんそう言いながら、ずっと窓の外見てるね」

「にやあ、なんだか眠くなつてきたにやあ……」

「今のうちに寝ておいたほうがいいよ、凛ちゃん」

「ビジネスクラスの座席つてこうなつてるのね。少し眠りにくいかも」

まさか前の列に、Sが来るとは……しかも、前の座席には……

「なんか比企谷君の匂いがするわね」

「さらつと怖いこと言つてんじやないわよ！あんたヤバい能力もあるの!?」

「まあまあ、ええやん。エリチやし」

まさかの三年生トリオである。しかも絢瀬さんが謎発言をしたせいで、親父と母ちゃんの顔が引きつっている。ぶつちやけ俺も少し引いてる。え、何？俺そんなに臭い？

あと希さんがさらつと笑顔で流しているのがすごい。これはいつもどおりというふうに思ふ。どうか。

とにかくこのまま何事もなく……

「そういえば希、もう3月だけど比企谷君とはどこまでいったの？」

「ア、アンタ……アイドルがいきなり何聞いてんのよ？バカじやないの？」

「何を言つてるの、にこ？旅にコイバナはつきものでしょ。それで、どうなの希？」
やめて！隣にいる親父と母ちゃんが聞き耳たててるから！両親に彼女との進展具合とかしられたら恥ずかしくて死んじやう！」

「キスまでしかしとらんよ」

「…………」

いや、そんなはつきり言わなくとも……つか、この人俺が後ろにいるの気づいてるよね？間違いなく気づいてるよね？

ちなみに親父と母ちゃんはうんうんと頷いていた。やめろ口元に手を当ててこそり笑うなよ……。

「でも、最近は八幡君も少しずつ素直になってきたんよ。一人はつきりの時は甘えてくるようになつたし」

「…………」

おつと何かあることないと言われそうな雰囲気。絢瀬さんと矢澤さんは黙つて聞き入り、ウチの親二人は笑いを堪えている。小町はこちらを肘でつついていた。

「たまにやけど、ウチの事『のんたん』って……」

「つ
!!」

この新手の羞恥プレイは約一時間ほど続き、俺はどう誤魔化すかを必死に考えてい
た。

Love can go the distance

#4

「あー、なんかどつと疲れたわ」

人生初の海外の地を踏みしめた俺は、特に感慨に耽るでもなく、ただひたすらげんなりしていた。

あんなからかいパターンがあるとは……高木さんだつて驚きだろうよ。

ちなみに希さん達は既にタクシーに乗り、先にホテルへと向かつた。後で覚えてろよ
……。

「ほら、お兄ちゃんタクシー乗るよ」

「おう」

「飛行機は中は退屈せずに済んだからよかつたわ」

「…………」

「…………やめてくれ」

「…………」

親父と母ちゃんが未だにニヤニヤこっちを見ているのは納得いかないが、まあせつか
くの海外だし切り替えよう。

何より家族旅行自体久しぶりだからな。

もし今後もこういう機会があるなら、変なこだわりは捨て、一緒に行くのも悪くはないと思つた。

ああいうからかいが付いてくるのはごめんだけどね！めっちゃ恥ずかしかつたわ！

* * * * *

ホテルに着き、荷物を置いてからロビーに戻ると、さつそく希さんと遭遇した。いつもすぎる笑顔で、何だか日本にいるような気分になつてしまふ。

「だうれだ？」

「それを真正面から言う人初めて見ましたよ……」

「あははっ、さつきは楽しかつたねえ」

「まあ尊い犠牲はありましたが……」

「ほら、ウチとしては親友二人に聞かれて、正直に答えられないわけにはいかんから」

「えつ、いくつか嘘情報ありましたよね？最後のほうの膝枕ねだつてくるとかただの妄想ですよね？」

「……八幡君、ウチの膝枕……イヤ？」

「ズルすぎやしませんかね……今からでもお願ひしたい気分ですよ」

「素直でよろしい。じゃあ、そろそろ行くからまた後でね」

「ええ。それじゃあ楽しんできてください」

「うん、八幡君達も楽しんでね♪」

何と言うか……ニューヨークでも相変わらずな人だな。そこがいいんだけど「お、お兄ちゃん、そんな所で一人でにやにやしないで……ここニユーヨークだよ?」

「…………」

* * * * *

これまで映画の中でしか見たことのない街並みを歩いていると、何だか自分も映画の登場人物になつたかのような気分だ。

「お兄ちゃん、こういうとこ希さんと来たかつたんじゃないの?」

「……別にまた今度でいい」

「うん。お兄ちゃんのそのリアクションでお腹いっぱい。あれ?なんか撮影してるね」「ああ。そうだな」

行き交う人並みの中で、一人の少女が歩く姿をカメラに収められていた。

ぱつと目を引くその容姿は、本物のモデルとかアイドルと言われても、すぐに納得してしまう。

周りにいるスタッフらしき人は日本人ようなので、案外日本で活動しているのかもしれない。

すると不意に目が合った。

「つ！」

何だ？なんかこつち見て驚いた気がしたんだが……。

その少女は、近くにいるやたらと背が高い強面の男の人と二言三言話してから、こちらに向かつて歩き始めた。

「ね、ねえお兄ちゃん……あの人、私達の方に来てない？」

「……いや、たまたまだろ」

進行方向に偶然俺達がいただけだろと思いながら、何故か動けずに立ち止まっていると、その少女は何と俺達の前で立ち止まつた。

そして、ほんのり赤い頬に手を当て、こちらに控えめな笑顔を向けてきた。

「ワタシの名前は、アナスタシアデス。日本でアイドルやつてマス」

「あ、は、はい……」

いきなり名乗られたが、もちろん初めて聞く名前だ。

だが、そんなことはお構いなしと言わんばかりに少女は距離を詰めてきた。

「アナタの目……とても素敵デス」

「え、あー、はい。どうも」

近い近い近い近い!!!あといい香りがやばい!!!!

「あ、もしもし希さん……」

「ちょっと小町ちゃん? どこに電話しようとしてるの?」

「冗談だつて。でもお兄ちゃんどしたの?」

「いや、俺にもわからん……」

「あの、ワタシ、今度テレビに出マス。よかつたら見てください」

「あ、は、はい……」

何だ、ただの営業か……びっくりしたあ。やたらぐいぐいくるから、ていうかいつの間にか両手を握られてるんですけど……!

すると、背筋に悪寒が走つた。

「つ!!」

「??」

本能に急かされるように俺は背筋を伸ばし、同じように悪寒を感じたらしいアナスタシアさんの手が緩んだ隙に慌てて距離をとる。

「あー……じゃあそろそろ行かなきやいけないんで」

「え、ええ、マタアイマショウ……」

彼女は笑顔で小さく手を振り、強面の男の人の元へ小走りで戻つた。

その凛とした背中を見て、小町は溜め息を吐いている。

「は～、綺麗な人だつたね～。お兄ちゃん、浮気はダメだよ」
「しねーよ。てか、そういうんじゃないだろ」

「……だといいけど」

何を疑う要素があるというのか。それよりさつきの悪寒……ま、まさかね。

俺はとりあえず色々気づいていないふりをすることにした。

Love can go the distance

#5

「え？ 高坂さんとはぐれた？」

「うん、そうなんよ……」

ホテルに戻ると、μ,sのメンバーが先程とは真逆の暗いテンションでたむろしていた。

何人かはこちらを見て「え、何でここにいるの？」みたいな表情をしたが、すぐに暗い表情で俯いた。華やかなホテルのロビーで、この一角だけがやたらと不釣り合いに見える。

「この辺りに来たことがあるのがウチだけなんだけど……」

「さすがに希一人探しに行かせるわけには行かないわ」

確かに絢瀬さんが心配する気持ちもわかる。

本当は皆探しに行きたいのだ。

だが、よく知らない街で行き当たりばつたりに移動して、自分や他のメンバーが迷子になつたら目も当てられない。

そう考へながらも自然と口は開いていた。

「俺も一緒に行きましょうか。それなら一人にしないで済むし」「……ええの？」

「あー、大丈夫ですよ……多分」

親父と母ちゃんに目配せすると、二人とも黙つて頷いてくれた。写真さえ見せてくれればこの二人ならある程度の範囲は探してくれるだろう。

「小町、悪いがそこで他のメンバー留守番してくれ」

「うん。お兄ちゃん、希さんから離れないようにな。お兄ちゃんまで迷子になつたらいやだよ？」

「おう」

希さんに目を向けると、彼女は力強く頷いてくれた。

ぶつちやけかなり不安だが、それも少し薄らいでいく。

そして、ホテルの外へ足を踏み出した……のだが。

「あ、みんな〜!!」

「穂乃果ちゃん!?」

なんと高坂さんがホテルの前まで来ていた。手に持つてゐるあれは……何かのケー
スか。

希さんは慌てて駆け寄り、高坂さんの肩に手を置いた。

「大丈夫やつた？ よく一人で帰つてこれたね……」

「一人じやないよ。ここまで優しいお姉さんが連れてきてくれたんだあ

「え？ 誰もいないけど……」

「そんな……あれ？ いない……」

「…………」

確かに誰もいない。いや、てか何だそのファンタジーみたいな話……ま、まあ、いいか。無事帰つて来れたんだし……。

希さんがこちらに申し訳なさそうな笑顔を見せたので、とりあえず頷く。
その後、高坂さんは園田さんに雷を落とされていた。

あまりの勢いに、とりあえず部屋に戻ろうとすると……

「ねえ八幡君……ウチの部屋に来て」

「…………は？」

やたらと優しい笑みを浮かべた希さんから、お呼びだしを喰らつた。

* * * * *

一応小町に伝えてから彼女の部屋に行くと、中は彼女一人だけだった。

「…………一人部屋なんですか？」

「違うよ。真姫ちゃんが気を利かてくれたんよ」

「ああ……なんか悪いですね。明日ライブなのに」

「そう。明日はライブだから、八幡君が浮気せんようにウチだけを見るようにしつかんとね」

「ど、どうしたんですか、いきなり……んんっ!?」

何の前振りもなく重ねられた唇。

彼女は俺をベッドの方へ押しやりながら、舌を卑猥に絡めてきた。

それに応じていると、乱暴にベッドに押し倒された。

軋んだ音がまるで遺物に感じられるくらい、もう既に二人きりの世界になつていた。

希さんはチロリと唇を舐め、再び強引に唇を重ねてきた。

「んん……！」

「んくっ……ん……」

頭の中に炎が燃えたぎり、何も考えられなくなりそうだ。

俺は今度はこちらのターンだと言わんばかりに彼女と位置を入れ替わり、ベッドに押し付け、唇を難に重ねた。

何だか獣になつたかのような気分だが、不思議と悪い気はしない。
微かに手の震えを感じながらも、今度は彼女のコートを脱がす。

さらに、その下に着ていたシャツのボタンを不器用に外すと、紫色の下着と豊満な谷間があらわになつた。

「どくん……どくん……と未知なる興奮が胸を叩くのを感じながら、俺はもう一度希さんと目を合わせた。

「……彼女はぎゅっと目を瞑つていた。

その様子を見た瞬間、急に体から力が抜け、俺は彼女の隣で仰向けになつた。

「……ええの？」

「無理しなくていいですよ。……なんかありました？」

「ヤキモチ……やね」

「ヤキモチ、ですか。……え？ 僕なんかしましたつけ？」

「…………めつちや綺麗な子に声かけられてデレデレしとつたね」

「つ！ い、いや、別にデレデレはしていませんが……」

「ていうか、あれ見られてたのか……あの時の悪寒は気のせいじゃなかつたのか。

希さんはさつきまでとは違う感じで俺の上に寝そべり、ふるふると首を振り、頬を膨らませた。

「してた。してたよ。それでね、もつとウチに夢中にさせたいなあつて……」

「もう夢中ですよ。出会つたその日から……」

「ほんとかな～？」

「信じてもらえるまで何度も言いますよ。……愛します」

「つ……きゅ、急にそんなんずるい～！」

「先に仕掛けたのはそっちですよ」

「もう……あ、そうだ！」

何か思いついたかのような表情を見せた希さんは、俺の手をとり、ぐいっと自分の胸に押しつけた。

「はっ!?」

「ウチの鼓動、わかる？」

「は、は、はひやい……」

暴力的な感触に頭の中が真っ白になりかけるが、何とか持ちこたえる。囁んだけど。
そんな俺のリアクションを見た希さんはいつもの悪戯っぽい笑みを見せ、口を開いた。

「今、すつごく高鳴つとるんよ」

「は、はい」

「この高鳴りの分だけ、ウチは……私は、君を愛しています」

「…………ありがとうございます。てかまた俺が暴走したらどうすんですか？」

「大丈夫。信頼してるから」
「そりやあ裏切れませんね」

やつぱりこの人には勝てそうもねえな。

俺達はどちらからともなく微笑み、長く甘い口づけを交わした。

窓から見えるニューヨークの夜空は東京と大して変わらないように見えた。

Love can go the distance

#6

ニューヨークでのライブを無事に終え、日本に戻った直後、再び事件は起こつた。

「お兄ちゃん、何あれ?」

「……芸能人でも来てんじゃねえの?」

やたらと人だかりができている。先に降りた希さん達は無事に抜けれただろうか。はぐれないよう小町の手を引き、親父と母ちゃんについていきながら、人だかりの中心地をチラ見すると、そこにはまさかの人物がいた。

「あれ、希さんだよね。ていうか、Sのメンバー、皆いるよね?」

「あ、ああ……」

背伸びをしてよく見ると、Sメンバーファンが群がり、その一人一人にメンバーがサインをしていた。

「うわあ……本当に有名人じやん。この前のライブのおかげかな」

「……そうかもしだ。ん?」

ふと周囲に目をやると、空港内のあちこちのスクリーンで、ニューヨークでのライブ

映像が流されていた。

華やかな着物風の衣装で歌い踊る彼女達は、これ以上ないくらいスクリーン映えして
いて、注目を集めるには十分すぎた。

……にしても人気爆発しすぎだけどな。

そのまま見ていると、希さんと目が合う。

彼女はこちらにウインクしてきたので、俺は頷き、小町の手を引いた。

「お兄ちゃんもウインクしたほうがよかつたんじやないの？」

「どこに需要があるんだよ……」

後ろ髪を引かれる思いがしたが、ひとまずその場を離れた。

* * * * *

夜になり、ベッドに寝転がつてゲームをしていたら、携帯がようやく震えだした。
俺は慌てて起き上がり、机に置いていた携帯を掴み、通話状態にする。

「……はい」

「やつほく。希お姉さんだよ」

「妙なテンションになつてますね。お疲れ様です」

「あはは、まさかあんなんなるとはねえ……ふうう」

「本当に有名になりましたね」

「そうなんよ。芸能になつた気分やね……秋葉原駅でもサインしたし……」

「このままプロデビューとかするんですか？」

「あー……そうやつた。ニューヨークで言う予定がドタバタしどつて忘れとつた」

「そ、そういうんですね……確かにドタバタしていましたからね」

「うんうん。ウチら、ニューヨークで激しく燃え上がつたよね……」

「まあ、ニューヨークで言い忘れたやつは、今度会つた時でいいんで……」

「スルーしたね。ほんと照れ屋さんなんやから」

「いや、あの夜に関して言えば希さんのほうが……」

「あ、そういうえば明日朝早いんやつた！ それじやあ八幡君、おやすみ！」

「……スルーしましたね。そつちも照れ屋じやないですか」

* * * * *

翌日、神社のバイトに行くと、希さんはやや疲れた表情で外のベンチに座つていた。

その憂いを帯びた表情を優しく風が撫でていく姿は、しばらく見ていたくなるが、とりあえず声をかけることにした。

「……またサイン責めにあつたんですか？」

「ん？ ああ、今度はそれとは別のプレッシャーがね……」

「プレッシャー？」

隣に座り、希さんにMAXコーヒーを手渡すと、彼女はそれを開け、ちびちびと口をつけた。

「実はね、次のライブはいつだって問い合わせが殺到してるらしいんよ」
「でもね、μ,sはウチらの卒業と共に終わらせるつて、皆で話し合って決めたんよ」

「あ、そうなんですか……え？」

「もしかして最近言いたかつたことって……てか、俺が聞いていいやつなんですか？」

「うん。君は口が固いからね。それに、君には聞いて欲しいんよ」

希さんは、こてりと俺の肩に頭を乗せ、体重をかけてきた。

ふわりと甘い香りが鼻腔をくすぐる感触を楽しみながら、俺は彼女の手を握った。
それからバイトが始まるまでの間、彼女の話に耳を傾けた。

* * * * *

その翌日……。

日を跨ぐ頃、少し眠気を覚えたタイミングで携帯が震えた。

「あ、もしもし八幡君」

「……どうかしましたか？」

「あのね、最後のライブやることになつたよ。また日にちは決まつとらんけど
「そうですか。絶対に観に行きますよ。あと、またボランティア必要な時は言つてくれ
さい」

「うん、ありがとう。今日はそれを言いたかつただけだから。おやすみ♪」

「……おやすみ」

彼女のテンションにつられ、少し目が覚めてしまつた。

間違いなく彼女はいつもより少し幼い無邪気な笑顔になつていてるだろう。

ただひとつ残念なことは、今楽しそうにしているであろう、彼女の笑顔が直接見られ
ないことだ。

ふと窓の外に目を向けると、星が昨日より綺麗に輝いていた。

Love can go the distance

#7

μ , sのラストライブとなる舞台・秋葉原には、全国からスクールアイドルが集まつていた。

まだライブ当日ではないが、あちこちに出店が出ていて、あの賑やかな司会者がリポートしていた。

「なんかすごい祭りになつてますね。てか、わざわざ全国から集めたんですか？」

「穂乃果ちゃんがスクールアイドルのお祭りにしようつて言うから、皆であちこち行つてきたよ」

「行動力ばねえ……」

「八幡君もやん。まさか本当にボランティアやつてくれるとは思つてたけど……」

「思つてたんですけど……」

「でも、友達をつれてきたのは予想外やつたね」

希さんの視線の先には、出店の売り子をやつてている由比ヶ浜や一色。奥でお米スムージーを作つている雪ノ下がいた。

「いや、あれは自己申告と言いますか……」

生徒会メンバーーやらその他のメンバーは、前日になつていきなり連絡してきた。今は学校は何も関係ないので、特に言わなかつたのだが……。

ちなみに材木座はあまりの女子の多さに圧倒されたのか、出店の奥でひたすら裏作業に徹していた。まあ、かなり助かっていてありがたいのだが……。

「いい友達ばかりやねえ」

「…………そつすね」

「あら、今日は捻デレ控えめやね」

「そんな塩分みたいな扱いされても……」

「ほらほら、お二人さん？まだ作業は残つてるわよ」

「エ、エリチ……背後からいきなり現れんでよ」

「ずっといたわよ」

「盗み聞きされとつたんやね」

「いえ、堂々と聞いていたわ」

「堂々としてれば聞いていいわけやないよ」

「さあ、それはさておき私達は立ち位置の確認をしておかないと」

強引にスルーしている感じはするが、こういう時の絢瀬さんの表情は頼れる年上の女

性で、たまにおかしく見えるのは気のせいなんだと思える。

「じゃあ、俺も作業に戻るんで。二人も頑張つてください」

「が、頑張つてなんて……そんな、いけないわ比企谷君、あなたには希がいるじゃない

……」

「……」

前言撤回。やはりこの人はどこかがおかしい。

「エ・リ・チ♪」

「はい」

「……他のメンバー集まつてますよ。行かなくていいんですか？」

「それもそうやね。じゃあ八幡君、また後で」

「比企谷君、今日は来てくれてありがとう」

「ええ」

こちらにひらひらと手を振り、駆け出した二人を見送ると、さつきまで出店の近くにいた戸塚がいないことに気づく。

あれ？さつきまでそこにいた気がするんだが……。

とりあえず俺も戻るか。

そう思い、出店の裏側に行くとそこには……

「あ……」

「……は？」

スクールアイドルの衣装を着た戸塚と、その姿を見て満面の笑みを浮かべる南さんと優木さんがいた。

え、何？ どういう状況？

戸塚が可愛いという現状以外、理解できずにはいると、戸塚は恥ずかしそうに身をよじった。

「は、八幡……見ないで。あと忘れて」

「…………」

俺はすぐ後ろを向き、脳内のフォルダに永久保存しておいた

後から聞いた話によると、戸塚を見て、どうにも我慢できなくなつたらしい。
……つたく、グツジョブ！

Love can go the distance

#8

「私達μ,sは……このライブをもつて、活動を終了することにしました」

準備を終え、明日に向けて本日は解散という雰囲気になつたところで、高坂さんがその場にいる皆へ告げた言葉。

驚いた表情はすぐに悲しげなものに変わり、高坂さんの言葉に耳を傾けていた。
事前に知っていた俺も、やはり改めて聞くと寂しいものがある。
近くにいた由比ヶ浜は涙を滲ませていた。

周りにいるスクールアイドル達も涙を隠そうともしていない。
夕焼けが、やけにもの悲しくこの場所を照らしていた。

もちろん続けようと思えば続けられるだろうし、それを期待している人達も沢山いる。

しかし、μ,sはスクールアイドルでいることを選んだのだ。

彼女達は限られた時間の中で一生懸命輝き、その瞬間のすべてを楽曲やパフォーマンスに注いだという事実はこれからも残り続ける。

そんなことを考えていたら、少し離れた場所にいた希さんと目が合う。

彼女はいつもの大人びた笑みに、ほんのちよつぴり寂しさを滲ませていた。そして夕陽に目を向けると、さつきより輪郭が曖昧に見えた。

* * * * *

ライブ当日。

まるでこのイベントのためにと思えるような青空だ。

真っ直ぐに降り注ぐ陽射しは、昨日とは真逆に新しい何かの始まりを暗示しているようすら思える。

もう既に秋葉原のど真ん中にはスクールアイドルがスタンバイしていて、祭りの雰囲気が通行人の目を惹いていた。

こちらはやることはやつたので、後は見守るだけとなり、色んな感情が混じり合っていた。

だが、決して嫌な感じはなく、むしろ清々しいくらいだった。

「八幡君」

「はい？」

背後から呼ばれ、振り返ると、そこには今日のための衣装に着替えた希さんがいた。

うつかり見とれてしまつたこちらの視線に気づいたのか、希さんは得意気な顔をし

た。

「ふふん、どう？」

「……あー、まあ、その、あれです。今までで一番綺麗だと思います
ん、ありがと。じゃあ、しつかり見ててね」

「ええ、もちろん」

どちらからともなく、こつんと拳を突き合わせると、何だか言葉にしがたい感情が沸き上がってきた。

「お二人さん、そろそろいいかしら」

「ていうか、いくら建物の陰とはいえ、少しは自重しなさいよ！」

「あはは、ごめんね。エネルギー補充しどつた。ね？」

「……まあ、そういうことで。じゃあ楽しんできてください」

三人は駆け出すると、すぐに他のメンバーと合流し、自分の配置につく。数秒の静寂から穏やかなイントロが始まり、そこから一気に加速していく。そこからは華やかな祭りの始まりだった。

街のあちこちに散らばつたスクールアイドルが、皆で踊り、歌を紡ぐ。青空の下、素敵なメロディーが響き渡り、祭りは盛り上がりを見せた。どの瞬間も俺はすべて焼き付けようと、しつかり見つめた。

* * * * *

熱狂のうちにライブは終わり、夕焼けが照らす街は、未だに余韻に包まれていた。隣にいる戸塚や材木座も感無量といった表情をしていた。

「楽しかったねえ」

「うむ。いい日だ」

「……そうだな」

そんなやりとりをしながら、ふわふわした気分でいると、突然高坂さんが「皆さん、ついてきてくださいーい！」と誘導を始めた。

μ, sのメンバー以外、皆がきよとんとしていると、俺は希さんから肩を叩かれた。「さ、八幡君も行こつ

「え？ ど、どこに……？」

「東京ドーム」

「マジですか」

「マジやね。お楽しみはまだまだこれから！」

「……まあ最後まで付き合いますよ」

彼女と共に歩き始めると、やわらかな風がそつと頬を撫で、どこかへ行つた。それはいつか二人でいる時に吹いた風の感触と似ていた。

パレード

「ふう、さすがに今日は疲れたなあ……」

「まあ、ひたすらライブしてましたからね」

東京ドームのライブを終え、俺は希さんの家に帰った。
そして、風呂で汗を流して寝間着になり、ようやく気持ちが切り替わったのか、希さんはぐてーっとベッドに寝転がつた。

そんな姿を見ていると、何だか勞いたくなつてきたので、優しく頭を撫でた。

「……お疲れ様です」

「ありがと。君もお疲れ様。本当に助かつたよ。ていうか、君も疲れたんやないの？」

「ライブで色々吹っ飛びましたよ」

「まあ、ウチの風呂上がりも見れたしねえ。八幡君なら一発で回復やろ」

「……なんか話変わつてますよー」

「あはは、それじやあ今から大事な話をせんといかんね」

「大事な話？」

「そ。春休みの九州旅行」

「……え？」

「実はお母さんから二人分の飛行機のチケットが送られてきたんよ。ウチに確認もなしに」

「マジですか」

何となくだが、あの人ならやりそuddaという気分になつた。希さんは「いきなりごめんね！」と言いながら、俺の腕を引っ張つた。

俺はそれを合図にベッドに寝転がり、彼女と向かい合つた。

「ふふふ、こんな態勢になつたら色々と我慢できなくなるやん？」

「ま、またそういうことを……」

「ウチは眠気のことをいつたんやけど？ 君は何だと思つたのかな？」

「…………」

言い返せなかつたので、とりあえず抱きしめてみた。

すると彼女も仕返しと言わんばかりに抱きしめ返してきた。

「大好き♪」

「…………どうも」

「ん？ 聞こえないなあ」

「…………俺も好きですよ」

そのまま唇を重ねると、彼女の目がとろんとしていた。

だがこれはこの前のようなではなく、おそらくただ眠いだけだろう。眠りにつく前に、今日という日を刻みつけるように口づける。

「…………」

極上の甘い時間に浸かっていると、まるで世界で二人きりになつたかのような感覚になる。

そんな中、快樂に後押しされ、互いに舌を絡み合う。

ざらついた感触が楽しくなってきたが、さすがにこのまま続けるわけにはいかないので、そつと唇を離すと、つうつと糸を引いた。

彼女はペロリと唇を舐め、小さく口を開いた。

「おやすみ、また明日」

「ええ、おやすみ」

すぐに彼女が眠りについたのがわかり、俺はその頬に手を添え、やわらかな温もりを感じる。

今、確かなことは、この人とずっと一緒にいたい。
何なら夢の中でも会いたい。

朝一番に笑顔を見たい。

そんな時間を重ねていきたい。

そんな事を願いながら、俺もゆっくりと夢の世界に身を委ねた。